

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書 I

上野東遺跡
現明獄遺跡

2006

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書 I

上野東遺跡
現明獄遺跡

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

「一般国道49号揚川改良」は、東蒲原郡阿賀町津川から同町白川に至る全長7.5kmの道路です。一般国道49号は太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路で、磐越自動車道を補完するとともに、国道49号沿線市町村と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしています。

このうち阿賀町清川から同町谷花地区に至る区間は、急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫り、通行規制区间に指定されています。これまで様々な対策工事を実施してきましたが、抜本的な対策は困難であり、道路管理にも限界があることから、阿賀野川の左岸を通る別線ルートを建設し、危険を回避することしました。

本書は「一般国道49号揚川改良」の建設に伴って実施した阿賀町大字西に所在する上野東遺跡・現明嶽遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査の結果、上野東遺跡では縄文時代前期後葉～末葉と平安時代の遺構・遺物が検出されました。縄文時代前期後葉～末葉期にはこの地がたびたび利用されたことを窺わせ、住居の跡などが見つかりました。また9世紀後半から10世紀初めの頃には、この地に開発が及び住居が残されました。平安時代の住居は、東蒲原郡内では初の例となります。現明嶽遺跡では、縄文時代前期後葉～末葉と後期中葉の遺構・遺物が検出されました。縄文時代前期後葉～末葉期には上野東遺跡と同じように、この地がたびたび利用されました。また後期中葉期には小さな集落が営まれました。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解をいただきました阿賀町教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をいただきました国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所・同津川出張所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字上野4, 762番地ほかに所在する上野東遺跡、同じく大字西字現明嶽4, 734番地8ほかに所在する現明嶽遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は、一般国道49号掘川改良の建設に伴い、新潟県が国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から受託したものである。発掘調査は、新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）という）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社帆舟組に委託し、平成17年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、平成17年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあたった。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせせ願いたい。
- 5 遺物の注記は、上野東遺跡の略記号「05上ヒ」、現明嶽遺跡の略記号「05ゲン」に出土地点、遺構名、層位等を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 掲載遺物の番号は、遺跡別に土器・土製品、石器・石製品の種別に通し番号を付した。本文及び観察表、図面図版、写真図版の遺物番号はすべて一致している。
- 8 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託して行い、提出原稿（第Ⅲ章5・第Ⅳ章5）は、了解を得て編集した。
- 10 石器・石製品の石材鑑定は、高橋保雄が行った。
- 11 造構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。遺物写真撮影（剥片石器を除く）は、デジタルカメラ（ニコン D70S）で撮影し、遺構写真とともに、CD化して編集した。剥片石器の写真撮影は、株式会社セビアスに委託した。なお、図版作成・編集作業にあたり、委託業者に提出した資料は、以下のとおりである。
本文・插図・観察表：Word形式、Excel形式のデータ、トレース原図、貼り込み版下
造構図面図版：DXF形式・PDF形式の測量データ、手取り原図、レイアウト図、文字データ
遺物図面図版：個別トレース図、拓影、レイアウト図
写真図版：デジタルデータ、レイアウト図
- 12 本書の執筆は、田海義正（埋文事業団 調査課長代理）の指導のもと、高橋保雄（同 専門調査員）、奥村伸男（同 主任調査員）、木村雄司（同 主任調査員）、村上章久（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課 調査員）があり、編集は高橋保雄が担当した。執筆分担は奥村伸男：第Ⅱ章1・2・3、第Ⅲ章3A・3B、第Ⅳ章3B、木村雄司：第Ⅱ章4、第Ⅲ章3B、第Ⅳ章3、村上章久：第Ⅲ章3B、第Ⅳ章3Bで、これ以外は高橋保雄である。
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。
ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

阿部 泰之　有坂 洋　伊藤喜代子　遠藤慎之介　遠藤 佐　岡本 郁栄　片岡 香子
勝山 百合　川口 陽子　神田 久　國島 啓　駒形 敏朗　佐藤 雅一　品田 高志
鈴木 譲　高木 公輔　田中 純作　富樫 秀之　中島 栄一　野田 豊文　野水 見子
野村 忠司　橋本 哲夫　肥田野 弘之　廣野 耕造　藤塚 明　古沢 妥史　増子 正三
水沢 幸一　宮本長二郎　渡邊 朋和　渡邊美穂子

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 試掘調査	2
B 本発掘調査	3
3 調査体制	5
A 試掘調査	5
B 本発掘調査	5
4 整理の経過と体制	6

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置	8
2 地理的環境	8
3 鹿瀬軽石質砂層の堆積について	9
4 歴史的環境	10

第Ⅲ章 上野東遺跡

1 調査の概要	14
A 遺跡の立地と微地形	14
B グリッドの設定	15
2 基本層序	15
3 遺構	16
A 概要	16
B 遺構各説	17
4 遺物	20
A 概要	20
B 縄文土器	20
C 石器	27
D 石製品	34
E 古代の土器	35
5 放射性炭素年代測定	36
A 試料の所見	36
B 測定方法	36
C 結果	36
6 まとめ	37
A 縄文時代の遺構・遺物と遺跡の性格	37
B 平安時代の遺構・遺物と遺跡の性格	38

《要 約》	39
上野東遺跡 土器観察表	40
上野東遺跡 石器観察表	41
第IV章 現明嶽遺跡	44
1 調査の概要	44
A 遺跡の立地と微地形	44
B グリッドの設定	44
2 基本層序	45
3 遺構	46
A 上層遺構の概要	46
B 上層遺構の各説	47
C 下層遺構の概要	51
D 下層遺構の各説	51
4 遺 物	52
A 概 要	52
B 縄文土器	52
C 土 製 品	62
D 石 器	62
E 石 製 品	69
5 放射性炭素年代測定	70
A 試料の所見	70
B 測 定 方 法	70
C 結 果	70
6 ま と め	71
A 遺物について	71
B 遺構と遺跡の性格	75
《要 約》	77
現明嶽遺跡 土器・土製品観察表	78
現明嶽遺跡 石器・石製品観察表	82
《引用・参考文献》	84

插図目次

第1図 一般国道49号掲川改良予定路線図	1	第16図 上野東遺跡 不定期石器分類図	30
第2図 現明嶽遺跡 レンチ位置図	2	第17図 上野東遺跡 篠状石器分類図	31
第3図 上野東遺跡 レンチ位置図	3	第18図 上野東遺跡 故障石類分類図	32
第4図 沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図	9	第19図 上野東遺跡 石皿分類図	33
第5図 上野東遺跡・現明嶽遺跡及び周辺の遺跡地図	13	第20図 上野東遺跡 石核分類図	34
第6図 上野東遺跡グリッド設定図	14	第21図 上野東遺跡 古代の土器(須恵器・土師器)	
第7図 小グリッド模式図	15	出土分布図	35
第8図 上野東遺跡の基本層序	15	第22図 現明嶽遺跡 グリッド設定図	44
第9図 純文土器出土分布図	21	第23図 現明嶽遺跡の基本層序	45
第10図 土器計測基準及び部位名称	22	第24図 現明嶽遺跡 純文土器出土分布図	52
第11図 器形分類図(前期後葉・末葉)	23	第25図 現明嶽遺跡 石器出土分布図	63
第12図 上野東遺跡 石器出土分布図	27	第26図 現明嶽遺跡 不定期石器分類図	65
第13図 上野東遺跡 石器分類図	28	第27図 現明嶽遺跡 故障石類分類図	67
第14図 上野東遺跡 石器失敗品分類図	29	第28図 現明嶽遺跡 石皿分類図	68
第15図 上野東遺跡 尖頭器分類図	29	第29図 上野東遺跡・現明嶽遺跡 前期後葉・末葉の	
		器形別土器集成図	72
		第30図 現明嶽遺跡 後期中葉の土器群	74

表目次

第1表 周辺的主要遺跡一覧	12	別表1 上野東遺跡 土器観察表	40
第2表 周辺遺跡との基本層序の比較	16	別表2 上野東遺跡 古代以降の土器観察表	41
第3表 上野東遺跡 器種別石器出土数	28	別表3 上野東遺跡 石器観察表	41
第4表 上野東遺跡 故障石類分類表	32	別表4 上野東遺跡 石器品観察表	43
第5表 上野東遺跡 放射性炭素年代測定結果	36	別表5 現明嶽遺跡 土器観察表	78
第6表 現明嶽遺跡 器種別石器出土数	63	別表6 現明嶽遺跡 土製品観察表	81
第7表 現明嶽遺跡 放射性炭素年代測定結果	70	別表7 現明嶽遺跡 石器観察表	82
第8表 後期中葉期の遺跡変遷図	75	別表8 現明嶽遺跡 石製品観察表	83

図版目次

【図面図版】

図版1 上野東遺跡の調査範囲と周辺の地形	
図版2 上野東遺跡造構配置図	
図版3 上野東遺跡 造構個別実測図1 SI8・14	
図版4 上野東遺跡 造構個別実測図2 SK6・7・13・15・17・18、焼土	
図版5 上野東遺跡 造構個別実測図3 焼土、硬化面、遺物集中地点、炭窯	
図版6 上野東遺跡 遺物実測図1 純文土器1	
図版7 上野東遺跡 遺物実測図2 純文土器2、古代の土器	
図版8 上野東遺跡 遺物実測図3 石器1	
図版9 上野東遺跡 遺物実測図4 石器2	

図版10 上野東遺跡 遺物実測図5 石器3	
図版11 上野東遺跡 遺物実測図6 石器4	
図版12 上野東遺跡 遺物実測図7 石器5	
図版13 上野東遺跡 遺物実測図8 石器6、石製品	
図版14 現明嶽遺跡の調査範囲と周辺の地形	
図版15 現明嶽遺跡(上層) 造構配置図	
図版16 現明嶽遺跡(下層) 造構配置図	
図版17 現明嶽遺跡 造構個別実測図1 SI1・2	
図版18 現明嶽遺跡 造構個別実測図2 SI10、SK3・5・7・8・11・12	
図版19 現明嶽遺跡 造構個別実測図3 SK13・15・17・20・21、焼土、SX、集石、炭窯	
図版20 現明嶽遺跡 造構個別実測図4 SA16・18・	

22. 焼土、遺物集中地点、集石
- 図版 21 現明嶽遺跡 遺物実測図1 縄文土器1
- 図版 22 現明嶽遺跡 遺物実測図2 縄文土器2
- 図版 23 現明嶽遺跡 遺物実測図3 縄文土器3
- 図版 24 現明嶽遺跡 遺物実測図4 縄文土器4
- 図版 25 現明嶽遺跡 遺物実測図5 縄文土器5
- 図版 26 現明嶽遺跡 遺物実測図6 縄文土器6
- 〔写真図版〕
- 図版 33 上野東遺跡・現明嶽遺跡の位置と周辺の景観
上野東遺跡遠景
- 図版 34 上野東遺跡 完掘全景、SI8 完掘全景、SI14 完掘全景、土器集合写真、石器集合写真
- 図版 35 上野東遺跡 基本層序、SI8、SI14
- 図版 36 上野東遺跡 SK6、SK7、SK13、SK15、SK17
- 図版 37 上野東遺跡 SK18、1号焼土、2号焼土、3号焼土、9号焼土
- 図版 38 上野東遺跡 9号焼土、16号焼土、4号硬化面、5号遺物集中地点、20号炭窯
- 図版 39 上野東遺跡 縄文土器1
- 図版 40 上野東遺跡 縄文土器2、古代の土器、石器1
- 図版 41 上野東遺跡 石器2
- 図版 42 上野東遺跡 石器3
- 図版 43 上野東遺跡 石器4
- 図版 44 現明嶽遺跡遠景、上層完掘全景
- 図版 27 現明嶽遺跡 遺物実測図7 土製品、石器1
- 図版 28 現明嶽遺跡 遺物実測図8 石器2
- 図版 29 現明嶽遺跡 遺物実測図9 石器3
- 図版 30 現明嶽遺跡 遺物実測図10 石器4
- 図版 31 現明嶽遺跡 遺物実測図11 石器5
- 図版 32 現明嶽遺跡 遺物実測図12 石器6、石製品
- 図版 45 現明嶽遺跡 SI10、SI1、SI2、土器集合写真
- 図版 46 現明嶽遺跡 基本層序、SI1、SI2
- 図版 47 現明嶽遺跡 SI10、SK3、SK5
- 図版 48 現明嶽遺跡 SK5、SK7、SK8、SK11、SK12・13、SK17
- 図版 49 現明嶽遺跡 19号集石、SK21、SX6、4号炭窯、SA16、SA18・22
- 図版 50 現明嶽遺跡 24号焼土、9号遺物集中地点、23号遺物集中地点、26号遺物集中地点、27号遺物集中地点、25号集石、調査風景
- 図版 51 現明嶽遺跡 縄文土器1
- 図版 52 現明嶽遺跡 縄文土器2
- 図版 53 現明嶽遺跡 縄文土器3
- 図版 54 現明嶽遺跡 縄文土器4、土製品、石器1
- 図版 55 現明嶽遺跡 石器2
- 図版 56 現明嶽遺跡 石器3
- 図版 57 現明嶽遺跡 石器4
- 図版 58 現明嶽遺跡 石器5

第Ⅰ章 序 説

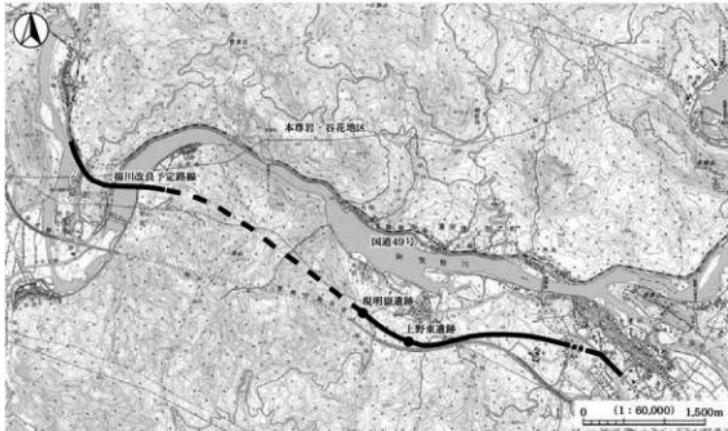
1 調査に至る経緯

「一般国道49号揚川改良（揚川道路）事業」は、阿賀町津川から同町白川に至る全長7.5kmの道路である。一般国道49号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路であり、磐越自動車道を補完するとともに、国道49号沿線市町村と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしている。このうち東蒲原郡阿賀町清川から同町谷花地区にいたる区間は、急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫っており、この渓谷裾部に沿ってJR磐越西線と国道49号が併走している。したがって、国道の線形が悪く、幅員も狭いことに加え、度重なる土砂災害・岩石崩壊及び雪崩の危険に晒され、通行規制区间（連続雨量150mm）に指定されている。

このため国土交通省は落石防止擁壁の設置、岩接着、岩塊除去などの対策工事を実施し、また落石探知センサー・テレビカメラの設置、斜面パトロール点検などの監視体制の強化に努めてきた。しかし、同ルートでの抜本的な対策は困難であり、このような道路管理にも限界があることから、対岸の阿賀野川左岸を通る別線ルートを建設し、危険を回避することとした。

昭和53（1978）年に同事業が事業化され、昭和63年12月に現ルートを2車線に拡幅し供用した。さらに平成12（2000）年度に工事用道路の建設、平成13年度に道路用地の確保等に着手した。

これに対応し、阿賀町大字西地区の揚川改良ルート内での遺跡の存在や埋蔵状況を把握するための試掘調査を平成15年度から実施した。現明礬遺跡を含む地区（西地区）は平成16年6・10月、上野東遺跡を含む地区（ため池付近）は平成16年8月に行った。この結果、これまで未発見の両遺跡から縄文時代の



第1図 一般国道49号揚川改良予定路線図

（国土地理院「津川」1:50,000原図 平成11年発行）

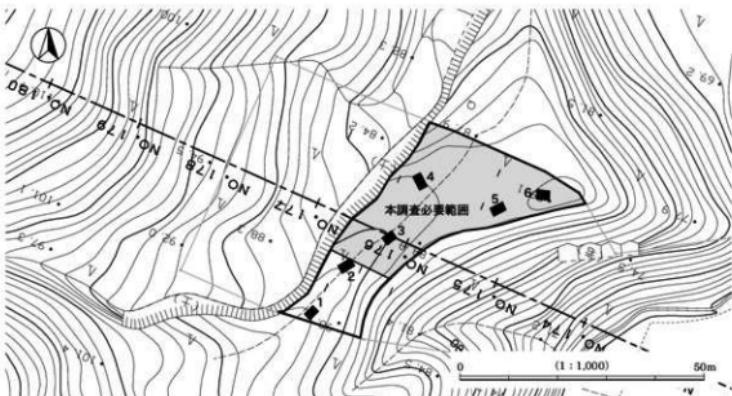
遺物が検出された。そこで、それぞれの小字名から「現明嶽」「上野（東）」を付して新遺跡として登録した。

さらに両遺跡を含む地区は、平成17年度に工事着工となったことから、同年4月の雪消えと同時に発掘調査を実施することになった。

2 調査の経過

A 試掘調査

現明嶽遺跡 面積910m²を対象に、平成16年6月16～18日までの3日間行った。現況は山林であることから、人力による調査となった。第2図のように対象地に6か所のトレンチ（試掘坑）を設定し、掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、トレンチ3～6で遺物が出土し、特にトレンチ4では約30片の土器を数えた。遺物の出土層位は鹿瀬輕石質砂屑（基本層序IV層）より上位で、後期中葉の土器片である。遺構はトレンチ4で集石¹⁾、トレンチ5で焼土²⁾を検出した。この結果、前述のように新遺跡の存在が明らかになり、小字名から「現明嶽遺跡」とし、法線内の750m²を本調査必要範囲とした。



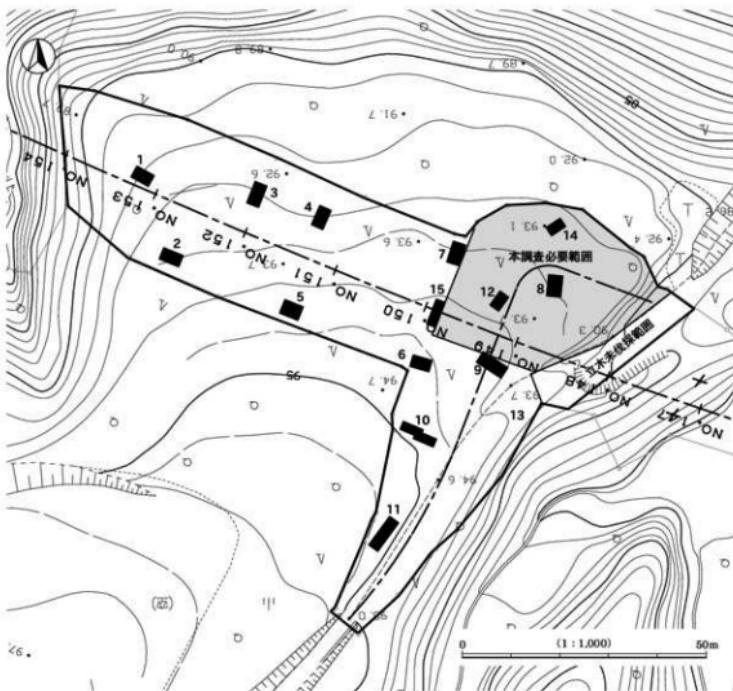
第2図 現明嶽遺跡トレンチ位置図（数字はトレンチ番号。アミは本発掘調査必要範囲）

範囲とした。

上野東遺跡 面積4,650m²を対象に、平成16年8月2～5日までの4日間行った。現況は山林であったが、立木伐採後のため、重機（バックホー）及び人力を併用し調査した。第3図のように対象地に15か所のトレンチ（試掘坑）を設定し、掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、トレンチ8・10・12・14で縄文時代前期後葉～末葉の遺物が認められた。また、遺構はトレンチ8でピット2基を確認した。この結果、前述のように新遺跡の存在が明らかになり、小字名から「上野東遺跡」とし、法線内の1,000m²を本調査必要範囲とした。なお、立木未伐採のため調査の出来なかった東側

1) 本発掘調査で19号集石したものに相当する。

2) 本発掘調査で14号焼土したものに相当する。



第3図 上野東遺跡トレンチ位置図 (数字はトレンチ番号。アミは本発掘調査必要範囲)

220m²については、発掘調査の要否の判断を保留とし、今後行われる本発掘調査の結果を加味して判断することとした。

B 本 発 掘 調 査

上野東遺跡、現明嶽遺跡を含む道路予定地は、既に建設工事が発注されていた。したがって、建設工事の都合から、当初は現明嶽遺跡から調査を行う予定になっていた。しかし、4月4日の現地下見では現明嶽遺跡は立木未伐採のため、調査を入れるまで相当期間待つことが予想された。そのため、国土交通省新潟国道事務所と協議を行った結果、雪消え後、すぐに調査のできる上野東遺跡から行うことになった。以下、調査日誌から経過を抄録する。

【上野東遺跡】

4月4日 現地下見。例年に比べ、残雪が多い(30~50cm)。支援業者と打ち合わせ。国土交通省津川出張所、阿賀町教育委員会、地元区長に挨拶。

4月13日 ほぼ雪消えとなる。遺跡への進入路、駐車場用地、プレハブ用地等の枝葉の処理、整地を

始める。

- 4月21日 本調査範囲の地形測量を行う。東側のため池近くの斜面については、本調査範囲から除外されていたが、立木伐採後、緩斜面であることがわかる。国土交通省新潟国道事務所との協議の結果、本調査に併行して確認調査を実施し、判断することとした。
- 4月25日 午後から調査を開始する。バックホーで表土を掘削する。人力によりトレンチを掘削し、層序の把握に努める。表土掘削済みの場所から、人力による包含層削平に入る。
- 5月2日 焼山頂上付近から遺跡の遠景写真を撮影する。
- 5月9日 ベルトコンベアを設置し、本格的な発掘作業に入る。1～4C、1～3Dグリッドから比較的遺物が多く出土し、焼土・集石等も認められる。以後、北に向かい包含層を掘り進める。平成16年度の試掘調査で、立木未伐採のため判断保留となっていた東側220m²については、本調査の結果を加味して判断されることになっていたが、隣接する2～3Dグリッドから遺構・遺物が出土することから本調査範囲に含めた。ただし、北・東側は山道や土取りのための擾乱・破壊があり、実質調査面積は60m²であった。
- 5月20日 東側ため池近くの緩斜面にトレンチを4か所設定し、試掘調査を行った結果、トレンチ1・2から遺物が出土したため、面積90m²を本調査範囲に追加する。
- 5月25日 2Cグリッドから遺構精査を行う。焼土遺構、硬化面、土坑等を確認し、各遺構の調査に着手した。
- 5月31日 1CグリッドでSI8を確認し、同遺構の調査に着手した。
- 6月6日 1～2DグリッドでSI14を確認し、平安時代の住居跡と判断し、調査に着手した。
- 6月10日 北側の3～4Aグリッドまでの精査をほぼ終了し、全体の遺構の分布状況がわかる。3～5A・B、4～5Cグリッドでは土取りのための擾乱・破壊が認められた。遺構がなく、遺物が少ないことを確認し、範囲を記録し、調査を終了する。この部分の面積は550m²である。
- 6月17日 遺跡はさらに南に延びる可能性があることから、国土交通省新潟国道事務所と協議し、南に約100m²（1Eグリッド）拡張することとした。
- 6月21日 ほぼ調査が終了し、国土交通省新潟国道事務所にて調査結果についての概要を報告する。
- 6月23日 遺跡にて調査成果を報道公開する。
- 6月25日 遺跡にて調査成果を一般公開する。見学者92名。
- 6月27日 ラジコンヘリコプターにて遺跡の全景写真を撮影する。
- 6月30日 遺構及び地形測量が終了し、現地調査を終了する。調査面積1,410m²。

【現明瞭遺跡】

- 6月17日 立木伐採後、遺跡の枝葉を除去する。トレンチを掘削し、基本層序を把握する。
- 6月28日 上野東遺跡の終了に伴い、本格的な調査となる。南北に2本、東西に1本の土層ベルトを残し、表土層、包含層を掘削する。4A・4Bグリッドから東側は鹿瀬輕石質砂層が明瞭に堆積し、上下に包含層が認められるため、この部分については上層・下層に分け調査した。
- 7月6日 一輪車での排土運搬はきわめて能率が悪いため、ベルトコンベアをクレーンにて吊り上げ、遺跡内に設置する。

- 7月11日 3A・4Aグリッドを精査し、竪穴住居、集石、土坑等を確認し、各遺構の調査に入る。
- 7月29日 遺構の測量を一部残し、上層の遺構をほぼ掘り上げる。ラジコンヘリコプターにて上層の全景写真を撮影する。
- 7月30日 遺跡にて調査成果を一般公開する。見学者107名。午後、引き続き下層の調査に着手した。
- 8月4日 遺跡の北側を流れる小さな沢部に水場遺構の存在の可能性があることから、国土交通省新潟国道事務所と協議のうえ、試掘調査に着手した。
- 8月5日 上下層の間層となる鹿瀬蛭石質砂層を除去し、下層の包含層をほぼ削平する。引き続き遺構精査に入る。焼土、遺物集中地点等を確認し、各遺構の調査に着手した。
- 8月9日 東側沢部の試掘調査は、トレンチを3か所設定したが、遺構・遺物は検出されなかった。写真・図面等の記録を取り、現地調査を終了する。
- 8月10日 下層の遺構をほぼ掘り上げる。
- 8月11日 クレーンでベルトコンベアを撤去する。下層の全景写真を撮影する。下層の遺構及び地形の測量を一部残し、現地調査を終了する。調査面積：上層 770m²、下層 500m²。
- 8月12日 器材、記録類を梱包・搬出し、現地から引き上げる。

3 調査体制

A 試掘調査

調査期間 現明嶽遺跡：平成16年6月16日～6月18日

上野東遺跡：平成16年8月2日～8月5日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越蔵一）

調査受託 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理	總 括	黒井 幸一（事務局長）
	管 理	長谷川二三夫（総務課長）
	庶 務	高野 正司（ 同 班長）
調 査	調 査 総 括	藤巻 正信（調査課長）
	調 査 指 導	山本 雄（ 同 試掘確認調査担当課長代理）
	調 査 担 当	浦沢 規朗（ 同 班長）
	調 査 職 員	片岡 千恵（ 同 嘴託員）

B 本発掘調査

調査期間 上野東遺跡：平成17年4月25日～6月30日

現明嶽遺跡：平成17年6月17日～8月12日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査受託 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理	總 括	波多 俊二（事務局長）
	管 理	長谷川二三夫（総務課長）
	庶 務	長谷川 靖（同 班長）
調 査	調 査 総 括	藤巻 正信（調査課長）
	調 査 指 導	田海 義正（同 本発掘調査担当課長代理）
	調 査 担 当	高橋 保雄（同 専門調査員）
	調 査 職 員	奥村 伸男（同 主任調査員） 木村 雄司（同 主任調査員）
	支 援 組 織	株式会社帆荔組
	現場代理人	今井 良男（株式会社帆荔組埋蔵文化財調査課 主任）
	調 査 員	村上 章久（株式会社帆荔組埋蔵文化財調査課）

4 整理の経過と体制

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。また、先に調査を実施した上野東遺跡の土器復元・実測・拓本は埋文事業団調査課で行った。

11月から支援業者の事務所を借り上げ、両遺跡の本格的な整理を実施した。整理作業の主な流れは下記のようになり、両遺跡を並行して整理した。

上野東遺跡

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
図面整理		■	■				■	■			
水洗・注記		■	■								
接合・復元				■	■	■					
実測・拓本					■	■	■	■			
トレース							■	■			
図版作成							■	■			
遺物写真撮影							■	■			
原稿							■	■			
編集・校正								■	■		

現明嶽遺跡

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
図面整理			■	■			■				
水洗・注記			■	■							
接合・復元				■	■	■					
実測・拓本							■	■			
トレース							■	■			
図版作成							■	■			
遺物写真撮影							■	■			
原稿							■	■			
編集・校正								■	■		

整理体制は以下のようになる。

整理期間 上野東遺跡：平成 17 年 9 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日

現明嶽遺跡：平成 17 年 9 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

整理受託 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理	總 括	波多 俊二（事務局長）
	管 理	長谷川二三夫（總務課長）
	庶 務	長谷川 靖（同 班長）
整 理	整 理 總 括	藤巻 正信（調査課長）
	整 理 指 導	田海 義正（同 本発掘調査担当課長代理）
	整 理 担 当	高橋 保雄（同 専門調査員）
	整 理 職 員	奥村 伸男（同 主任調査員） 木村 雄司（同 主任調査員）
支 援 組 織	株式会社帆薺組	
調 査 員	村上 章久（株式会社帆薺組埋蔵文化財調査課）	
整理作業員	真壁鈴子、大瀧明美、石川宏美、佐藤直美、鈴巻奈美子、高田賢治 (以上、株式会社帆薺組埋蔵文化財調査課)	

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

今回報告する上野東遺跡、現明嶽遺跡の周辺の遺跡としては、磐越自動車道の建設に伴い発掘調査を実施した大坂上道遺跡（旧津川町大字西字大坂上道西1990～1991年調査）、猿額遺跡（同字猿額中丸1991年調査）、中棚遺跡（同字中棚1991年調査）、及び化野遺跡（旧上川村大字九島字長木1993～1995年調査）などがある。したがって遺跡の位置と環境については、これらの報告書〔浅沢・北村ほか1995・高橋ほか2005〕などに詳しく記されているので、本章ではこれらを参考に概観するに留める。

1 遺跡の位置

上野東遺跡、現明嶽遺跡は阿賀町に位置する。

- ・上野東遺跡（東蒲原郡阿賀町大字西字上野4,762番地ほか）。
- ・現明嶽遺跡（東蒲原郡阿賀町大字西字現明嶽4,734番地8ほか）。

なお、阿賀町は、東蒲原郡の津川町、三川村、上川村、鹿瀬町の4町村が平成16年4月1日に合併して誕生した町である。

阿賀町は新潟県の東部に位置し、県都新潟市から東へ磐越自動車道で約35分、一般国道49号では約60分で町の中心部に到達する距離にあり、町の東側は福島県境と接している。

町の中央を阿賀野川とその支流の常浪川が流れ、その沿岸の段丘を中心に開けた山間地域である。中心部は比較的平坦だが、周辺は急峻な山岳地帯に囲まれており、北に大きく飯豊山塊が広がり、北西には越後山脈が南北に走っている。総面積952.88km²で、新潟県全面積の約6.8%を占める。総世帯数5,306世帯、総人口15,169人である。（平成18年3月31日現在、同町H.Pより）

2 地理的環境

東蒲原郡を含む本県の東部山間部は、朝日山地、飯豊山地、越後山脈、三国山脈など2,000m級の高い地域を主とし、この山間部を横切って、流長約210km、流域面積約7,710km²の阿賀野川が西流し、多くの支流とともに大小の沖積平野を形成している。

阿賀野川の源流は、福島県と栃木県の県境付近、荒海山（1,581m）から流れ出る阿賀川（大川）である。日光街道に沿って北上し、猪苗代湖を源流とする日橋川と喜多方市塙川町会知地区付近で合流し、西へ向きを変える。さらに尾瀬沼を源流とする只見川と喜多方市山都町三津合地区付近で合流する。新潟県に入ると阿賀野川と名を変え北に飯豊山地、南に越後山脈を望みながら、東蒲原郡阿賀町津川で常浪川と、阿賀野市分田付近で早出川と合流、さらに新潟市満願寺付近で小阿賀野川と分流した後、新潟市松浜町付近で日本海に注ぐ。

上野東遺跡、現明嶽遺跡は津川盆地西縁の阿賀野川左岸に形成された河岸段丘上にある。両遺跡は沢を挟み約500m離れて対峙する。阿賀野川から約750m南にある常浪川と、阿賀野川との合流地点からは約2,500m東に位置している。これらの地域の河岸段丘を形成した阿賀野川の現水面は標高約50mであ

るので、現水面と遺跡の比高は上野東遺跡では42～44m程、現明嶽遺跡では38～41m程になっている。遺跡付近の段丘は、阿賀野川河床からの比高や段丘堆積物から5面に区分される〔二宮1973〕。上野東遺跡、現明嶽遺跡は共に上から3段目の西山II段丘面に位置する。段丘面の表層は、いずれも軟質の凝灰岩をはじめとした角礫を多く含む礫層で、層厚は4m前後である。基盤層は凝灰岩からなる新第三期層である〔新潟1983〕。

3 鹿瀬軽石質砂層の堆積について

上野東遺跡、現明嶽遺跡では縄文時代後期中葉を主とする遺物包含層（上層）と縄文時代前期後葉～末葉の遺物包含層（下層）の間層としてサラサラの黄褐色砂質層、淡黄色砂が堆積する。この堆積層は基本層序IV層に該当する。既存の遺跡では大坂上道遺跡（標高87.7m）、猿顎遺跡（標高88.3m）まで確認されているが〔沼沢ほか1995〕、今回の上野東遺跡では標高94.0mで確認されている。

上野東遺跡および、現明嶽遺跡の下層を埋没させたこの砂質土は、福島県大沼郡金山町の沼沢火山の噴出物と考えられる。しかし噴火に伴う直接的な堆積層ではない。通常、火山灰は偏西風の影響から主に火山の東側に飛ばされるため、北西に位置する2遺跡には到達しにくいからである〔高橋ほか2005〕。

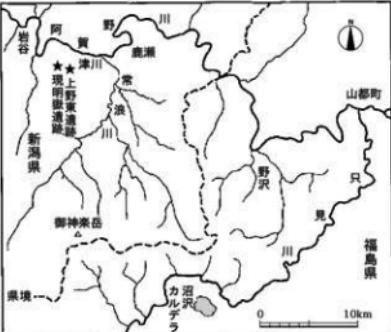
従来、同火山灰層は「沼沢火山灰層」、「鹿瀬軽石質砂層（かのせかるいしつさそう）」、「沼沢浮石質砂層」などと様々に呼称されていたものを、単に煩雑をさけるため、沼沢火山灰層とされる傾向にあった〔沼沢ほか前掲〕。本書では同火山灰層が降下火山灰ではなく二次堆積によることを明確に表現するため、「鹿瀬軽石質砂層」に統一して記述する。

鹿瀬軽石質砂層の只見川、阿賀野川による二次堆積の経緯は以下のように考えられる。

①沼沢火山の噴火による大量の軽石・火山灰が、只見川・阿賀野川に沿って流下し、その過程で阿賀野川の谷を埋没させ、堰の役割を果たすことで一時的なダム湖を形成する。②ダム湖は火山灰で混濁した流水で満たされ段丘面を浸したが、水流は穏やかでそれまでの地表面を流出させなかった。③ダム湖を満たした流水に含まれた微細な火山灰が湖底に沈積することによって水平層理の砂質土層が形成される。④ダム湖の水が引き、砂質土層が地表面となる。更に火山灰流下の過程で幾度となくこの過程が繰り返され、鹿瀬軽石質砂層が形成された〔高橋ほか前掲〕。

鹿瀬軽石質砂層中の炭化自然木片の放射性炭素年代測定法によって得られた結果から、鹿瀬軽石質砂層の堆積は 4950 ± 100 年B.P.、 5030 ± 100 年B.P頃と推定される〔只見川第四紀研究グループ1966〕。

また上野東遺跡からは縄文時代前期末葉の大木6式古段階の土器が出土している。この土器の直上に鹿瀬軽石質砂層が堆積していることから、土器が存在した時期と鹿瀬軽石質砂層が堆積した時期は、きわめて近いものであることが考えられる。



第4図 沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図
〔結集as=1976を一部改変〕

その他鹿瀬軽石質砂層に埋没した遺跡としては前述の猿額遺跡〔滝沢ほか前掲〕、福島県山都町上ノ原遺跡〔芳賀ほか1983〕、北野遺跡〔高橋ほか前掲〕などがあげられる。猿額遺跡では鹿瀬軽石質砂層により埋没した土坑から大木6式土器が出土しており、その上層の包含層からも大木6式が出土している。北野遺跡下層では大木6式古段階の土器が出土している。上ノ原遺跡でも、鹿瀬軽石質砂層の直下から大木6式の前半期の土器が出土している。また、降下火山灰層（1次堆積層）が確認されている会津高田町鹿島遺跡〔丹野・本間1991〕、同町下谷ヶ池平B・C遺跡〔芳賀・藤谷1986〕、同町宮西遺跡〔芳賀ほか1984・1990〕、磐梯町・猪苗代町にまたがる法正尻遺跡〔松本ほか1991〕でも鹿瀬軽石質砂層の直下から大木6式土器が出土している。

以上の例から沼沢火山が噴火活動を開始したのは大木6式古段階期で、その後の二次堆積もほぼ同時代に始まったことが推測できる。

4 歴史的環境

阿賀町の遺跡分布状況を見ると、その多くは阿賀野川及びその支流によって形成された河岸段丘上に位置している。また、山間部の小瀬ヶ沢洞窟、室屋洞窟など1950年代から発掘調査が実施されてきたことはこの地域の特徴である。

1990年代に入ると、磐越自動車道の建設、常波川ダムの開発に伴って遺跡調査が行われ、旧石器時代から平安時代まで幅広い時代の遺跡が相次いで報告してきた。さらに、本報告の両遺跡を含む一般国道49号掲川改良事業に伴う調査で、新たな調査成果が期待されている。以下、縄文時代を中心に概観する。

旧石器時代

これまで、旧石器の報告は、1968年に調査が行われた旧鹿瀬町角神A遺跡（6）のみであった。しかし、磐越自動車道の建設に伴う発掘調査で、旧三川村上ノ平遺跡（3）から1,107点、吉ヶ沢遺跡（2）から12,451点の旧石器時代の石器群が検出された。両遺跡とも約15,000年前と13,000年前との二期に大別され、出土した彫刻刀は神山型を基本とする。いわゆる杉久保石器群の範疇に含まれる〔沢田ほか1994・2004〕。2005年3月、これら2つの遺跡から出土した石器群1,103点が県指定考古資料となった。

縄文時代

草創期・早期

旧上川村小瀬ヶ沢洞窟は1958～59年に中村孝三郎等により調査が行われ、早期の地層よりさらに下部の地層から押田縄文などさまざまな文様を持つ土器が発見された〔中村1960〕。翌年以降、同じ上川村の室屋洞窟でも調査が開始され、やはり早期以前の地層から土器が検出された〔中村・小片1962〕。この調査結果は、從来の早期から始まる縄文時代の区分に草創期を設定する一要因となり、学術的な面からも画期的な調査であった。また、同遺跡については、近年新たな観点を加えた再検討が行われた〔小野・鈴木1994〕。

旧上川村北野遺跡（41）は、前述した鹿瀬軽石質砂層を挟んで上層と下層に分け、2期にわたって調査した。その下層からは、早期中葉のものと考えられる住居跡5軒・土坑11基が検出された〔高橋ほか2003〕。また、旧上川村大谷原遺跡（56）でも早期中葉のものと考えられる住居跡や墓と考えられる土坑群、貯蔵穴、水場などが検出されている〔遠藤2000〕。両遺跡とも、類例の少ない当該期の集落跡として注目されるものである。

前期

北野遺跡、旧津川町猿額遺跡（22）、中棚遺跡（21）が前期の遺跡として挙げられるが、これらも磐越自動車道の建設に伴って調査されたものである。今回調査を行った両遺跡で確認された鹿瀬軽石質砂層は、北野遺跡・猿額遺跡でも確認されている。特に猿額遺跡では標高88mの地点で同砂層が確認され、これまで最も標高の高いところで検出されたものとされてきた。また、出土遺物のうち、前期末葉の土器は、東北南部系の大木5・6式である。大木5・6式の土器がまとめて出土した例は県内でも類例が少なく、阿賀町の歴史を考える上で重要な報告となった〔滝沢・北村ほか前掲〕。

北野遺跡の下層は、同砂層によって覆われていたために前期後葉～末葉の住居跡が良好な状態で保存されていた。環状集落や竪穴住居の周堤を含め、同砂層に覆われる直前の遺跡・地形を調査報告できた〔高橋ほか前掲〕。

中期

中期に入ると遺跡数は急激に増加し、旧津川町原遺跡（14）、古志王遺跡（29）、角嶋岩陰遺跡（15）、中棚遺跡、猿額遺跡、大坂上道遺跡（23）、旧鹿瀬町長者屋敷遺跡（10）、角神遺跡B（7）、角神遺跡C（8）、角神遺跡D（9）、旧上川村北野遺跡、大屋敷遺跡（44）、孤窓遺跡（49）、揚城遺跡（51）などが挙げられる。

中棚遺跡は、検出された遺構・遺物から、前期末葉～中期初頭を中心とした遺跡であることが判明した。土器に比して石器が多く、土坑から同一母岩と思われる頁岩の剥片が出土している。石器の製作工程を考える上で注目されている〔滝沢・北村ほか前掲〕。

大坂上道遺跡の出土遺物のうち、中期の土器は北陸系の影響が多いもののほか、関東地方の影響が強いものも検出されている〔滝沢・北村ほか前掲〕。

後期

後期の遺跡は、前期または中期と複合しているものが多い。北野遺跡上層では、住居跡64軒、土坑328基、埋設土器132基、焼土18基、集石22基、掘立柱建物1棟、溝9条、性格不明遺構5基、ピット多数が検出された。これらは中期前葉～後期中葉の集落跡を構成する遺構であるが、出土した遺物から、多くは中期末葉～後期初頭の集落に伴うと考えられる。この時期の土器の系統は東北系で大木10式古段階から在地系の三十稻場式が主体であり、これに関東系の加曾利E式、称名寺I・II式が混じる〔高橋ほか2005〕。

それ以外では、旧津川町太師堂遺跡（13）が挙げられる。太師堂遺跡は、阿賀野川に南面する丘陵突端上にあり、2001年に行われた県の詳細分布調査によって、スクレイバー・フレイク等の石器、縄文後期のものとみられる土器細片の分布が確認されている。同じように旧津川町楠川遺跡（40）、三川村牧ノ沢遺跡（5）でも分布が確認されている。

晚期

晚期の遺跡も中期・後期と複合しているものが多い。旧三川村堂田遺跡（1）、旧津川町長者屋敷遺跡（10）、古志王遺跡（29）などがそれにあたる。それ以外では旧上川村揚城遺跡が挙げられる。揚城遺跡は、室谷川右岸に北面する丘陵地に位置し、晚期のものと推定される完形の深鉢形土器が出土している〔本間ほか1962〕。旧上川村人ヶ谷岩陰遺跡（46）も晚期の遺跡として報告されている。1985年に上川村教育委員会によって発掘調査され、晚期終末の変形工字文を主文様とする土器が出土した〔小野ほか1986〕。

弥生・平安時代

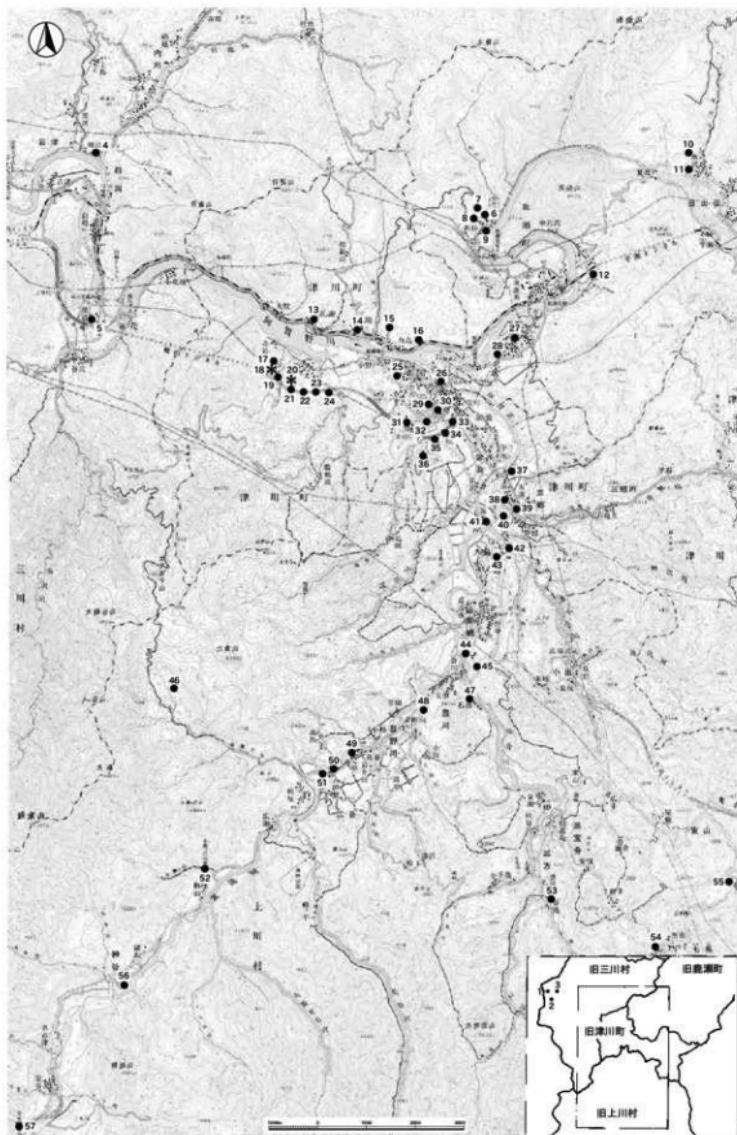
弥生・平安時代になると極端に遺跡数は減少するなか、大坂上道跡では平安時代の須恵器・土師器・黒色土器が少量であるが検出された。器種は椀・甕・鍋・壺等で、このうち数点は会津大戸窯産の須恵器であることが確認されている。大戸窯産の須恵器が確認されたのは県内では初例である〔滝沢・北村ほか前掲〕。しかし、住居跡は検出されていない。今回の調査で、上野東道跡から平安の住居跡が検出されたことは、この地域の歴史を知る上で重要な報告となり得ると考える。

中世・近世

北野遺跡上層から中世の建物跡・溝・近世の墓などが検出されているが、この時代の遺跡も数が少ない。県指定史跡となっている津川城跡は、1252（建長4）年に藤倉盛弘により、阿賀野川と常浪川の合流点に位置する麒麟山に築かれた山城である。特に会津藩にとっては1627（寛永4）年に江戸幕府の命により取り壊されるまで、越後国警備の重要な拠点であった。

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	堂 田	绳文（中・晚期）	30	金 鉢 清 水	绳文
2	吉 ケ 沢	旧石器、绳文（前期）	31	上 ノ 山	绳文、平安
3	上 ノ 平	旧石器、绳文（前・後期）	32	羽 黒 林	绳文
4	若 宮 浴 宿	绳文（晚期）	33	中 島	绳文
5	牧 ノ 沢	绳文（後・晚期）	34	奥 田	绳文
6	角 神 A	旧石器	35	大 舟	绳文
7	角 神 B	绳文	36	エ ン マ 坂	旧石器
8	角 神 C	绳文	37	古 天 神	绳文（後・晚期）
9	角 神 D	绳文（中期）	38	高 満	绳文、奈良、平安
10	長 者 屋 敷	绳文（中・後・晚期）	39	天 満	绳文
11	中 貝	绳文（中期）	40	楠 川	绳文（中・後・晚期）
12	深 戸	绳文（中期）	41	北 野	绳文（早・前・中・後期）、中世、近世
13	大 師 堂	绳文（後期）	42	七 堀 道 下	绳文（中・後・晚期）
14	原	绳文（中・後・晚期）	43	キ ネ カ 杉	绳文（中期）
15	角 岬 岩 陰	绳文（後期）	44	大 屋 敷	绳文（中・後・晚期）
16	角 岬 山	绳文（後期）	45	開 後	绳文
17	赤 岩	绳文（中・後・晚期）	46	人 ケ 谷 岩 陰	绳文（晚期）
18	現 明 廉	绳文（前・後期）	47	石 烟	绳文
19	上 野	绳文（前期）	48	山 口	绳文
20	上 野 東	绳文（前・後・晚期）、平安	49	狐 泽	绳文（中・後・晚期）
21	中 横	绳文（前・中期）	50	八 田 蟹	绳文
22	猿 頭	绳文（前・中期）	51	揚 城	绳文（晚期）
23	大 坂 上 道	绳文（中・後期）	52	小瀬ヶ沢洞窟	绳文（草創・早期）
24	今 井 野	绳文	53	栗 澄 B	绳文（中・後期）
25	小 野 戸	平安	54	谷 地	绳文（中・後期）
26	上 旗 岩 町	绳文（中・晚期）	55	中 山	绳文
27	大 真 澄	绳文（後期）	56	大 谷 原	绳文（早・中期）
28	麒麟 山 東 方	绳文	57	室 � 容 洞 宿	绳文（草創・早・中・後・晚期）、平安
29	古 志 王	绳文（中・晚期）			

第1表 周辺の主要遺跡一覧



第5図 上野東遺跡・現明嶽遺跡及び周辺の遺跡地図
 (国土地理院発行 平成11年「津川」「野沢」平成9年「御神楽岳」平成元年「大日岳」1:50,000原図)

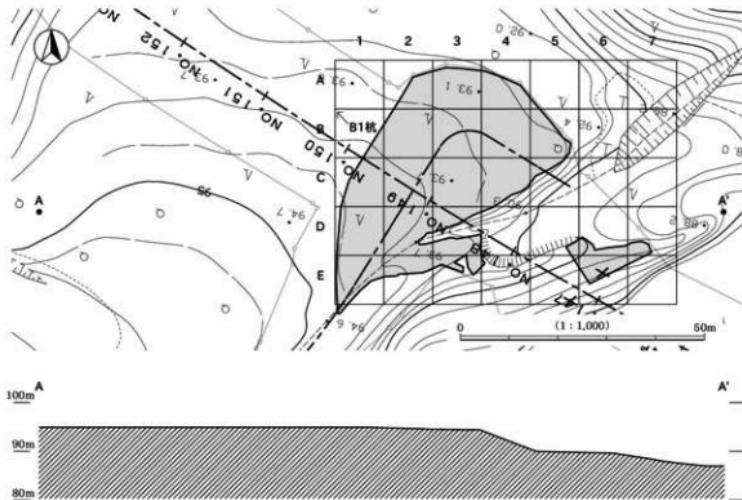
第III章 上野東遺跡

1 調査の概要

A 遺跡の立地と微地形

上野東遺跡は津川盆地の西縁にあたり、阿賀野川左岸の段丘に所在する。現在、遺跡付近の段丘は東を西ノ沢川に、西は赤岩川に区切られ、長さ1.0kmを測る。この間を5つの小谷で開析されている。上野東遺跡も同様に東西の両側が小谷で開析され、長さ約80~120mに刻まれた段丘が南から北に向かって舌状に延びている。したがって、南側は徐々に標高を高めながらも奥行き約350mの段丘が続き、北側は段丘崖で下位の段丘と区切られる。調査地の標高は東側斜面を除き92~94mで、現阿賀野川の河床から比高約40mを測る。

これらの段丘面はかつて広葉樹で覆われ炭焼き等に利用されていたが、昭和30年代以降、一部、煙や杉の植林事業が行なわれた。したがって、調査直前は杉林及びナラを主とする広葉樹で覆われていた。これとは別に上野東遺跡の北東部は大字西集落の共有地であり、地山の粘土層は壁土として利用¹⁾されていた。さらに段丘の東側の小谷をせき止めた溜池の堤盛土にも利用²⁾されたため、遺跡の半分近く(約550m²)は破壊と搅乱を受けていた。これ以外の部分の遺存状況は、概して良好であった。



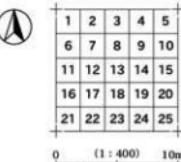
第6図 上野東遺跡グリッド設定図（アミは本発掘調査範囲）

1) 戦時中から家屋等の建設時に採取されたという。

2) 戦後に溜池の拡大時に築堤用に採取されたという。

B グリッドの設定

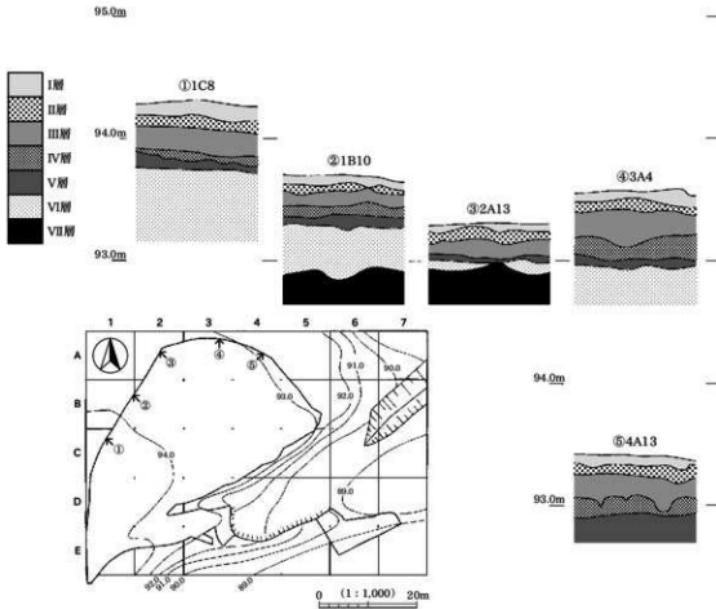
調査地は南から北に向かって緩く傾斜する地形で、真北方向とほぼ一致するため、グリッドの方向は真北を基準に設定した。国家座標のX座標 = 186575.000 (北緯37度40分51.33902秒)、Y座標 = 81880.000 (東経139度25分30.37584秒) を基点 (1B机) とし、南北・東西をそれぞれ10mの方眼を組み、大グリッドとした。グリッドの表示は、調査地を覆う方眼を西から東に算数字 (1~7)、北から南にアルファベット (A~E) を付し、これを組み合わせた。小グリッドは大グリッドをさらに2m方眼に分割し、25区分した。小グリッドの表示は第7図のよう北西隅を1 (基点) に算数字順とした。包含層出土遺物の出土地点は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせ取り上げた。



第7図 小グリッド模式図

2 基本層序

既述のように本遺跡は阿賀野川左岸の段丘上の平坦地に位置するものの、阿賀野川に向かって南側から北側に極めて緩く傾斜する。したがって、調査区内はどの地点においても基本層序はほぼ同じである。しかし、標高94~95m前後がこの付近では鹿瀬輕石質砂層（基本層第IV層）の堆積境界と推定されるせいか、



第8図 上野東遺跡の基本層序

段丘縁部を除き、標高が高くなると鹿瀬軽石質砂層が薄くなり、低くなると厚く堆積する傾向にある。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅶ層まで説明する。

Ⅰ層：10～15cm 7.5YR5/3（にぶい褐色土）～4/3（褐色土） 表土。草木根が多く、上層は未分解腐植土となる。粘性・しまりなし。

Ⅱ層：5～10cm 7.5YR3/2（黒褐色土）～3/3（暗褐色土） 縄文時代中期以降の遺物包含層であるものの、遺物は少ない。

Ⅲ層：10～30cm 7.5YR4/4（褐色砂質土）～3/4（暗褐色砂質土） Ⅳ層への漸移層。粘性なし。Ⅳ層が認められない、または薄く堆積するところでは、V層とも混じる。この場合、前期後葉～末葉の遺物が紛れて出土する。

Ⅳ層：0～15cm 10YR5/6～5/8（黄褐色砂土） 鹿瀬軽石質砂層。福島県金山町沼沢火山に起源を持つ火山灰の二次堆積層。約5,000年前の堆積（第Ⅱ章3参照）とされている。粘性なし。標高の低い第3グリッド列から東側にかけて厚く堆積し、標高の高い第2グリッド列から西側は薄く、または認められない。薄く堆積するところでは、Ⅲ・V層と混じり合う。

Ⅴ層：0～10cm 7.5YR6/4（にぶい橙色シルト）～5/6（明褐色シルト） シルト質で粘性あり。しまりややあり。縄文時代前期の遺物包含層で、上面及び上層から前期後葉～末葉の遺物が出土している。

Ⅵ層：5～40cm 7.5YR5/6（明褐色粘土）～6/8（橙色粘土） シルト質粘土で粘性・しまりあり。遺物は含まれない（地山）。大字西集落の壁土用に利用された土である。

Ⅶ層： 7.5YR 5/6（明褐色粘土）、6/8（橙色粘土） Ⅵ層に疊が混入したもの。シルト質粘土で粘性・しまりあり。遺物は含まれない（地山）。

上野東遺跡の基本層序は、現明嶽遺跡及びこれまで調査された周辺の遺跡との層序と比較すると、下記のように中棚遺跡を除き一致する。これは中棚遺跡の大部分が標高95m

遺跡名	基 本 層 序							備 考
	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	
上野東遺跡	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	
現明嶽遺跡	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	
中 棚 遺 跡	I層			II層		III層		浅沢・北村as前掲
猿 鹿 遺 跡	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層		浅沢・北村as前掲
大坂上遺跡	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層		浅沢・北村as前掲

第2表 周辺遺跡との基本層序の比較

以上を測り、鹿瀬軽石質砂層（Ⅳ層）、同漸移層（Ⅲ層）が堆積しなかつたためと考えられる。

3 遺構

A 概 要

上野東遺跡では鹿瀬軽石質砂層の直下から縄文時代前期後葉～末葉の遺構・遺物が、これより上層では、縄文時代中期以降、とりわけ平安時代の遺構・遺物が検出された。

既述のように、調査地は西集落地区の住人が、確認できる範囲では戦時中からVI層の土を壁土にすべく採取する場所であり、また、隣接するため池の工事にあたっての土取り場所でもあった。その結果、遺跡の北東部分約550m²については基本層VII層にまで及ぶ擾乱・破壊を受けている。したがって該当範囲での遺構は残っていない。

見つかった遺構は住居（略号SI）2軒、土坑（略号SK）7基、焼土8基、硬化面2基、遺物集中地点1か

所の20である。なお遺構番号については、遺構毎の番号ではなく調査の過程に於いて確認順に付けられた一連の番号である。以下、遺構の種類ごとに概要を記述する。

B 遺構各説

(1) 住居(SI)

SI8 (国版3・34・35)

調査区西側の1Cグリッドに位置する。V層上面を削平中に、鹿瀬軽石質砂の落ち込みを検出して確認した。平面形は円形を呈し、長径5.7m、短径5.6m、深さ26cmを測る。床面は平坦で、断面形は浅い皿状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、確認面から床面上の3cmまでは鹿瀬軽石質砂が厚く堆積する。炉は径53cmを測る円形の地床炉で、住居のほぼ中央に位置する。

柱穴は径9～15cm、深さ3～16cmの小規模のものが14基検出された。10基は壁沿いを巡り、しかも殆どが建物の内側斜め上方向に掘り込まれている。ピットの規模や向きから、垂木状の柱を斜め内側に立て、中央で束ねて屋根とした「テント式住居」[宮本1996]と推定される。柱穴の覆土は、褐色土、明褐色土が堆積し、このうちP1～7、11～14は、柱穴を検出した時点で鹿瀬軽石質砂の堆積が認められた。また測量図面では建物の外側が極めて緩く高くなっている。住居の掘り込み土を盛り上げた「周堤」の痕跡と推定される。

遺物は床面から深鉢形土器(1)が横位の状態で出土している。このほか、覆土から縄文土器(2・3)、不定形石器2点、剥片類6点、敲磨石類1点、石皿1点(59)が出土した。時期は遺構の確認層位、出土土器から縄文時代前期後葉(大木5b式期)と推定される。

SI14 (国版3・34・35)

調査区南西部の1Dグリッドに位置する。II層を削平中に須恵器の小破片が出土したが、プランが確認できずに、V層で床面を確認した。遺物の出土状況等からみて、II層の黒褐色土中から掘り込みがあったものと考えられる。確認面からは、床、カマド、柱穴等が検出されている。柱穴並びを見る限り、平面形は不整な方形を呈していたものと推定され、北、東側がやや歪む。長軸4.0～4.4m、短軸3.1～3.9m、長軸方向はN-129°～Wを測る。西側の床面上では径3.5～2.1mの範囲にわたり、炭化物の散布が認められた。

カマドは住居の南壁中央付近に位置したものと思われ、燃焼部及びカマド構築部材の礫が出土している。袖部、煙道部等は確認できなかった。煙道と考えられる位置には径61cmの落ち込みが検出された。これは本遺構のカマドの掘り方に切られている。この落ち込みからは多量の焼土が検出され、燃焼部の焼土に類似することから、本遺構以前のカマド掘り方の可能性が考えられる。

柱穴は径15～45cm、深さ8～42cmの規模のものが29基検出され、16基は壁沿いを巡ったものと思われる。柱穴は隣接して2基以上確認されており、カマドの状況もあわせて考慮すると、複数回の建替えがあったものと考えられる。遺物は床面から須恵器、土師器の破片が出土している。このほか、覆土と考えられる黒褐色土中からは、須恵器(66・68・69)、土師器(67)が出土している。時期は、これらの出土土器から9世紀後半～10世紀初頭と推定される。このほか、カマドの袖部付近から石鏃が1点(4)出土している。

(2) 土坑

SK6 (国版3・36)

調査区西部の2C1グリッドに位置し、北西0.9mにSK7が隣接する。V層上面を削平中に確認した。平

面形は円形を呈し、長径175cm、短径160cm、深さ36cmを測る。底面は平坦で、側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は2層に識別され、レンズ状に堆積する。遺物は覆土上層から縄文土器63g(4)が出土している。時期は出土土器から、縄文時代前期後葉(大木5b式期)と推定される。

SK7 (図版4・36)

調査区西部の1B25グリッドに位置し、V層上面で確認した。平面形は梢円形を呈し、長径156cm、短径120cm、深さ46cm、長軸方向はN-47°-Wを測る。底面は平坦で、側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は3層に識別され、レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～未葉と推定される。

SK13 (図版4・36)

調査区中央から南寄りの3C23、3D3グリッドに位置し、V層上面で確認した。平面形は円形を呈し、長径140cm、短径120cm、深さ26cmを測る。側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1層から剥片1点、2層から縄文土器8g、剥片類1点が出土した。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から、縄文時代前期後葉～未葉と推定される。

SK15 (図版4・36)

調査区中央部の3C18グリッドに位置する集石土坑である。V層上面を削平中に確認した。平面形は梢円形を呈し、長径190cm、短径140cm、深さ22cm、長軸方向はN-48°-Wを測る。側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈する。礫は確認面から底面直上まで認められ、計957点、249kg出土している。遺物は縄文土器16g、剥片類2点が出土した。出土土器が細片のため遺構の時期は不明であるが、縄文時代前期後葉以前と推定される。なお、本遺構から出土した炭化材試料について年代測定を行った結果、 $7,980 \pm 40$ YBPの年代を得ている。

SK17 (図版4・36)

調査区中央からやや北寄りの2B19グリッドに位置し、V層上面で確認した。平面形は円形を呈し、長径143cm、短径125cm、深さ44cmを測る。底面はやや凸凹があり、側壁は段を持ちながら立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。遺物は縄文土器12g(5)、石鏃失敗品1点(8)、剥片類2点、石皿1点が出土した。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から、縄文時代前期後葉～未葉と推定される。

SK18 (図版4・37)

調査区北側端の3A14・15グリッドに位置し、V層上面で確認した。平面形は円形を呈し、長径70cm、短径65cm、深さ22cmを測る。底面はやや凸凹があり、側壁は緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形を呈し、覆土は2層に識別される。遺物は石皿1点が出土した。時期は確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～未葉と推定される。

20号炭窯 (図版5・38)

調査区北部の3A20～4A21グリッドに位置する炭窯で、II層を削平中に確認した。平面形は梢円形を呈し、長径212cm、短径175cm、深さ55cm、長軸方向はN-24°-Eを測る。底面はやや凸凹があり、側壁は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形状を呈し、覆土は5層に識別される。4層が炭化物層で、10～16cm程度堆積する。焼土は底面付近の5層から検出され、底面及び壁面が被熱し、赤変している。礫は354点出土し、これらは全て被熱している。以上のことから、焼けた木材の上に礫と土を覆つて炭を作る「伏焼」の方法の炭窯と推定される。時期は確認層位、覆土の堆積状況から平安時代以降と推定される。しかし、炭化材試料について年代測定を行った結果、 $6,370 \pm 40$ YBPの年代を得ており、遺構の年

代観と一致しない。

(3) 焼 土

1号焼土（図版4・37）

調査区中央部の2C19グリッドに位置する。西0.8mに2号焼土、南西1.6mに9号焼土が隣接する。V層上面を削平中に確認した。焼土範囲は梢円形を呈し、長径202cm、短径146cm、厚さ12cm、長軸方向N-72°-Eを測る。遺物は縄文土器（6・7）、石錐1点（17）、剥片類1点が出土した。時期は出土土器から縄文時代前期後葉（大木5b式期）と推定される。

2号焼土（図版4・37）

調査区中央部の2C20グリッドに位置し、V層上面で確認した。焼土範囲は円形を呈し、長径68cm、短径64cm、厚さ10cmを測る。遺物は出土していない。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

3号焼土（図版4・37）

調査区南側の3D22グリッドに位置し、V層上面で確認した。焼土範囲は円形を呈し、長径38cm、短径37cm、厚さ5cmを測る。遺物は出土していない。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

9号焼土（図版4・37・38）

調査区中央部から西寄りの2C23グリッドに位置し、V層上面で確認した。焼土範囲は円形を呈し、長径78cm、短径76cm、厚さ12cmを測る。遺物は石錐1点、剥片類1点が出土した。時期を特定できる遺物は出土しなかつたが、確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

16号焼土（図版5・38）

調査区北部の4A16グリッドに位置し、II層を削平中に確認した。焼土範囲は円形を呈し、長径72cm、短径59cm、厚さ10cmを測る。南西で20号炭窯と重複し、これに伴う可能性がある。

21号焼土（図版5）

調査区南西部の1E8グリッドに位置する。西0.5mに22号焼土、南1mに23号焼土が存在する。V層上面を削平中に確認した。焼土範囲は円形を呈し、長径40cm、短径35cm、厚さ6cmを測る。遺物は出土していない。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

22号焼土（図版5）

調査区南西部の1E8グリッドに位置し、V層上面で確認した。焼土範囲は円形を呈し、径44cm、厚さ8cmを測る。遺物は出土していない。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

23号焼土（図版5）

調査区南西部の1E13グリッドに位置し、V層上面で確認した。焼土範囲は円形を呈し、長径42cm、短径37cm、厚さ6cmを測る。遺物は出土していない。時期は遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

(4) 遺物集中地点

5号遺物集中地点（図版5・38）

調査区ほぼ中央の2C8グリッドに位置し、4号硬化面の北東に隣接する。遺物は土器を中心に、 $1.52 \times 1.60\text{m}$ の範囲で検出された。特に西側 $54 \times 38\text{cm}$ の範囲では、底部片を中心に比較的大型の胸部片が集中する。遺物は標高 $93.56 \sim 93.70\text{m}$ の範囲で、基本層V層上面の傾斜に沿いながら出土している。遺物は縄文土器 $2,865\text{g}$ (9~12) が出土した。時期は縄文時代前期後葉(大木5b式期)である。

(5) 硬化面

4号硬化面(図版5・38)

2C13グリッドに位置する。硬化の範囲は $1.29 \times 1.18\text{m}$ で、5号遺物集中地点と同レベルで検出されている。遺物は出土していない。5号遺物集中地点との関連を捉えることができなかつたが、時期差はあまりないものと考えられ、縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

19号硬化面(図版5)

調査区北西の2B4、5グリッドに位置し、II層上面で確認した。硬化面は $1.85 \times 1.44\text{m}$ の範囲に広がり、厚さは $2 \sim 15\text{cm}$ を測る。硬化の度合いは一様ではなく、東側 $0.4 \times 0.3\text{m}$ 、西側 $1.44 \times 0.93\text{m}$ の範囲が最も硬く締まっている。遺物は出土していない。時期は不明ながら、検出層位から縄文時代中期以降に所属するものと推定される。

4 遺 物

A 概 要

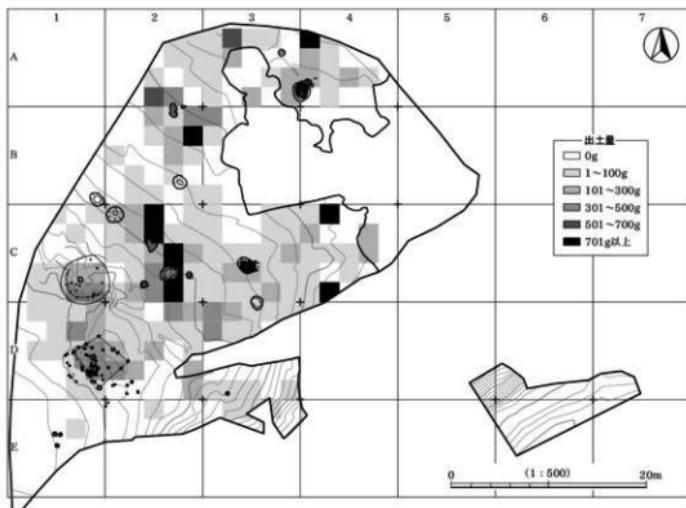
上野東遺跡の遺物は、鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下の層から出土している。その出土量は、縄文土器 $31,941\text{kg}$ 、石器・石製品 605 点、古代の土器 803g (須恵器 715g 、土師器 88g)である。このほか搬入磚、古代以降の砥石などがある。

縄文土器は鹿瀬軽石質砂層の下層から前期前葉～末葉までの、上層からは中期以降のものが出土している。主体は前期後葉～末葉に所属し、ほかの時期は断片的である。石器は時期的な傾向をつかみにくくものの、出土層位・分布から、多くは土器と同じく前期後葉～末葉に所属するものと思われる。分布は、縄文時代前期後葉～末葉の遺構が分布する $1 \sim 3 \cdot C \sim D$ グリッドと $2A \cdot 2B$ グリッドに集中する。古代の土師器・須恵器はSI14及びその周辺に集中し、これらの遺物がほぼ全てSI14に伴うものと考えられる。

なお、土取りのため搅乱・破壊を受けていた3B～5Bグリッドを中心とする部分からは、ほとんど出土していない。以下、縄文土器、石器、古代の土器の順に説明する。

B 縄文土器

前述のように調査の結果、 $31,941\text{kg}$ の縄文土器が出土している。鹿瀬軽石質砂層の下層からは前期前葉～末葉までの、上層からは中期以降のものが出土している。しかし、前期後葉～末葉が大半を占め、これ以外の時期は断片的で少ない。前期後葉～末葉に所属する土器は、鹿瀬軽石質砂層の直下の基本層V層上面～上層から出土している。出土分布状況は、SI8、SK6、1・2・9号焼土、4号硬化面、5号遺物集中地点などの前期後葉～末葉の遺構が検出された $1 \sim 2 \cdot C \sim D$ グリッドからの出土が多い。このほか該期の遺構は認められなかつたが、 $2A \cdot 2B$ グリッド境からの出土も多い。これ以外の時期のものは、出土量が少ないので、散漫に分布する。



第9図 繩文土器出土分布図

(1) 資料の提示

検出された遺構は少なく、遺物は時期的なまとまりがあるとはいえ、必ずしも多くない。したがって、遺構に伴うものは、比較的細片のものまで図化・掲載した。遺構に伴わないと判断された包含層出土土器は、分類や編年のお資料と思われるものを中心に図化・掲載した。資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、本文で詳述した。以下、若干の補足説明をする。

a 観察表の記載項目

No. 土器の掲載番号であり、実測図番号、写真番号に一致する。

遺構名・出土地点 遺構出土のものは遺構名を、包含層出土のものは、原則として小グリッドまでを記入した。

層位 遺構出土のものは覆土内のどの層位から出土したかを記入した。包含層出土のものは、基本層序のどの層か記入した。

残存部位・残存率・破損品・破片資料は、第10図の部位名称を参考に残存部位を記入し、その残存率を分数で記入した。

計測値 第10図の計測基準に従った。口縁部径（以下「口径」とする）、底部径（以下「底径」とする）、器高をcm単位で記入した。復元実測で推測の度合いの極めて強いものは（ ）付きとした。

縄文原体 施文された縄文の原体記号である。また原体記号の後に施文方向を矢印で示した。横位の場合は「→」、縦位の場合は「↓」、不明ないし規則性がない場合は記入していない。撚糸文の場合は「撚糸」の後に原体を記入した。

色 調 『新版標準土色帖 1996年版』[農林水産省農林水産技術会事務局 1996] を参考に記入した。なお、基本層序の土層説明の色調も同様である。

混 和 材 胎土中に含まれる鉱物や岩片であり、肉眼観察により特に多く含まれているものや特徴的なことを記入した。礫と砂は粒径2mm程度を境に区別した。海綿骨針が含まれている土器が見られたが、特に多く含まれている土器に「骨針」と記入した。

時 期 わかる範囲でおよその時期を、土器型式名がわかる場合は型式名を記入した。

(2) 分 類

a 分 類

分類は先ず鹿瀬軽石質砂層を挟んで出土する土器が区分されることや前期後葉～末葉の土器が主体を占め、これ以外は各時期ともに散発的であることから、所属時期を考慮し、次の4群に分けた。

第Ⅰ群土器：前期前葉～中葉に所属するもの。

第Ⅱ群土器：前期後葉～末葉に所属するもの。

第Ⅲ群土器：中期以降に所属するもの。

第Ⅳ群土器：ほとんどが第Ⅱ群と推定されるが、破片資料や地文だけのため確実な時期判断が出来ないもの。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ群は鹿瀬軽石質砂層の直下、基本層V層上面～上層にかけて、第Ⅲ群土器は鹿瀬軽石質砂層上位の基本層II～III層で出土している。

器 形 主体的に出土した第Ⅱ群土器は、破片資料が多いもののすべて深鉢と推定される。また復元実測したものも含めると器形に複数のバリエーションが認められる。しかも、本遺跡の西約500mに存在する現明嶽遺跡の下層では、本遺跡より若干新しい土器を多く出土している。したがって、現明嶽遺跡との器形の変化を比較するため、器形の類型化を行った。

A器形：口縁部と胴部の境が明瞭でなく、胴部中位からやや大きく外反して口縁部にいたるもの。

B器形：口縁部と胴部の境が明瞭でなく、底部から口縁部にかけて直線状に開くもの。いわゆる「バケツ形」を呈する。

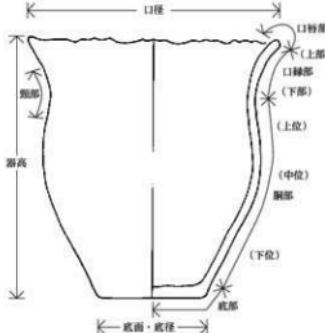
C器形：口縁部と胴部の境が明瞭でなく、底部から口縁部にかけて筒状になるもの。いわゆる「円筒形」を呈する。本遺跡では出土していない。

D器形：底部から胴部にかけてやや内湾気味に開き、胴部から口縁部にかけて直立気味になり、口縁部上位でやや強く外反する。口縁部と胴部の境がいくらか明瞭になる。

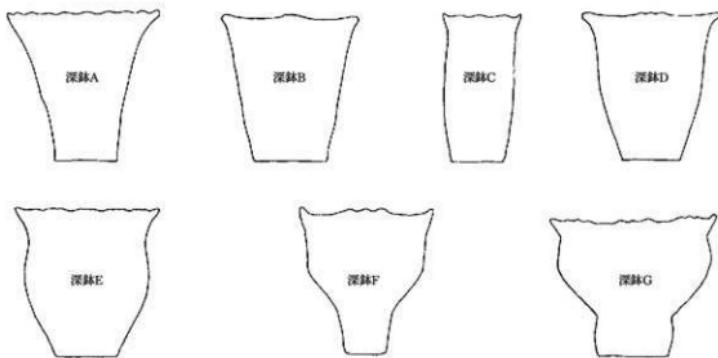
E器形：胴部中位で膨らみ、頸部でわずかにすぼまり、口縁部はやや強く外反する。

F器形：胴部下位がすぼまり、中位が膨らみ、頸部がすぼまり、口縁部が外反する。E器形とG器形の中間器形となる。本遺跡では出土していない。

G器形：胴部下位が筒状(台状)、中位が球状に膨らみ、頸部で強くすぼまり、口縁部が外反する。いわゆる「金魚鉢形」を呈する。本遺跡では出土していない。



第10図 土器計測基準及び部位名称



第11図 器形分類図（前期後葉～末葉）

細分類 さらに出土土器の大半を占める第Ⅱ群土器は文様、系統などから、第Ⅲ群土器は文様・時期から、第Ⅳ群土器は破片部位と文様により次のように細分した。

第Ⅱ群土器（1・2・4・6・9～12・16～39） 前期後葉～末葉に所属するもの。

A類 沈線による鋸歯状文（山形文）からなるもの。横走沈線が頸部に巡るもののが極めて多い。器形はD器形となるものが多い。なお、本遺跡からは粘土紐貼り付けによる鋸歯状文は1点も認められなかった。鋸歯状文の形状でさらに細分した。

A1類 (4・6・9・10・16・17) 横走沈線とやや大柄の鋸歯状文が施文されるもの。平行沈線は頸部に巡り、口縁部と胴部を区画するものが多い。

A2類 (11・18～22) 横走沈線とやや小形で小刻みな鋸歯状文が施文されるもの。平行沈線は頸部に巡り、口縁部と胴部を区画するものが多い。

A3類 (23) 口縁部の上下を横走沈線で区画し、やや小形で小刻みな鋸歯状文（山形文）が施文されるもの。

B類 (24) 繩文原体が押圧されるもの。図示した上器は横走沈線と鋸歯状文が施文され、ほかの文様と組み合わされている。

C類 (25・26) 沈線による弧線文が施文されるもの。横走沈線が頸部に巡る。

D類 (27～29) 頸部に横走沈線が5～7条巡るもの。胴部は繩文または繩文+綾縞文となる。

E類 (1・12) 口縁部に押捺または划みが施され、胴部は繩文または撚糸文のみのもの。器形はA・B器形である。

F類 (30・39) 幅の広い隆線（幅5mm程度）を貼付し、隆線上に連続爪形文を施文するもの。

G類 東関東系の土器のもの。文様・時期によりさらに細分した。

G1類 (31) 浮島Ⅲ式に相当するもの。半截竹管状工具の内側による三角文や爪形文を施文するもの。

G2類 (32) 興津Ⅰ式に相当するもの。半截竹管状工具による有節沈線文（爪形文）を頸部に巡らし、胴部は有節沈線文で横位連続菱形文を施す。

H類 半截竹管状工具による平行沈線や連続爪形文を施文するもの。形状により細分した。

H1類（2・34） 比較的細い平行沈線や細かい爪形文を施文するもの。

H2類（35～38） やや幅の広い平行沈線や連続爪形文を施文するもの。

H3類（33） 縦位に平行沈線が施文されるもの。

第III群土器（57～65） 中期以降に所属するもの。

A類（57） 中期前葉に所属するもの。

B類（58～62） 後期前葉に所属するもの。

C類（63） 後期中葉に所属するもの。

D類（64・65） 明確な時期は不明であるが、後期以降に所属するもの。

第IV群土器（3・5・7・8・40～56） ほとんどが第II群と推定されるが、破片資料で地文だけのため確実な時期判断が出来ないもの。破片部位により細分した。

A類（8・41～50） 口縁部破片のもの。

B類（3・5・7・51～54） 胎部破片もの。

C類（55・56） 底部破片のもの。

（3）土器各説

a 遺構出土土器（図版6・39）

各遺構から出土した土器について前述の分類をもとに説明する。細かい破片資料は記述が重複するため、適宜省略したものもある。

SI8出土土器（1～3）

床面から1個体、覆土から少量出土している。1はやや退化した鋸歯状装飾体が口縁部に付き、波状口縁となる。口唇部は肥厚し、波頂部は強く、ほかは弱い刻みが付けられる。口縁部以下は縄文RLが施される。器形はB器形となる。胎土に石英を含む砂礫を多く含み、焼成は堅緻である。大木5b式に比定される。

SK6出土土器（4）

覆土から少量の上器が出土している。4は沈線によるやや大柄な鋸歯状文が施文される第II群A1類の土器である。口縁部に鋸歯状装飾体が付き、口縁部下部は指頭圧痕状の押捺が巡る。遺存部を見る限り、口縁部の直下は波頂部下に鋸歯状沈線文、波底部下は平行沈線が横走するようである。器形はB器形となる。大木5b式に比定される。

SK17出土土器（5）

覆土から少量の土器が出土している。図示した土器は縄文LRが施文された土器細片である。

1号焼土出土土器（6・7）

焼土内から少量の土器が出土している。6は沈線による大柄な鋸歯状文が縦位に施文される第II群A1類の土器で、7は縄文RLの深鉢の胴部破片である。

16号焼土出土土器（8）

焼土確認面から少量の土器が出土している。破片資料のため断定できないが、器形はE器形になるものと思われる。退化した鋸歯状装飾体が付くため、波状口縁となり、波頂部に刻み目が付く。口縁部以下は縄文RLが施文される。第IV群土器に含めたが、明らかに大木5式である。

5号遺物集中地点（9～12）

深鉢3個体と胸部破片が出土している。細かく割れて出土したため、12を除き復元実測である。9は口縁部と胸部がいくらか明瞭になるD器形を呈する。退化した鋸歯状装飾体が付くため波状口縁となり、波頂部に刻み目が施される。口縁部と胸部の境には平行沈線が横走し、直下に鋸歯状沈線文が施文される。10は口縁部と胸部が明瞭なE器形である。鋸歯状装飾体が全周し、口縁部下部にも刻みが付けられる。口縁以下の文様構成は、9に近似する。11はE器形と推定され、頸部から胸部上位に小形で小刻みの鋸歯状沈線文が7条巡る。12は口縁部と胸部の境が不明瞭なA器形である。口縁部が前後の押圧により、小波状を呈する。口縁部以下は撲糸文Rが施文されている。すべて大木5b式である。

b 包含層出土土器 (図版6・7・39・40)

第Ⅰ群土器 (13~15) 前期前葉～中葉の所産と推定されるものである。いずれも胎土に纖維を混入する。13・14は深鉢の胸部破片で、13は羽状繩文が、14は繩文LRが施文される。15は底部破片で、底部間近まで爪形の刺突が施される。前期前葉の所産と推定される。

第Ⅱ群土器 (16~39) 前期後葉～末葉に所属するものである。既述のように本遺跡の主体をなすもので、基本層序V層上面～上層から多く出土している。分類を基に記述する。

A類 (16~23) 沈線による鋸歯状文(山形文)からなるもの。横走沈線が頸部に巡るもののが極めて多い。器形はD器形となるものが多い。鋸歯状文の形状でさらに細分した。

A1類 (16・17) 同一個体で、波状口縁である。繩文RLに口縁部に沿って沈線が4~5条巡り、やや大柄な鋸歯状沈線が巡る。器形は破片のため明確でないが、B器形と思われる。

A2類 (18~22) 18~21は胸部上位から頸部にかけてやや小形で小刻みな鋸歯状文が施文され、18~20は頸部に横走沈線が認められる。破片のため、わかりにくいが頸部の括れが認められる。大木5b式と推定される。22はやや小形で小刻みな鋸歯状文があるため、A2類に含めたが鋸歯状文が1条であること、縦位の平行沈線が認められること、頸部の括れが見られず胸部破片のようにも見えることから他時期(中期)の可能性も考えられる。

A3類 (23) 内湾気味に開く、幅の広い口縁部の上下を横走沈線で区画し、区画内に鋸歯状沈線文が施文される。大木6式古段階と推定される。内湾気味に開き、幅の広い口縁部を持つ器形は、大木6式以降に認められるが、破片資料のため器形分類には類型化していない。

B類 (24) 頸部がいくらか括れるD器形となる。頸部に1条の沈線を横走させ口縁部と胸部を区画し、口縁部に繩文RLを押圧する。胸部は鋸歯状沈線文を用いて、各種のモチーフを描いている。大木5b式と推定される。

C類 (25・26) 26はE器形となる深鉢である。口縁部に鋸歯状装飾体が付き、口唇部に繩文が施される。口縁部下部は折り返し口縁のため肥厚し、押捺が巡る。胸部は綾縞文を持つ繩文地に沈線で弧線文を巡らせている。25は胸部破片であるものの、26と同様に綾縞文を持つ繩文地に沈線で曲線文が描かれている。大木5b式と推定される。

D類 (27~29) いずれも頸部に多条の横走沈線を巡らせ、口縁部と胸部を区分する。口縁部は波状口縁となる。28・29はD器形となり、鋸歯状装飾体から変化したと思われる瘤状の突起が付く。口縁部は無文、胸部は綾縞文を持つ繩文となる。大木5b式と推定される。

F類 (30・39) 口縁部破片で、遺存部を見る限りG器形の口縁である。文様は口縁部にやや幅広な隆線を2条?貼付し、隆線上に爪形文を施している。胸部も隆線が貼付され、爪形文が施文される。

大木6式古段階に比定される。39は胴部破片で隆線上に爪形文が施文されるが、細片のため明確でない。

G類 (31・32) 東関東系の土器である。文様・時期からさらに細分した。

G1類 (31) 波状口縁の口縁部破片で、半截竹管状工具の内側による三角文や爪形文が施文される。胎土に雲母、石英を含んだ砂礫が多く、厚手でよく焼かれている。浮島田式に比定される。

G2類 (32) E器形の深鉢で、頸部に4条の有節沈線が巡り、口縁部と胴部を区画する。口縁部は退化した鋸歯状装飾体が付き波状口縁となる。文様は肥厚した口縁部下部に押捺、頸部も含め縄文しが横位・斜位に押圧される。胴部は有節沈線で横位連続菱形文を巡らせる。頸部の横位有節沈線文、胴部の横位連続菱形文から興津I式と考えたが、口縁部の縄文圧痕、退化した鋸歯状装飾体、口縁部下部の押捺など大木5b式の特徴も含まれている。

H類 (33～38) いずれも破片であるが、半截竹管状工具による平行沈線や連続爪形文などが施文されている。文様の形状により細分した。

H1類 (34) 小破片であるが、細い平行沈線や細かい連続爪形文が見られる。諸磕c式に近似する。

H2類 (35～38) いずれもやや幅の広い平行沈線や連続爪形文を施文される。35・38は口縁部破片で、38には口唇部に刻みが付けられる。新潟市(旧巻町)豊原遺跡第III群土器〔前山1994〕に近似する。諸磕b式併行と考えている。

H3類 (33) 胴部破片で、縦位の平行沈線が施文される。

第III群土器 (57～65) 中期以降に所属するものである。出土点数は少ない。時期により細分した。

A類 (57) 深鉢の胴部破片である。縄文地に半截竹管状工具による半隆起線文が横走する。中期前葉の所産と推定される。

B類 (58～62) 59～62は頸部区画の見られない深鉢で、胴部は太い沈線が垂下する。縦位の沈線間は無文のもの(59・60)、縄文のもの(61・62)がある。口縁部は指頭圧痕状の押捺(59・62)や沈線による梢円文(59)が施される。58はこれらの土器に付く、円孔や盲孔のある突起である。後期前葉の南三十稻場式古段階に比定される。

C類 (63) 鉢の口縁部破片である。外面は無文で、内面に2条、口唇部に1条の沈線が巡る。後期中葉の加曾利B1式期と推定される。

D類 (64・65) 64は深鉢の口縁部破片で、条線文が縦位に施文される。65は撚糸Rを縦位と斜位に施文し、網目状撚糸文風にしている。きわめて良好な焼成である。時期は限定できないが、いずれも後期以降の所産である。

第IV群土器 (40～56) 出土地点や層位、伴出土器の時期的傾向から、ほぼ第II群土器と推定できるが、破片資料や地文だけのために確定的な時期判断ができないものである。部位により細分した。すべて深鉢である。

A類 (40～50) 口縁部破片で、形状により細分した。

A1類 (41～43) 折り返し口縁で、肥厚するものである。41は口唇部に押捺、口縁部下部に刻み状の押捺が施される。

A2類 (44～46) 44は口縁部上部の前後の押圧、45・46は口唇部の押捺により小波状口縁となる。なお44は口唇部上に縄文LRが施文される。

A3類(40・47) 40は口唇部に刻みが、47は刺突が巡る。

A4類(48~50) いずれも平口縁である。

B類(51~54) 胸部破片もの。地文により細分した。

B1類(52) 単節縄文のもので、52は縄文RLが施文されている。

B2類(54) 単節縄文と綾縄文のもので、54は縄文RLと綾縄文が施文されている。

B3類(53) 檜糸文のもので、53は檜糸文Rが施文されている。

B4類(51) 羽状縄文のもので、51は縄文LR・RLが施文されている。35と同一個体の可能性がある。

C類(55・56) 深鉢の底部破片で、胸部に55は縄文LR、56は縄文RLが施文されている。

C 石 器 (図版8~13・40~43)

出土した石器は第2表のとおり、合計で601点である。遺構内から25点(4.2%)、遺構外から576点(95.8%)で、遺構外出土が圧倒的に多い。これを集落遺跡に比較すると大きな違いである。本遺跡が集落遺跡ではなく、遺構が少ないことに起因するものである。したがって、石器の出土分布傾向は、包含層の分布傾向を大きく反映するものの、SI8、SK13・15、1・2・9号焼土、4号硬化面、5号遺物集中地点など、前期後葉～末葉の遺構が集中する地区から南側にかけて多く分布している。すなわち1C～4C・1D～2Dグリッドに相当する。また東寄りの斜面では出土が少なくなる。

器種別の出土数を見ると、各器種の出土点数は少ないものの、縄文時代の遺跡から出土する器種のほぼすべてを網羅する。この中で不定形石器、敲磨石類が多く、この2器種で70%を占める。石鏃、尖頭器、鎧状石器、石皿も一定量の出土である。なお、異形石器1点はあるものの、石製品は少ない。



第12図 上野東遺跡 石器出土分布図

器種名 出土区分	石鏃	尖頭器	石錐	石底	不定形石器	両側刃鋸痕のある石器	ヘラ状石器	打製石斧	石錐	磨製石斧	敲削石器	石錐	砥石	小計	石鏃失敗品	石核	剥片類	合計
	遺構内出土	1	1		2				3	2		9	2	14	25			
遺構外出土	5	6	2	3	61	2	5	1	2	3	45	9	3	146	4	24	402	576
合計	6	6	3	3	63	2	5	1	2	3	48	11	3	155	6	24	416	601
百分率(%)	3.9	3.9	1.9	1.9	40.6	1.3	3.2	0.6	1.3	1.9	31.0	7.1	1.9	100.5	—	—	—	—

第3表 上野東遺跡 器種別石器出土数

所属時期については、出土地点・出土層位から前期後葉～末葉の遺構周辺に多く、前葉後葉～末葉の土器と同様な出土状況であることから、ほとんどが同時期に所属するものと推定できる。以下、器種毎に特徴的な事柄について記述する。

(1) 石 鏃 (1~6)

尖頭状の狩猟具のひとつで、尖頭部・側縁部・基部（脚部）が作出され、左右がほぼ対象のものを石鏃とした。後述する尖頭器とは平面形態で分類した。また、基本的に尖頭器より小型で軽い。ただし、小形の尖頭器とは、大きさ、重さであまり変わらないものもある。6点出土している。

分類 出土数が少ない割に多様な平面形を呈する。基部形態により細分した。

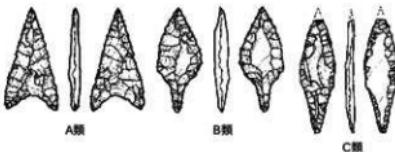
A類 (1~4) 四基無茎鏃である。4点出土している。側縁部の形状を見ると1・2は直線状に広がり、3は反り気味となり、4は内湾気味となる。基部の抉りはいずれも深く大きい。

B類 (5) 凸基有茎鏃である。1点のみの出土である。側縁部から茎部にかけてやや非対称である。

C類 (6) 尖基鏃である。1点のみの出

土地である。薄手の素材を用い、細身の柳葉状に仕上げている。側面観は素材の形状からやや湾曲する。

分布は1を除き、1D・2C・2Dグリッドにまとまる傾向が見られる。石材は1・2がメノウ、3が黒耀石、4~6が真岩である。



第13図 上野東遺跡 石鏃分類図

(2) 石鏃失敗品 (7~11)

小形の剥片に押圧剝離の二次調整が施されたもので、小形の剥片石器のうち石鏃以外を石鏃失敗品とした。不定形石器とは、大きさ・厚さ・二次調整・使用痕の有無などで区別される。石鏃完成品と比べた場合、素材・大きさ・二次調整などから、石鏃を意図して製作したと思われるが、何らかの理由で製作を断念（失敗）したとみられる。6点出土している。

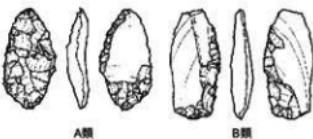
分類 二次調整の進行程度により細分類した。

A類 (7~9) 周縁の二次調整が半周以上に及ぶもの。

B類 (10~11) 周縁の二次調整が一部のみのもの。

A類は二次調整が進行した結果、7のようにいくらか石鏃の完形品がある程度イメージできる。B類は

A類に比べ、より素材の形状を大きく残す。A類4点、B類2点に分けられる。出土分布は他の石器や石鏃と同傾向であり、2C・1D～3Dグリッドから出土する。石材は石鏃と同様に硬質で緻密な石材が用いられている。大きさは石鏃完成品に比べ、大きく重くなる。8・9・11のように打瘤を完全に除去できないもの、7・10のように素材の厚みを減じられないものが認められ、このような理由から石鏃製作を断念したものよりも推定される。



第14図 上野東遺跡 石鏃失敗品分類図

(3) 尖頭器 (12～16)

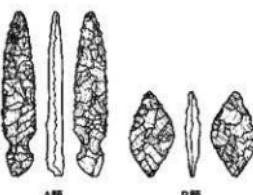
細身の尖頭状の狩猟具の一つで、先頭部・側縁部・基部が作出され、左右がほぼ対称なものである。石鏃に比べ、大きさ・重さ・平面形で区別される。6点出土している。

分類 平面形で細分した。A類3点、B類3点の出土である。

A類 (12～14) 全体形が細身で、基部が丸く、つまみ状になるものである。山形県高畠町押出遺跡で多出した「押出型ポイント」〔佐々木・佐藤1986〕と呼称されている。

B類 (15・16) 全体形がやや幅広な木葉形になるものである。図示していないものは、基部または先頭部の破片と推定されるものである。

12は基部の抉りが明瞭に作り出され、13・14は抉りが浅い。いずれも丁寧な作りである。15は薄手で小形品、16は厚手で大形品となる。二次調整は15が丁寧で、16は粗い作りである。大きさ、二次調整から未完成品の可能性もある。出土分布は他の石器と同傾向であり、調査区南部の1D・2D・1E・3Eグリッドに散布する。石材は石鏃と同様に硬質で緻密な石材が用いられている。



第15図 上野東遺跡 尖頭器分類図

(4) 石錐 (17～19)

3点のみの出土である。17はつまみ部の一部を欠き、やや長めの錐部を持つ。使用の結果の摩耗が認められる。18・19は厚手で大形の素材の端部に、粗い二次調整が施されている。

(5) 石匙 (20～22)

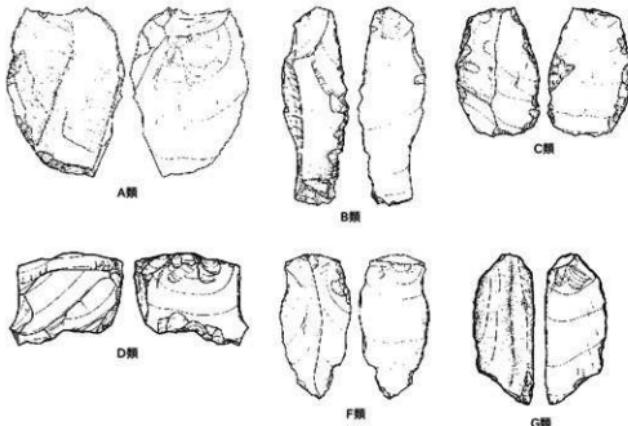
3点のみの出土である。つまみ部を上に置き、刃部との関係を見ると20は斜刃形、21は縦形、22は横形となる。但し、刃部はいずれも弧を描くように作られている。調査区南部の2D・3Dグリッドに散布する。22は黒色緻密貫安山岩製で、この地域ではほとんど使用されていない石材である。

(6) 不定期石器 (23～33)

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。63点抽出出した。

分類 刃部の形状の違いにより細分した。

A類 (23) 連続的な押圧剥離による滑らかな刃部を持つもの。片面調整のため、刃部断面形は片刃と



第16回 上野東遺跡 不定形石器分類図

なる。スクレイバー、搔・削器と呼称されていたものに相当する。2点のみの出土である。図示した石器は大形剥片の左側縁から下縁にかけて二次調整が施されている。

B類 (24~26) 連続または連続状の剥離による鋸歯状の刃部を持つもの。片面・半両面調整のため、刃部断面形は片刃となる。鋸歯縁石器、デンティキュレイトと呼称されていたものに相当する。7点出土している。24は横長剥片の両側縁に、26は右側縁から下縁に、25は縦長剥片の右側縁に二次調整を加えている。

C類 (27・28) 両面に連続または連続状の剥離のあるもの。両面調整のため刃部断面形は両刃となる。刃部の側面観がジグザグ状となるものもある。8点出土している。27は縦長剥片の両側縁が、28は大形の横長剥片の下縁が刃部と推定される。

D類 (29) 捜入状の刃部を持つもの。挿入石器、ノッチと呼称されていたものに相当する。3点のみの出土である。図示した石器は下縁の片面に二次調整が加えられ、片刃の挟りが作られている。

E類 素材の端部に連続または連続状の剥離による刃部を持つもの。エンドスクレイバー、搔器と呼称されていたものを含む。本遺跡からは出土していない¹⁾。

F類 (30・31) 不連続な剥離の刃部を持つもの。23点出土し、不定形石器の37%を占める。30は縦長剥片の左側縁から下縁に、31は厚手の横長剥片の下縁に不連続な剥離が認められる。

G類 (32・33) 明らかに刃部の二次調整が認められないものの、使用の結果と思われる刃こぼれ状の微細剥離・摩耗・光沢などの使用痕が認められるもの。9点出土している。32は縦長剥片の左側縁に、33は横長剥片の上縁・下縁に使用痕が認められる。特に32は光沢・摩耗痕が著しく認められる。

このほか上記の分類に当てはまらないものが11点認められた。

出土分布傾向は、土器や全体的な石器の出土傾向と同じく、調査区南部の2C・1~2Dグリッドに多い。石材は頁岩33点(52%)、流紋岩14点(22%)、緑色凝灰岩6点(10%)、凝灰岩5点(8%)を数え、

1) 不定形石器は現明櫛遺跡と細分類を同じにしたため、細分類では出土していないものもある。

この4種の石材で92%を占める。地元で採取できる硬質で緻密な石材を使用している。素材は判別できるものでは縦長剥片22点、横長剥片21点でほぼ同数となる。なお、図示していないが扁平礫のもの1点認められた。

(7) 両極剥離痕のある石器 (34・35)

2点のみの出土である。34は2個1対の刃部を、35は4個2対の刃部を持つ。いずれも頁岩製の横長剥片である。

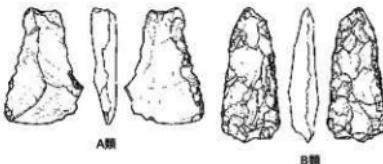
(8) 篦状石器 (36~40)

硬質で緻密な石材を用い、両面調整で斧状に仕上げた石器である。5点出土している。

分類 平面形により2細分した。

A類 (36・37) 基部から刃部への開き角が大きく、いわゆる撥形を呈するもの。2点出土している。36は刃部の節理面で欠損し、そこから正面に多数の二次調整が加えられている。刃部は仕上げられていない。37は素材の形状を大きく残し、二次調整は主に裏面右側縁に集中する。

B類 (38~40) 基部から刃部への開き角が小さく、いわゆる撥形と短冊形の中間形を呈するもの。3点出土している。いずれもほぼ全面に二次調整が加えられている。形状から見ると



第17図 上野東遺跡 篚状石器分類図

39・40は近似し、38とはやや異質である。

出土分布は、数が少ないこともあり、集中化傾向は認められない。石材は流紋岩、頁岩で占められ、硬質で緻密な石材である。

(9) 打製石斧 (41)

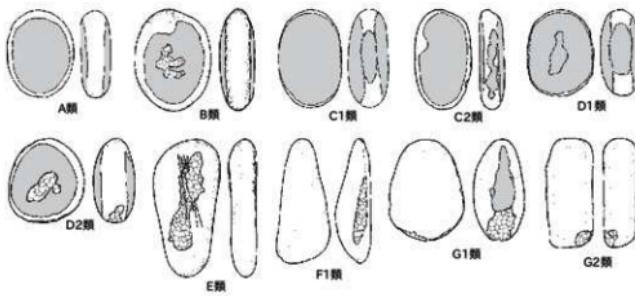
1点のみの出土である。41は基部が欠損するものの、節理面で剥離した板状の素材の両側縁、刃部にやや粗い二次調整を加え斧状に仕上げたものと推定される。石材はやや軟質な結晶片岩である。平面形は篚状石器に近似するが、石材、素材、二次調整等から中期以降に多出する打製石斧に分類した。

(10) 石 錘 (42・43)

扁平礫の両端に剥離・敲打で抉りをつけた石器である。2点のみの出土である。42はやや大形（長さ8.8cm）の扁平礫の両端に剥離と敲打で抉りをつけている。凝灰角礫岩製。43はやや小形（長さ5.4cm）の扁平礫の両端に剥離で抉りをつけている。安山岩製。

(11) 磨製石斧 (44・45)

敲打・研磨で斧状に仕上げた石器である。3点出土している。44は基部が細くすぼまるタイプの定角式磨製石斧である。風化が激しく、器面の剥落が著しい。斑櫻岩製。出土地点、石材、基部形状から前期後葉～末葉の所産でなく、後期以降に所属するものと思われる。45は擦切り痕の残る小形で細身の磨製石斧である。製作時の研磨痕や使用時の刃部の線状痕が明瞭に認められる。蛇紋岩製。このほか、図示し



第18図 上野東遺跡 敷磨石類分類図

ていないが蛇紋岩製の刃部破片が1点出土している。

(12) 敷 磨 石 類 (46~58)

片手ないしは両手で把持できる大きさの砾の表面に、調整や使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。表裏面の凹痕は敲打痕の集中とし、敲打痕に含めた。また側縁の使用痕のうち、平面・曲面を問わず、面をなす場合は磨痕、凹凸だけの場合は敲打痕とした。48点出土している。器種石器の中では不定形石器に次いで多く、砾石器の中では最も多い。

分類 第3表、第18図のとおり、表裏面の磨痕・敲打痕・側縁の磨痕・敲打痕の組み合わせで細分した。ただし、風化が激しく砾表面の状態がわかりにくいものは、観察できる範囲で分類した。また、側縁の磨痕と敲打痕の両方が認められる場合は、磨痕を優先した。

A類 (46・47) 表裏面のいずれかに磨痕が認められるもの。12点出土している。

B類 (48) 表裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められるもの。3点出土している。

C1類 (49・50) 表裏面のいずれかと側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。5点出土している。

C2類 (51) 表裏面のいずれかに磨痕、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの。4点出土している。

D1類 (52) 表裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められ、側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。2点出土している。

D2類 (53) 表裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められ、側縁のいずれかに敲打痕が認められるものの。2点出土している。

E類 (54) 表裏面のいずれかに敲打痕が認められるものの。1点のみの出土である。54は表裏面の敲打痕のほか、線状の擦痕も認められる。

F1類 (55) 表裏面のいずれかに敲打痕が認められ、側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。1点のみ出土している。56は断面三角形の棒状で特殊磨石と呼ばれているものである。

分類	表裏面の磨痕	表裏面の敲打痕	側縁の磨痕	側縁の敲打痕	備考
A類	有				
B類	有	有			
C1類	有		有		
C2類	有			有	
D1類	有	有	有		
D2類	有	有		有	
E類	有				特殊磨石
F1類		有	有		
F2類		有		有	
G1類			有		特殊磨石
G2類				有	

第4表 上野東遺跡 敷磨石類分類表

1) 分類上、存在の可能性があるものの現明巣遺跡でも出土しなかった。

F2類 表裏面のいずれかに敲打痕が認められ、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの。出土していない。

G1類 (56) 側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。2点出土している。56は断面梢円形であり、特殊磨石に含められる。

G2類 (57・58) 側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの。2点出土している。図示した2点は端部に敲打痕が認められる。

このほか破片資料や風化のため分類できないものが14点出土している。出土分布傾向は、全体的な石器の出土傾向とほぼ同じく、2~3C、1~3Dグリッドに多く分布する。石材は安山岩15点、花崗岩14点、石英安山岩9点、凝灰岩4点が多く使用され、この4種で42点(88%)を占めている。

(13) 石 盔 (59~64)

大形で扁平な礫の表面または表裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもの。砥石とは使用面の状態から区別される。11点出土している。

分類 使用面の加工の状態で細分した。

A類 (59・60) 敲打により、使用面が作出されているもの。いわゆる加工石皿である。使用が進むと周縁に明瞭な線が形成される。3点出土しているが、いずれも破片資料である。

B類 (60~64) 使用面が作出されず、素材獲得時の礫面を無加工のまま使用しているもの。いわゆる無加工石皿である。8点出土している。

出土分布傾向は、出土数が少ないこともあり、調査区南東部に散布する。石材はA類がすべて凝灰岩で占められ、B類は1点を除き、花崗岩で占められる。いずれも粒子構造を持つ石材であり、さらにA類はやや軟質で加工しやすい石材である。また、被熱の痕跡が7点(64%)に認められ、他器種と大いに異なる特徴である。

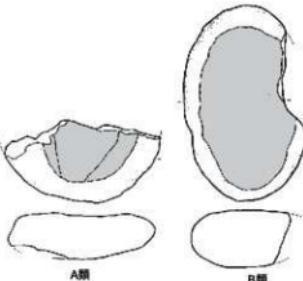
(14) 砥 石 (65・66)

砂岩などの粒子構造を持つ礫の表面に、使用による磨面(砥面)が認められる石器である。3点のみの出土である。石皿とは使用面の状態で区別される。

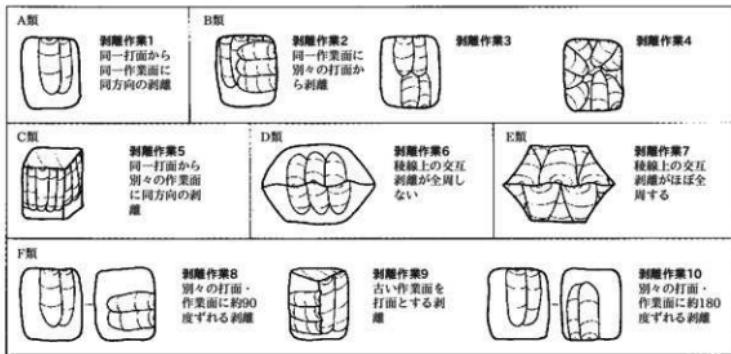
65は破片資料であるものの、扁平礫の片面に砥面が認められ、使い込まれた方向に沿って滑らかな砥面がわかる。66は破片であるものの、直方体の砥石と推定できる。破損面以外は使用された痕跡が認められる。形状から縄文時代の所産でなく、平安時代以降に所属する。図示していないが、このほか破片資料が1点出土している。石材は凝灰岩2点、砂岩1点で粒子構造を持つ石材が用いられている。

(15) 石 核 (67~71)

剥片剥離作業を何らかの理由により断念した残核、及び剥片剥離作業後の残核である。24点出土している。全体的に概観すると自然礫・荒削礫・剥片と多様な素材を用いている。剥離作業の前段階となる打



第19図 上野東遺跡 石皿分類図



第20図 上野東遺跡 石核分類図

面調整は行われず、剥離作業の可能な打面さえあれば、どこからでも剥離作業が行われている。

分類 第20図の石核分類図〔高橋2003〕に当てはめ分類した。石核に残された剥離の痕跡から剥離作業に注目した分類であり、剥離作業面数、打面数、剥離方法から10細分7分類にまとめられる。本遺跡の石核は、出土数が少ないこともあり、すべての分類を満たしていない。以下、図示したものについて分類を中心に説明する。B類1点、D類5点、E類2点、分類不可16点である。

B類 (67) 同一剥離作業面に別々の打面（約90°・180°ずれる）から剥離作業が行われるもの。したがって、打面は2面以上で、剥離作業面は1面である。1点のみの出土である。67は荒削素材の左側面・右側面を打面とし、正面に剥離作業が行われている。

D類 (68・69) 石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業で、剥離作業が全周しないもの。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。5点出土し、分類できたものでは最も多く、68・69は扁平な角礫の約半周～3/4周程度に交互剥離が施されている。

E類 (70) 石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業で、剥離作業が全周するもの。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。D類とE類は剥離作業方法が同じであり、その範囲が全周するかしないかの違いである。2点出土している。70は荒削礫の稜線（周縁）から正裏面に交互剥離が行われ、ほぼ全周している。

このほか分類できなかつたものが16点出土している。これらのほとんどが第20図の剥離作業の複数組み合わせである。多くは交互剥離（D類・E類）との組み合わせである。分類できたものも含め、打面転移を頻繁に繰り返し行い、剥離作業を行なったことを意味している。

出土分布は他の石器の分布傾向と異なり、調査区全体に散布している。石材は頁岩・流紋岩各8点、凝灰岩4点、緑色凝灰岩3点、硬砂岩1点となる。地元で採取できる硬質で緻密な石材を用いている。

(16) 剥片類・接合資料 (72~74)

416点出土している。時間的な制約があったものの、石核も含め接合を試みた。剥片同士の接合例が1例あった。

72は蹠表皮の残る横長剥片である。73は縦長剥片で、打面が小さく、石刃状を呈する。74は接合資

料で、74aの剥離以前から同一打面で剥離作業が行われ、縦長剥片が得られている。石材は72・73が頁岩、74が硬砂岩である。

D 石 製 品 (図版13・43)

1点のみの出土である。75は異形石器と呼称されているもので丁寧な二次調整が加えられている。破片資料で全体形はわからないが鹿角状または鋸歯状を呈するものと推定される。鉄石英製。76は径17.8cm、重さ6.85kgの球形の自然礫である。無加工のため石製品には含められないが、いわゆる「丸石」で、形の特異性から遺跡内に搬入されたものと考えている。花崗岩製。

E 古代の土器 (図版7・40)

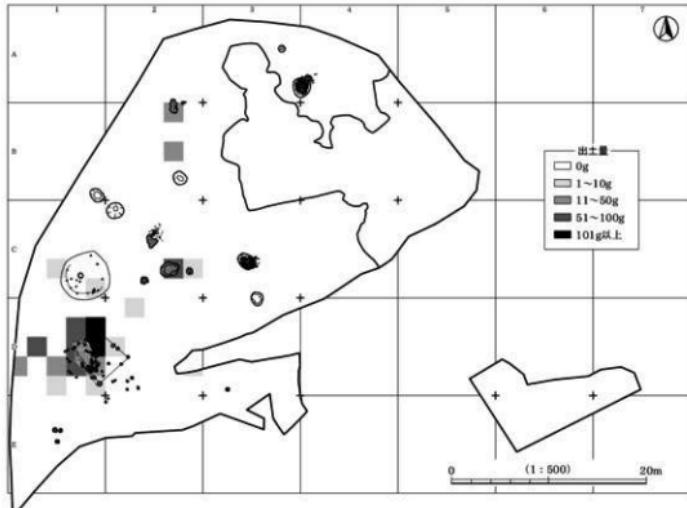
第一次調査では未確認であったが、本調査で少量認められた。全体で803g出土し、須恵器715g、土師器88gである。出土分布はSI14に大半が重なることから、同構成に伴うものである。時期的にまとまり、9世紀後半～10世紀初頭と推定される。同時期の土器は、本遺跡から500m東に存在する大坂上遺跡にまとまって出土している〔滝沢・北村ほか前掲〕。

なお、出土土器のうち須恵器は大坂上遺跡にならない、下記のように胎土観察から产地を推定した。

胎土Ⅰ群：洗練された生地に、白色粒子を多く含む。佐渡小泊窯産または新津丘陵産の可能性が高い。

胎土Ⅱ群：生地の粒子密度が高く、全体的にセメント状を呈する。会津大戸窯産の可能性が高い。

66は須恵器の長頸瓶で、口径10.0cm、底径8.4cm、器高23.1cmを測る。口縁部は上部で大きく外反し、端部は上方につまみ出されている。肩部は張り出しがやや強く、最大径は胴部上位に有し、倒卵形となる。底部高台は低く、接地面が狭く、断面形は台形状を呈する。内外面ロクロナデで、内面は凹凸が



第21図 上野東遺跡 古代の土器（須恵器・土師器）出土分布図

激しい。胎土はI群で佐渡小泊窯産の可能性が高い。67は土師器の椀である。口径13.3cm、口径5.5cm、器高4.2cmを測る。器形は内湾気味に立ち上がり、口縁端部がやや外反気味となる。内外面クロナデ、薄手の作りで、底部は糸切痕が認められる。68は須恵器の壺胴部下位の破片であり、内外面クロナデされている。胎土はII群で会津大戸窯産の可能性が高い。69は須恵器の壺の胴部破片で、外面に平行叩き目が認められる。胎土はI群である。

5 放射性炭素年代測定

はじめに

上野東遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字上野東4,762番地ほかに所在し、阿賀野川左岸の段丘上に立地し標高92～94mを測る。発掘調査の結果、绳文時代・平安時代の遺構・遺物が検出された。本報告では、本遺跡で確認された遺構の年代観を明らかにするため、自然科学的手法を用いて検討する。

A 試料の所見

試料①：SK15内の炭化物。約 2.1×1.8 mの範囲に、径10～20cm程度の被熱礫が数百個集まっている。したがって、火が焚かれたものと推定できる。確認面の状況から绳文時代前期後葉の所産と推定されるが、土器等の遺物が伴わないので明確でない。

試料②：20号炭窯の出土。径2.0×1.7m、深さ55cmの土坑に炭化物・焼土・礫が多量に認められる。遺物が出土していないため時期は不明である。

B 測定方法

測定は、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLibbyの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)である。付記した誤差については、複数回(通常は4回)の測定値について χ^2 検定を行い、測定値の統計誤差から求めた値を用いたが、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いた。測定年代の補正に用いた $\delta^{13}\text{C}$ の値は加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、標準試料PDB(白亜紀のペレムナイト(矢石)類の化石)の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差(‰；パーミル)で表したものである。

遺構名		試料名	試料の形態	BP年代および炭素の同位対比		Code.No
SK15	No.1	炭化物		Libby Age (yrBP)	: 7,980 ± 40	IAAA-51730
				$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	= -27.76 ± 0.97	
				$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	= -629.5 ± 1.7	
				pMC (%)	= 37.05 ± 0.17	
				$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	= -631.6 ± 1.5	
				pMC (%)	= 36.84 ± 0.15	
$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし				Age (yrBP)	: 8,020 ± 30	
20号炭窯	No.2	木炭		Libby Age (yrBP)	: 6,370 ± 40	IAAA-51731
				$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	= -26.01 ± 0.98	
				$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	= -547.4 ± 2.4	
				pMC (%)	= 45.26 ± 0.24	
				$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	= -548.4 ± 2.3	
				pMC (%)	= 45.16 ± 0.23	
$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし				Age (yrBP)	: 6,390 ± 40	

第5表 上野東遺跡 放射線炭素年代測定結果

C 結 果

結果を第5表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SK15内の炭化物は、 $7,980 \pm 40$ BP。20号窯内の木炭は $6,370 \pm 40$ BPを示す。

6 ま と め

本遺跡では、縄文時代の遺構・遺物、平安時代の遺構・遺物が検出された。ここでは調査で得られた成果を要約し、まとめとする。

A 縄文時代の遺構・遺物と遺跡の性格

(1) 遺物について

土器 出土した縄文土器は既述のように前期前葉～後期中葉までの多時期にわたる。しかし、第II群土器とした前期後葉～末葉の土器が主体となり、これ以外の時期はきわめて断片的で少ない。本遺跡を含む東蒲原地域は福島県会津地方に隣接し、明治30年代まで会津地方の一部に含められてきた。したがって、同地方とは密接な関係を持っていた。土器の様相についても、東北地方南部の福島県や会津地方との共通点が非常に多い。同地方の縄文時代前期後葉～末葉の土器編年は、大木3～6式が相当する。本遺跡と関連する大木5・6式の土器は、これまでいくつか論考があり〔興野1967～70、芳賀1985、白鳥1989〕、また福島県会津高田町鹿島遺跡〔丹野・本間1991〕、同町宮西遺跡〔芳賀1984・鈴鹿1990〕、福島県磐梯町法正尻遺跡〔松本ほか1991〕、新潟県旧上川村北野遺跡〔高橋・荒谷前掲〕などでまとまった資料が出土している。

本遺跡の第II群土器を器形的に見ると、口縁部と胴部の境が明瞭でないA器形・B器形、口縁部と胴部の境がいくらか明瞭になるD器形、口縁部と胴部の境がさらに明瞭になるE器形が認められる。この中ではD・E器形が多く認められる。口縁部と胴部の境が明瞭でないものの円筒状のC器形、いわゆる「金魚鉢形」を呈するF器形、G器形は皆無である。大木4式の器形は、頸部が括れるものもあるが、長胴化は認められない。多くはA器形・B器形である。一方、大木6式では、口縁が外傾し胴が張る長胴形のもの、底部付近が円筒形でそれより上が金魚鉢形をなすもの、口縁が直立気味に開く円筒形のものといった深鉢の器形分化が起こる〔白鳥前掲〕。大木5式の土器を見ると、大木4式以来のA・B器形のほか、頸部が（いくらか）括れ、長胴化の兆しが見えるD・E器形が存在する。本遺跡出土の土器をこれらに照らし合わせると、A・B器形は大木4式以来の古手の様相を持ち、D・E器形は大木6式に近い器形を持つ。前述のように器形がわかるものではD・E器形がA・B器形に比べ多いことから、器形的に見ると多くは大木5式の新しい方に属するものと思われる。大木5式は前半を5a式、後半を5b式に細分される〔興野1970〕ことから、器形的に見て大木5b式といえる。

一方、文様からみると次のような特徴が指摘できる。

①大木4式以来、大木5式まで粘土紐貼付をモチーフとしたもの（鋸歯状文が多い）が認められるが、本遺跡では皆無である。

②沈線による鋸歯状文のうち、やや大柄なものは、胸部上位に集約し、横走沈線が頸部に巡る。

③沈線による鋸歯状文のうち、やや小形で小刻みなものは本数が多い。

④頭部に横走沈線が多用され、この文様が施文される器形は（いくらか）頭部が括れる。また口縁部文様帶と脣部文様帶を区画する。

⑤縄文原体が押圧されているものは、横走沈線など他の文様と施文される。

⑥鉈齒状沈線が弧線文に置き換えられたものがある。

⑦口唇部の鋸歯状装飾体は崩れて瘤状になったり、小刻みになったりしている。また口縁部下部に付き、全周するものがある。

⑧浮島III式、興津I式、諸磲b式、諸磲c式が伴出している。

⑨文様が脣部上位から口縁部に集約化する。

これらの特徴は、大木5b式の特徴であり、本遺跡出土の第II群土器の多くは、大木5b式、またはこれに併行するものと考えている。なお、第II群土器のうち、23・30・39は大木6式古段階に所属する。石器 石器はそれ自体で土器のように時期の決定は難しいが、土器のほとんどが前期後葉～末葉に所属すること、出土分布が土器と同傾向のことから、石器の所属時期も前期後葉～末葉と推定できる。各器種では下記の事柄が特徴・特筆とされる。

①石鎚では凹基無茎鎚が多く、脚部の抉りが深い。

②尖頭器が一定量出土している。このうち山形県高畠町押出遺跡で多出した押出型ポイントが、3点出土している。

③敲磨石類、石皿の出土比率が高い。石皿A類（加工石皿）の3点は、加工石皿の出現期の類例となる。

④蛇紋岩製の磨製石斧は2点を数え、うち1点は掠切石斧である。糸魚川地方からもたらされたものと推定される。押出型ポイントと合わせ各地との交流が窺われる。

（2）遺構と遺跡の性格

縄文時代の遺構は、住居1軒、土坑6基、焼土7基、硬化面1基、遺物集中地点1か所である。このうち、出土遺物から住居1基（S18）、土坑1基（SK6）、遺物集中地点1か所（5号）が大木5b式期と考えられる。このほかの遺構もSK15を除き、確認層位、周辺の遺構や出土遺物から、前期後葉～末葉と推定できる。SK15は集石土坑であり、当初は前期後葉～末葉と推定したが、遺物は被熱躍だけである。炭化物の放射性炭素年代測定の結果 $7,980 \pm 40$ (LibbyAge) という値が出ており、早期まで遡る可能性がある。

S18は、住居の掘り込みや柱穴の規模や向きから、テント式住居と考えられる。この時期の集落及び竪穴住居は、旧上川村北野遺跡下層で検出されている〔高橋前掲〕。同遺跡は大木5～6式期の集落で、3～5棟の建物や住居が3期にわたり変遷している。それと比較すれば、北野遺跡の小形住居に近似するもの、出土遺物の量や遺構数から集落とは言えない。一時的な利用地、または季節的な利用地と推定される。

このような遺跡は、住居や建物等は検出されていないものの、本遺跡の南東方向 200～300m 離れた中棚遺跡〔北村・滝沢前掲〕、猿額遺跡〔北村・滝沢前掲〕、旧三川村上ノ平遺跡A地点〔沢田ほか1994〕、同C地点〔沢田1996〕、第IV章で報告する現明嶽遺跡がある。東蒲原地域の阿賀野川を臨む河岸段丘上には堅穴住居が1～数棟の小規模集落（遺跡）が、前期後葉～末葉にかけて急増する。詳細は不明であるものの縄文人の活発な活動が想像される。

B 平安時代の遺構・遺物と遺跡の性格

平安時代の遺構・遺物は、竪穴住居と推定されたSI14と共に伴う少量の須恵器・土師器である。時期は、9世紀後半～10世紀初頭と推定される。同時期の遺跡として、東蒲原郡内では本遺跡から500m東に存在する大坂上道遺跡〔滝沢・北村ほか前掲〕、旧上川村北野遺跡上層〔高橋ほか前掲〕がある。いずれも遺構が少ないか特定できず、遺物も大坂上道遺跡ではやまとまるものの多くはない。このように9世紀から10世紀にかけての時期で、山地や丘陵上に立地し、遺構や遺物がそれほど多く認められない遺跡として、県内の他地域では糸魚川市原山遺跡〔川村1988〕、中頸城郡旧中郷村横引遺跡〔小池・土橋1996〕、同村柳平遺跡〔小池・土橋前掲〕、旧妙高高原町大堀遺跡〔土橋ほか1996〕、同町中ノ沢遺跡〔土橋ほか1997〕、新発田市坂ノ上C遺跡〔渡邊2001〕など多くの類例を挙げることができる。

9世紀後半から10世紀前半は、律令体制の崩壊に伴い旧来の集落が解体し、新規集落の成立と山野への開発・進出が指摘されている〔坂井1999〕。本遺跡の平安時代の遺構・遺物は、このような流れの中で位置付けられるものと考えている。

要 約

- 1 上野東遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字上野4、762番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に立地し、東側の斜面を除き標高92～94mを測る。
- 2 調査は一般国道49号揚川改良事業の建設に伴い、平成17年4月25日～6月30日まで実施した。調査面積は1,410m²である。
- 3 調査の結果、縄文時代と平安時代の遺構・遺物が検出された。また、約5,000年前の堆積といわれている鹿瀬軽石質砂層も確認された。
- 4 鹿瀬軽石質砂層は標高94m地点で検出され、この地域（津川盆地）では最も高い位置で確認されたことになる。
- 5 縄文時代の遺物・遺構は前期後葉～後期中葉頃までであるが、前期後葉～末葉が主体を占める。
- 6 縄文時代の遺構は前期後葉～末葉の竪穴住居1軒、土坑6基、焼土7基、硬化面1基、遺物集中地点1か所であり、一時的・季節的な利用地の遺跡と推定される。
- 7 縄文時代の遺物は、土器・石器である。縄文土器は前期後葉～末葉の大木5b式、大木6式古段階がほとんどである。また東関東系の浮島式、興津式の土器も出土している。石器は出土量が多くないものの縄文時代遺跡で出土する器種が一通り認められる。押出型ポイント、蛇紋岩製の磨製石斧などの出土は、各地との交流を窺わせる。
- 8 平安時代の遺構は住居1軒であるものの、東蒲原地域では初例となる。遺物は土師器・須恵器であり、9世紀後半から10世紀初頭と推定される。

観察表

土器觀察表

%	遺跡名・出土地点	層位	分類	基準 地形	残存部位 ・既存半 径	計測値 (cm)	文様・施文等	縄文原体	色調 (内/外)	付着物 (内/外)	直和材等	時期	備考
1	S3B	床面	Ⅱ群E1	深縫E1	門縫部～ 既存2/3	高: 22.3 (1: 20.0) 既: 11.0	波紋口縁、波瀬模様	BL→	褐色/白色	/スヌ	石英・砂	大木5b	焼成堅相
2	S3B	廻土中	Ⅱ群E1	深縫E1	側部片		竹管状工具による押し印き		明褐色/黑色		砂	白磁	白磁
3	S3B	廻土中	Ⅱ群E1	深縫E1	側部片				灰褐色/灰白色		砂	白磁	白磁
4	S3E6	廻土	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部～ 既存2/3	口: 17.0	波紋口縁、波瀬、口縫下部 神社、波瀬模様	BL→	灰褐色/白色 →灰褐色/白色	/スヌ	砂	大木5b	
5	S3K17	廻土1	Ⅱ群A1	深縫E1	側部片				褐色/白色		砂	白磁	白磁
6	11号施主	廻土2	Ⅱ群A1	深縫E1	側部片				褐色/白色		砂	白磁	白磁
7	11号施主	廻土2	Ⅱ群A1	深縫E1	側部片		圓文		褐色/白色		砂	白磁	白磁
8	16号施主	廻土2	Ⅱ群A2	深縫E1	側部片		波紋口縁、口既切込、圓文		灰褐色/褐色		砂	大木5b	
9	5号上側面	廻土	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部～ 既存2/3	口: 27.2	波紋口縁、波瀬、口縫、横 走状模様	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	大木5b	焼成堅相
10	5号上側面	廻土1	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部	高: 23.7 (0)	波紋口縁、波瀬、口縫下部 横走状模様	BL→	浅黄色/浅黄色	オコダ /スヌ	砂	大木5b	
11	5号上側面	廻土	Ⅱ群A2	深縫E1	側部片	1/4	圓文、副斜状模様	BL→	灰褐色/白色	オコダ /スヌ	砂	大木5b	
12	5号上側面	廻土	Ⅱ群E1	深縫E1	既存2/3	高: 33.4 (1: 33.3) 既: 13.8	小波瀬口縁、熟文	直角形	明黃褐色/明黃褐色	オコダ /スヌ	砂	大木5b	底部堅相 あり
13	8トレンチ	I群	深縫E1	側部片			圓状圓文	BL→ LR	灰褐色/白色 →		砂	白磁	白磁
14	3AB	I群	深縫E1	側部片			圓文	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	白磁	白磁
15	58K25	V	I群	深縫E1	既存2/3		直形刺突		灰褐色/白色		砂	白磁	白磁
16	ZD16	II	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部		圓文、橫走狀縫、橫走狀模 様	BL→	灰褐色/白色		砂	大木5b	焼成堅相 17.7年一 前の例
17	ZD16	II	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部		圓文、橫走狀縫、橫走狀模 様	BL→	灰褐色/白色		砂	大木5b	焼成堅相 17.7年一 前の例
18	3C21	III	Ⅱ群A2	深縫E1	側部片		圓文、橫走狀縫、橫走狀模 様	BL→	灰褐色/白色		砂	大木5b	
19	1C23	III	Ⅱ群A2	深縫E1	側部片		圓文、橫走狀縫、橫走狀模 様	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	大木5b	
20	2C12	III	Ⅱ群A2	深縫E1	側部片		圓文、橫走狀縫、橫走狀模 様	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	大木5b	
21	2B22	III	Ⅱ群A2	深縫E1	側部片		圓文、副斜状模様	BL→	灰褐色/白色		砂	大木5b	
22	13トレンチ	II群A2	深縫E1	側部片			圓文、副斜状模様、堅相	BL→	灰褐色/白色		砂	大木5b	焼成堅相
23	1D14	V	Ⅱ群A3	深縫E1	門縫部		圓文、橫走狀模様、堅相	BL→	灰褐色/白色		砂	大木古	
24	ZC3・ZC18・ZD10 ・3C17・3C21・ 3C22・3D1・3D6・ 3D9・3D25	II群E1	深縫E1	門縫部～ 既存2/3	口: 18.4	神社口縁、圓文、橫走狀 模様	BL→	灰褐色/白色 →	灰褐色/白色 →	/スヌ	砂	大木5b	燒成堅相
25	1D20	V	Ⅱ群C	深縫E1	側部片		圓文、圓文、長形狀模 樣	BL→	褐色/灰褐色		砂	大木5b	
26	ZC14・ZC17・ZC18 ・3C17・3C21・ 3C22・3D1・3D6・ 3D9・3D25	II群E1	深縫E1	門縫部～ 既存2/3	高: (28.0) (1: 27.2) 既: 12.8	波紋口縁、橫走狀模 樣	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	大木5b	燒成堅相	
27	1D10	III	Ⅱ群D	深縫E1	門縫部	口: 13.8	波紋口縁、圓文、橫走狀模 樣	BL→	灰褐色/白色		砂	大木5b	
28	ZC2・ZC15・ZC19 ・3C24・3D4・ 3C25・3D5・3D22	II群E1	深縫E1	門縫部	高: (41.3) (1: 39.4) 既: 15.6	波紋口縁、圓文、圓文、 橫走狀模樣	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	大木5b		
29	ZA20・ZA25・AA1 ・4A1・4A2・4A3 ・4C6・8トレンチ	II群E1	深縫E1	門縫部	高: (47.1) (1: 35.0) 既: 13.8	波紋口縁、圓文、圓文、 橫走狀模樣	BL→	灰褐色/白色	砂礫 石英	砂	大木5b		
30	ZC14・ZC17 ・3C11・3C11	II群F	深縫E1	門縫部	口: 15.4	圓文、橫走狀模樣、口既切 込	?	灰褐色/白色	/スヌ	砂	大木古		
31	4C11・4C12・8トレン チ	II群G1	深縫E1	門縫部	高: (37.8)	波紋口縁、橫走狀模 樣	BL→	灰褐色/白色		砂	石英・ 碧玉	白磁	
32	ZA4・ZA14・ZA15 ・ZA25・ZA24 ・3B1・3B1・3B1 ・3B6・4AB・4B8	II群G2	深縫E1	門縫部	高: (40.0) (1: 39.6) 既: 15.7	波紋口縁、圓文、橫走狀 模樣	BL→	灰褐色/白色 →	灰褐色/白色 →	/スヌ	砂	圓津 I	
33	ZD16	V	Ⅱ群H3	深縫E1	側部片		竹管状工具の縦目平行溝		灰褐色/白色	/スヌ	砂	圓津 II	
34	ZC23	V	Ⅱ群H	深縫E1	側部片		平行溝、直形刺	?	灰褐色/白色		砂	圓津 II	
35	1D9・1D20・1D15	II群H2	深縫E1	門縫部		平行溝、直形刺、斜筋	BL→ RL	灰褐色/白色 →	灰褐色/白色	/スヌ	砂	圓津後葉	
36	ZC24	V	Ⅱ群H2	深縫E1	側部片		圓文、平行溝、直形刺	BL→	灰褐色/白色		砂	圓津後葉	
37	ZA11	III	Ⅱ群H2	深縫E1	側部片		圓文、平行溝、直形刺	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	圓津後葉	
38	ZD2	III	Ⅱ群H2	深縫E1	門縫部		口既切込、圓文、平行溝、 直形刺	BL→	灰褐色/白色	/スヌ	砂	圓津後葉	
39	不明	廻乱	Ⅱ群H	深縫E1	側部片		圓文、既既口に孔文	BL→	浅褐色/灰褐色		砂	大木5b	3Dの既既 合
40	4A19	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部		口既切込、圓文	BL→	黃褐色/黃褐色		砂	圓津後葉	?	
41	2B23	III	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部		口既切込、下部既既		灰褐色/白色	/スヌ	砂	圓津後葉	→
42	不明	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部		圓文	BL→	黃褐色/白色		砂	圓津後葉	→	
43	不明	Ⅱ群A1	深縫E1	門縫部		無文、圓文	BL→	黃褐色/白色		砂	圓津後葉	→	
44	ZC18	III	Ⅱ群A2	深縫E1	門縫部		口既切込、口既既		黃褐色/黃褐色		砂	圓津後葉	
45	ZC15	III	Ⅱ群A2	深縫E1	門縫部		口既切込、無文?		黃褐色/黃褐色		砂	圓津後葉	既既化して
46	ZC18	III	Ⅱ群A3	深縫E1	門縫部		口既切込、圓文	BL→	黃褐色/黃褐色	/スヌ	砂	圓津後葉	
47	ZC5	III	Ⅱ群A3	深縫E1	門縫部		口既切込、圓文	BL→	黃褐色/黃褐色	/スヌ	砂	圓津後葉	

土器觀察表

No.	遺構名・出土地点	層位	分類	器種	残存部位	計測値(cm)	文様・施文等	調査原体	色調(内/外)	付着物 (内/外)	直和寸	時期	備考
48	2C23	V	古群A4	深鉢	口縁部片		縞文	L8.0→	にない褐色/にない褐色	/スヌ	砂漬	後期後葉	
49	4C1	V	古群A4	深鉢	口縁部片		縞文	L8.0→	赤褐色/褐色	/	砂漬	後期後葉	~末葉
50	2D25	III	古群A4	深鉢	口縁部片		押江縞文	BL2.?	にない褐色/	直和	後期後葉	~末葉	
51	3D6	V	古群B4	深鉢	側邊片		目状縞文	L8.0→HL	にない褐色/にない褐色	/スヌ	砂漬	後期後葉	?
52	1D9	III	古群B1	深鉢	側邊片		縞文	BL1.?	にない褐色/	/	砂	後期後葉	~末葉
53	2B4	III	古群B3	深鉢	側邊片		縞文	BL1.?	にない褐色/	/			
54	9H	V	古群B2	深鉢	側邊片		縞文、縞細火	BL1.?	にない褐色/にない褐色	/		後期後葉	~末葉
55	2B8・2B10	III,V	古群C	深鉢	底面1/2	底:12.2	縞文	L8.0→	にない褐色/	/	砂漬		
56	3D6	III	古群C	深鉢	底邊片		縞文	BL1.?	にない褐色/にない褐色	オコゼ/砂			
57	3C25	III	單群A	深鉢	側邊片		縞文、縞位半斜線縞文	L8.0→	にない褐色/にない褐色	/スヌ		中期古葉	
58	2A20	III	單群B	深鉢	口縁部		内斜火	BL1.?	にない褐色/	直和	南・土植	南古	
59	9H	V	單群B	深鉢	口縁部片		口沿部押焰、縞位底斜面	BL1.?	にない褐色/にない褐色	/	南・土植	南古	
60	3D23	I	單群B	深鉢	口縁部片		縞位次底斜面	BL1.?	にない褐色/にない褐色	/	南・土植	南古	
61	1D05・2D06 2D16・12トレンチ	II,III	單群B	深鉢	口縁部~ 側邊片		口縁部押焰、縞位次底斜面 縞文	BL1.?	褐色/褐色	砂漬 砂漬 砂漬	南・土植 南古 南古	南・土植 南古 同一 側体	
62	1D25	III	單群B	深鉢	側邊片		縞位次底斜面、縞文	BL1.?	褐色/褐色	砂漬 砂漬 砂漬	南・土植 南古 南古	南・土植 南古 同一 側体	
63	2D8	III	單群C	鉢	口縁部片		口沿部丸足面、無文、内 面に丸足跡	BL1.?	褐色/灰褐色			後期中葉	
64	3C20	III	單群D	深鉢	口縁部片		素面火	BL1.?	にない褐色/	洗浄後		後期~ 晚期	
65	3C15・4C22	II,III	單群D	深鉢	口縁部1/3	口:22.0	絞目状風渦文	BL1.?	褐色/にない褐色	砂漬		燒成形跡	

古代以降の土器觀察表

No.	埋因	器種	出土地点	層位	分類	残存部位・残存率	計測値(cm)	色調(内/外)	司用	備考
66	灰面痕	灰面痕	SI14・IC25・1D9・1D10・1D12・ 1D13・1D15・1D16・1D18・ 1D19・1D23・2C19・2D2	III,IV,V	古群	口縁部~底部4/5	高:22.1 幅:10.0 厚:3.4	白色/灰褐色	後半~1OC前頭	内面凸狀付着物あり、被熱。
67	上側痕	痕	ID14・ID15・ID19・ID25	III	古群	口縁部~底部2/3	高:4.2 (1):13.3 幅:5.5	白色/褐色 にない褐色	後半~1OC前頭	底部表面凹。
68	底底痕	痕	ID12・ID15・ID19・ID19・ID20	II,III,V	古群	側邊片1/6		灰褐色/灰褐色	後半~1OC前頭	内面凸狀付着物あり、被熱。
69	底底痕	痕	1D9・1D15	III	古群	側邊片		白色/白色	後半~1OC前頭	内面凸狀付着物あり、被熱。

石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	直造状態	備考	
1	4A6	III	A	3.1	1.6	0.3	1.0	メノウ	完形		
2	2D6	V	A	2.3	2.1	0.4	1.3	メノウ	先端欠		
3	2D17	A	2.7	1.9	0.3	1.0	黒曜石	完形			
4	S14カマドフデ	A	2.4	1.5	0.3	0.8	真岩	横長	片断欠		
5	2C16	V	B	3.2	1.3	0.4	1.3	真岩	横長	完形	左右不揃
6	2D5	V	C	3.5	1.1	0.3	0.8	真岩	横長	先端欠	

石器失敗品觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	直材	備考
7	2C18	III	A	6.5	3.8	1.2	21.2	真岩	縞長	
8	2B-SK17	I	A	3.1	1.6	6.2	2.7	緑色凝灰岩	縞長	
9	2D5	III	A	3.7	2.9	1.0	10.0	淡灰岩	縞長	
10	1D14	III	B	3.3	2.4	0.8	5.0	淡灰岩		折断有・被熱?
11	3D1	V	B	3.4	1.6	0.6	2.4	緑色凝灰岩	縞長	

尖頭器觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	直造状態	備考
12	3C14	III	A	6.8	1.4	0.7	5.7	真岩	完形	
13	3E3	III	A	3.8	1.5	0.6	3.3	铁英石	完形	左右不对称
14	1E14	V	A	6.6	1.9	0.6	7.9	砂岩凝灰岩	完形	底部の抉り有い
15	1D16	V	B	3.5	1.8	0.6	2.52	淡灰岩	完形	左右不对称
16	2D13	B	B	0.1	3.1	1.5	25.4	真岩	完形?	未完成品の可能性あり

石錐觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	直材	備考
17	地盤1	I		2.7	1.1	0.5	0.8	真岩	菱形	つまみ形欠
18	2D8	V		6.2	5.3	2.2	46.6	真岩	菱形	完形
19	4A11	III		5.6	6.3	2.2	46.9	真岩	縞長?	三角形

観察表

石危觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	遺存状態	備考
20	2D12	II	5.9	4.3	1.3	21.1	頁岩	板長?	完形	斜刃形石斧
21	3D6	III	5.5	3.6	1.0	11.6	頁岩	板長	刃部先端欠	圓形石斧
22	2D12	III	3.1	3.1	0.7	4.6	黑色鐵狀頁岩	板長	刃部先端欠	圓形石斧

不定形石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	二次調整部位	折断	備考
23	1C17(南トレンド)		A	14.0	10.1	4.3	498.0	頁岩	板長	左側縁～下縁	有	
24	2C12	III	B	9.0	9.9	1.5	105.3	頁岩	板長	両側縁	有	
25	3D6	V	B	11.0	3.6	1.5	61.5	頁岩	板長	右側縁	無	
26	2D4	V	B	6.6	8.1	1.7	81.3	頁岩	板長	右側縁～下縁		
27	3A16	III	C	7.1	4.6	1.6	51.2	流紋岩	板長	両側縁	無	
28	3C16	V	C	5.7	13.0	1.6	110.7	頁岩	板長	上縁・下縁	無	
29	2B15	V	D	3.8	4.6	1.5	17.1	頁岩	板長	上縁・下縁	有	
30	2D7	III	F	7.9	4.0	1.8	39.2	頁岩	板長	左側縁～下縁	無	使用痕有
31	3C17	V	F	4.5	5.6	2.1	46.9	綠色變灰岩	板長	下縁	無	
32	2C15	III	G	6.2	2.9	0.9	14.1	頁岩	板長	無	無	使用痕著しい
33	1D15	V	G	2.6	5.4	0.9	9.2	頁岩	板長?	無	無	

両極剥離痕のある石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	刃部形状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
34	1C19	III	二側一對	2.8	3.4	1.1	12.1	頁岩	板長剥片
35	3D6	II	四側二對	3.4	4.1	1.5	19.5	頁岩	板長剥片

範状石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
36	2D4	V	A	6.8	5.1	1.6	44.3	流紋岩	板長?	刃部欠	板熱	
37	2B23	V	A	9.5	6.4	2.0	86.7	頁岩	板長	両刃	完形	
38	2D22	III	B	11.0	4.7	2.4	108.4	頁岩	片刃	完形		
39	2B15	V	B	7.4	4.5	1.8	49.0	流紋岩	板長?	両刃	完形	
40	4A18	V	B	8.3	4.5	1.8	67.9	頁岩	板長	片刃	完形	

打製斧器觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
41	2B22	III	7.5	6.9	1.9	127.0	結晶片岩	両刃	基部欠		

石錐觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
42	2C9	III	8.8	7.8	3.0	248.1	凝灰岩	完形	両端敲打による流れ有		
43	2B4	III	5.4	4.3	1.4	40.6	安山岩	完形			

磨製斧器觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
44	7D22	I	8.0	4.7	2.8	143.1	流紋岩	両刃	刃部欠	風化激しい	
45	4C1	III	6.3	1.7	1.1	20.2	流紋岩	両刃	完形	擦切斧刃・刃部に縦状痕有	

敲磨石類觀察表

No.	出土地点・遺構名	解位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	表面	側縁	底縁	遺存状態	備考
46	小場	表様	A	11.9	9.1	4.0	681.0	花崗岩	○	×	×	完形	被熱
47	2B5	V	A	10.0	9.9	5.4	765.0	花崗岩	○	×	×	完形	風化や激しい
48	小場	表様	B	11.0	8.3	3.8	459.0	玄武安山岩	○	○	×	完形	被熱
49	2B9	V	C1	12.3	8.7	5.6	909.0	安山岩	○	×	×	完形	
50	3D7	III	C1	10.9	8.8	3.8	635.0	安山岩	○	×	×	完形	
51	3D7	III	C2	12.8	7.9	3.5	564.0	玄武安山岩	○	×	○	完形	
52	2B17	V	D1	11.9	9.3	5.3	905.0	花崗岩	○	○	×	完形	
53	1D10	III	D2	8.6	7.5	4.2	363.0	安山岩	○	○	×	完形	被熱?
54	4C2(トレンチ)	E	14.9	7.0	3.1	460.0	輝緑岩	×	○	×	完形	表面に縦條の擦痕有	
55	2D4	V	F1	17.2	7.1	4.9	645.0	輝緑岩	○	○	×	完形	いわゆる特殊磨石
56	3B24	V	G1	11.1	8.2	5.8	663.0	安山岩	○	○	○	完形	
57	3C24	III	G2	8.6	5.4	4.9	406.0	輝緑岩	×	×	×	完形	
58	2A23	III	G2	12.0	6.0	3.7	440.0	安山岩	×	×	○	完形	

石皿觀察表

No.	出土地点・遺構名	剖位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	遺存状態	備考
59	S18	上面	A	20.0	17.3	6.1	1,370	凝灰岩	1/4	被熱
60	不明	表様	A	11.5	21.9	6.9	1,290	凝灰岩	1/4	
61	6E6	V	B	37.4	24.2	8.0	11,000	花崗岩	ほぼ完形	表面が使用面・風化やや激しい
62	2B23	V	B	31.9	27.6	9.7	10,000	花崗岩	ほぼ完形	被熱
63	不明	複瓦	B	25.3	15.9	7.9	3,960	花崗岩	3/4	被熱
64	2C7	V	B	29.3	19.0	10.5	8,200	花崗岩	3/4	被熱

砥石觀察表

No.	出土地点・遺構名	剖位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
65	2C9	V	23.1	15.7	5.3	1,611.0	凝灰岩	1/2	風化やや激しい
66	3E3	I	8.6	6.9	2.7	291.9	砂岩	1/2	形状から古代以前か

石核觀察表

No.	出土地点・遺構名	剖位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
67	2D7	III	B	8.7	9.5	3.0	375.3	砂岩	
68	1D25	III	D	8.7	10.0	4.6	400.4	頁岩	
69	2D8(9トレンド)	D	10.4	10.5	3.9	241.9	凝灰岩		
70	2B14	V	E	9.4	9.5	4.6	239.0	緑色凝灰岩	
71	3A25	V		12.1	11.2	7.5	875.6	頁岩	

剥片・接合資料觀察表

No.	出土地点・遺構名	剖位	剥片名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
72	3A21	III	標長	3.8	6.2	1.5	31.1	頁岩	
73	OE(10トレンド)	I	標長	6.4	2.5	0.6	8.8	頁岩	
74	3D6	V	接合資料	4.8	2.6	2.2	16.9	砂岩	
74a	3D6	V	標長	3.2	1.5	1.1	3.9	砂岩	
74b	3D6	V	標長	4.3	2.6	1.4	13.0	砂岩	

石製品觀察表

No.	器種名	出土地点・遺構名	剖位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
75	圓形石器	2C25	V		3.1	1.2	0.4	1.4	頁岩質	一部欠
76	丸石	2D11	尾削木	17.8	16.9	15.4	6850.0	在頁岩	完形	球形の搬入線

第IV章 現明嶽遺跡

1 調査の概要

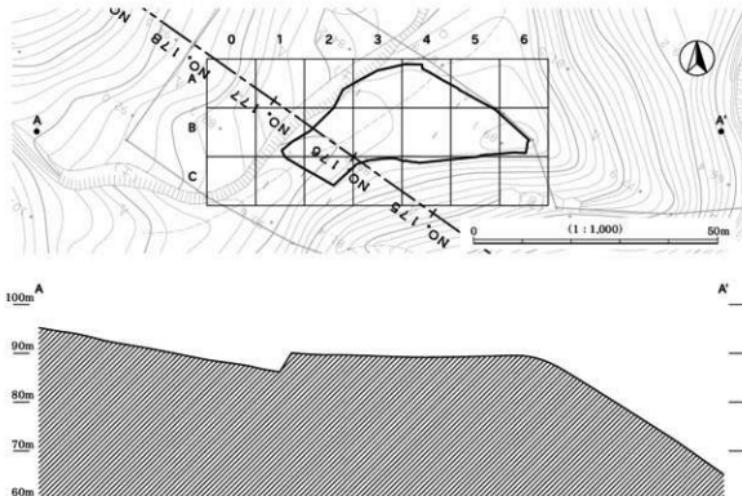
A 遺跡の立地と微地形

現明嶽遺跡は、上野東遺跡の西方約700mに位置する。ともに津川盆地の西縁にあたり、阿賀野川左岸の段丘に所在する。現在、遺跡付近の段丘は東を西ノ沢川に、西は赤岩川に区切られ、この間をいくつかの小谷に開析されている。現明嶽遺跡は前面をこの赤岩川に接し、背後を小谷で区切られ、さらに焼山（標高378m）を控えている。したがって、ほぼ西から東に尾根状に延びる段丘に立地する。この尾根状の段丘は幅20m前後と狭く、標高88～90mを測り、赤岩川との比高約25mである。南に開けた遺跡は、眼下に赤岩川、北東方向に阿賀野川を望む。

これらの段丘面は、かつて広葉樹で覆われ、炭焼き等に利用されていたが、昭和30年代以降、杉の植林事業に利用されてきた。現明嶽遺跡の立地する段丘も、かつて畑地や炭焼き等に利用されていたが、調査前の現況は杉林で覆われていた。

B グリッドの設定

調査地はほぼ西から東に向かって延びる段丘で、真北方向とほぼ直交するため、グリッドの方向は真北を基準に設定した。法線内のセンター杭No.176（国土座標のX座標=186868.250：北緯37度41分



第22図 現明嶽遺跡グリッド設定図

00.98513秒)。Y座標=81458.649(東経139度25分13.29802秒)を基点(3C杭)とし、南北・東西にそれぞれ10mの方眼を組み、大グリッドとした。グリッドの表示は、調査地を覆う方眼を西から東に算数字(1~6)、北から南にアルファベット(A~C)を付し、これを組み合わせた。

小グリッドは大グリッドをさらに2m方眼に分割し、25区分した。小グリッドの表示は、第7図の上野東遺跡と同じく、北西隅を1(基点)に算数字順とした。包含層出土遺物の出土地点は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせ取り上げた。

2 基本層序

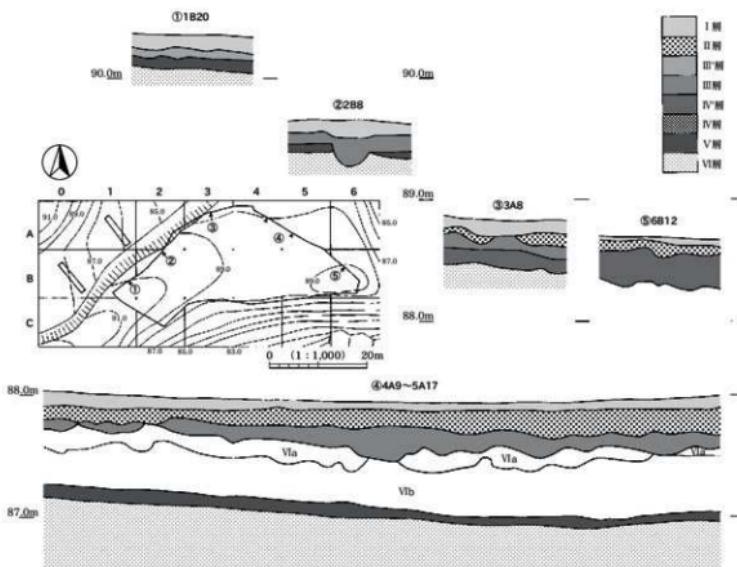
既述のように本遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に位置することから、基本的に上野東遺跡と基本層序はほぼ同じである。しかし、現明礪遺跡内では、段丘幅が狭いことや地形にいくらか傾斜があることから、地點により土層の厚薄が見られる。特に鹿瀬輕石質砂層(基本層第IV層)の堆積に著しい違いが見られた。

以下、基本層序I~VII層まで説明する。

I層: 10~15cm 7.5YR5/3(にぶい褐色土)~4/3(褐色土) 表土。草木根が多く、上層は未分解植土となる。粘性・しまりなし。

II層: 0~20cm 7.5YR3/2(黒褐色土)~3/3(暗褐色土) 縄文時代中期以降の遺物包含層である。

本遺跡では後期中葉の遺物が多く包含されていた。



第23図 現明礪遺跡 基本層序

- III層：0～30cm 7.5YR4／4（褐色砂質土）～3／4（暗褐色砂質土） IV層への漸移層。粘性なし。
- III'層：II層とIII層の混じり土。第1～3グリッド列では基本層序の堆積が薄く、II・III層の混じりで分層できなかった。
- IV層：0～60cm 10YR5／6～5／8（黄褐色砂土） 鹿瀬軽石質砂層。福島県金山町沼沢火山に起源を持つ火山灰の二次堆積層。約5,000年前の堆積とされている。粘性なし。地形にやや窪みが見られる（極めて浅い洪积地形）。第4・5グリッド列境の周辺では、厚く堆積する。また段丘幅が狭く、標高が徐々に高くなる第1～3グリッド列では薄くまたは認められなくなる。厚く堆積するところでは、次のように分層した。
- IVa層：鹿瀬軽石質砂層にいくらか不純物が混じる層。
- IVb層：鹿瀬軽石質砂層の純層。
- IV'層：III層とIV層の混じり土。IV層の堆積が薄いところではIII層とIV層が混じる層が認められた。
- V層：0～10cm 7.5YR2／2（黒褐色シルト）～2／1（黒色シルト） シルト質で粘性あり。しまりやあります。縄文時代早期～前期末葉の遺物包含層で、上面及び上層から前期後葉～末葉の遺物が出土している。
- VI層：7.5YR5／6（明褐色粘土）～6／8（橙色粘土） シルト質粘土で粘性・しまりあり。遺物は含まれない（地山）。
- VII層：7.5YR 5／6（明褐色粘土）、6／8（橙色粘土） VI層に礫が混入したもの。シルト質粘土で粘性・しまりあり。遺物は含まれない（地山）。
- なお、上野東遺跡・中棚遺跡・猿額遺跡・大坂上道遺跡との基本層序の対応関係は、「第III章上野東遺跡2基本層序」で説明した。

3 遺構

A 上層遺構の概要

本遺跡では基本層IV層、鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下の層から遺構・遺物が検出され、上層からは縄文時代後期前葉～近代、下層からは縄文時代早期～前期末葉の遺構・遺物が出土している。上層の遺構はIII層の下層からIV層上面が遺構確認面となっている。しかし、調査区西側の段丘高位ではV層上面で確認された遺構もある。これは、3A2～3C2ラインより西側の段丘高位で、鹿瀬軽石質砂層の堆積が認められないことや、III層の堆積が薄くなることに起因する。確認された遺構は、縄文時代後期中葉の竪穴住居3軒、土坑10基、焼土1基、集石1か所、性格不明遺構1基、近世以降の炭窯1基、ハサ木3列である。

遺跡は幅約20m、周囲との比高25mを測る狭い段丘上に立地し、段丘北縁に2軒、南縁に1軒の竪穴住居が存在する。調査区中央は遺構の少ない広場となり、住居の周辺に土坑・集石等の遺構が点在する形で集落が形成されている。また、調査区東側の段丘先端部及び西側の段丘高位では遺構の分布は希薄となり、狭い範囲の中で集落が営まれていたことが窺える。

なお、遺構名の略号及び遺構番号は上野東遺跡に準ずるが、本遺跡では、性格不明遺構やハサ木跡が検出されているため、性格不明遺構をSX、ハサ木跡をSAと呼称した。

B 上層遺構の各説

(1) 穴住居

SI1 (図版 17・45・46)

調査区北側、縁部の3Aグリッドに位置し、V層上面で確認した。東1mに19号集石が隣接する。平面形は梢円形を呈し、長径4.3m、短径3.8m、深さ22cmを測る。炉は石圓炉で住居のはば中央に位置する。炉の掘形は径54×53cm、深さ18cmを測る。柱穴は9基検出され、いずれも壁沿いに巡っている。規模は径16~28cm、深さ8~19cmを測る。このほか、床面から径50~70cm、深さ20~22cmの土坑P7、P11が検出されている。土器は浅鉢形土器(1)等、合計160g出土している(2~4・101)。石器は、剥片1点が出土している。時期は出土土器から、縄文時代後期中葉に所属する。

SI2 (図版 17・45・46)

調査区北側、縁部の3A~4Aグリッドに位置し、IV層上面で確認した。北東0.4~0.6mにSK11・15、北西1.5mにSK21、西1mに19号集石が隣接する。平面形は円形を呈し、長径4.8m、短径4.1m、深さ52cmを測る。床面は平坦で、側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は5層に識別され、レンズ状に堆積する。炉は径70×50cmの地床炉で、住居中央からやや南寄りに位置する。柱穴は12基検出され、7基は壁沿いに巡っている。規模は、径16~24cm、深さ8~18cmを測る。住居北西側のP1・P2の内側には、P8・P9がそれぞれ対になって検出され、この部分が出入り口であったものと推測される。

土器は、深鉢形土器(7)、注口土器(15・16)等、合計1,724g出土している(5・6・8~14・103・109)。石器は、石錐1点(9)、不定形石器3点、打製石斧1点、石錘1点(35)、敲磨石類7点(38)、砥石1点、剥片15点が出土している。時期は出土土器から、縄文時代後期中葉に所属する。

SI10 (図版 18・45・47)

調査区南西部の2B~3Bグリッドに位置し、III層上面で確認した。平面形は円形を呈し、長径3.7m、短径3.2m、深さ67cmを測る。床面は平坦で、側壁は南側では階段状に、その他は急角度で立ち上がる。覆土は6層に識別され、レンズ状に堆積し、北~北西側からの流れ込みと判断できる。炉は径82×68cmの地床炉で、住居はぼ中央に位置する。柱穴は17基検出され、いずれも壁沿いに巡っている。規模は、径10~24cm、深さ7~22cmを測る。住居の南側は、柱穴が極端に少なくなり、側壁も階段状に立ち上がることから、出入り口と考えられる。

土器は深鉢形土器(17・18・26)、浅鉢形土器(43)等、合計8,319g出土している(19~25・27~42・44~50)。石器は、不定形石器1点(19)、敲磨石類1点(48)、石皿2点、砥石2点(65・66)、剥片16点が出土している。この他、土偶(233)、スタンプ形土器製品(234)、丸石(75)、石棒1点(76)が出土している。時期は出土土器から、縄文時代後期中葉に所属する。

(2) 土 坑

SK3 (図版 18・47)

調査区中央からやや西側の3B7グリッドに位置し、V層上面で確認した。SK5の南側に隣接する。平面形は円形を呈し、長径95cm、短径85cm、深さ35cmを測る。底面は平坦で、側壁は急角度に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土はブロック状に堆積し、3層に識別される。遺物は縄文土器76g

(51～55)、不定形石器1点(23)が出土している。時期は出土土器から、縄文時代後期中葉に所属する。

SK5 (図版18・47・48)

調査区中央からやや西側の3B2グリッドに位置する集石土坑で、IV層上面で確認した。平面形は橢円形を呈し、長径80cm、短径65cm、深さ13cm、長軸方向はN-80°-Eを測る。底面は凹凸があり、側壁は急角度で立ち上がる。覆土は単層で黒褐色土が堆積し、炭化物を多量に含む。礫は確認面から覆土下層まで認められ、殆どのものが被熱している。時期は周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期中葉と推定される。

SK7 (図版18・48)

調査区中央部の4B6グリッドに位置し、IV層上面で確認された。東0.5mにSK8、西0.4mにSX6が隣接する。平面形は円形を呈し、長径93cm、短径85cm、深さ27cmを測る。底面は平坦で、側壁は急角度に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は3層に識別される。土器は深鉢形土器(56～58)、壺形土器(62)等、合計401g出土している(59～61)。石器は、両極に剥離痕のある石器1点、剥片3点、砥石2点(63)が出土している。時期は出土土器から、縄文時代後期中葉に所属する。また、壺形土器(62)内から出土した炭化物について年代測定を行った(第4章5参照)。この結果、 $3,470 \pm 30$ Y.B.Pの年代を得ており、出土土器の年代観と概ね一致する。

SK8 (図版18・48)

調査区中央部の4B6～12グリッドに位置し、IV層上面で確認された。平面形は円形を呈し、径85cm、深さ25cmを測る。底面は東側へ向かって傾斜する。側壁は東側では内傾しながら立ち上がり、その他は緩やかに立ち上がる。覆土は地形の傾斜に沿って斜位に堆積し、2層に識別される。遺物は縄文土器521g(63～67)、不定形石器1点(22)、剥片2点が出土している。時期は出土土器から、縄文時代後期中葉に所属する。

SK11 (図版18・48)

調査区北部の4A6・7グリッドに位置し、IV層上面で確認された。南0.5mにSK15が隣接する。平面形は不整な円形を呈し、長径190cm、短径170cm、深さ30cmを測る。底面は凹凸があり、側壁は南側では急角度に立ち上がるが、その他は緩やかに立ち上がる。覆土は地形の傾斜に沿って斜位に堆積し、2層に識別される。遺物は敲磨石類2点が出土している。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

SK12 (図版18・48)

調査区南東部の5B21グリッドに位置し、IV層上面で確認された。北0.2mにSK13、北西0.7mに14号焼土が隣接する。北側でSA16と重複し、これより古い。平面形は精円形を呈し、長径100cm、短径83cm、深さ53cm、長軸方向はN-23°-Wを測る。底面はやや凹凸があり、東側の側壁がオーバーハングする。断面形は袋状を呈する。覆土は2層に識別され、黒褐色土が主体である。遺物は出土していない。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

SK13 (図版19・48)

調査区南東部の5B6グリッドに位置し、IV層上面で確認された。平面形は円形を呈し、長径88cm、短径82cm、深さ29cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は急角度に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、2層に識別される。遺物は出土していない。時期は、遺構の確認層位、遺物の出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

SK15（図版19）

調査区北部の4A12グリッドに位置し、IV層上面で確認された。平面形は円形を呈し、長径140cm、短径133cm、深さ35cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は急角度に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は水平に堆積し、2層に識別される。遺物は縄文土器245g(68)、石錐1点(6)、剥片2点が出土している。時期は、遺構の確認層位、遺物の出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

SK17（図版19・48）

調査区東部の5B9グリッドに位置し、IV層上面で確認された。平面形は円形を呈し、長径86cm、短径83cm、深さ8cmを測る。底面は凹凸があり、側壁は急角度に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、2層に識別される。遺物は縄文土器9g出土している。時期は、遺構の確認層位、遺物の出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

SK20（図版19）

調査区東部の4B4グリッドに位置し、IV層上面で確認された。平面形は梢円形を呈し、長径252cm、短径160cm、深さ50cm、長軸方向はN-61°-Eを測る。底面は平坦で、側壁は北西側では階段状に、その他は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、5層に識別される。遺物出土していない。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

SK21（図版19・49）

調査区北側斜面の3A8グリッドに位置し、III層の下層で確認した。平面形は円形を呈し、長径105cm、短径90cm、深さ50cmを測る。底面は平坦で、側壁は南側がオーバーハングする。北側では緩やかに立ち上がり、その他は急角度で立ち上がる。覆土は地形の傾斜に沿って斜位に堆積し、6層に識別される。土器は、深鉢形土器(70・71)等、合計1,282g出土している(69・72・73・125)。石器は、敲磨石類1点が出土している。時期は出土土器から、縄文時代後期中葉に所属する。

(3) 燃 土**14号焼土（図版19）**

調査区南東部の4B20グリッドに位置し、試掘調査で確認されたものである。確認層位はIII層の下層である。焼土範囲の平面形は、西側部分を欠失するため不明であるが、残存状況から円形を呈するものと推測される。残存部分の範囲は長径83cm、短径44cm、厚さ8cmを測る。遺物は出土していない。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

(4) 集 石**19号集石（図版19・49）**

調査区北部の3A18グリッドに位置し、試掘調査で確認されたものである。確認層位はIII層の下層である。集石は48×38cmの範囲で検出され、礫は全て被熱している。この集石の中央付近からは、縄文土器2点が出土した。遺物は標高88.61～88.51mの範囲で、ほぼ同レベルに出土している。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

(5) 性格不明遺構

SX6 (図版19)

調査区中央部の3B10～15グリッドに位置し、IV層上面で確認された。西0.8mに4号炭窯が隣接する。規模等で他の土坑との相違が認められるため、これを区別した。平面形は不整な楕円形を呈し、長径310cm、短径210cm、深さ44cm、長軸方向はN-16°-Eを測る。底面は凹凸があり、側壁は緩やかに立ち上がる。覆土は単層で、黒褐色土が堆積する。遺物は石匙1点(10)、剥片2点が出土している。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から縄文時代後期中葉と推定される。

(6) 炭 窯

4号炭窯 (図版19・49)

調査区中央部の3B8・9グリッドに位置し、IV層上面で確認された。平面形は楕円形を呈し、長径145cm、短径115cm、深さ62cm、長軸方向はN-86°-Wを測る。底面は平坦で、側壁は西側では階段状に、その他は急角度で立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、4層に識別される。覆土1・2層は、綿まりの弱い黒色土が堆積し、炭化物を多量に含む。焼土は覆土下層から底面にかけて検出され、底面が被熱し赤変している。以上のことから、焼けた木材の上に土を覆つて炭を作る「伏焼」の方法の炭窯と推定される。時期は覆土の状況から、近世以降に所属するものと推定される。

(7) ハサ木跡

SA16 (図版20・49)

調査区中央からやや東寄りの4A～4Bグリッドに位置し、IV層上面で確認された。南端の柱穴がSK12と重複し、これより新しい。長軸方向はN-27°-Wで、南北に延びる。柱穴は6基確認された。柱穴の掘形は円形・楕円形を呈し、規模は径44～46cm、深さ10～48cmを測る。覆土は綿まりの弱い黒褐色土が堆積する。南側の中央ではトレンチのため、柱穴が確認できなかった箇所もあるが、6間(12.52m)と考えられる。柱間寸法は北側から2.22、1.60、1.82、(4.70)、2.18mを測る。覆土の状況から、近世以降のハサ木跡であると推定される。

SA18 (図版20・49)

調査区南部の3B～4Bグリッドに位置し、IV層上面で確認された。北1mにSA22が隣接する。長軸方向はN-82°-Wで、東西に延び、SA22とほぼ平行する。柱穴は4基確認されている。柱穴の掘形は、円形・楕円形を呈し、径46～75cm、深さ11～70cmを測る。柱間寸法は東側から3.40、2.44、2.54mを測る。覆土の状況から近世以降のハサ木跡であると推定される。また、柵列の70cm南では径26cm、深さ58cmのピット1基が検出されている。位置関係、断面形状、覆土の状況から、ハサ木を支える「添え木」の柱穴と考えられる。

SA22 (図版20・49)

調査区南部の4Bグリッドに位置し、IV層上面で確認された。長軸方向はN-83°-Wで、東西に延びる。柱穴は4基確認されている。柱穴の掘形は円形・楕円形を呈し、径32～56cm、深さ36～52cmを測る。柱間寸法は東側から1.38、1.88、3.94mを測る。覆土の状況から近世以降のハサ木跡であると推定される。

C 下層遺構の概要

基本層IV層の鹿瀬軽石質砂層の下層からは、縄文時代早期～前期末葉の遺構・遺物が検出されている。遺構確認面はV層上面で、焼土1基、遺物集中地点4か所、集石1か所が確認された。遺構は鹿瀬軽石質砂層に覆われていたために良好な状態で検出することができたが、上層に比べて少なく、調査区中央付近の3B・4Bグリッドに散在する。

この鹿瀬軽石質砂層を除去したV層面の地形は、東側の段丘先端部及び西側の段丘高位から、調査区中央の4A・Bグリッドに向かって緩斜面を形成している。遺構は、この段丘高位の東側平坦面の縁部から検出される傾向にあり、24号焼土、25号集石、23・26号遺物集中地点が確認されている。また、9・27号遺物集中地点は、段丘先端部側の西側斜面から検出されている。

D 下層遺構の各説

(1) 焼 土

24号焼土（図版20・50）

調査区中央部の3B13・14グリッドに位置する。北東1mに26号遺物集中地点が隣接する。焼土範囲は円形を呈し、長径54cm、短径52cm、厚さ8cmを測る。遺物は出土していない。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から、縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

(2) 遺物集中地点

遺物集中地点は4か所確認されている。いずれも明確な掘形が確認されなかったため、遺物集中地点としたものである。

9号遺物集中地点（図版20・50）

調査区南部の4B22グリッドに位置する。遺物は47×44cmの範囲に集中し、深鉢形土器（79）が正立した状態で検出された。時期は出土土器から大木6式（古段階）期に所属する。

23号遺物集中地点（図版20・50）

調査区中央からやや西寄りの3B18グリッドに位置する。遺物は42×31cmの範囲に集中し、深鉢形土器（78）が横位の状態で検出された。時期は出土土器から大木6式（古段階）期に所属する。

26号遺物集中地点（図版20・50）

調査区中央部の3B9グリッドに位置する。遺物は48×40cmの範囲に集中し、南側23×15cmの範囲には炭化物の集中が認められた。遺物は深鉢形土器（77）が横位の状態で検出され、この他には礫2点が出土している。時期は出土土器から大木6式（古段階）期に所属する。

27号遺物集中地点（図版20・50）

調査区中央からやや東寄りの4B17・18グリッドに位置する。遺物は52×31cmの範囲に集中し、深鉢形土器（80）が横位の状態で検出された。時期は出土土器から大木6式（古段階）期に所属する。

(3) 集 石

25号集石（図版20・50）

調査区中央部の3B5グリッドに位置する。礫が最も集中するのは中央42×28cm、西側53×27cm

の範囲で、径10～15cmの比較的大型の縄が検出された。この範囲からは剥片1点が出土している。時期は、遺構の確認層位、周辺の遺物出土状況から、縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

4 遺 物

A 概 要

現明嶽遺跡の遺物は、鹿瀬軽石質砂層を挟んだ上下の層から出土している。その出土量は、縄文土器44.286kg、土製品4点、石器475点、石製品3点である。このほか搬入磯などがある。

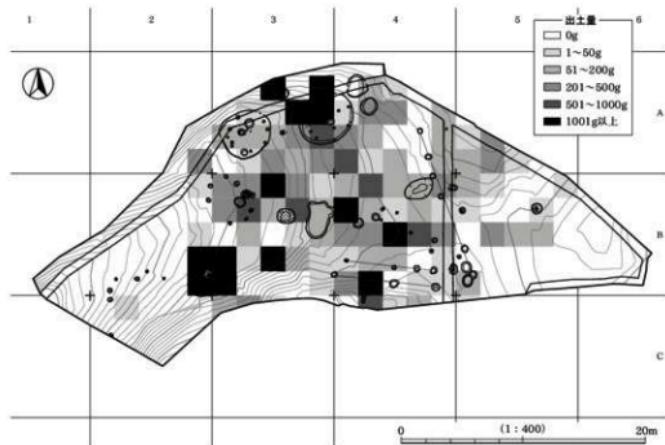
縄文土器は、第IV層（鹿瀬軽石質砂層）より下層からは早期～前期の、上層からは後期～晚期のものが出土している。このうち最も多く出土しているものは上層の後期中葉の土器で、次いで下層の前期後葉～末葉の土器である。この二時期の土器でほとんどを占め、他の時期のものは極めて少ない。石器は、時期的な傾向をつかみにくいものの、出土層位・分布から、多くは土器と同時期と考えている。分布は、前期末葉と後期中葉の遺構が分布する3A・3B・4A・4Bグリッドに集中する。

以下、縄文土器・土製品、石器・石製品の順に説明する。

B 縄文土器

前述のように調査の結果、44.286kgの縄文土器が出土している。これらの縄文土器は、鹿瀬軽石質砂層の下層からは早期中葉～前期末葉の、上層からは後期前葉～晚期のものが出土している。最も多く出土している土器は、上層の後期中葉で集落に伴う遺物である。これらの土器の出土層位は、基本層のII層～III層である。また遺構に伴う土器も多い。分布は、後期中葉の竪穴住居や土坑などが見つかった2・3列グリッド境～4・5列グリッド境にかけて多く出土した。この部分は集落の内側に当たる。

次いで前期後葉～末葉の遺物が出土している。これらは同時期の遺物集中地点や焼土の存在した4A・



第24図 現明嶽遺跡 縄文土器出土分布図

4Bグリッドからのものがほとんどであり、出土個体数は多くないものの復元率が高い。出土層位は鹿瀬輕石質砂層直下のV層上面である。

なお、段丘先端部の6Bグリッド、段丘奥部の1B～Cグリッドでは遺構が存在しないこともあり、土器もほとんど出土していない。なお、後期中葉の集落が検出されたこともあり、北側の小谷部と南側の段丘崖にトレーナーを入れ、土器捨て場や水場遺構の検出を試みたが確認できなかった。

(1) 資料の提示

資料の提示方針は上野東遺跡と同じく、遺構に伴うものは比較的細片のものまで図化・掲載した。遺構に伴わないと判断された包含層の出土土器は、分類や編年のお資料と思われるものを中心に図化・掲載した。また提示方法も上野東遺跡と同じく、資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、本文で詳述した。なお、観察表の記載項目の説明については、第三章B.aを参照されたい。

(2) 分類

a 分類

分類は、鹿瀬輕石質砂層を挟んで出土する土器が上層と下層で大きく区分されること、下層は前期後葉～末葉の土器が主体を占めること、上層は後期中葉が主体を占めること、これ以外は各時期ともに散発的であることから、まず所属時期を考慮し、次の5群に分けた。

第I群土器：早期中葉～前期中葉に所属するもの。

第II群土器：前期後葉～末葉に所属するもの。

第III群土器：中期前葉～後期前葉に所属するもの。

第IV群土器：後期中葉に所属するもの。

第V群土器：後期後葉～晚期に所属するもの。

粗製土器は、上層と下層で土器の胎土や厚み、焼成等でほぼ明確に区分でき、さらに有文土器は、下層では前期後葉～末葉が主体を占めること、上層では後期中葉がほとんどであることから、上層は第IV群に、下層は第II群に所属するものと判断し、これに含めた。

器形 下層で主体的に出土した第II群土器は、すべて深鉢で器形が分かるものが多い。また器形に複数のバリエーションが認められ、第三章で詳述した上野東遺跡出土のものと器形の変化を比較するため、類型化を行った。したがって、器形分類は上野東遺跡と同じである。模式図は第11図を参照されたい。

A器形：口縁部と胴部の境が明瞭でなく、胴部中位からやや大きくな外反して口縁部にいたるもの。上野東遺跡で出土していたが、本遺跡では出土していない。

B器形：口縁部と胴部の境が明瞭でなく、底部から口縁部にかけて直線状に開くもの。いわゆる「バケツ形」を呈する。

C器形：口縁部と胴部の境が明瞭でなく、底部から口縁部にかけて筒状になるもの。いわゆる「円筒形」を呈する。上野東遺跡では出土していない。

D器形：底部から胴部にかけてやや内湾気味に開き、胴部から口縁部にかけて直立気味になり、口縁部上位でやや強く外反する。口縁部と胴部の境がいくらか明瞭になる。

E器形：胴部中位で膨らみ、頸部でわずかにすぼまり、口縁部はやや強く外反する。

F器形：胴部下位がすぼまり、中位が膨らみ、頸部がすぼまり、口縁部が外反する。E器形とG器形の

中間器形となる。上野東遺跡では出土していない。

G 器形：胸部下位が筒状（台状）、中位が球状に膨らみ、頸部で強くすぼまり、口縁部が外反する。いわゆる「金魚鉢形」を呈する。上野東遺跡では出土していない。

このほか、口縁部が幅広く、文様帯が明確に区分される器形のものも認められる。破片資料のため全体の器形が明らかでないため、類型化していない。なお、第IV群土器も多量に出土しているが、第II群土器のように深鉢形土器だけでなく、器種が多様であるため、器種内の器形分類は行っていない。

細分類 さらに各群の出土土器は時期、文様、系統などを考慮し、以下のように細分した。

第I群土器（81～87） 早期中葉～前中期中葉に所属するもの。

A類（81～83） 早期中葉の田戸下層式に相当するもの。

B類（84～87） 前中期中葉に相当するもの。

第II群土器（77～80・88～152） 前中期後葉～末葉に所属するもの。系統により区分し、さらに文様により細分した。地文のみ施文された粗製土器は、地文の種類を基に細分した。

第II-1群 東北系（在地）の土器

A類 沈線による鋸歯状文（山形文）からなるもの。横走沈線が頸部に巡るもののが極めて多い。器形はD器形となるものが多い。なお、本遺跡からは粘土組貼り付けによる鋸歯状文は1点も認められなかった。鋸歯状文の形状でさらに細分した。

A1類（88～91） 横走沈線とやや小形で小刻みな鋸歯状文が施文されるもの。平行沈線は頸部に巡り、口縁部と胸部を区画するものが多い。

A2類（92・93） 横走沈線と柄大きな鋸歯状文と曲線文（渦巻き文）が施文されるもの。

B類（94～96） 幅広な口縁部や肥厚する口縁部に縄文原体が押圧されているもの。

C類（97） 肥厚する口縁部下部に幅の広い爪形文が施文されるもの。

D類（77・98） 幅の広い口縁部文様帶に沈線が描かれ、その側縁に爪形文が沿うもの。器形はF・G器形になるものと予想される。

E類（78・80・99～101） 明確に区画された口縁部文様帶に、沈線で直線が施文されるもの。

F類（79・102～106） ゾーメン状の粘土紐を貼付し、紐上に細かな爪形文が施文されるもの。

G類（107） 頸部に横走沈線を貼付し、口縁部文様帶を区画するが無文のもの。口唇部は肥厚し、波状口縁となる。

H類（108・109） 胸部上位または頸部に、退化した鋸歯状沈線文と思われる沈線が施文されるもの。

I類（110・111） 口縁部が無文で、胸部に縄文のみが施文されるもの。口縁部はやや肥厚する平口縁である。

J類（112～116） 縄文地に半截竹管状工具による押引文が施文されるもの。

K類（117・118） 口唇部に縄文が施文されるもの。胸部は縄文地となる。

L類（119） 平行沈線間に爪形文が施文されるもの。

第II-2群 東関東系の土器

A類（120～122） 半截竹管状工具の内側による三角文や爪形文を施文するもの。

B類（123～125） 口縁部上部から縦位短沈線、刺突文、半截竹管状工具による押引文で構成されるもの。

C類（126・127） 平行沈線で区画された区画内に擬似磨貝殻文が施文されるもの。

第II-3群 北陸系の土器

A類 (128~131) 三角形印刻文、半截竹管状工具による爪形文、半隆起線文で構成されるもの。

第II-4群 ほとんどが大木5~6式の粗製土器、または胴部破片と推定されるが明確な系統は不明である。

A類 単節縄文のもの。

A1類 (132~134) 縄文RLが施文されるもの。

A2類 (135~143) 縄文LRが施文されるもの。

B類 縄文地に綾縁文が施文されるもの。

B1類 (144) 縄文RLに綾縁文が施文されるもの。

B2類 (145~150) 縄文LRに綾縁文が施文されるもの。

C類 (151・152) 複節縄文が施文されるもの。

第III群土器 (5・153~155) 中期前葉~後期前葉に所属するもの。

A類 後期前葉に所属するもの。

A1類 (153) 受口状の口縁部を持つ深鉢形土器。

A2類 (154) 頸部が強く括れる深鉢形土器。口唇部に横走沈線、頸部に平行沈線や刺突文が巡るもの。

A3類 (5・155) 口縁部には波状口縁に沿って平行沈線文が、胴部には渦巻状の沈線が施文される。

第IV群土器 (1~4、6~76、156~216、227~231) 後期中葉に所属するもので、最も多く出土している土器群である。細分に当たっては、破片のため不明確なものもあるが、まず器種別に分け、さらに器種内で文様、系統、器形等を考慮して行った。

第IV-1群 有文の深鉢形土器(精製深鉢)である。

A類 關東系の加曾利B式に類似するもの。

A1類 平行沈線文系の土器である。

a種 (17・18・56・57・63・156~165) 平行沈線が施文されたもの。区切文の有無、文様帶の広狭、波状口縁や平口縁など多様な器形・文様の土器がある。

b種 (58) 平行沈線と区画文が組み合わされたもの。

c種 (166) 平行沈線が外側のほか、内面にも巡るもの。

A2類 (167) 斜線文が施されたもの。

B類 東北系の土器である。

B1類 (6・19~23・168~180) 磨消・充填縄文により曲線的な文様が施文されたもの。口縁部や頸部に刻みや刺突が無い。

B2類 (7・24・26・181) 磨消・充填縄文により曲線的な文様が施文され、口縁部や頸部に刻みや刺突がある。

B3類 (25) 沈線沿いに刻みや刺突が施されたもの。

第IV-2群 粗製の深鉢形土器である。

A類 口縁部に文様帶を持つもの。

A1類 (186) 口縁部に無文帶を持ち、胴部に縄文が施文される。

A2類 (187) 口縁部に縄文帶を持ち、胴部が無文のもの。

B類 (2・3・9・28~36・51~53・64・69~71・188~197) 口縁部に文様帯が無く、地文のみのもの。施文の種類により、1類：縄文LR、2類：縄文RL、3類：縄文R、4類：羽状縄文、5類：条線文、6類：無文、7類：縄文Lに細分した。1類：縄文LRが極めて多く、次いで5類：条線文、6類：無文である。また4類：羽状縄文は意識的に施文されているものはほとんど認められなかった。

C類 (8・10~12・37~40・54・55・59~61・65・68・74~76・198~205) 脊部破片で、B類に準じ細分した。

第IV-3群 鉢形土器、浅鉢形土器である。細片のため、器種が明瞭でないものがある。系統・器形・文様等により細分した。

A類 関東系の加曾利B式に近似するもの。器形は頸部が括れず、口縁部は内湾気味に外傾すると思われる。

A1類 (1・41・66・72) 平行沈線文が施文されるもの。

A2類 (206) 平行沈線文が内面に施文されるもの。

B類 東北系の土器である。頸部が括れ、口縁部は直線状に外傾する。

B1類 (14) 頚部以下は縄文のみ施文され、頸部に刻みが見られない。

B2類 (42・207) 頚部以下は磨消・充填縄文により、曲線的な文様が施文される。また頸部や台部に刻みや刺突が見られる。

C類 (43・208) 系統は明らかでないが、頸部が強く内屈する。口縁部には平行沈線文が巡り、脣部には縄文地に平行沈線文を施す。

第IV-4群 注口土器、壺形土器である。細片のため、器種が明瞭でないものがある。大きさ・系統・文様等により細分した。

A類 (13) 東北系の大形注口土器である。

B類 (62) 東北系の大形壺形土器である。

C類 中小形の注口土器、壺形土器である。

C1類 (16・44・210・211) 無文地に沈線による曲線文を施文する。

C2類 (45~47・212) 磨消・充填縄文により曲線的な文様を施文する。

C3類 (213) 刻みを持つ平行沈線で区画された区画内に瘤が付く。

第IV-5群 (4・48~50・67・227~231) その他の土器である。A類：深鉢形土器の底部破片、B類：深鉢形土器の突起で、ほとんどが後期中葉に所属すると思われるものの、断定できない。

第V群土器 (217~226) 後期後葉～晩期に所属する土器。

A類 (217) 後期後葉に所属するもの。

B類 (218~226) 晩期に所属するもの。

(3) 土器 各 説

a 遺構出土土器 (図版21~23・51・52)

各遺構から出土した土器について前述の分類をもとに説明する。細かい破片資料は記述が重複するため、適宜、省略したものもある。

SI1 出土土器（1～4）

覆土から少量出土している。1は加曾利B式に近似する平行沈線文系の浅鉢である。薄手の作りで、口縁部は内湾気味に外傾する。2・3は粗製の深鉢形土器の口縁部破片で、2は縄文LR、3は無文である。

SI2 出土土器（5～16）

覆土上層から床面まで比較的多く出土している。5は深鉢形土器の胸部破片で、平行沈線が渦巻状に施文される。6・7は胸部を大きく欠くが、同一個体である。磨消縄文による曲線的な文様を持つ深鉢形土器で、縄文部は同一原体LRの羽状縄文が施される。7は波状口縁に沿って沈線が、頸部に沿って二条の沈線が横走し、それぞれ沈線内に刻み目が付けられる。13・15・16は注口土器である。13は大形品で、器形はいわゆる鏡餅状となる。頸部と胸部の境に刻み隆帯が巡り、そこから頸部にねじれた突起が4か所に貼付される。胸部は沈線で入組文状の曲線文を描き、磨消縄文とする。また刻み隆帯を胸部上位と下位、縦位に4か所貼付し、それぞれの交点には瘤が付く。無文部はよく磨かれ光沢を帯びる。新発田市ニタ子沢C遺跡〔田中・鈴木2003〕に類例が認められる。16は第IV-4群C1類の注口土器で、胸部には無文地に沈線で曲線文が描かれている。朝日村脇ノ沢遺跡〔湯原ほか1999〕に類例が認められる。15は注口部である。なお、16は注口部を欠き、15・16は胎土が似ていることから、同一個体の可能性もある。14は第IV-3群B1類の浅鉢形土器で、頸部に括れを持ち、これを境に口縁部は無文、胸部は縄文となる。無文部、内面はよく磨かれている。8～12は粗製土器で、9は底部から口縁部に向かい、大きく開く器形になるものと推定される。5は後期前葉、6・7・13～16は後期中葉に所属し、8～12も同時期と推定される。

SI10 出土土器（17～50）

覆土上層から下層まで多くの遺物が出土し、すべて第IV群土器で後期中葉に所属する。17・18は第IV-1群A1類a種で平行沈線文が施文された深鉢形土器である。いずれも波状口縁で、17は平行沈線が蛇行文で区切られる。18は区切り文が無く、頸部に刻み目が施文される。20～26はB類の東北系の深鉢形土器である。20～23はB1類の磨消縄文による曲線的な文様が施文される。24・26は波状口縁で頸部が括れる器形の深鉢形土器である。文様は磨消縄文による曲線的な文様を持ち、24は頸部に、26は口縁部上部と頸部に刻み目が各1列付けられるB2類である。25は幅広い口縁部縄文帯の上部に刻み目が1列付けられたB3類である。28～40は粗製の深鉢形土器（第IV-2群）である。28～36は口縁部破片で、地文は28・29・31～34が縄文LR（B1類）、30が縄文RL（B2類）、35・36が無文（B6類）である。37～40は胸部破片で、37～39が縄文LR（C1類）、40が無文である。41～43は浅鉢形土器（第IV-3群）である。41は関東系の平行沈線文（A1類）が施文され、42は東北系の曲線的な文様と頸部に刻み（B2類）を持つ。43は頸部が強く内屈し、口縁部と胸部に平行沈線文（C類）が巡る。44～47は注口土器（第IV-4群）で中小形品と推定される。46は沈線による曲線文（C1類）、45・47は磨消縄文による曲線的な文様（C2類）となる。44は頸部破片で無文であるものの、胸部は沈線による曲線文（C1類）が施文されると思われる。48～49は深鉢形土器の胸部下位から底部にかけての破片である。

SK3 出土土器（51～55）

覆土から少量の土器が出土し、いずれも粗製の深鉢形土器の破片である。51は条線文、52・53は無文の口縁部破片で、54・55は縄文LR（C1類）の胸部破片である。

SK7 出土土器（56～62）

覆土からやや多くの土器が出土している。いずれも後期中葉に所属する。56・57は平行沈線文系の深

鉢形土器（A1類a種）、58は平行沈線文と区画文が組み合わさった深鉢形土器（A1類b種）である。なお57・58はSK8出土のものと接合している。59～61は粗製の深鉢形土器の胴部破片で、59は縄文LR、60は縄文RL、61は無文となる。62はやや大形の壺形土器（第IV-4群B類）で、胴部下位を除き、ほぼ全面に弱く縄文LRが施文される。周辺地域の遺跡に類例が無く、仙台市伊古田遺跡〔渡部ほか1995〕に類例が多く認められ、東北系の壺形土器である。なお、土器内の年代測定では、Libby Age (yrBP) : 3, 470 ± 30という結果が出ている。

SK8出土土器（63～67）

覆土からやや多くの土器が出土している。いずれも後期中葉に所属する。63は平行沈線文系の深鉢形土器（A1類a種）、64・65は粗製の深鉢形土器で、64は口縁部破片で縄文LRが、65は胴部破片で羽状縄文が施文される。66は平行沈線文系の浅鉢の破片、67は無文の深鉢形土器の底部である。

SK15出土土器（68）

覆土下層から少量の上器が出土している。68は縄文LRが施された粗製の深鉢形土器の胴部破片である。

SK21出土土器（69～73）

69～71は粗製の深鉢形土器の口縁部で、後期中葉の所産と推定される。69は同一原体縄文Rで羽状縄文、70は縄文L、71は縄文LRが施文される。なお、70は平口縁に刻みのある突起が3個付く。72は浅鉢の口縁部で、平行沈線文系とも思われるが、細片のため明確でない。73は無文の破片資料であるが、注口土器の口縁部と推定される。

3BグリッドP1出土土器（74・75）

いずれも粗製の深鉢形土器の胴部破片で条線文が施文される。色調は異なるが、文様、胎土から同一個体と考えられる。

4CグリッドP1出土土器（76）

粗製の深鉢形土器の胴部破片で縄文Rが施文される。

9号土器集中地点（79）

鹿瀬軽石質砂層直下で出土した深鉢形土器である。器形はいわゆる「金魚鉢形」を呈するG器形となる。口唇部に3個の小波状を1単位とする突起が8単位付く波状口縁となる。文様は口縁部から胴部上位にかけてソーメン状の細い粘土紐を鋸歯状や渦巻状に貼付し、これに細かい爪形文を施したものである。胴部中位以下の地文は羽状縄文となる。器形、文様から大木6式古段階に相当する。

23号土器集中地点（78）

鹿瀬軽石質砂層直下で出土した深鉢形土器である。器形はいわゆる「円筒形」を呈するC器形となる。口唇部に緩やかな小波状の突起が8単位付く波状口縁となる。文様は口縁部と胴部を横走沈線で区画し、口縁部に沈線で曲線文を描いている。胴部の地文は縄文LRとなる。器形、文様から大木6式古段階に相当する。

26号土器集中地点（77）

鹿瀬軽石質砂層直下で出土した深鉢形土器である。器形は胴部下位がすぼまり、中位が膨らみ、頸部がすぼまり、口縁部で外反する。口唇部は3個の小波状を1単位とする突起が、それぞれ対となり、波状口縁を呈する。文様は口縁部と胴部を横走沈線で区画し、口縁部に沈線で鋸歯状文や円文の曲線文を描き、沈線沿いに爪形文が施文される。胴部の地文は縄文LRとなる。器形、文様から大木6式古段階に相当する。

27号土器集中地点 (80)

鹿瀬輕石質砂層直下で出土した深鉢形土器である。器形はいわゆる「バケツ形」を呈するB器形となる。口唇部に刻みの入った緩やかな小波状の突起が4単位付く波状口縁となる。文様は肥厚した口縁部の上下を横走沈線で区画し、沈線で鋸歯状文、渦巻き文、「U」字文を描いている。胸部の地文は縄文LRとなる。器形、文様から大木6式古段階に相当する。

b 包含層出土土器 (図版23～26・52～54)

第I群土器 (81～87) 早期中葉～前期中葉に所属するもの。

A類 (81～83) いずれも同一個体の深鉢形土器である。横位・斜位の沈線と列点文が施文される。旧湯沢町岩原I遺跡第II群1類B [北村1990] に類似し、早期中葉の田戸下層式に相当する。

B類 (84～87) 細片であるが、同一個体の深鉢形土器と思われる。太目の原体で羽状縄文が施され、胎土に纖維が多量に含まれる。前期前葉の所産と推定される。

第II群土器 (16～39)

前期後葉～末葉に所属するものである。既述のように後期中葉の土器について多く出土している。鹿瀬軽石質砂層直下のV層上面～上層から多く出土している。分類を基に記述する。

第II-1群 東北系(在地)の土器

A類 (88～93) 沈線による鋸歯状文(山形文)からなるもの。横走沈線が頸部に巡るもののが極めて多い。鋸歯状文の形状でさらに細分した。大木5b式と推定される。

A1類 (88～91) 88・89・91は同一個体で口縁部～胸部上位にかけて3条の横走沈線とやや小ぶりの鋸歯状文が巡る。器形はD器形となる。90は横走沈線と鋸歯状文のほか、弧線文が加わる。

A2類 (92・93) 同一個体の深鉢形土器である。口縁部～胸部上位にかけて横走沈線、横長・粗縫な鋸歯状文が巡り、渦巻き文が施文される。器形はいわゆる「バケツ形」のB器形を呈する。

B類 (94～96) 94・95は肥厚する口縁部に縄文LRが押圧され、口縁部下に94は鋸歯状沈線、95は弧線文が施文される。96は波状口縁となる深鉢形土器である。隆線により幅広の口縁部文様帯を区画し、6条の縄文RLを押圧している。なお、波頂部下に粘土瘤を貼付している。94・95が大木5b式、96が大木6式古段階と推定される。

C類 (97) 肥厚する口縁部下部に幅の広い爪形文が施文されている。胸部は縄文RLの地文となる。大木6式古段階と推定される。

D類 (98) 波状口縁の深鉢形土器の口縁部である。横走隆線により幅広の口縁部を作出し、沈線で斜線文、円形文、「U」字文等を描き、沈線沿いに爪形文を施文する。大木6式古段階と推定される。

E類 (99～101) 口縁部の上下を横走沈線で区画し、区画内に沈線で直曲線を描いている。なお、99は2個単位の継長の瘤が貼付され、100は瘤状の小突起が付く。大木6式古段階と推定される。

F類 (102～106) いずれも「く」の字に屈曲する口縁部を持つ。102・103は同一個体である。沈線で区画された口縁部の区画内にやや大きな円形瘤を貼付する。区画内や瘤周囲にソーメン状の細い粘土組を貼付し、組上に細かい爪形文が施文される。104～106は同一個体である。肥厚した口縁部に瘤を貼付し、瘤周囲や口縁部にソーメン状の細い粘土組を鋸歯状や円形に貼付し、組上に細かい爪形文が施文される。大木6式古段階と推定される。

G類 (107) 双瘤状の小突起が4個付く波状口縁で、器形はE器形になるものと推定される。横走隆

帶で口縁部と胴部を区画し、口縁部は無文、胴部は縄文 RL となる。大木 5b 式と推定される。

H 類 (108・109) 同一個体である。深鉢形土器の胴部上位または頭部に、退化した鋸歯状文と思われる沈線が横走する。地文は縄文 LR である。

I 類 (110・111) 同一個体である。無文の口縁部破片で、緩く外反し肥厚する。胴部は縄文施文と推定される。

J 類 (112～116) いずれも深鉢の胴部破片と推定され、縄文地に半截竹管状工具の押引文が施文される。

K 類 (117・118) 同一個体である。平口縁の口唇部に縄文が施文される。胴部は縄文 LR である。大木 5c 式と推定される。

L 類 (119) 深鉢の胴部破片で、縄文地に平行沈線と爪形文が施文される。

第II-2群 東関東系(浮島・興津式)の土器

A 類 (120～122) 同一個体である。深鉢の胴部破片で、半截竹管状工具による爪形文や三角文が施文される。浮島Ⅲ式〔西村 1968・瓦吹 1989〕に相当する。

B 類 (123～125) 同一個体である。波状口縁の深鉢で、口縁部上部から継位短沈線、刺突文、半截竹管状工具による押引文が充填される。浮島Ⅲ～興津Ⅰ式〔西村前掲・瓦吹前掲〕に相当する。

C 類 (126・127) 同一個体である。深鉢の口縁部と胴部破片である。継位短沈線、擬似貝殻文、平行沈線で文様構成され、127 は平行沈線で区画された菱形に磨削擬似貝殻文が施文される。興津Ⅱ式〔西村前掲・瓦吹前掲〕に相当する。

第II-3群 北陸系の土器

A 類 (128～131) いずれも同一個体の深鉢形土器である。三角形印刻文、半截竹管状工具による爪形文、半隆起線文が充填される。石川県能都町真脇遺跡〔小島 1986〕に類例が多く、鍋屋町式第Ⅱ群土器〔室岡・寺村ほか 1960〕、鍋屋町式3段階〔寺崎 1993〕に相当する。

第II-4群 ほとんどが大木 5～6 式の粗製深鉢形土器の口縁部または胴部破片と推定されるが、明確な系統は断定できない。

A 類 単節縄文のもの。本遺跡では縄文 LR が RL に比べ圧倒的に多く認められる。

A1 類 (132～134) いずれも深鉢形土器の胴部破片で、縄文 RL が施文される。

A2 類 (135～143) いずれも深鉢形土器の破片で、縄文 LR が施文される。

B 類 縄文地に綾縞文が施文されるもの。本遺跡では単節縄文に綾縞文が施文されるものが多く認められたが、縄文 LR に綾縞文の組み合わせが圧倒的であった。

B1 類 (144) いずれも深鉢形土器の胴部破片で、縄文 RL と綾縞文が組み合わされている。

B2 類 (145～150) いずれも深鉢形土器の胴部破片で、縄文 LR と綾縞文が組み合わされている。

C 類 (151・152) いずれも深鉢形土器の胴部破片で、縄文 RLR が施文される。

第III群土器 (153～155) 中期前葉～後期前葉に所属するもの。極めて少数の出土であり、すべて後期前葉と推定される。

A1 類 (153) 受け口状の口縁部を持つ、深鉢形土器の破片である。頭部に一条の沈線が巡り、胴部は縄文 LR が施文される。

A2 類 (154) 頭部が強く括れる深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部は無文であるが、口唇部に横走沈線、頭部に横走沈線と刺突が巡る。

A3類（155） 波状口縁の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部上部は内外に沈線が巡り、口縁部は繩文地に平行沈線が巡る。胸部は平行沈線の渦巻き繩文と思われるが、明確でない。

第IV-1群 第IV-1群 有文の深鉢形土器（精製深鉢）である。

A類 関東系の加曾利B式に類似するもの。

A1類 平行沈線文系の土器である。

a種（156～165） 平行沈線文が主文様となるものである。156・159・160・161・163は縱位の蛇行文で、163は縱位の短沈線で平行沈線文が区切られる。157は波状口縁に沿って平行沈線が巡る。158は小突起が付く平口縁である。

c種（166） 外面の平行沈線のほか、内面にも沈線が巡るものである。1点のみの出土である。なお、小突起が付くが、平口縁である。

A2類（167） 深鉢の胴部破片である。沈線区画内に斜線文が施文されたものである。1点のみの出土である。「斜線文土器」「遠部第2類」「安孫子1998」と呼称されるものである。

B類 東北系の土器である。

B1類（168～180） 沈線区画内の磨消・充填繩文により、曲線的な文様が施文されたものである。168は波状口縁、169～171は平口縁となる。172～181は胴部破片であるが、細片のため、文様構成等は不明である。

B2類（182） 深鉢の胴部破片で、頭部に1列の刻み目が横走する。

なお、182～185は第IV-1群と推定されるが、細片のため系統は不明である。

第IV-2群 粗製の深鉢形土器である。

A類 口縁部に文様帶を持つものである。

A1類（186） 口縁部に無文帯を持ち、胴部は繩文が施文されるもの。1点のみの出土である。

A2類（187） 口縁部に繩文帯を持ち、胴部が無文のもの。1点のみの出土である。

B類（188～197） 口縁部に文様帶が無いもの。地文の種類が、1類：繩文LR（188～192）、2類：繩文RL（193）、3類：繩文R（194）、4類：羽状繩文（195）、5類：条線文（196）、6類：無文（197）がある。

C類（198～205） 深鉢形土器の胴部破片である。地文の種類が、1類：繩文LR（198）、2類：繩文RL（199・200）、3類：羽状繩文（201）、4類：条線文（202～204）、5類：無文（205）がある。

第IV-3群 鉢形土器、浅鉢形土器である。

A類 関東系の加曾利B式に類似するもの。器形は頭部が括れず、口縁部は内湾気味に外傾すると思われる。

A2類（206） 胴部破片であり、平行沈線が内面にも施文されるものである。1点のみの出土である。加曾利B1式と推定される。

B類 東北系の土器である。頭部が括れ、口縁部は直線状に外傾する。

B2類（207） 台付き浅鉢である。頭部の屈曲部は刻みのある平行沈線で区画し、口縁部は無文、胴部は磨消繩文の曲線的な文様が描かれる。台部との接合部に刻み降帶が貼付される。

C類（208） 頭部が強く内屈し、口縁部には沈線文、胴部には繩文LRに平行沈線文が施文される。

なお、209は台付き浅鉢の台部と推定されるが、破片資料のため、詳細は不明である。

第IV-4群 注口土器、壺形土器である。

C類 中小形の注口土器、壺形土器である。

C1類 (210・211) 無文地に沈線による曲線文を施文している。

C2類 (212) 破片資料のため詳細は不明であるが、磨消縫文により曲線的な文様を施文する。

C3類 (213) 小形の注口土器である。刻みを持つ平行沈線で区画された区画内に瘤が付き、注口部と合わせ、4区画される。

第IV-5群 (227~231) その他の土器である。A類：深鉢形土器の底部破片 (227~230)、B類：深鉢形土器の突起 (231) である。

第V群土器 (217~226) 後期後葉～晩期に所属する土器である。

A類 (217) 深鉢の脇部破片である。平行沈線文と入組文が組み合わさり、区画内に縄文LRが施文される。後期後葉の瘤付き土器に相当する。

B類 (218~226) 218~220は鉢形土器の口縁部破片で、同一個体である。細片であるが、口縁部に浮線網状文が認められる。晩期後葉の浮線網状文第2段階 [石川1992] と推定される。221・222は粗製の深鉢形土器の口縁部破片で、同一個体である。口縁部に3条の沈線が巡り、脇部は無文となる。晩期後葉に所属する。223~226は粗製の深鉢形土器の破片で、同一個体である。口縁部に粘土組の積上げ痕を明瞭に残し、ほぼ全面に粗い条痕が施される。大洞C2式後半から主体的 [石川前掲] になるといわれ、晩期後葉の所産と推定される。

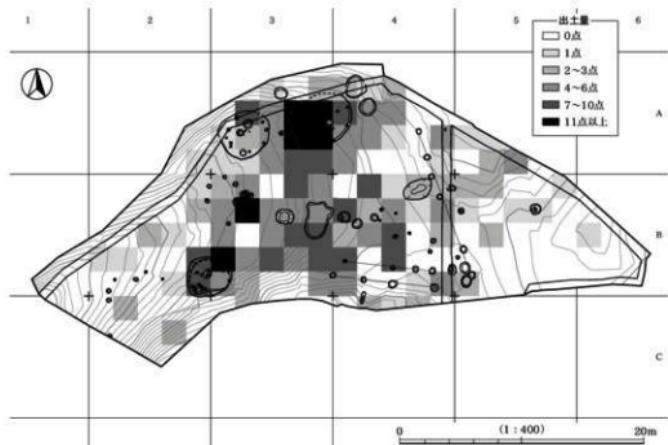
C 土 製 品 (図版27・54)

4点出土している。232は無文のミニチュア土器である。底部から口縁部にかけて内湾し、球形気味に仕上げられている。233は耳と腹部が強調された「山形土偶」である。両足、両腕、右耳を失った上半身で、頸部と脇部上半・下半に3分割されている。更に口と両乳房を欠いている。SI10の東南壁近くの覆土からの出土である。ほぼ同じ場所で出土したことから、埋納または廃棄にかかわらず、同時に行われたものである。234・235はスタンプ形土製品である。234は径4.7cmの円形で、中央に高さ2.2cmの低いつまみが付く。底面に沈線で渦巻き文が描かれている。SI10の北側、覆土下層からの出土である。235は長径5.2cm、短径2.3cmの長楕円形で、中央に高さ3.3cmのやや高く太いつまみが付く。底面に沈線で放射状文が描かれている。

D 石 器 (図版27~32・54~58)

出土した石器は第6表のとおり、合計で476点である。遺構内から74点(15.5%)、遺構外から402点(84.5%)で、遺構内出土の比率が高い。上野東遺跡と大きく異なる。本遺跡が集落遺跡で、竪穴住居をはじめとする遺構が多いことに起因するものである。したがって、石器の出土分布傾向は、包含層の分布傾向を大きく反映するものの、SI1・2・10、SK3・5・7・8・11・12・15・21など、後期中葉の遺構が集中する集落の内側に多く分布している。すなわち第2・3グリッド列の境から第4・5グリッド列境に相当し、土器の分布とほぼ一致する。

石核・剥片類・石錐失敗品を除いた器種石器は167点を数える。これらを器種別に出土数を見ると、各器種の出土点数は少ないものの、縄文時代の遺跡から出土する器種のほぼすべてを網羅する。この中で不定形石器38点(22.8%)、敲磨石類79点(47.3%)が多く、この2器種で70%を占める。石錐、打製石斧、石皿、砥石も一定の比率を示す。なお、石製品は3点認められた。



第25図 現明嶽遺跡 石器出土分布図

出土区分	石器	尖頭器	石鏃	石底	不定形石器	両端石器	ヘラ状石器	打製石斧	石錐	磨製石斧	鐵磨石類	石毬	砥石	小計	石核	剥片類	石器失敗品	合計
遺構内出土		2	1	6	1		1	1	11	3	5	31	43					74
遺構外出土	1	1	3	2	32	3	4	6	2	1	68	11	2	136	10	254	2	402
合計	1	1	5	3	38	4	4	7	3	1	79	14	7	167	10	297	2	476
百分率(%)	0.6	0.6	3.0	1.8	22.8	2.4	2.4	4.2	1.8	0.6	47.3	8.4	4.2	100.1	—	—	—	—

第6表 現明嶽遺跡 器種別石器出土数

所属時期については、出土地点・出土層位から後期中葉の遺構周辺に多く、土器の出土分布とほぼ同様なことから、多くが後期中葉に所属し、次いで前期後葉～末葉のものと推定できる。以下、器種毎に特徴的な事柄について記述する。

(1) 石 鐵 (1)

1点のみの出土である。凹基無茎鐵で、薄手の丁寧な作りである。流紋岩製。本地域では後期中葉期は有茎鐵になっていることから、前期後葉～末葉の所産と推定される。

(2) 石鐵失敗品 (2・3)

2点出土している。2はほぼ全面に二次調整が及んでいるが、素材の厚さを減じ切れていない。3は主要剥離面の一部に二次調整があるだけで、打瘤は除去されていない。石材は2がメノウ、3が頁岩である。

(3) 尖 頭 器 (4)

1点のみの出土である。薄手で丁寧な作りの尖頭器で、全体形が細身で、基部が括れ、つまみ状になるものである。山形県高畠町押出遺跡で多出した「押出型ポイント」[佐々木・佐藤前掲]と呼称されているもので、本遺跡では前期後葉～末葉の所産と推定される。凝灰岩製。

(4) 石 錐 (5~9)

5点出土し、すべて掲載した。5はつまみ部に抉りがある特異な形の石錐で、つまみ部だけに限れば石匙の可能性もある。錐部は徐々に広がるため、比較的長くなる。6~8は錐部からつまみにかけて大きく広がるタイプで、特に7は素材のごく一端に二次調整を加えているだけである。いずれも錐部は短く、7は特に短い。9は細身で棒状のものであるが、作りは粗雑で短い。石材は5・8が流紋岩、6が頁岩、7が緑色凝灰岩、9が鉄石英で、硬質緻密な石材を使用している。

(5) 石 匙 (10~12)

3点出土している。つまみ部を上に置き、刃部との関係を見ると10・11は縦形、22は斜刃型となる。10はほぼ全面に二次調整が施されている。11はつまみ部を欠損するが、二次調整の状態から「松原型石匙」¹⁰⁾【秦1991】と呼ばれ、早期最終末~前期前葉の所産とされている。12はほぼ全面に二次調整が及び、刃部は弧を描き、全体形は三日月状を呈する。類似品が上野東遺跡や北野遺跡下層【高橋ほか前掲】で複数認められることから、前期後葉~末葉の所産と考えられる。石材は10が凝灰岩、11が頁岩、12が鉄石英で、硬質緻密な石材を使用している。

(6) 不定形石器 (13~23)

38点出土し、器種石器の中では敲磨石類について多く、22.8%の比率を占める。

分類 上野東遺跡と同じく、刃部の形状の違いにより細分した。

A類 (13・14) 連続的な押圧剥離による滑らかな刃部を持つもの。片面調整のため、刃部断面形は片刃となる。スクレイバー、搔・削器と呼称されていたものに相当する。6点出土している。図示した石器は縦長剥片の正面左側縁に二次調整が施されている。

B類 (15・16) 連続または連続状の剥離による鋸歯状の刃部を持つもの。片面・半両面調整のため、刃部断面形は片刃となる。鋸歯縁石器、デンティキュレイトと呼称されていたものに相当する。7点出土している。15は横長剥片の下縁に、16は縦長剥片の両側縁に二次調整を加えている。

C類 (17) 両面に連続または連続状の剥離のあるもの。両面調整のため刃部断面形は両刃となる。刃部の側面観がジグザグ状となるものもある。6点出土している。17は横長剥片のほぼ全周に二次調整が加えられるが、下縁が刃部と推定される。

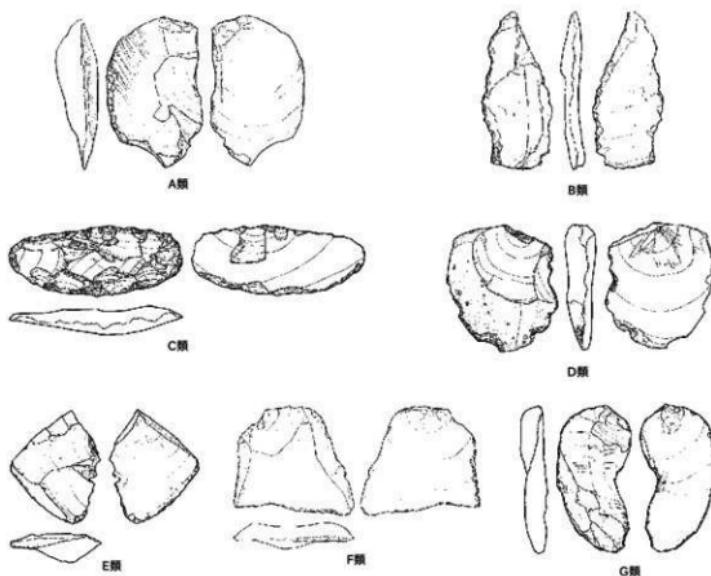
D類 (18) 挟入状の刃部を持つもの。挟入石器、ノッチと呼称されていたものに相当する。2点出土している。図示した石器は下縁と裏面左側縁に二次調整が加えられ、抉りが作られている。

E類 (19・20) 素材の端部に連続または連続状の剥離による刃部を持つもの。エンドスクレイバー、搔器と呼称されていたものを含む。3点出土している。19・20は剥片の下縁(下端)に二次調整を加え、滑らかな弧を描く刃部を作出している。

F類 (21・22) 不連続な剥離の刃部を持つもの。6点出土している。21は横長剥片の左側縁から下縁に、22は縦長剥片の両側縁に不連続な剥離が認められる。

G類 (23) 明らかに刃部の二次調整が認められないものの、使用の結果と思われる刃こぼれ状の微細

10) 松原型石匙とは、剥片の裏面右側縁に調整剥離を施し、これを打面として正面に調整剥離が施されているもの。早期最終末から前期前葉の所産とされている。



第26図 現明礬遺跡 不定形石器分類図

剥離・摩耗・光沢などの使用痕が認められるもの。1点のみの出土である。23は縦長剥片の両側縁に使用の結果と思われる微細剥離が認められる。

このほか上記の分類に当てはまらないものが7点認められた。

出土分布傾向は、土器や全体的な石器の出土傾向と同じく、後期中葉の遺構が集中する集落の内側の3~4・A~Bグリッドに多い。石材は凝灰岩12点(32%)、緑色凝灰岩11点(29%)、頁岩9点(24%)、流紋岩4点(11%)を数え、この4種の石材で96%を占める。ほかに鉄石英2点がある。地元で採取できる硬質で緻密な石材を使用している。素材は判別できるものでは縦長剥片21点、横長剥片10点となり、縦長剥片が横長剥片の2倍となっている。

(7) 両極剥離痕のある石器 (24・25)

4点出土している。2個1対の刃部を持つもの1点、4個2対の刃部を持つもの3点となる。図示した2点はいずれも4個2対の刃部を持つ。石材は鉄石英2点(24・25)、頁岩2点で、硬質緻密な石材を使用している。但し25は緑色の鉄石英が用いられ、この地域では前期前葉～中葉に用いられた石材「高橋前掲」と推定されている。

(8) 鍔状石器 (26~29)

4点出土している。26はやや大形の両刃で、27~29は中～小形の片刃で、形状にはらつきはあるもの

の、基部から刃部への開き角が大きい「揃形」と呼ばれるものである。28は刃部の二次調整が少ないものの、これ以外は側縁、刃部のいずれにも二次調整を丁寧に加えている。石材は頁岩3点、珪質岩1点で、硬質緻密な石材を用いている。27～29は形状、出土層位から見て前期後葉～末葉の所産と推定される。

(9) 打製石斧 (30～34)

7点出土し、剥片石器の中では一定の比率(4.2%)を示す。様々な形状のものが出土している。30は縱長剥片の素材を生かし、ほとんど二次調整を加えていない。頁岩製。32も同様で、剥片状の扁平な角縁にほとんど二次調整を加えていない。チャート製。31は剥離と敲打がほぼ全周し、刃部が作出されている。また刃部に摩耗・つぶれの使用痕も認められる。磨製石斧の未成品からの転用も考えられる。輝緑岩製。図示していないが、ほかに類似品が1点認められる。33は粗雑な剥離による成形後、正裏面に研磨を加えたものである。側面は素材の形状を生かし、片面は無加工、片面は稜をつぶしている。緑色凝灰岩製。研磨は見られるが、主要な成形と認められないため、磨製石斧ではなく打製石斧とした。胴部に抉りを持つ、分銅形の打製石斧である。側縁の抉り部はつぶし加工し、ほかは粗雑な二次調整である。ホルンフェルス製。

石材、形状、出土層位から中期以降の所産と推定され、34をはじめほとんどが後期中葉の所産と考えている。

(10) 石 錘 (35・36)

3点出土している。図示しないものも含め、扁平縁の両端に剥離と敲打を加え、抉りをつけたものである。いわゆる「礫石錘」と呼称されているものである。石材は安山岩2点、凝灰角縁岩1点で、加工しやすい石材を用いている。

(11) 磨製石斧 (37)

1点のみの出土である。敲打と研磨を行い、幅狭・厚めで基部から基礎がすぼまる磨製石斧に仕上げている。側縁と基部には敲打痕が多く残るもの、刃部には使用の結果と推定される刃こぼれ状の細かい剥離が認められる。形状から後期以降と推定され、後期中葉の所産と考えられる。

(12) 敲磨石類 (38～55)

上野東遺跡と同じく、表裏面の凹痕は敲打痕の集中とし、敲打痕に含めた。また側縁の使用痕のうち、平面・曲面を問わず、面をなす場合は磨痕、凹凸だけの場合は敲打痕とした。79点出土している。器種石器の中では最も多く出土し、47.6%を占める。

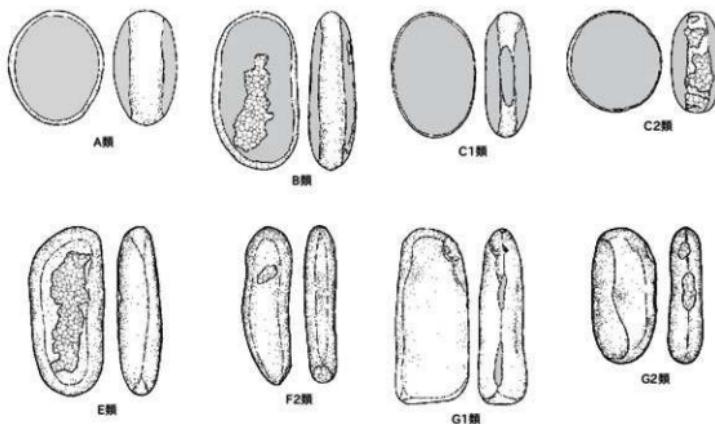
分類 上野東遺跡と同じく、第4表のとおり、表裏面の磨痕・敲打痕、側縁の磨痕・敲打痕の組み合わせで細分した。ただし、風化が激しく礫表面の状態がわかりにくいものは、観察できる範囲で分類した。また、側縁の磨痕と敲打痕の両方が認められる場合は、磨痕を優先した。分類模式図は第27図のようになる。

A類 (38～40) 表裏面のいずれかに磨痕が認められるもの。21点出土している。

B類 (41) 表裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められるもの。3点出土している。

C1類 (42) 表裏面のいずれかと側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。4点出土している。

C2類 (43～45) 表裏面のいずれかに磨痕、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの。7点出土し



第27図 現明礬遺跡 敵磨石類分類図

ている。43は拳大の亜角砾の表裏面に磨痕、側縁に敲打痕が認められるものである。敵磨石類は通常、円窪や楕円窪が使用されるのに対し、素材がやや異質である。

D1類 表裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められ、側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。上野東遺跡では2点出土しているが、本遺跡では出土していない。

D2類 表裏面のいずれかに磨痕と敲打痕が認められ、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの。1点のみ出土したが、図示していない。

E類 (46~48) 表裏面のいずれかに敲打痕が認められるもの。8点出土している。

F1類 表裏面のいずれかに敲打痕が認められ、側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。上野東遺跡では1点出土しているが、本遺跡では出土していない。

F2類 (49・50) 表裏面のいずれかに敲打痕が認められ、側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの。2点出土している。

G1類 (51・52) 側縁のいずれかに磨痕が認められるもの。6点出土している。52は断面三角形で、特殊磨石に含められる。

G2類 (53~55) 側縁のいずれかに敲打痕が認められるもの。8点出土している。53・55は側縁に、54は端部に敲打痕が認められる。

このほか破片資料や風化のため分類できないものが19点出土している。出土分布傾向は、全体的な石器の出土傾向とほぼ同じく、後期中葉の遺構が集中する集落の内側の3~4・A~Bグリッドに多い。石材は安山岩30点(38%)、花崗岩13点(16%)、石英安山岩・凝灰岩各7点(9%)が多く使用され、この4種で57点(72%)を占めている。また被熱の痕跡が見られるものが14点あった。

(13) 石 盆 (56~62)

扁平な大形砾の表面または表裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもの。砥石と

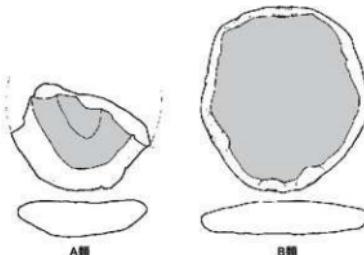
は使用面の状態から区別される。14点出土し、器種石器の中で一定の比率(8.4%)を占めている。

分類 上野東遺跡と同じく、使用面の加工の状態で細分した。

A類 (56・57) 敲打により、使用面が作出されているもの。いわゆる加工石皿である。使用が進むと周縁に明瞭な縁が形成される。3点出土しているが、いずれも破片資料である。

B類 (58~62) 使用面が作出されず、素材獲得時の裸面を無加工のまま使用しているもの。いわゆる無加工石皿である。11点出土している。

出土分布傾向は、全体的な石器の出土傾向とほぼ同じく、後期中葉の遺構が集中する集落の内側の3~4・A~Bグリッドに1点を除き分布する。石材は凝灰角礫岩4点、礫岩3点、花崗岩2点などとなり、いずれも粒子構造を持つ石材である。また、被熱の痕跡が5点に認められた。



第28図 現明慶遺跡 石皿分類図

(14) 砥 石 (63~66)

7点出土している。63~66はいずれも広い砥面を持つ、面砥石である。長さ18~30cm、重さ1.3~7.2kgを測ることから、置き砥石である。使用の頻度から使い込まれた方向に沿って滑らかさの状態の異なる砥面がわかる。石材は砂岩、凝灰岩各2点、輝緑岩・礫岩、緑色凝灰岩各1点で、多種類の石材を用いているが、粒子構造を持つ石材である。

(15) 石 核 (67~71)

10点出土している。全体的に概観すると自然礫・荒削礫・剥片と多様な素材を用いている。剥離作業の前段階となる打面調整は行われず、剥離作業の可能な打面さえあれば、どこからでも剥離作業が行われている。

分類 上野東遺跡と同じく第20図の石核分類図〔高橋前掲〕に当てはめ分類した。石核に残された剥離の痕跡から剥離作業に注目した分類であり、剥離作業面数、打面数、剥離方法から10細分7分類にまとめられる。本遺跡の石核は、出土数が少ないこともあり、すべての分類を満たしていない。以下、図示したものについて分類を中心説明する。出土数はA類2点、B類1点、C類1点、D類2点、E類1点、分類不可3点である。

A類 (67) 同一打面から同一剥離作業面に同方向の剥離作業が行われるもの。したがって、打面が1面、剥離作業面が1面である。67は角礫の平坦面を打面とし、正面を剥離作業面としている。

B類 (68) 同一剥離作業面に別々の打面(約90°・180°ずれる)から剥離作業が行われるもの。したがって、打面は2面以上で、剥離作業面は1面である。1点のみの出土である。67は荒削素材の正面の上側面と・左側面を打面とし、裏面に剥離作業が行われている。

C類 (69) 同一打面から別々の剥離作業面に同方向の剥離作業が行われるもの。したがって、打面が1面で、剥離作業面が2面以上ある。

D類 (70) 石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業で、剥離作業が全周しないもの。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。70は角礫の約3／4周程度に交互剥離が施されている。

E類 (71) 石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業で、剥離作業が全周するもの。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。D類とE類は剥離作業方法が同じであり、その範囲が全周するかしないかの違いである。71は荒削礫の稜線（周縁）から正裏面に交互剥離が行われ、ほぼ全周している。

このほか分類できなかったものが3点出土している。これらのほとんどが第20図の剥離作業の複数組み合わせである。多くは交互剥離（D類・E類）との組み合わせである。分類できたものも含め、打面転移を頻繁に繰り返し行い、剥離作業を行なったことを意味している。

出土分布傾向は、全体的な石器の出土傾向とほぼ同じく、後期中葉の遺構が集中する集落の内側の3A～B・4Bグリッドに分布する。石材は頁岩5点、流紋岩3点、鉄石英・メノウ各1点となる。地元で採取できる硬質で緻密な石材を用いている。

(16) 剥片類・接合資料 (72～74)

剥片類は297点出土している。時間的な制約があつたものの、石核も含め接合を試みた。剥片同土の接合例が1例あった。

72は縦長剥片で、打面は比較的広いが、石刃状を呈する。73は台形状の横長剥片である。74は接合資料で、同一地点から出土している。74aの剥離以前から同一打面で剥離作業が行われ、縦長剥片が得られている。石材は72が頁岩、73・74が緑色凝灰岩である。

E 石 製 品 (図版32・58)

3点出土している。75は破片資料のため明確でないものの、石剣の剣部破片とした。石棒の剣部破片の可能性もある。千枚岩製で板状に破損している。76は石棒で全体の約2／3程度が遺存しているものと考えられる。鞍山岩の棒状礫の剣を剥離と敲打でつぶし、上端から約7cmの部分に弱い抉りを作出し、頭部と剣部を区分している。77は花崗岩の丸石である。長さ25.7cm、幅21.1cm、厚さ14.5cm、重さ11.5kgを測る無加工の梢円球で、SI10の覆土上層から出土している。球形という形の特異性から何らかの目的を持って、遺跡に搬入したものと推定できる。

5 放射性炭素年代測定

はじめに

現明嶽遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字現明嶽4,734番地8ほかに所在し、阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高88～90mを測る。発掘調査の結果、鹿瀬輕石質砂層を挟んで縄文時代後期中葉（上層）及び縄文時代前期後葉～末葉（下層）の文化層が確認されている。

本報告では、本遺跡の上層で確認された遺物の年代観を明らかにするため、自然科学的手法を用いて検討する。

A 試料の所見

試料①：SK7の出土である。径約90cm・深さ25cmの穴の底面から出土した完形土器内の炭化物である。周辺の遺構の状況や土坑の覆土から縄文時代後期中葉の土坑と推定している。しかし、土器は壺形を呈し、縄文が施文され、器形から弥生土器ではないかという意見が出されている。

B 測定方法

測定はAMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLibbyの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)である。付記した誤差については、複数回(通常は4回)の測定値について χ^2 検定を行い、測定値の統計誤差から求めた値を用いたが、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いた。測定年代の補正に用いた $\delta^{13}\text{C}$ の値は加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、標準試料PDB(白亜紀のペレムナイト(矢石)類の化石)の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差(‰; パーミル)で表したものである。

C 結 果

結果を第7表に示す。試料の測定年代(補正年代)は、土器内の炭化物は、 $3,470 \pm 30\text{BP}$ を示す。

遺構名	試料名	試料の形態	BP年代および炭素の同位対比	Code.No
SK7	No.1	炭化物	Libby Age(yrBP)	: 3,470 ± 30
			$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	= -24.90 ± 0.84
			$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	= -350.6 ± 2.6
			p MC(‰)	= 64.94 ± 0.26
		$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	= -350.5 ± 2.3
			p MC(‰)	= 64.95 ± 0.23
			Age(yrBP)	: 3,470 ± 30
IAAA-61732				

第7表 現明嶽遺跡 放射性炭素年代測定結果

6 まとめ

本遺跡では、縄文時代前期後葉～末葉の遺構・遺物、後期中葉の集落に伴う遺構・遺物が検出された。ここでは重複することも多いが、調査で得られた成果を要約し、まとめとする。

A 遺物について

(1) 上野東遺跡、現明嶽遺跡の前期後葉～末葉の土器の比較

本遺跡では既述のように前期後葉～末葉の土器が出土し、その主なものは東北（在地）系の大木5b式～大木6式古段階で、すべて深鉢形土器である。文様・器形等の特徴から大木6式古段階が中心となる。一方、第3章で詳述した上野東遺跡でも大木5b式～大木6式古段階の土器が主体を占め、すべて深鉢形土器である。文様・器形等の特徴から大木5b式が中心となる。全体の形状がわかる土器を中心に、第29図に掲載し並べてみた。

これらを比較し大木5b式～6式古段階の器形や文様の流れを概観する。

器形 変遷過程を器形ごとにまとめて記述する。

- ①A器形は胴部中位から大きく外反し、「朝顔形」の器形となる。福島県会津高田町鹿島遺跡〔丹野・本間前掲〕、同町青宮西遺跡〔芳賀前掲・鈴鹿前掲〕、旧上川村北野遺跡下層〔高橋ほか前掲〕などで多く見られ、大木4式・5a式から継続する器形である。これらの遺跡では大木5b式で少なくなり、北野遺跡下層、福島県磐梯町法正尻遺跡〔松本前掲〕の大木6式古段階では見られなくなる。上野東・現明嶽の両遺跡でも同傾向で、上野東遺跡の大木5b式期で1点（図版6-12、以下「版」を略す）認められるに過ぎない。
- ②B器形は底部から口縁部まで直線的に聞く「バケツ形」の器形となるもので、A器形同様に大木4式・5a式から継続する器形である。ただし、法正尻遺跡や北野遺跡下層でも認められるように大木6式古段階まで存続する。上野東・現明嶽の両遺跡でも同傾向で、上野東遺跡の大木5b式（図6-1）で、現明嶽遺跡の大木5b式（図23-93）、大木6式古段階（図23-80）で認められる。
- ③D・E器形は胴部中位がいくらか膨らみ胴部上位から頸部がすぼまり、口縁部が強く外反する器形である。D器形で口縁部と胴部の境がいくらか明瞭になり、E器形はより一層明瞭になる。ともに大木5a式で認められるが、それほど多くない。また、E器形はB器形からの発展とも推定される。E器形は宮城県藤塚貝塚〔興野1968〕でも見られるが、器高が低く長胴化していない。後述する胴部文様の上昇とともに発展する器形であるが、大木5b式期以降口縁部はさらに変化するため、大木5b式期以降は見られない器形となる。上野東・現明嶽の両遺跡でも同傾向で、上野東遺跡の大木5b式（D器形：図6-9・28、図7-29、E器形：図6-10・26、図7-32）で、現明嶽遺跡の大木5b式（D器形：図23-88、E器形：図24-107）で多くの類例が認められる。
- D・E器形の口縁部だけを見るならば、図7-30、図23-79のようにさらに頸部が強く屈曲するものと、図23-77、図24-98のように口縁部が長くなるものと予想される。
- ④C器形は「円筒形」、F器形・G器形は胴部下位がすぼまり、いわゆる「金魚鉢形」ないしはそれに近いものであり、大木5b式期には多く見られず、大木6式古段階以降に多く見られる器形である。C器形は東北北部の円筒下層式からの影響である。^③でも触れたが、F器形・G器形の口縁部の屈曲、胴部

器形 器形名	A器形	B器形	C器形	D器形	E器形	F器形	G器形
上野東遺跡 大木5b		図版6-12	図版6-1		図版6-9 図版6-28 図版7-29	図版6-10 図版6-26 図版7-32	
大木6古							図版7-30
大木5b		図版23-93		図版23-88	図版24-107		
現明嶽遺跡 大木6古		図版23-80 図版23-78				図版23-77 図版23-79	他の器形 図版24-98 図版24-99

第29図 上野東遺跡・現明嶽遺跡 前期後葉～末葉の器形別土器集成図（縮尺不同）

中位のふくらみは、D・E器形の発展と思われる。上野東遺跡ではG器形（図7-30）のみであるが、現明嶽遺跡ではC器形（図23-78）、F器形（図23-77）、G器形（図23-79）が認められる。

⑤その他の器形は破片資料であり、大木6古段階に比定され、法正尻遺跡や北野遺跡下層でも認められる器形である。図24-98はD・E器形の口縁部の幅広化であり、胴部はさらに長胴化するものと思われる。図24-99は「く」の字に屈曲する口縁部が直立気味になるものである。

文様帯・文様 時期ごとに、部位ごとに記述する。

[上野東遺跡・現明嶽遺跡の大木5b式]

①東北南部の大木5a式では口縁部から胴部中位まで幅広く施文され、大木5b式では文様は次第に横位展開となり、口縁部付近に集約される〔興野前掲・芳賀前掲・白鳥前掲〕としている。両遺跡の大木5b式も同様であり、横位沈線、横位の鋸歯状文等は頭部から胴部上位に集約（図6-6・10・26・28など）されている。

②上野東遺跡の大木5b式の口縁部に幅狭な文様帯が付く土器では、下部に刻み目が付き、文様帶は地文だけ（図6-10・26、図7-32）である。また、頸部を沈線で区画された口縁部文様は、地文（図6-

9) または無文(図7-29、図24-107など)である。

③口縁部上部～口唇部は小波状口縁が連続する(図6-10・12)、波状口縁で刻みがある(図版6-1・9)、瘤状に肥厚する波状口縁になる(図6-28、図7-29、図24-107)、崩れた鋸歯状装飾体がいくつか付く(図6-10・26、図7-32)ものがある。いずれも大木5a式期の鋸歯状装飾体が変容したものと推定される。

(上野東遺跡・現明遺跡の大木6式古段跡)

- ①口縁部文様帶と胴部文様帶が完全に区画されてくる。区画方法として横走沈線(図23-78)、横走沈線沿いの爪形文(図23-77、図24-98)、爪形文を伴う太い降線(図7-30)や細い降線(図23-79)がある。また口縁部を肥厚させ胴部との境に段をつける(図23-80)ものもある。胴部文様は地文だけ(図23-78・80など)のものが多くなり、文様があるものは頸部直下に集中(図23-79)する。
- ②口縁部は板状になり、しかも幅広くなり、大木5b式に比べ大きく変化する。したがって、各種の文様が口縁部に施される。
- ③口縁部上部～口唇部は、崩れた鋸歯状装飾体の流れを汲む2～3の小波状が1単位となった山形突起も見られるが、4ないしは8単位の波状口縁(図23-77・79など)となる。また平口縁(図7-30、図24-99)も見られる。

(2) 後期中葉土器群の編年的な位置

本遺跡出土の後期中葉の土器群は、SI1・2・10を中心とした後期中葉の集落跡に伴う土器である。時期的に短期間で、量的にまとまった資料として貴重である。

県内における後期中葉の土器がまとまっている遺跡はこれまで多くはなかった。しかし、近年の発掘調査により、類例は多くなってきた。ここでは、本遺跡と距離的に近く、時期的に近い旧下田村成就院脇遺跡〔勝山2004〕、旧中条町江添遺跡〔折井・金内ほか2005〕、新発田市二タ子沢C遺跡〔田中ほか2003〕の調査成果を参考に、編年的位置について見てみたい。

成就院脇遺跡では南三十稻場式～加曾利B1式が主体となり、加曾利B1式の有文深鉢・浅鉢土器では、内外面ともに平行沈線が通り、口唇部は刻みを持つ土器が多い。江添遺跡の後期中葉の土器は加曾利B1式新段階～B2式に併行するものと推定されている。加曾利B1式新段階では、平行沈線間に「の」の字文を描く深鉢、内面に平行沈線を描き口唇部に刻みを持つ浅鉢、胴部がそろばん玉形の注口土器などが認められる。加曾利B2式併行では、深鉢形土器の平行沈線文系土器で区切り文を持つものと持たないものがある。東北系の土器では、曲線文系の土器、曲線文に沿って刺突施文されるもの、クランク文系の土器があり、加曾利B1式新段階からB2式併行と推定されている。また粗製土器では口唇部に刻みや縄文が施文されるものが多い。

二タ子沢C遺跡は後期中葉～後葉の加曾利B2式、B3式、西ノ浜式に限られている。加曾利B2式の深鉢では大振りな波状口縁・平口縁がある。胴部は併行沈線文系のモチーフに「つ」の字や蛇行文の区切り文がつくものと矩形の磨消縄文がある。加曾利B2～B3式の過渡期の深鉢では、口縁部上部や頸部の括れ部に沈線を挿んだ粗い刺突文が施される。胴部は磨消縄文となる。加曾利B3式では口縁部と胴部に横方向に展開する磨消縄文が施文される。平口縁は頸部の区画、括れが弱く口縁部上部に縄文帯が巡る。また磨消縄文区画には羽状縄文が施文される。粗製深鉢は加曾利B3式で羽状縄文が約2割を占め、同種原体、異種原体がある。器形では小さな底部から直線的に大きく開く器形があり、加曾利B2～B3式期に

用いられた。加曾利B2式の鉢・浅鉢では多段の縄文帯と区切り文、縄文地に平行沈線や斜線を入れるものがある。また磨消縄文は引いたままの区画沈線はB2式のようで、B3式では無文部と一体化するように磨き込まれ、異種羽状縄文が多い。加曾利B2式の壺・注口土器では、隆帶上の粗い刻み、ねじれた突起、細くはっきりした区画沈線の磨消縄文、B3式では磨消縄文に異種羽状縄文が多いと指摘している。

[本遺跡の土器群の特徴]

深鉢形土器 平行沈線文系の土器(17・18・56・63)は蛇行文、縦位の短沈線などの区切り文を持つものと持たないものがあり、波状口縁・平口縁ともに口縁部が無文となる。曲線文系の土器(7・26)は口縁部と頸部に沈線を伴う刻み目が施文され、胴部は磨消縄文となる。波状口縁は口縁部が無文となり、平口縁(20・171)は無文のものと縄文帯のものがある。縄文部は単節縄文が圧倒的で、羽状縄文はわずかである。しかも羽状縄文は同種原体の異方向施文である。二タ子沢C遺跡の加曾利B2式とした深鉢形土器に一致する。

粗製土器 単節縄文LRが圧倒的に多く、単節縄文RL、条線文、無文が一定量認められ、無節縄文、羽状縄文は極めて少ない。羽状縄文は異種原体のものは認められなかった。なお、二タ子沢C遺跡で指

	平行沈線文系	曲線文系
有文深鉢形土器		
粗製深鉢形土器		
鉢・浅鉢		
注口土器・壺		

第30図 現明徹遺跡 後期中葉の土器群

摘された小さな底部から直線的に大きく開く器形（9・32）のものが認められる。二タ子沢C遺跡で認められた異種原体がないこと、江添遺跡で認められた口唇部の縄文や刻み目が施文されるものがないことから、この両者の間（加曾利B2式併行）の粗製深鉢と推定される。

鉢・浅鉢形土器 関東系の平行沈線文系の土器は、多段の縄文帯（1）を持つものである。東北系のものは頸部が括れ口縁部が無文、胴部は縄文施文（14）または磨消縄文（42・207）となる。磨消縄文のものは引いたままの区画沈線で、頸部に刻み目がつく。縄文はすべて単節縄文で、羽状縄文は見られない。関東系の浅鉢形土器は二タ子沢C遺跡で加曾利B2式に、東北系の浅鉢形土器は福島県磐梯町角間遺跡〔山岸ほか1990〕で類例が見られ、加曾利B2式併行〔本間1996〕としている。なお、浅鉢C類とした頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部は横走沈線、胴部は多段の縄文帯を持つもの（43・208）は類例が不明なもの、多段の縄文帯から加曾利B2式併行と考えられる。

注口土器・壺 大形の注口土器とした13は鏡餅状の器形、隆帶上の粗い刻みと交点に瘤貼付、ねじれた突起、はっきり引かれた区画沈線の磨消羽状縄文（同種原体）である。二タ子沢C遺跡に類例があり、加曾利B2式併行とされている。大形の壺形土器とした62は、口縁部から胴部下位まで縄文施文である。近辺に類例はなく、やや離れるが仙台市伊古田遺跡〔渡部前掲〕に類例が求められる。ただし、伊古田遺跡の場合は加曾利B1式併行とされ、さらに検討を要する。中小形の注口土器・壺で16・210は、無文地に太くはっきり引かれた沈線が横方向に展開している。器形・施文方法から朝日村脇ノ沢遺跡〔湯原ほか1999〕に類例が求められ、加曾利B2式

以前〔國島・渡邊2001〕とされている。

小形の土器で213はスリットの入った瘤

を口縁部と胴部に4単位ずつ（胴部は注口部を含む）もち、胴部は刻みのある沈線で区画している。角間遺跡に類例が求めら

れる。

以上、本遺跡出土の後期中葉の土器群を見ると、二タ子沢C遺跡の加曾利B2式併行とされた土器群と共に通点が極めて多いことがわかる。また、比較検討を加えた上記4遺跡の変遷は、存続時期に若干の変更はあるものの、おおむね第7表とのおりに変遷したものと推定される。

B 遺構と遺跡の性格

本遺跡の出土土器を見れば、縄文時代早期以降、人々が断続的にこの地を訪れ、何らかの活動をしたものと推定できる。この中で前期後葉～末葉、後期中葉の遺構・遺物が極めて多く、最も利用された時期と言える。ここでは遺構・遺物から考えられる遺跡の性格についてまとめてみたい。

〔前期後葉～末葉期〕

検出された遺構は、焼土1基、集石1基、遺物集中地点4か所である。集石からは被熱燐20点（4.2kg）が出土している。遺物集中地点は大木6式古段階の深鉢形土器が、各1個体が50cm前後以内の範囲から立位、横位の状態で出土したものである。出土状況から置かれた状態に近いものと考えられる。また深鉢形土器は煮炊きに使用されることから、遺物集中地点で火の使用が考えられる。このように考えられるならば、検出遺構はすべて火の使用と関係した遺構といえよう。一方、出土した遺物は大木5b式～6式古段階の土器で、大木6式古段階が多い。石器も基本層V層出土のものを中心に伴うものと考えられる。

遺跡名	時期		
	後期中葉	後期中葉	後期中葉
加曾利B1式併行	加曾利B2式併行	加曾利B3式併行	
成田院脇遺跡	■		
江添遺跡	■	■	
現明瞭遺跡	■	■	
二タ子沢C遺跡	■	■	

第8表 後期中葉層の遺跡変遷図

第III章の上野東遺跡のまとめでも述べたが、出土遺物の量や遺構数から集落とは言えない。一時的な利用地、季節的な利用地と推定され、住居を構えるほどでないものの、なんらかの理由から火を使用した活動も行われた場所である。

【後期中葉期】

検出された遺構は竪穴住居3軒、土坑10基、焼土1基、集石1基、性格不明遺構1基である。これらの遺構のうち、竪穴住居は幅狭い段丘の縁部に構築し、東側から南側に広場を確保している。土坑や集石等の小さな遺構は、竪穴住居の周囲または広場の中央から南に作られている。遺物はこれらの遺構に伴う土器・土製品・石器・石製品がまとまって出土している。土器は深鉢形土器以外に浅鉢、台付き浅鉢、壺、注口土器など多器種にわたり、石器も敲磨石類、不定形石器をはじめ、石皿、砥石、打製石斧も一定量出土している。数は少ないが土製品・石製品ではミニチュア土器、土偶、スタンプ形土製品、石棒、丸石など精神生活にかかわる遺物が出土している。このように遺構・遺物から、小さいながら短期間に営まれた集落といえよう。

さらに3軒の住居の構成は、土器型式から見るといずれも加曾利B2式併行で同時期である。しかし、住居の遺物の出土状況から前後関係がある。それぞれの住居からの土器出土量はSI1が160g、SI2が1,724g、SI10が8,319gではほぼすべてが覆土からの出土である。石器も同じくSI1が1点、SI2が30点、SI10が22点¹⁾となる。したがって、廃棄された住居の順に遺物が捨てられたと予想されることから、前後関係は、①古 SI10→SI2→S I 1 新、②古 SI10・2→SI1 新、③古 SI10→SI2・1 新の3パターンが考えられる。しかし、SI2の覆土にも遺物が堆積している状況を考えると、①の前後関係になるとを考えている。このように見ると住居1軒の集落となる。集落と呼べるかどうかもあるが、住居跡が通常の竪穴住居と変わらないこと、住居の変遷があること、住居の配置が広場を意識していること、遺物が該期の集落から出土するものと変わらないことから小集落といえる。

本遺跡は幅の狭い段丘上で、南側は比高約25mの段丘崖で区切られ、北側は比高5mの小さな沢を経て急斜の山が迫る地形である。集落の立地を考える上で特異な場所である。しかし、この小さな沢は、夏場でも水が枯れず、近年まで水田が営まれていた。水場に恵まれたことが縄文集落を立地させた要因と思われる。

1) SI2より少ないと、土層観察用のトレーナーで取り上げたものがあるため、実際はSI10がかなり多くなる。

要 約

- 1 現明嶽遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町大字西字現明嶽4,734番地8ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高88～90mを測る。
- 2 調査は一般国道49号揚川改良の建設に伴い、平成17年6月17日～8月12日まで実施した。調査面積は上層770m²、下層500m²である。
- 3 調査の結果、約5,000年前の堆積といわれている鹿瀬輕石質砂層を挟んで、下層から縄文時代早期中葉～前期末葉、上層から後期前葉～近年までの遺構・遺物が検出された。
- 4 縄文時代の遺物・遺構は後期中葉が最も多く、次いで前期後葉～末葉である。この2時期で遺構・遺物のほとんどを占めている。
- 5 縄文時代前期後葉～末葉の遺構は、焼土1基、集石1基、遺物集中地点4か所である。一時的・季節的な利用地の遺跡と推定される。
- 6 縄文時代後期中葉の遺構は、竪穴住居3軒、土坑10基、焼土1基、集石1基、性格不明遺構1基である。短期間営まれた小さな集落といえる。
- 7 縄文時代前期後葉～末葉の遺物は、土器・石器である。縄文土器は東北系の大木5b式～大木6式古段階の深鉢形土器である。また東関東系の浮島式、興津式の土器、北陸系の鍋屋町式も出土している。石器は出土量が多くないものの、縄文時代遺跡で出土する器種が一通り認められる。
- 8 縄文時代後期中葉の遺物は、土器・土製品、石器・石製品である。縄文土器は関東系の加曾利B2式に近似するもの、東北系の加曾利B2式に併行するもので、器種は深鉢、浅鉢、注口土器、壺など多器種にわたる。石器も敲磨石類、不定形石器をはじめ、石皿、砥石、打製石斧も定量出土している。数は少ないが土製品・石製品ではミニチュア土器、土偶、スタンプ形土製品、石棒、丸石など精神生活にかかわる遺物が出土している。
- 9 本遺跡は後期中葉の集落の立地を考える上で特異な場所と思われる。夏場でも水が枯れない水場に恵まれたことが縄文集落を立地させた要因と思われる。

観察表

土器觀察表

順位	通称名・ 地點名	層位	分類	形態・ 地質	既存半径 直径	計測値 (cm)	文様・施文等	調文原体	色調 (内/外)	付着物 (内/外)	直和材等	時期	備考
1	S31	層上	N-3-B1	既存	1/30断片 1/6	17.0	平行沈文版	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針	後期中華			
2	S31	層上	N-2-B1	既存	1/30断片		施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針	既成中華	既成中華		
3	S31	層上	N-2-B16	既存	1/30断片		施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針	既成中華	既成中華		
4	S31	層上	N-5-B1A	既存	1/30断片/1	既成6.7							
5	S32	層上	既存A3	既存	1/30断片		施文・施版文	黒褐色	砂礫	後期中華	刮削	18世紀同一 個体	
6	S32	層上	N-1-B1	既存	1/30断片下半 1/6	既成6.5	刮状施文・施消施文	黒褐色/ぬき色	/ヌス	骨針	後期中華	17世紀同一 個体	
7	S32	層上	N-1-B1	既存	1/30断片/1	既成6.0	施状施文・口唇部・施剥削 人・施脱皮文	黒褐色/ぬき色	骨針	後期中華	17世紀の入り 江戸時代		
8	S32	層上	N-2-B1C1	既存	1/30断片		施文	黒褐色/ぬき色	骨針	後期中華	刮削	18世紀同一 個体	
9	S32	層上	N-2-B1	既存	1/30断片上半 1/4	既成2.8	施文	黒褐色/ぬき色	骨針	後期中華	刮削	既成中華	
10	S32	層上	N-2-B1C1	既存	1/30断片		施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	オコダ				
11	S32	層上	N-2-B1C1	既存	1/30断片		施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針				
12	S32	層上	N-2-B1C1	既存	1/30断片		施文	黒褐色/ぬき色	骨針				
13	S32	層上	N-4-B1A	上部	1/30	既成1/4	既存・剥落跡巻上屈屈・施 消施文	黒褐色/ぬき色	骨針	後期中華	剥落直前		
14	S32	層上	N-3-B1	既存	1/30断片	既成2.3	施消施文	黒褐色	骨針	後期中華	刮削直前		
15	S32	層上	N-4-B1	上部	1/30	既成1/4	施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針	後期中華	剥落直前		
16	S32	層上	N-4-B1	上部	1/30	既成13.8 既成4.5 既成3.1	施版文	黒褐色/ぬき色	骨針	後期中華	剥落直前		
17	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 既成1.5/1	既成3.6	既存・屈屈・平行沈文・施 消施文	浅黄褐色/片肩褐色	オコダ /ヌス	骨針	後期中華		
18	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 既成3/4	既成3.0	既存・屈屈・施剥削口・平行 沈文・施消施文	黒褐色/ぬき色	骨針・骨 針	後期中華			
19	S310	層上	N-1-B1B	既存	1/30断片		施消施文	?	骨針	後期中華			
20	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下		施消施文	黒褐色/ぬき色	骨針	後期中華			
21	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片		施消施文	黒褐色/浅黄褐色	骨針	後期中華	22世紀同一 個体		
22	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片		施消施文	黒褐色/褐色	骨針	後期中華	22世紀同一 個体		
23	S310	層上	N-1-B1B	既存	1/30断片	既成1.6	施消施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針	後期中華	既成中華		
24	S310	層上	N-1-B2	既存	1/30断片		既存・刀刃縁・施剥削口・施 消施文	黒褐色/ぬき色	オコダ /ヌス	骨針	後期中華		
25	S310	層上	N-1-B3	既存	1/30断片 之上半	既成2.6	既存剥削・施消施文	黒褐色/ぬき色	骨針	後期中華	22世紀同一 個体		
26	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之上半	既成4.4	既存・屈屈・口唇部内凹・施 剥削口・施消施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	/ヌス	骨針	後期中華	既成中華 剥落直前	
27	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成2.4	既存刀刃縁・施文	黒褐色/ぬき色	/ヌス	骨針	後期中華		
28	S310	層上	N-2-B1	既存	1/30断片 1/6	既成3.0	施状施文・施文	黒褐色/ぬき色	/ヌス	骨針			
29	S310	層上	N-2-B1B	既存	1/30断片		施文	浅黄褐色/ぬき色	骨針				
30	S310	層上	N-2-B2	既存	1/30断片 之下	既成3.2	施文	既成2.2	骨針	既成中華			
31	S310	層上	N-2-B1	既存	1/30断片		施文	黒褐色/ぬき色	骨針				
32	S310	層上	N-2-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.0	施文	既成2.2	骨針				
33	S310	層上	N-2-B2	既存	1/30断片 之下	既成3.0	施文	既成2.2	骨針				
34	S310	層上	N-2-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.0	施文	既成2.2	骨針	剥落直前			
35	S310	層上	N-2-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.0	施文	既成2.2	骨針	既成中華			
36	S310	層上	N-2-B2	既存	1/30断片 1/6	既成2.2	施文	既成2.2	骨針	既成中華			
37	S310	層上	N-2-B1C1	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
38	S310	層上	N-2-B1C1	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
39	S310	層上	N-2-B2C1	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
40	S310	層上	N-2-B2C1	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
41	S310	層上	N-3-B1	既存	1/30断片		平行沈文版・施文	既成2.2	骨針	後期中華	剥落直前		
42	S310	層上	N-3-B1	既存	1/30断片 既成1/1	既成4.2	既存剥削・施消施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針	後期中華			
43	S310	層上	N-3-B1C	既存	1/30断片		平行沈文版・施消施文	黒褐色/に赤い斑塊 色	骨針	後期中華			
44	S310	層上	N-4-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.0	施文	既成2.2	骨針	後期中華	既成中華		
45	S310	層上	N-4-B1	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	後期中華			
46	S310	層上	N-4-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.0	施文	既成2.2	骨針	後期中華			
47	S310	層上	N-4-B1	既存	1/30断片		既存剥削・施消施文	既成2.2	骨針	後期中華			
48	S310	層上	N-6-B1A	既存	1/30断片 之下	既成2.7	施文	既成2.2	骨針	既成中華			
49	S310	層上	N-6-B1A	既存	1/30断片 之下	既成2.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
50	S310	層上	N-5-B1A	既存	1/30断片	既成2.8	施文	既成2.2	骨針	既成中華			
51	S310	層上	N-2-B1B	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
52	S310	層上	N-2-B1B	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
53	S310	層上	N-2-B1B	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
54	S310	層上	N-2-B1C	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
55	S310	層上	N-2-B1C	既存	1/30断片		施文	既成2.2	骨針	既成中華			
56	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施消施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
57	S310	層上	A1a	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施消施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
58	S310	層上	C2	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
59	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
60	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
61	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
62	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
63	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
64	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
65	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
66	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
67	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
68	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
69	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
70	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
71	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
72	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
73	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
74	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
75	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
76	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
77	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
78	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
79	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
80	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
81	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
82	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
83	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
84	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
85	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
86	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
87	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
88	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
89	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
90	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
91	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
92	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
93	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
94	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
95	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
96	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
97	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
98	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
99	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
100	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
101	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
102	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文	既成2.2	骨針	既成中華	既成中華		
103	S310	層上	N-1-B1	既存	1/30断片 之下	既成3.6	施文</						

土器觀察表

順番名・ 土地点	層位	分類	器種・遺 物形	部位	計測値 (cm)	文様・施文等	縄文原体	色調 (内/外)	目測物 (内/外)	直面材等	時期	歴	
57 SK7・SK8	層上1 A1a	滑頭	口縁部片			磨消文	BL→	灰黄褐色/灰黄 褐色	オコゲ/ スヌ	骨針	後期中世	後期中世 JL 142-143	
58 SK7・SK8	層上1 A1b	滑頭	口縁部上半 1/2	23.4	平行状文、延彌文、磨消 文	BR→	灰黄褐色/灰褐色 褐色	/スヌ	骨針	後期中世	前土良		
59 SK7	層上1 B'2BC1	滑頭	削除片			磨文	BR→	褐色/灰褐色	/スヌ	骨針			
60 SK7	層上1 B'2BC2	滑頭	削除片			磨文	BR→	灰褐色/灰褐色	/スヌ	骨針			
61 SK7	層上1 B'2BC3	滑頭	削除片			磨文	BR→	灰褐色/灰褐色	オコゲ/	研磨			
62 SK7	層上1 N-4BF	筆	口縁部~ 底部1/1	25.8 (13.0 底部6.2)		磨文	BR→	褐色/灰褐色 褐色	/スヌ	研磨	後期中世	底部木柄頭	
63 SK8	層上1 N-1野	滑頭	口縁部上半 1/2	22.6	磨消文	BL→	灰褐色/灰褐色 灰褐色	オコゲ/ スヌ	骨針	後期中世	前土良 始土层		
64 SK8	層上1 N-2BF	滑頭	口縁部上半 1/2	31.2	磨文	BR→	灰褐色/灰褐色		骨針		後期中世		
65 SK8	層上1 N-2BC2	滑頭	削除片			磨消文	BR→	灰褐色/灰褐色		研磨		後期中世	
66 SK8	層上1 N-2BC3	滑頭	削除片			磨消文	BR→	褐色/灰褐色		研磨	後期中世	前土良	
67 SK8	層上1 N-6BA	滑頭	口縁部上半 ~底部1/3	10.2	無文	BR→	灰褐色/灰褐色		研磨		灰褐色	灰褐色	
68 SK15	層上上 B'2-BC1	削除片				磨文	BR→	褐色/褐色	オコゲ/	骨針			
69 SK21	層下上 B'2-BF	滑頭	口縁部片			磨消文	BR→	灰褐色/灰褐色		骨針、砂	後成形織		
70 SK21	層下上 B'2-BF	滑頭	口縁部片	21.5	突起平口縫、磨文	L	灰褐色/褐色	/スヌ	骨針				
71 SK21	層下上 N-2野	滑頭	口縁部~ 底部上半 1/2	24.6	磨文	BR→	灰褐色/灰褐色	オコゲ/ スヌ	骨針				
72 SK21	層下上 N-3BF(A1)	滑頭	口縁部片			平行状文	BR→	褐色/褐色		後期中世	研磨	前?	
73 SK21	層下上 N-4BF	口沿 上部	口縁部片			無文	BR→	灰褐色/灰褐色	オコゲ/	骨針		後期中世?	
74 3BP1	層上 B'2-BF	滑頭	削除片			素面文	BR→	褐色/灰褐色				75共同一織	
75 3BP1	層上 B'2-BF	滑頭	削除片			素面文	BR→	灰褐色/灰褐色	/スヌ			74共同一織	
76 4CP1	層上 B'2-BF	滑頭	削除片			磨文	BR→	灰褐色/灰褐色					
77 26号遺物集中地点	V U-1BD	滑頭 机脚4/5	口縁部~ 底部4/5	26.5 底部6.3	皮状白跡、沈底瓦形文、 机脚4/5	BR→	灰褐色/灰褐色	オコゲ/ スヌ	研磨	大本古			
78 23号遺物集中地点	V U-1BF	滑頭 C	口縁部~ 底部1/1	19.6 底部5.2	皮状白跡、改彌文、磨文	BR→	褐色/褐色	オコゲ/	研磨、石 器	大本古			
79 9号遺物集中地点	V U-1BF	滑頭 G	口縁部~ 底部1/1	30.0 底部12.0	皮状白跡、磨形文、羽状 線文、絞繩文	BR→	褐色/灰褐色	オコゲ/ スヌ	明歩陶、砂 器	大本古			
80 27号遺物集中地点	V U-1BF	滑頭 H	口縁部~ 底部1/1	23.7 底部5.5	皮状白跡、沈底瓦形文、 机脚4/5	BR→	褐色/褐色	オコゲ/ スヌ	研磨、石 器	大本古			
81 3B18	V I-BF	滑頭	口縁部	19.6	平行状文、網夷文	BR→	灰褐色/灰褐色		研磨	日本II 群山-1 JL 142-143			
82 3B18	V I-BF	滑頭	削除片			平行状文	BR→	灰褐色/灰褐色		研磨	日本II 群山-1 JL 142-143		
83 3B18	V I-BF	滑頭	削除片			平行状文	BR→	灰褐色/灰褐色		研磨	日本II 群山-1 JL 142-143		
84 8B15	V I-BF	滑頭	口縁部片			刮状纏文	BR→	褐色/灰褐色		せんべい、 骨針	前中期	7-8世紀	
85 4B1	Ⅲ I-BF	滑頭	削除片			刮状纏文	BR→	浅黄褐色/浅黃褐色		せんべい、 骨針	前中期	8-9世紀	
86 3B3	Ⅲ I-BF	滑頭	削除片			刮状纏文	BR→	浅黄褐色/浅黃褐色		せんべい、 研磨	前中期	8-9世紀	
87 3B10	Ⅲ I-BF	滑頭	削除片			刮状纏文	BR→	浅黄褐色/浅黃褐色		せんべい、 骨針	前中期	8-9世紀	
88 4B14・5B2	V U-1BF A1	滑頭 D'	口縁部~ 底部上半 1/2	27.5	平行状文、新狀状文、 磨文	BR→	浅黄褐色/浅黃褐色		研磨	大本古	89-91と 同一個体		
59 3B6	V U-1BF A1	滑頭 D'	口縁部片			平行状文、新狀状文、 磨文	BR→	灰褐色/灰褐色	/スヌ	研磨	大本古	88-91と 同一個体	
90 4A21	V U-1BF	滑頭	削除片			平行状文、新狀状文、 磨文	BR→	灰褐色/灰褐色	/スヌ	研磨	大本古	92-93と 同一個体	
91 5B14	V U-1BF A1	滑頭 D'	口縁部片			平行状文、擴張大、縮 小	BR→	二尖端褐色/深褐色		大本古	92-93と 同一個体		
92 4B14	V U-1BF A2	滑頭	削除片			横走状文、縮張大縮 小文、縦文、網夷文	BR→	褐色/褐色		研磨	大本古	92-93と 同一個体	
93 4A21	V U-1BF	滑頭	削除片			横走状文、縮張大縮 小文、縦文	BR→	褐色/灰褐色		研磨	大本古	92-93と 同一個体	
94 4B7	粗底	U-1BF	滑頭	削除片		平行状文、擴張大、縮 小	BR→	褐色/褐色		研磨	大本古	92-93と 同一個体	
95 3C2	Ⅲ U-1BF	滑頭	削除片			平行状文、擴張大、縮 小	BR→	褐色/褐色		研磨	大本古	92-93と 同一個体	
96 4A7	I-III	滑頭	削除片	31.5	透孔状文、口縫状文、透 孔状文、縫合部透孔、豐 乳頭状文	BR→	灰褐色/褐色	/スヌ	研磨	大本古			
97 3C2	Ⅲ U-1BF	滑頭	削除片			口縫状文、新狀状文、 磨文	BR→	二尖端褐色/灰褐色		研磨	大本古	後成形織	
98 3B4・3B18	V U-1BD	滑頭	削除片1/3	33.8	皮状白跡、口縫状文、新狀 文、縫合部透孔、豐乳頭 状文	BR→	灰褐色/灰褐色	/スヌ	研磨	大本古			
99 4B6	Ⅲ U-1BF	滑頭	口縫部~ 底部上半 1/5	21.0	口縫状文、新狀状文、 磨文	BR→	褐色/褐色		研磨	大本古	成形織		
100 4A17・4A23	Ⅲ U-1BF	滑頭	口縫部片			透孔状文、透孔状文、口 縫状文	BR→	灰褐色/灰褐色		大本古	91-92と 同一個体		
101 S31	層上 U-1BF	滑頭	口縫部片			口縫状文	BR→	褐色/褐色		研磨	大本古	91-92と 同一個体	
102 5B1	Ⅲ U-1BF	滑頭	口縫部片			口縫状文、圓形凹形透孔、 縫合部透孔	BR→	灰褐色/灰褐色		研磨	大本古	91-92と 同一個体	
103 S32	層上 U-1BF	滑頭	口縫部片			口縫状文、圓形凹形透孔、 縫合部透孔	BR→	二尖端褐色/灰褐色		研磨	大本古	91-92と 同一個体	
104 4B6	Ⅲ U-1BF	滑頭	口縫部片			口縫状文、圓形凹形透孔、 縫合部透孔	BR→	褐色/褐色		研磨	大本古	105-106 と同一個体	
105 3B19	Ⅲ U-1BF	滑頭	口縫部片			口縫状文、圓形凹形透孔、 縫合部透孔	BR→	褐色/褐色	/スヌ	研磨	大本古	105-106 と同一個体	
106 4B6	Ⅲ U-1BF	滑頭	口縫部片			口縫状文、圓形凹形透孔、 縫合部透孔	BR→	褐色/褐色	/スヌ	研磨	大本古	105-106 と同一個体	
107 3A10	Ⅲ U-1BG	滑頭	口縫部上半 1/5	30.0	皮状白跡、新狀状孔隙板	BR→	浅黄褐色/灰褐色	/スヌ	研磨	大本古			
108 4A21	V U-1BF	滑頭	削除片			透孔状文、口縫状文	BR→	灰褐色/灰褐色		研磨	大本古	108-109 と同一個体	
109 S32	層上 U-1BF	滑頭	削除片			透孔状文、口縫状文	BR→	褐色/褐色	/スヌ	研磨	大本古	108-109 と同一個体	
110 4B21	Ⅲ U-1BF	滑頭	口縫部片			透孔状文、口縫状文	BR→	灰褐色/褐色	/スヌ	研磨	大本古	111-112 と同一個体	

観察表

土器觀察表

%	通稱名・ 土地点	層位	分類	器種・造形	内外部状・ 修理等	計測値 (cm)	文様・施文等	縄文部体	色調 (内/外)	付着物 (内/外)	底面等	時期	備考
112/3A15	Ⅲ	II-1段	深鉢	側縁片	有壓沈線、施文	粗.	に赤い褐色/に赤い褐色	オコゲ/			表面張 痕?		
113/3A15	Ⅲ	II-1段	深鉢	側縁片	有壓沈線、施文	粗.	に赤い褐色/に赤い褐色	オコゲ/			表面張 痕?		
114/4A21	V	II-1段	深鉢	側縁片	有壓沈線、施文	LR→	に赤い褐色/灰褐色				表面張 痕?		
115/3A15	Ⅲ	II-1段	深鉢	側縁片	有壓沈線、施文	RL↓	に赤い褐色/褐色				表面張 痕?		
116/4A21	V	II-1段	深鉢	側縁片	有壓沈線、施文	LR→	灰褐色/灰褐色				表面張 痕?		
117/3A24	Ⅲ	II-1段	深鉢	口縁部片	口唇状施文、施文	LR→	赤褐色/灰褐色	研磨			表面張痕	113E-1-1	
118/3A23	Ⅲ	II-1段	深鉢	口縁部片	口唇状施文、施文	LR→	赤褐色/に赤い褐色	研磨			表面張痕	HIT-2-10	底面少々黒い
119/4B9	V	II-1段	深鉢	側縁片	平行沈線・点形文、施文	浅褐色/浅褐色	/スヌ	砂附	表面張痕?				
120/3A25	V	II-2段A	深鉢	側縁片	三角文・爪痕の刺突	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-1 底: II-2-1-2			
121/4A13	Ⅲ	II-2段A	深鉢	側縁片	三角文・爪痕の刺突	青褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-3 底: II-2-1-4			
122/4B4	V	II-2段A	深鉢	側縁片	三角文・爪痕の刺突	浅褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-5 底: II-2-1-6			
123/3A15	Ⅲ	II-2段B	深鉢	口縁部片	成狀沈線、底位凹切、刺突、施文	浅褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂、石黄	石黄底人 面1と同・斜体	123-1-23			
124/3A13	Ⅲ	II-2段B	深鉢	口縁部片	成狀沈線、底位凹切、刺突、施文	明帯褐色/灰褐色	/スヌ	砂、石黄	石黄底人 面1と同・斜体	123-1-23			
125/3K21	廻土下	II-2段B	深鉢	側縁片	爪形文	に赤い褐色/褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-7 底: II-2-1-8			
126/3A25	V	II-2段C	深鉢	口縁部片	柱状沈線、平行沈線・刺突、焼痕・施文	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-9 底: II-2-1-10			
127/3B15	V	II-2段C	深鉢	側縁片	平行沈線・刺突、施文・施文	褐色/褐色		砂附	浮島式	口: II-2-1-11 底: II-2-1-12			
128/3C5	Ⅲ	II-3段A	深鉢	口縁部片	口唇状沈線・点形文・三角印	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-13 底: II-2-1-14			
129/3B12	Ⅲ	II-3段A	深鉢	側縁片	爪形文、集合沈線	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-15 底: II-2-1-16			
130/3B12	Ⅲ	II-3段A	深鉢	側縁片	集合沈線	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-17 底: II-2-1-18			
131/3C3	Ⅲ	II-3段A	深鉢	側縁片	集合沈線	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附	浮島式	口: II-2-1-19 底: II-2-1-20			
132/2A21	Ⅲ	II-4段 A1	深鉢	側縁片	闕文	RL→	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂		燒成形態		
133/3B6	Ⅲ	II-4段	深鉢	側縁片	闕文	RL→	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂				
134/3A14	Ⅲ	II-4段A1	深鉢	側縁片1/2	闕文	RL↓	白				燒成形態		
135/4A22	V	II-4段A2	深鉢	口縁部片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂				
136/4B14	V	II-4段A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/灰褐色	/スヌ	砂、谷附				
137/4A21	V	II-4段A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂附				
138/3A25	V	II-4段A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	褐色/褐色に赤い褐色	オコゲ/			燒成形態		
139/4A21	V	II-4段 A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂				
140/4B14	V	II-4段A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	浅褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂				
141/5B14	V	II-4段A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	に赤い褐色/褐色						
142/5A22	V	II-4段 A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	に赤い褐色/に赤い褐色	/スヌ	砂				
143/3A25	V	II-4段A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	褐色/褐色に赤い褐色	/スヌ	砂		燒成形態		
144/3B6	Ⅲ	II-4B11	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂				
145/5A22	V	II-4段B2	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂				
146/5B12	V	II-4段B2	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂				
147/4A12	Ⅲ	II-4段B2	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂、谷附				
148/4B14	V	II-4段B2	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂				
149/4B14	V	II-4段B2	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂				
150/3L1	V	II-4段B2	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂				
161/3C2	Ⅲ	II-4C5	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	褐色/褐色	/スヌ	砂		燒成形態		
152/3B9	Ⅲ	II-4C5	深鉢	側縁片	闕文	RLR↓	に赤い褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂		燒成形態		
153/S110	廻土	III群A1	深鉢	側縁片	成狀沈線、施文	UR→	に赤い褐色/に赤い褐色				後掘削面		
154/5B1	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	成狀沈線、施文	UR→	明褐色/明褐色				後掘削面		
155/4B6	Ⅲ	III群A2	深鉢	口縁部片	口唇状施文。平行沈線、闕文	UR→	灰褐色/浅褐色				後掘削面		
156/4B2・4B3	Ⅲ	III群A2	深鉢	口縁部片	底:7.6 底:7.6	平行沈線、施文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶		
157/3A15	Ⅲ	III群A2	深鉢	口縁部片	底:7.6	成狀沈線、平行沈線、闕文	UR→	に赤い褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶		
158/3C1	Ⅲ	III群A2	深鉢	口縁部片	底:7.6	成狀沈線・口縁部・平行沈線、闕文	UR→	に赤い褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶		
159/3B20	深鉢	III群A1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/灰褐色	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
160/4C2	Ⅲ	III群A1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	に赤い褐色/褐色	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
161/4B12	Ⅲ	III群A1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	平行沈線、施文	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
162/4A15	Ⅲ	III群A1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	平行沈線、施文	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
163/3A14	Ⅲ	III群A1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	平行沈線、施文	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
164/5B21	Ⅲ	III群A1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	平行沈線、施文	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
165/3B1	Ⅲ	III群A1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	平行沈線、施文	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
166/4B2	Ⅲ	III群A1	深鉢	口縁部片	闕文	UR→	灰褐色/黑色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
167/2C	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/褐色	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
168/4C2	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
169/3A14	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/褐色	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
170/3A15	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/褐色	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
171/4C2	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/褐色	/スヌ	砂附	後掘削面 中帶			
172/2B25	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
173/4A20	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
174/4B6	Ⅲ	III群A2	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
175/4B6	Ⅲ	III群 B1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
176/3B1	Ⅲ	III群 B1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
177/2B20	深鉢	III群 B1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
178/2B25	Ⅲ	III群 B1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
179/4B6	Ⅲ	III群 B1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			
180/2B5	Ⅲ	III群 B1	深鉢	側縁片	闕文	UR→	灰褐色/に赤い褐色	オコゲ/	砂附	後掘削面 中帶			

土器觀察表

No.	通名稱 出土地點	層位	分類	器種	內部位置 及形狀	計測値 (cm)	文様・施文等	繩文部体	色調 (P/H/赤)	付着物 (内/外)	直和材等	時期	備考
181/3C2	田	N'-1前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
182/3R15	田	N'-1前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
183/4R24	田	N'-1前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	成形窓
184/4R2	田	N'-1前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	成形窓
185/2R25	田	N'-1前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	前土頭員
186/3R6	田	N'-2前A1	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
187/3R2	田	A2	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
188/4R21	田	N'-2前B1	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
189/3A20	田	N'-2前B1	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色/灰褐色	無	砂礫	後衛中葉	
190/2A25	田	N'-2前	直縫	口縫部上半 刷毛1	口:4.0 刷毛:1.7	無	無	無	褐色/淡褐色/ 褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
191/4R2	田	N'-2前 B1	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色/ 褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
192/3A15	田	N'-2前	直縫	口縫部~ 刷毛1	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
193/4R10	田	N'-2前B2	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
194/4C2	田	N'-2前B2	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	オコゲ/3.1
195/3A20	田	N'-2前B4	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
196/3R1	田	N'-2前 B5	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
197/3R1 - 2R25	西側, 田	N'-2前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
198/5R12	田	N'-2前C1	直縫	口縫部片1/2	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
199/4A8	田	N'-2前C2	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
200/4A20	田	N'-2前C2	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
201/3A20	田	N'-2前C3	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
202/3A15	田	N'-2前C4	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
203/4C2	田	C2	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
204/3R3	田	N'-2前 C4	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
205/4B6 - 4B13 - 4B16	田	N'-2前 C5	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
206/3A20	田	N'-3前A2	直縫	口縫部片	高:13.4 底:6.3	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
207/4R6	田	N'-3前B2	直縫	口縫部片	高:1/2 底:6.3	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
208/4C2	田	N'-3前C	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
209/3A20	田	N'-3前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
210/3A14 - 3A15	田	N'-4前 C1	直縫	口縫部片2/3	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
211/4R6	田	N'-4前 C1	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
212/3R7	田	N'-4前 C1	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
213/3A20	田	N'-4前 C3	直縫	口縫部片	高:6.2 底:6.0 底:1.9	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
214/3A14	田	N'-4前 上部	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
215/3R1	田	N'-4前 上部	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
216/3R7	田	N'-4前	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
217/3A16 - 4A16	田	V'前A	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
218/4R2	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	
219/3A20	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
220/3R7	田	V'	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
221/4R6	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	32/2028-80
222/3A23	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	32/2028-80
223/5A17	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
224/5A18	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
225/5A15 - 5A17	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
226/3R3	田	V'前B	直縫	口縫部片	無	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
227/3A10	田	N'-5前A	直縫	口縫部片	高:5.4	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
228/3C2	田	N'-5前A	直縫	口縫部片	高:5.4 底:5.0	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
229/3A14	田	N'-5前A	直縫	口縫部片	底:5.5	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
230/4R2	田	N'-5前A	直縫	口縫部片	底:9.7	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	31/2028-80
231/5R1	田	N'-5前B	直縫	史前片	底:9.3	無	無	無	褐色/淡褐色	無	砂礫	後衛中葉	

土製品觀察表

No.	出土地點 - 通名稱	層位	器種	計測値 (cm)	重さ (g)	真和材	時期	備考
232/3C2	田	ミニチュア土器	口縫4.3、底3.6、高2.2	62.0	骨針	後衛中葉	文様は無文	
233/S10	橋上上	土器	S15.6、幅7.7、H.5.9	225.3	骨針	後衛中葉	三分格	
234/S10	橋下上	土器	土器1.4、高5.2	21.1	骨針	後衛中葉	文様は無文の単縫文	
235/4A21	田	スタンプ形土器	口縫5.2、底2.3、高8.3	23.0	骨針	後衛中葉	文様は无縫の単縫文	

観察表

石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	遺存状態	備考
1	3A24	Ⅲ		3.0	1.7	0.4	1.4	流紋岩	板長	完形	円底無穿孔

石器失敗品觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	備考
2	2C	V	3.7	2.6	1.0	8.5	メノウ	板長	二次調査はほぼ全用
3	4A16	Ⅲ	4.1	2.8	0.5	5.4	真岩	板長	二次調査は一部

尖頭器觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	遺存状態	備考
4	2C9	Ⅲ	4.8	1.9	0.5	3.3	凝灰岩	板長	完形	押出型ポイント

石錐觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	鋸歯断面	遺存状態	備考
5	3A10			8.2	2.8	1.2	19.0	流紋岩	板長	菱形	完形
6	SK15	覆土上		6.6	5.3	1.3	25.7	真岩	板長	菱形	完形
7	4B2	Ⅲ	5.0	3.3	1.2	17.4	緑色凝灰岩	板長	菱形	完形	
8	3A15	Ⅲ	4.2	2.9	0.6	7.2	流紋岩	板長	菱形	完形	
9	S12	床		3.1	1.1	0.5	1.6	黒石英	板長	菱形	完形

石魁觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	遺存状態	備考	
10	SX6	底面		5.4	2.9	0.9	11.0	凝灰岩	板長	完形	緑色石成
11	3B19	V		2.0	6.0	0.7	10.2	真岩	板長	つまみ部欠	黒石英、白石英化、表面による磨耗
12	3B18	V		3.3	2.5	0.5	2.9	黒石英	板長	完形	斜方形石成

不定形石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	二次調査部位	切削	備考
13	4A16	Ⅲ	A	7.3	5.1	1.6	43.7	凝灰岩	板長	左側縫	無	
14	3B13	Ⅲ	A	8.0	5.0	1.8	65.7	真岩	板長	左側縫	無	
15	3A22	Ⅲ	B	5.6	10.4	1.1	62.5	流紋岩	板長	下縫	無	
16	3B20	Ⅲ	B	8.4	3.7	1.2	25.9	黒石英	板長	両側縫	無	
17	6B11	Ⅲ	C	3.4	8.3	1.2	31.8	凝灰岩	板長	ほぼ全周	無	
18	2B13	V	D	6.7	5.8	1.6	54.6	凝灰岩	板長	右側縫	無	
19	S10	覆土	E	4.4	3.7	2.1	27.2	緑色凝灰岩	板長	下縫	無	
20	4B21	Ⅲ	E	5.4	4.3	0.9	15.8	凝灰岩	板長	下縫	有	
21	3B20	V	F	13.0	7.3	1.4	70.0	緑色凝灰岩	板長	左側縫～下縫	無	
22	SK8	覆土	F	8.7	7.6	1.5	83.1	真岩	板長	両側縫	無	
23	SK3	覆土	G	7.1	3.9	1.2	22.3	凝灰岩	板長	無	両側縫に豊富な縫隙	有

兩極剝離痕のある石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	刃部形状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	備考	
24	4A13	V	四側二対	3.3	2.4	1.2	10.1	黒石英	板長		
25	3B25	Ⅲ	四側二対	3.0	2.9	1.0	7.9	黒石英	板長		縁系鉄石英

範状石器觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	鋸歯断面	遺存状態	備考
26	6トレンチ			8.7	6.3	2.2	119.0	真岩	板長	両刃	完形
27	4B13	V		5.9	3.2	1.5	26.3	流紋岩	板長	両刃	完形
28	5B8	V		7.3	4.7	1.4	49.9	真岩	板長	両刃	完形
29	4B4	V		6.7	4.5	1.4	40.6	真岩	板長	両刃	完形

打製石斧觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	素材	鋸歯断面	遺存状態	備考
30	4C2	Ⅲ		9.4	6.8	2.0	119.0	真岩	板長	両刃	完形
31	2B5	Ⅲ		16.4	7.1	3.3	562.9	流紋岩	扁平盤	両刃	完形
32	2B	I		10.3	5.5	1.9	125.4	チャート	扁平盤	両刃	完形
33	S12	覆土上		12.0	5.4	3.0	301.4	緑色凝灰岩	扁平盤	片刃?	完形
34	3B8	Ⅲ		10.0	6.2	1.6	89.7	5.5±5.5	板長	両刃	完形

石錐觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	遺存状態	備考	
35	S12	覆土上		7.9	6.1	2.2	110.0	安山岩	完形	
36	4トレンチ			6.8	6.2	1.6	91.7	安山岩	完形	

磨製石斧觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	刃部断面形	遺存状態	備考
37	3A21	Ⅲ	10.5	4.1	2.7	173.9	輝緑岩	両刃	完形	向側壁基部に敲打痕有る

敲磨石類觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	表面磨	側縁 崩壊	遺存状態	備考
38	S12	覆土	A	11.3	9.6	6.4	934.9	石英安山岩	○	×	完形	被熱
39	4A17	Ⅲ	A	11.1	10.5	4.3	791.7	花崗岩	○	×	完形	風化やや激しい・被熱
40	3A24	Ⅲ	A	10.8	6.6	4.0	420.1	石英安山岩	○	×	完形	
41	4A16	Ⅲ	B	15.7	8.7	4.8	981.2	斑紋岩	○	○	完形	
42	3B14	V	C1	12.5	8.3	4.6	693.9	安山岩	○	×	完形	
43	3A24	Ⅲ	C2	10.5	8.7	4.8	480.4	輝緑岩	○	×	完形	
44	4B16	Ⅲ	C2	10.1	9.4	5.0	689.6	花崗岩	○	×	完形	
45	3A17	Ⅲ	C2	10.5	8.1	4.2	521.0	石英安山岩	○	×	完形	
46	4A21	V	E	13.1	6.0	3.2	385.1	安山岩	○	×	完形	
47	3A12	Ⅲ	E	10.6	4.7	2.6	174.1	安山岩	○	○	完形	
48	S110	覆土	E	11.7	7.2	2.8	271.6	斑紋岩	×	○	完形	
49	3B9	V	F2	12.2	4.0	2.4	190.1	真岩	○	○	完形	
50	3A25	V	F2	13.3	7.0	3.5	488.8	閃緑岩	○	○	完形	
51	3A19	V	G1	11.5	6.5	4.1	277.7	安山岩	×	○	完形	いゆわる特殊磨石
52	3A24	V	G1	17.5	7.2	5.1	756.8	安山岩	×	○	完形	いゆわる特殊磨石
53	2B	V	G2	10.5	5.1	2.7	217.4	花崗岩	×	○	完形	
54	3A19	V	G2	12.1	6.2	5.8	561.8	花崗岩	×	○	完形	被熱による欠損有
55	3B6	Ⅲ	G2	9.5	5.1	2.5	149.2	輝緑岩	×	○	完形	

石皿觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重(g)	石材	遺存状態	備考
56	3B7	Ⅲ	A	16.9	12.6	5.4	808	超亜角隕岩	破片	被熱
57	S110	覆土上	A	15.1	8.4	8.2	933.7	超亜角隕岩	破片	
58	3B25	V	B	25.1	20.2	9.5	5,640	流紋岩	ほぼ完形	被熱
59	4A20	V	B	26.2	24.1	4.8	4,710	超亜角隕岩	ほぼ完形	
60	2B14	Ⅲ	B	38.7	23.2	8.3	11,100	花崗岩	完形	被熱
61	4A12	Ⅲ	B	19.8	16.8	3.3	1,170	安山岩	完形	表面に敲打痕あり
62	3B14	Ⅲ	B	17.7	13.0	5.4	1,560	斑紋岩	完形	片面に敲打痕あり

砥石觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
63	SK7	覆土上	24.3	16.3	10.5	4,620	輝灰岩	完形	
64	4C4	Ⅲ	18.1	10.2	6.7	3,135	砂岩	ほぼ完形	
65	S110	覆土上	22.8	20.4	15.1	7,200	砂岩	完形	
66	S110	覆土上	30.2	19.0	4.3	2,430	砂岩	完形	敲打痕もあり

核核觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
67	3B20	V	A	7.5	9.7	6.6	532.1	夷蔵岩	
68	3A15	Ⅲ	B	8.0	6.1	2.4	80.8	流紋岩	
69	3B4	V	C	6.2	9.5	5.0	256.2	斑紋岩	
70	4B24	V	D	6.4	5.7	3.6	102.8	真岩	
71	4B8	Ⅲ	E	6.3	8.0	3.2	173.9	真岩	

剥片觀察表

No.	出土地点・遺構名	層位	器物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
72	4A20	Ⅲ	楕円剥片	8.4	3.8	1.6	48.6	真岩	
73	3A15	Ⅲ	楕円剥片	5.5	8.7	1.9	68.5	緑色凝灰岩	
74	3B7	Ⅲ	楕円剥片	10	7.6	2.5	93.5	緑色凝灰岩	
74a	3B7	Ⅲ	楕円剥片	7.1	4.1	1.8	36.0	緑色凝灰岩	
74b	3B7	Ⅲ	楕円剥片	9.8	7.6	2.3	57.5	緑色凝灰岩	

石製品觀察表

No.	器物名	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
75	石剣	3A14	Ⅲ	15.0	3.5	1.2	73.2	手板岩	破片	石剣の可能性もあり
76	石棒	3B16,S110	床	25.1	7.4	6.4	1980.0	安山岩	2/3	
77	丸石	S110	覆土上	25.7	21.1	14.5	11500.0	花崗岩	完形	圓錐形

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1998 「I 加曾利B式土器資料」『奈良国立文化財研究所史料 第49冊 繩文後期加曾利B式・中国地方の陶棺・下總国分寺・尼寺資料 山内清男考古資料9』奈良国立文化財研究所
- 阿部朝衛 2000 「先史時代人の失敗と練習」『考古学雑誌』第86巻 第1号 日本考古学会
- 石川日出志・増子正三・波邊裕之 1992 『新潟県安田町文化財調査報告書12 六野瀬遺跡1990年調査報告書』新潟県安田町教育委員会
- 稲葉 明・木村 広・二宮俊策・稲村裕一 1976 「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『新潟県教育センター研究報告』第9号 新潟県教育センター
- うきたむ風土記の丘考古資料館 1996 『第3回特別展 繩文のタイムカプセル 押出遺跡』
- 遠藤 佐 1995 「よみがえる縄文時代～村内遺跡発掘調査概要1～」新潟県上村教育委員会
- 小野 昭 1986 『人ヶ谷岩陰（第一次発掘調査概報）』新潟県上村教育委員会
- 小野 昭・鈴木 俊成 1994 『環日本海地域の土器出現期の様相』有山閣出版
- 折井 敦・金内 元 2005 『第IV章 江添遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第147集 稚塚遺跡I・江添遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章、第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 勝山百合 2004 『下田村文化財調査報告書第34集 成就院遺跡』新潟県下田村教育委員会
- 神村 透 1999 「特殊磨石・折損特殊磨石」『信濃』第51巻 第10号 信濃史学会
- 川村浩司 1988 「平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 原山遺跡・大塚遺跡』新潟県教育委員会
- 瓦吹 堅 1989 「浮島・興津式土器様式」『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
- 北村 亮 1990 「第Ⅲ章4. A. 土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原I遺跡・上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 興野義一 1967 「大木式土器理解のために(I)」『考古学ジャーナル』13号 ニューサイエンス社
- 興野義一 1968 「大木式土器理解のために(II)」『考古学ジャーナル』16号 ニューサイエンス社
- 興野義一 1968 「大木式土器理解のために(III)」『考古学ジャーナル』18号 ニューサイエンス社
- 興野義一 1968 「大木式土器理解のために(IV)」『考古学ジャーナル』24号 ニューサイエンス社
- 興野義一 1969 「大木式土器理解のために(V)」『考古学ジャーナル』32号 ニューサイエンス社
- 興野義一 1970 「大木式土器理解のために(VI)」『考古学ジャーナル』48号 ニューサイエンス社
- 興野義一 1970 「大木5b式の提唱」『古代文化』第22巻第4号 財團法人古代学協会
- 國島 晴 1988 「新潟県の縄文時代後期中葉の土器について」『新潟考古学談話会報』第1号 新潟考古学談話会
- 國島 晴・波邊裕之 2001 「新潟県における縄文後期後半の土器様相」『第14回縄文セミナー 後期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 小池義人・土橋由里子 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集 横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 国土交通省新潟国道事務所 2004 『パンフレット 一般国道49号揚川改良（揚川道路）』 国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所
- 小島俊彰 1986 「7 第7群土器 朝日下刷式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 小島俊彰 1989 「十三菩提式土器様式」『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
- 坂井秀弥 1999 「第4章、第1節総論」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 佐々木洋治・佐藤正俊 1986 「山形県・押出遺跡」『月間文化財』第278号 第一法規出版株式会社
- 沢田 敦 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 上ノ平遺跡A地点』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

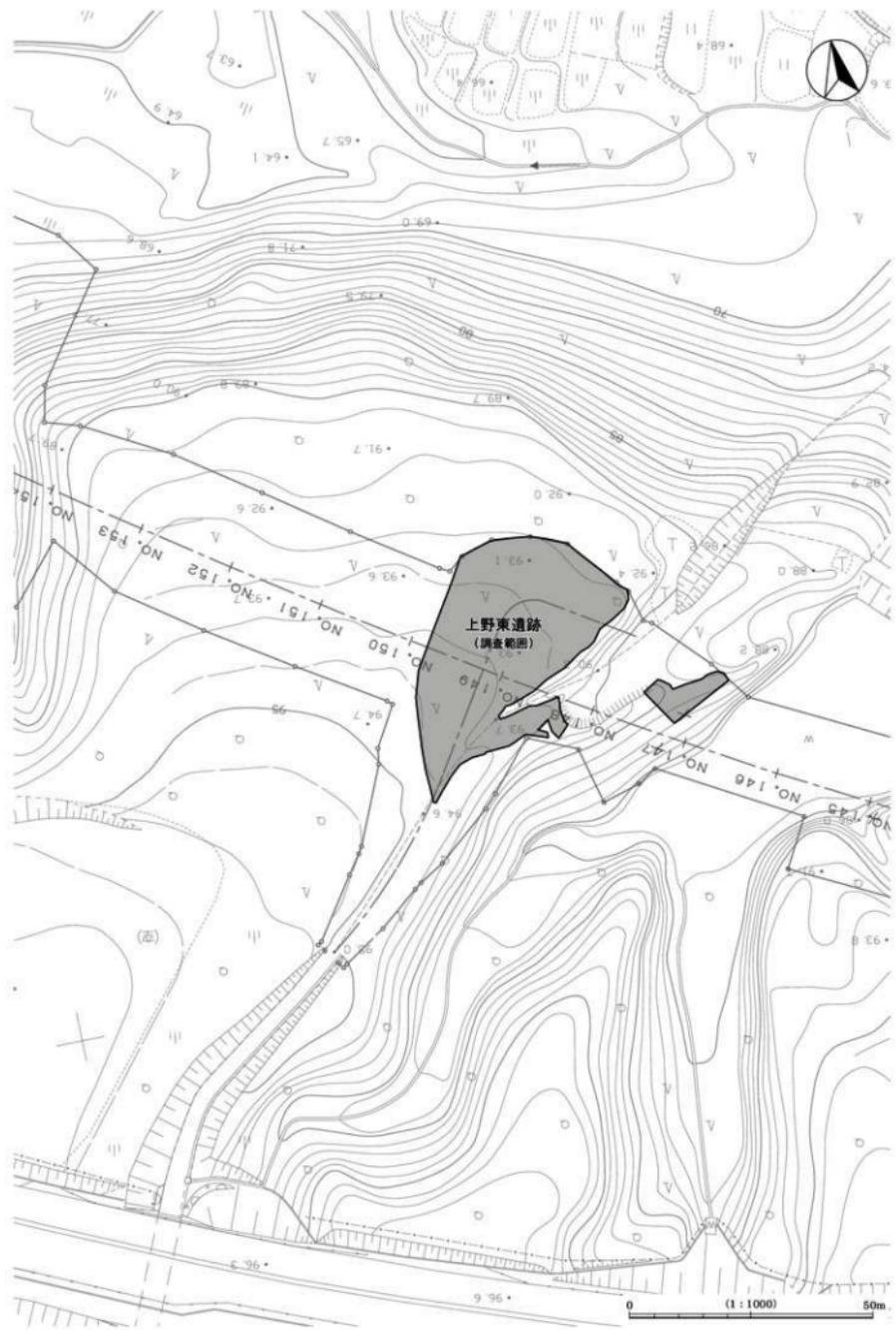
- 沢田 敦 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第73集 上ノ平遺跡C地点』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦・坂上 有紀 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第132集 吉ヶ沢遺跡B地点』新潟県教育委員会(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1996 『新潟県における縄文後期中葉の土器群』『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 白鳥良一 1989 『前期大木式土器様式』『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』 小学館
- 鈴木克彦 2005 『東北南部後期前、中葉の番匠地層年の再検討』『縄文時代』16 縄文時代文化研究会
- 鈴木道之助 1981 『圓錐石器の基礎知識 犬縄文』 柏書房
- 高橋保雄 1998 『沼ノ沢遺跡』『朝日村文化財報告書第15集 落合向い遺跡・坂巻遺跡・沼ノ沢遺跡』 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 高橋保雄・荒谷伸郎 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第119集 北野遺跡I (下層)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄・高橋保・児玉泰裕・齊藤準 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第141集 北野遺跡II (上層)』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗・片岡千恵 『揚川改良(西地区)たみ池付近)試掘調査』『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗・北村 亮・佐藤正知・阿部雄生 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第68集 大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 只見川第四紀研究グループ 1966b 『福島県野沢盆地の浮石砂層の基底部より算出した木材の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代 XXVI—』『地球科学』第82号
- 田中耕作・鈴木 晓 2003 『新発田市埋蔵文化財調査報告書第25 二タ子沢C遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 谷口康浩 1989 『諸磯式土器様式』『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』 小学館
- 丹野隆明・本間 宏 1991 『福島県文化財調査報告書第266集 鹿島遺跡・平林B遺跡・権現山下遺跡』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鶴間正昭 1986 『古代末期の丘陵地域開発について—多摩丘陵の様相ー』『東京都埋蔵文化財センター研究論集IV』(財)東京都埋蔵文化財センター
- 寺崎裕助 1988 『刈羽式土器について(予察)』『新潟県考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 寺崎裕助 1993 『鍋屋町式土器について』『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』 縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1997 『吉川町古町B遺跡について』『新潟県考古学談話会会報』第7号 新潟考古学談話会
- 寺村光晴・室岡 博ほか 1960 『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会
- 土橋由里子ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第75集 大堀遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由里子ほか 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第84集 中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 富樫泰時 1976 『トランシエ様石器について』『東北考古学の諸問題』 東北考古学会
- 中村 孝三郎 1960 『小瀬ヶ沢洞窟』 長岡市立科学博物館
- 中村 孝三郎・小片 保 1960 『宝谷洞窟』 長岡市立科学博物館
- 新潟県 1983 『新潟県下越 土地分類基本調査 津川』
- 二宮俊策 1973 『新潟県東蒲原地方における阿賀野川の河岸段丘について』『新潟県教育センター研究収録』第6集(理科研究編12) 新潟県教育センター
- 西村正衛 1968 『茨城県郡敷郡興津貝塚 第一次調査』「学術研究一人文学・社会科学篇」第17号 早稲田大学教育学部
- 中野 純 1997 『北陸における縄文時代前期後葉の土器様相(上)一地域の様相把握に向けての資料集成ー』『柏崎市立博物館館報』第11号 新潟県柏崎市立博物館

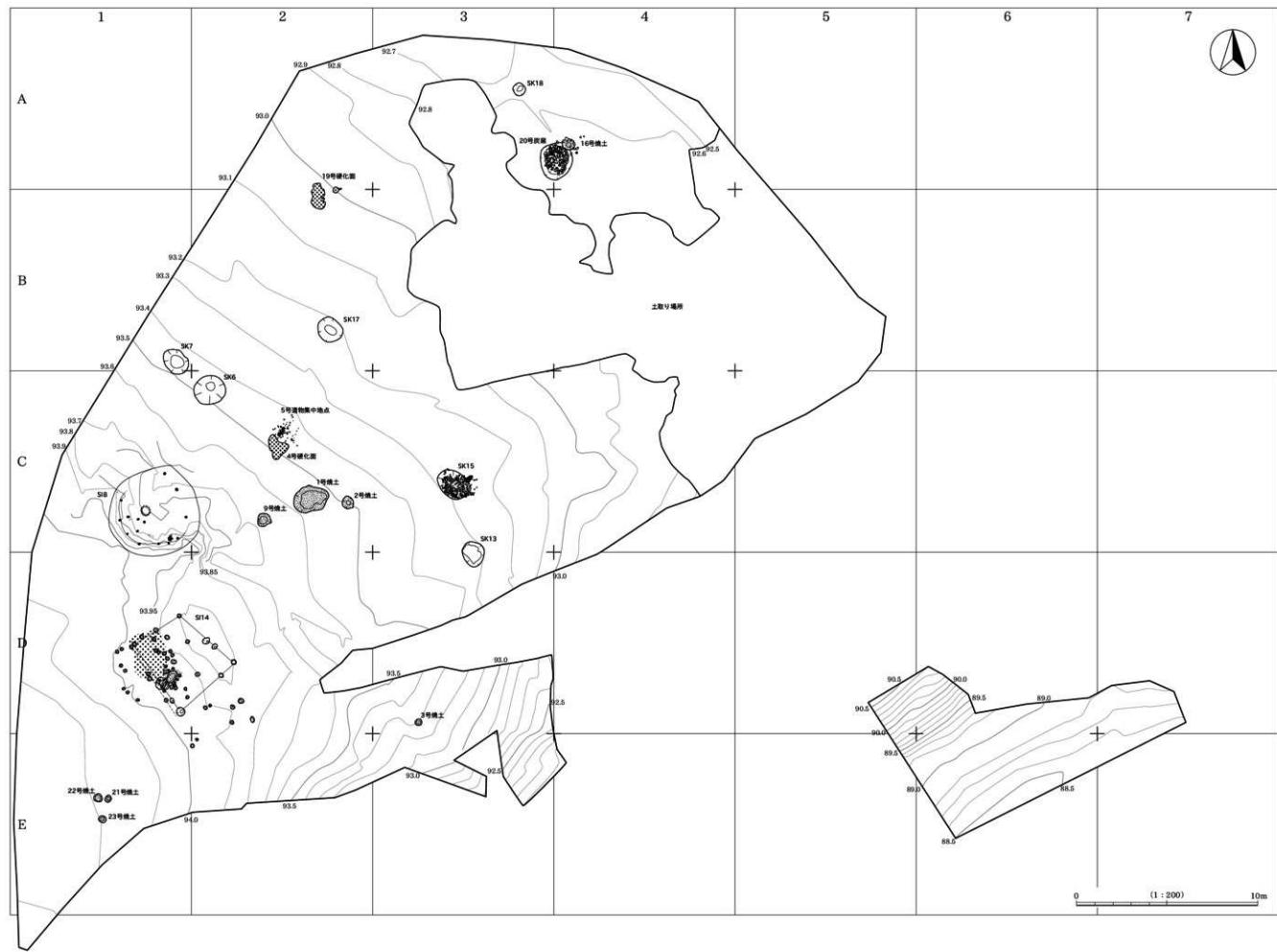
- 中野 純 1998 「北陸における縄文時代前期後葉の土器様相（下）—地域的様相把握と分析による問題提起—」『柏崎市立博物館館報』第12号 新潟県柏崎市立博物館
- 芳賀英一 1985 「大木式土器と東部関東との関係」『古代』第80号 早稲田大学考古学会
- 芳賀 英一・藤田 誠 1986 『福島県文化財調査報告書第164集 腰巻遺跡・下谷ヶ池平B・C遺跡』福島県教育委員会
- 芳賀英一^{ほか} 1983 『福島県山都町文化財調査報告書第4集 上ノ原遺跡』福島県会津高田町教育委員会
- 芳賀英一^{ほか} 1984 『福島県会津高田町文化財調査報告書第5集 背宮西遺跡』福島県会津高田町教育委員会
- 芳賀英一^{ほか} 1990 『福島県文化財調査報告書第227集 中宮遺跡・上宮A遺跡・背宮西遺跡・三十刈遺跡・水上遺跡』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 秦 昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石器」『考古学雑誌』第76巻 第4号 日本考古学会
- 本間 宏 1996 『福島県における縄文後期中葉の土器群』『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 本間嘉晴^{ほか} 1962 『新潟県文化財年報第四 阿賀一束蒲原郡学術総合調査報告書一』新潟県教育委員会
- 前山精明 1994 「3 遺跡と遺物」『巻町史』資料編1 考古 新潟県巻町
- 松田光太郎 2003 「大木6式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』第39号 神奈川考古同人会
- 松本 茂^{ほか} 1991 『福島県文化財調査報告書第243集 法正丘遺跡』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住宅建築』中央公論美術出版
- 八木光則 1976 「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』第28巻第4号 信濃史学会
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 山岸英夫^{ほか} 1990 『福島県文化財調査報告書第240集 角間遺跡・高森平A遺跡』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
- 湯原勝美^{ほか} 1999 『朝日村文化財報告書第16集 脇ノ沢遺跡・長通り遺跡』新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 渡邊美穂子 2001 『新発田市文化財調査報告 第23-2 坂ノ沢C遺跡II（平安時代編）』新潟県新発田市教育委員会
- 渡部 紀^{ほか} 1995 『仙台市文化財調査報告書第193集 伊古田遺跡』仙台市教育委員会

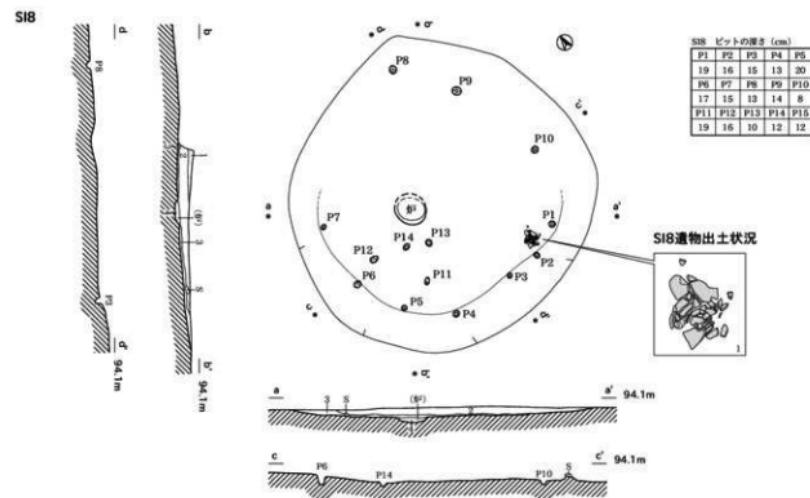
図 版

上野東遺跡の調査範囲と周辺の地形

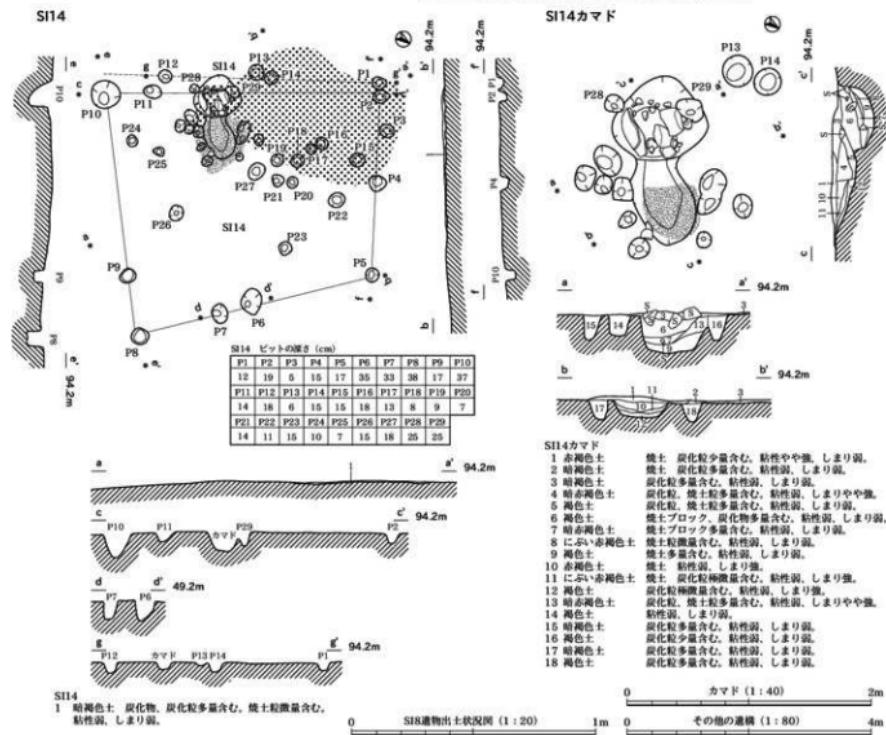
圖版 1

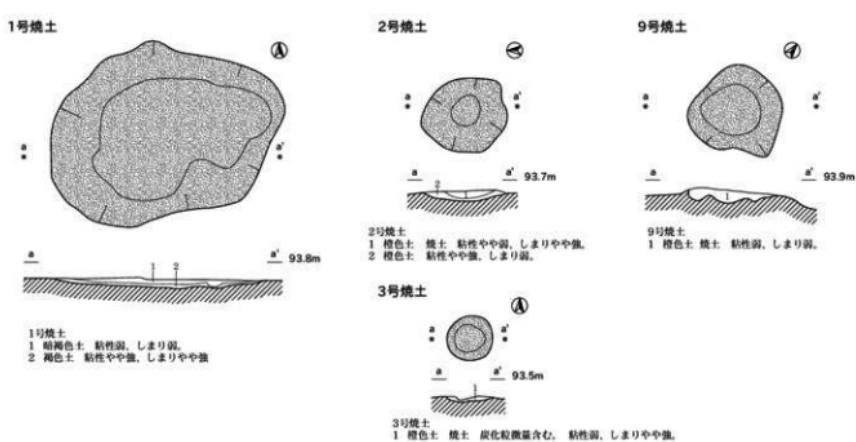
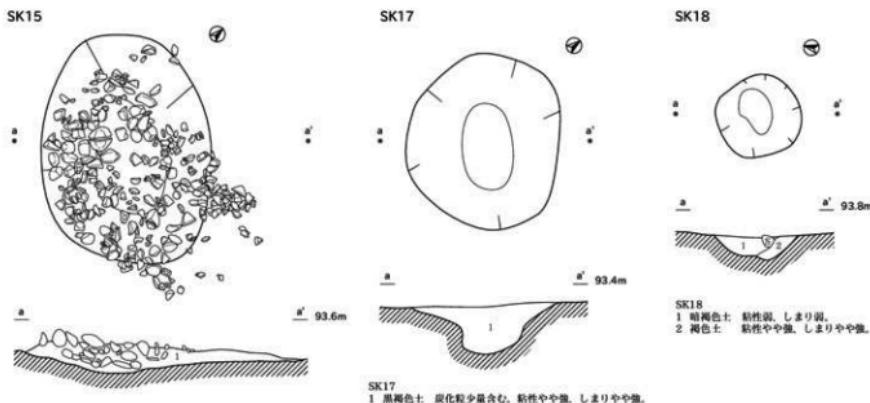
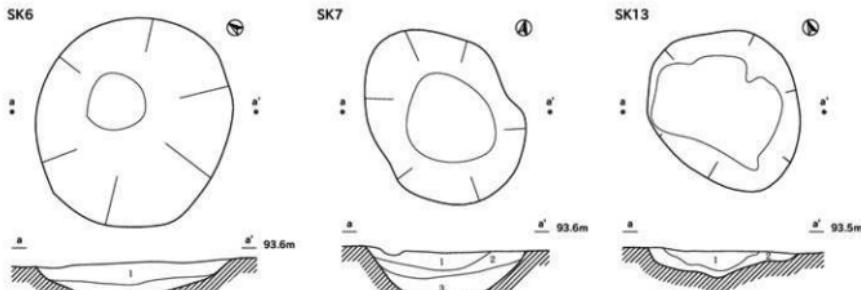


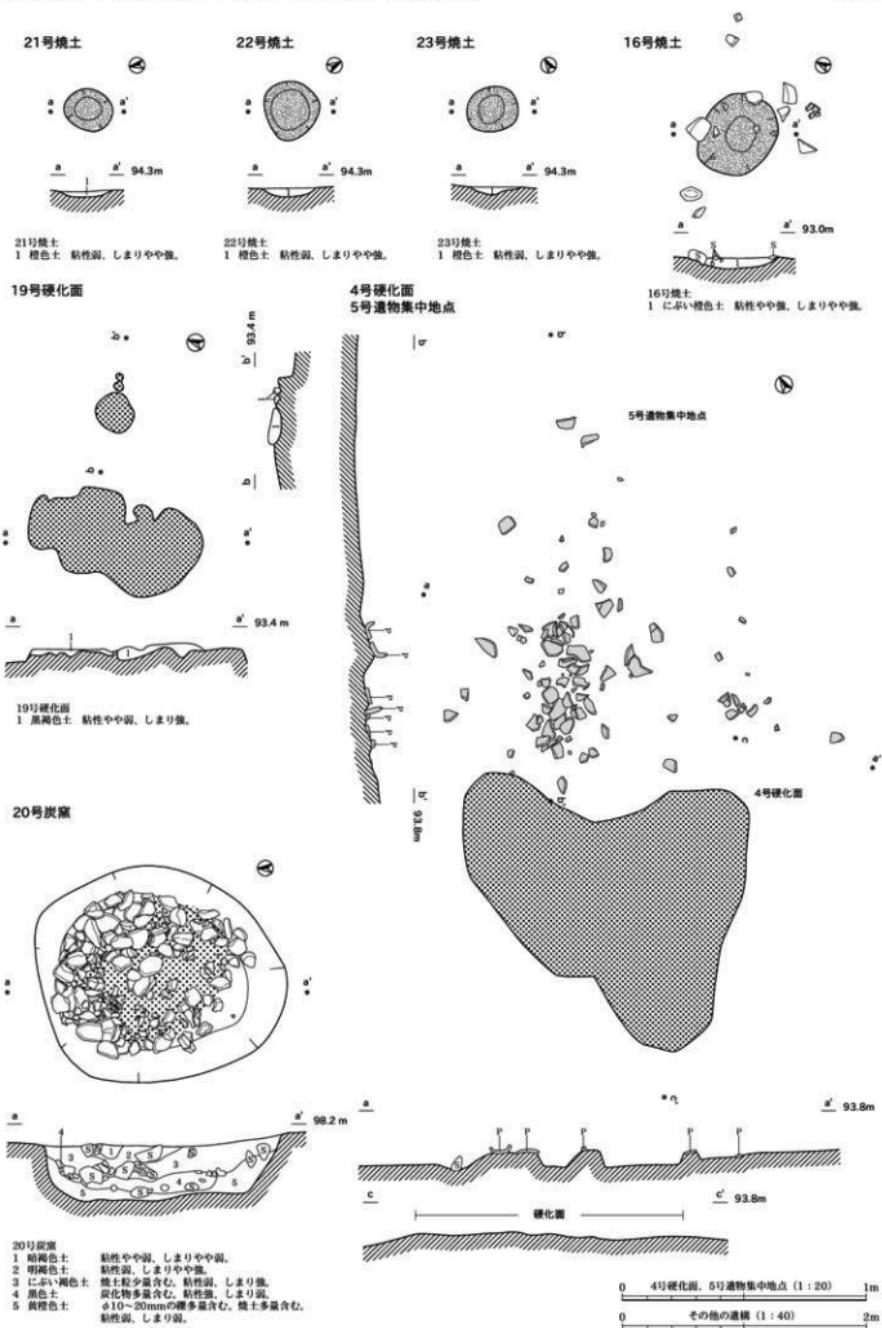




S18	
1 高色土	鹿瀬輕石質砂多量含む。炭化粒微量含む。ローム粒微量含む。 粘性弱、しまり弱。
2 明褐色土	鹿瀬輕石質砂多量含む。粘性弱、しまり弱。
3 明褐色土	鹿瀬輕石質砂多量含む。燒土粒微量含む。粘性弱、しまり弱。
4 (併) 明褐色土	燒土、焼土ブロック多量含む。粘性強、しまり強。





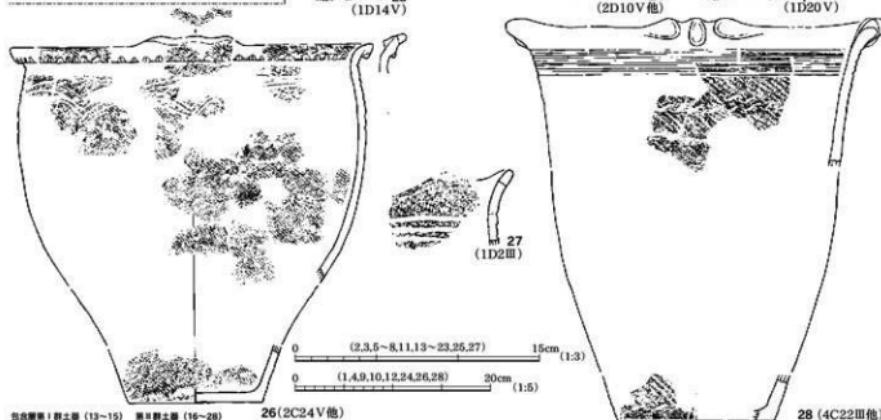
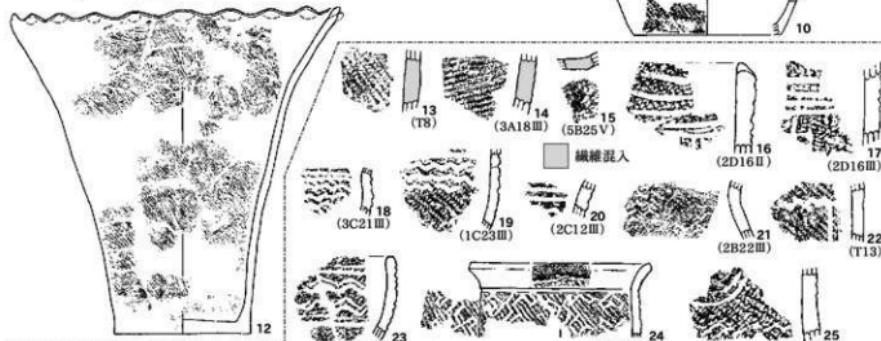


四 版 6

上野東遺跡 遺物実測図 1 縄文土器 1



5号遗物集中地点

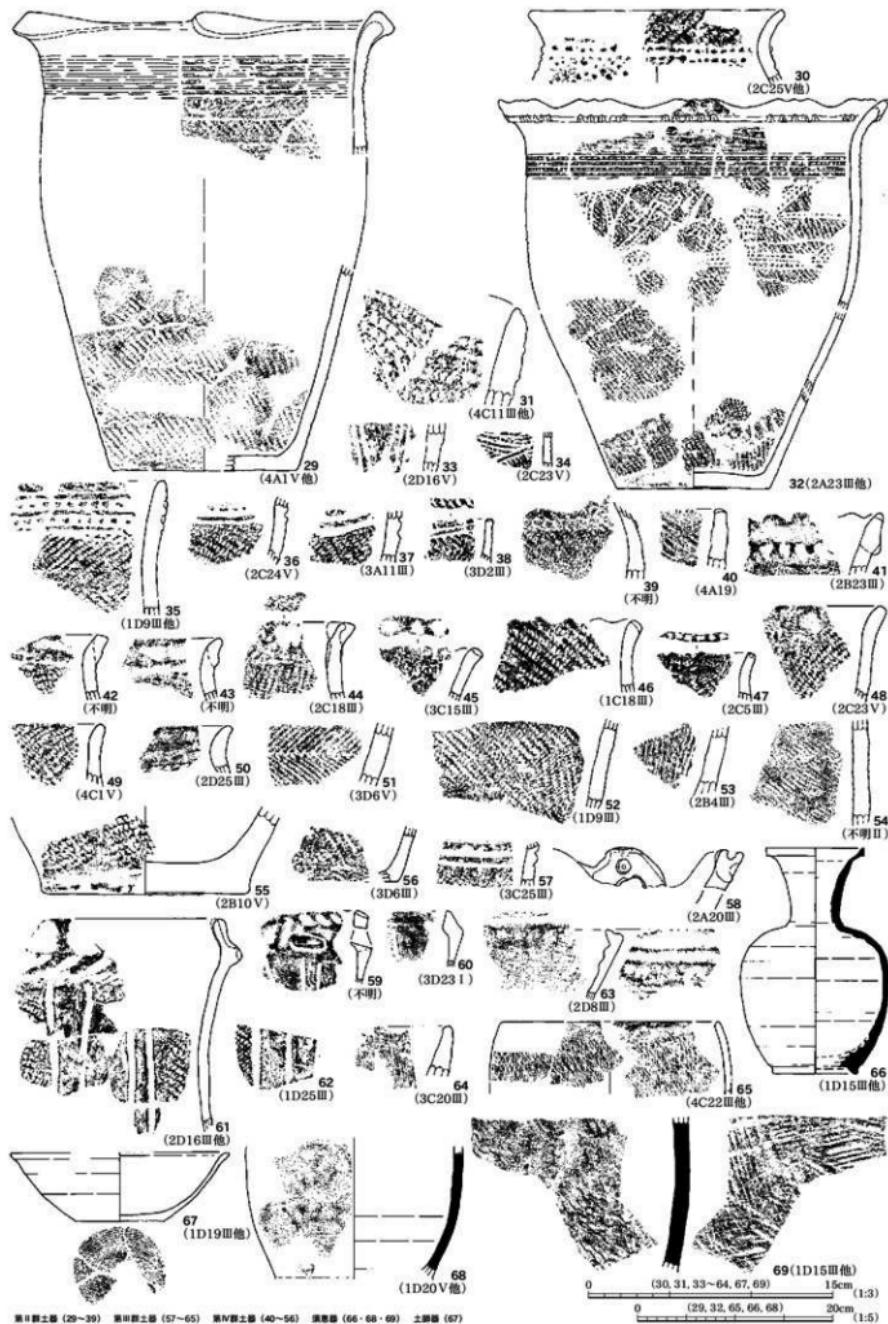


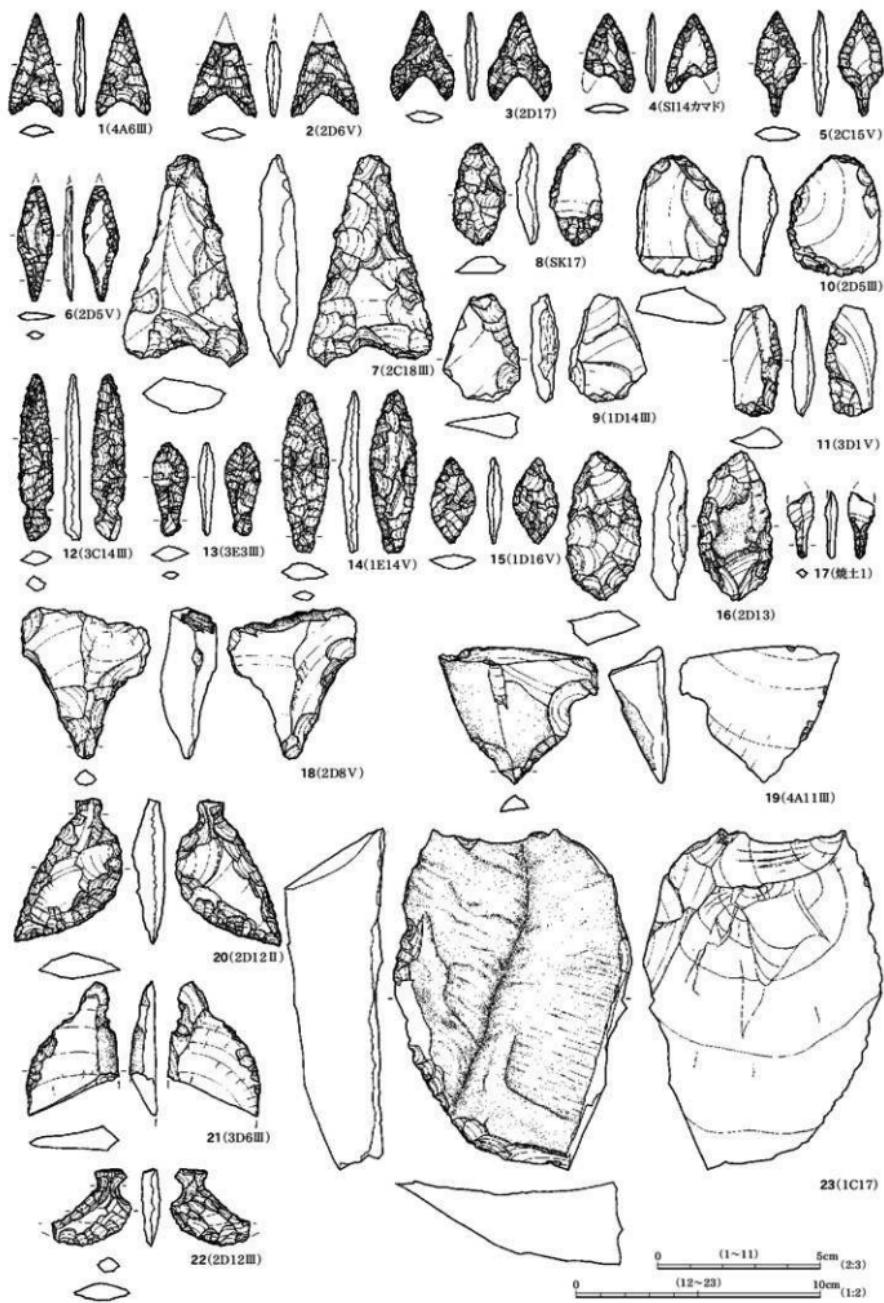
自由體制：群主體（13~15） 群II群主體（16~28）

26(2C24V他)

(2.3.5~8.11.13~23.25.27) 15cm (1:5)

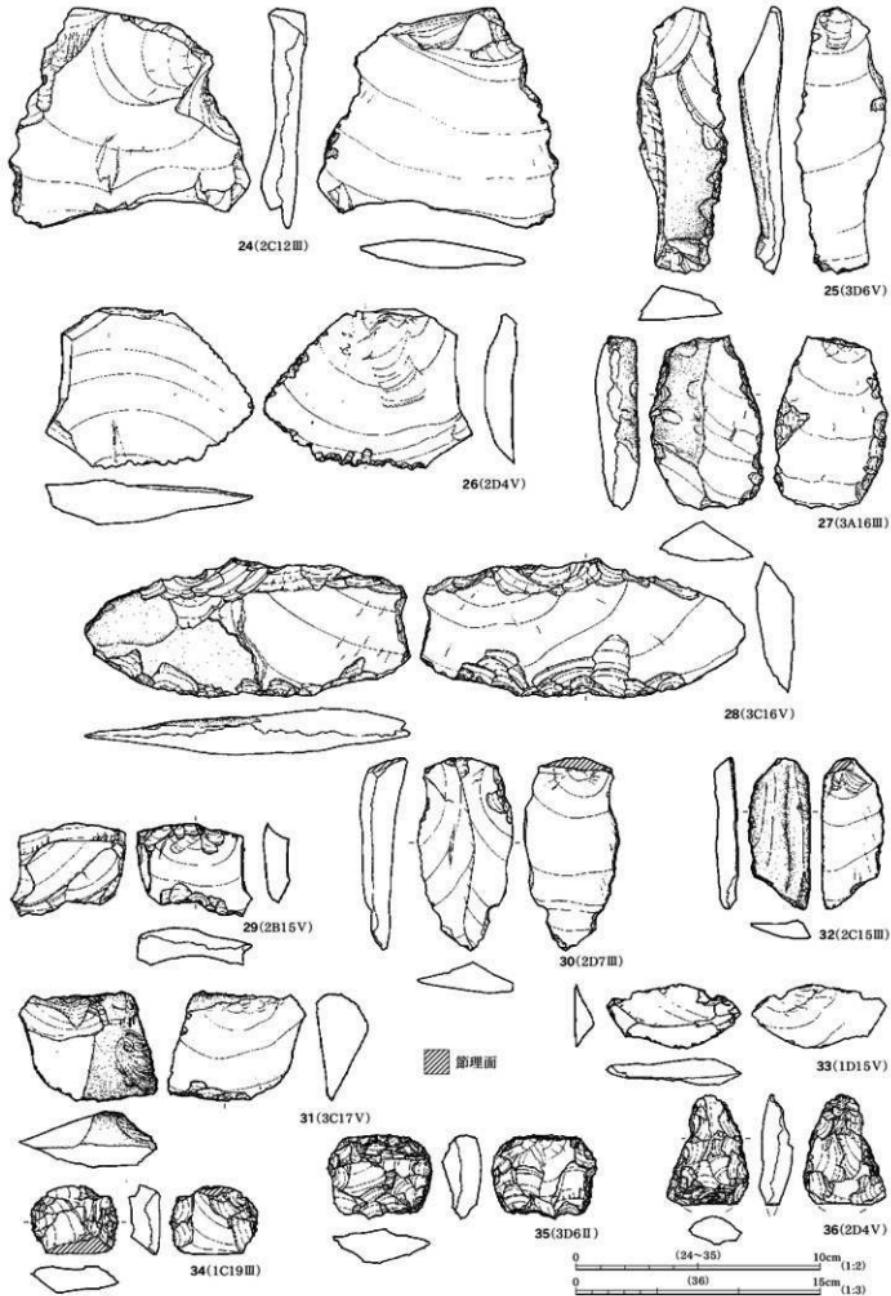
28 (4C22III他)



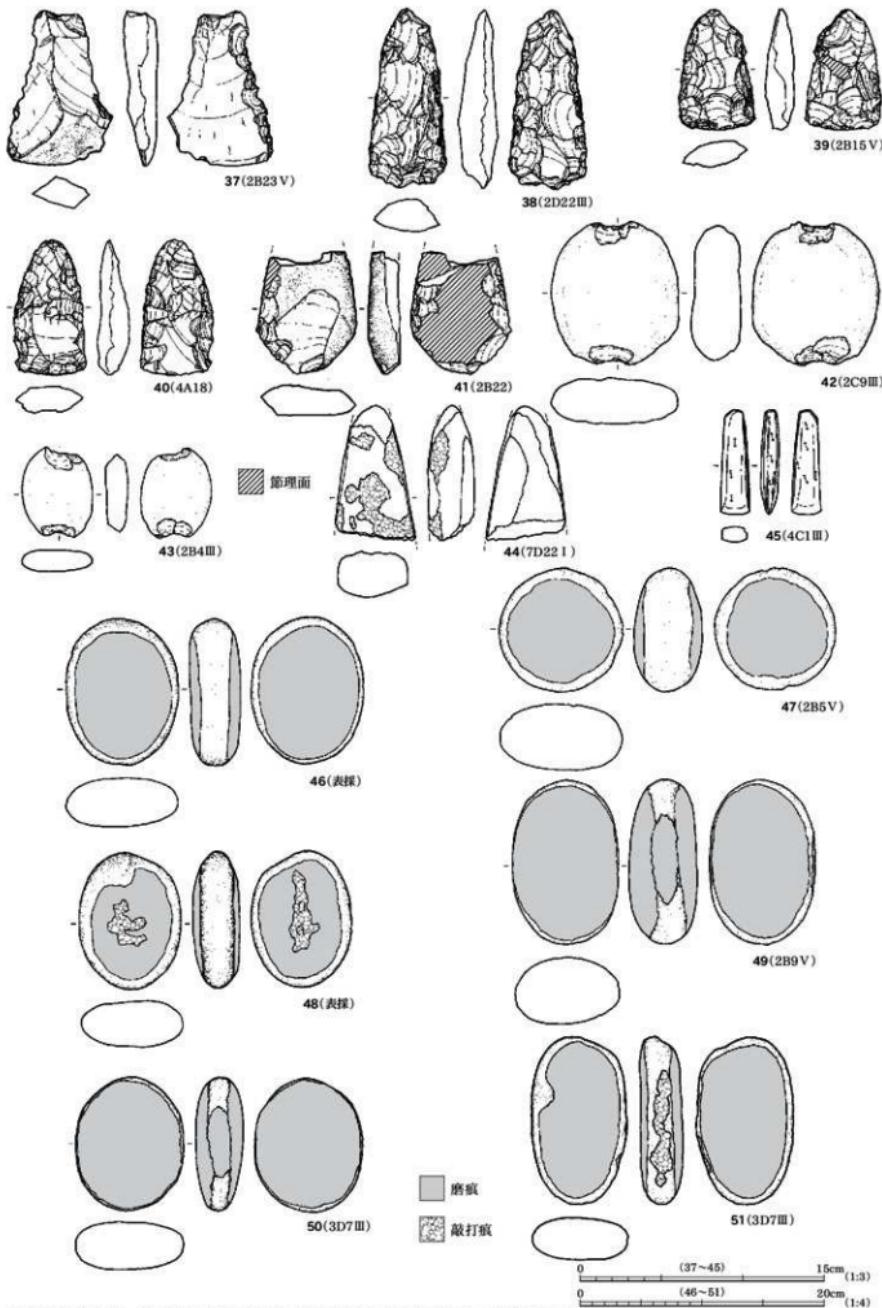


石器 A種 (1～4)・B種 (5)・C種 (6) 石器次用品 A種 (7～9)・B種 (10～11) 大型器 A種 (12～14)・B種 (15～16) 石器 (17～19) 石核 (20～22) 不定期石器 A種 (23)

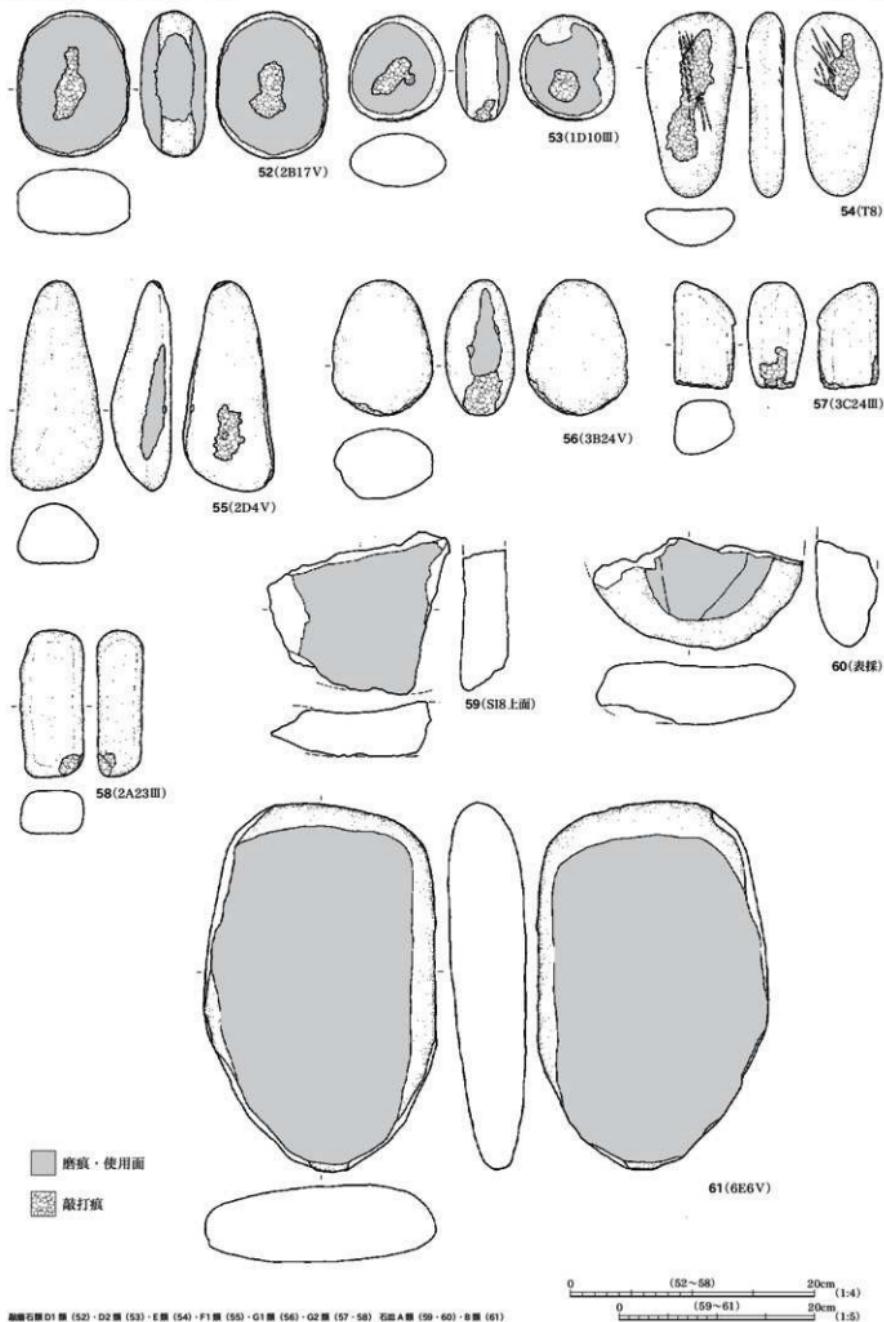
0 (1～11) 5cm (2:3)
0 (12～23) 10cm (1:2)

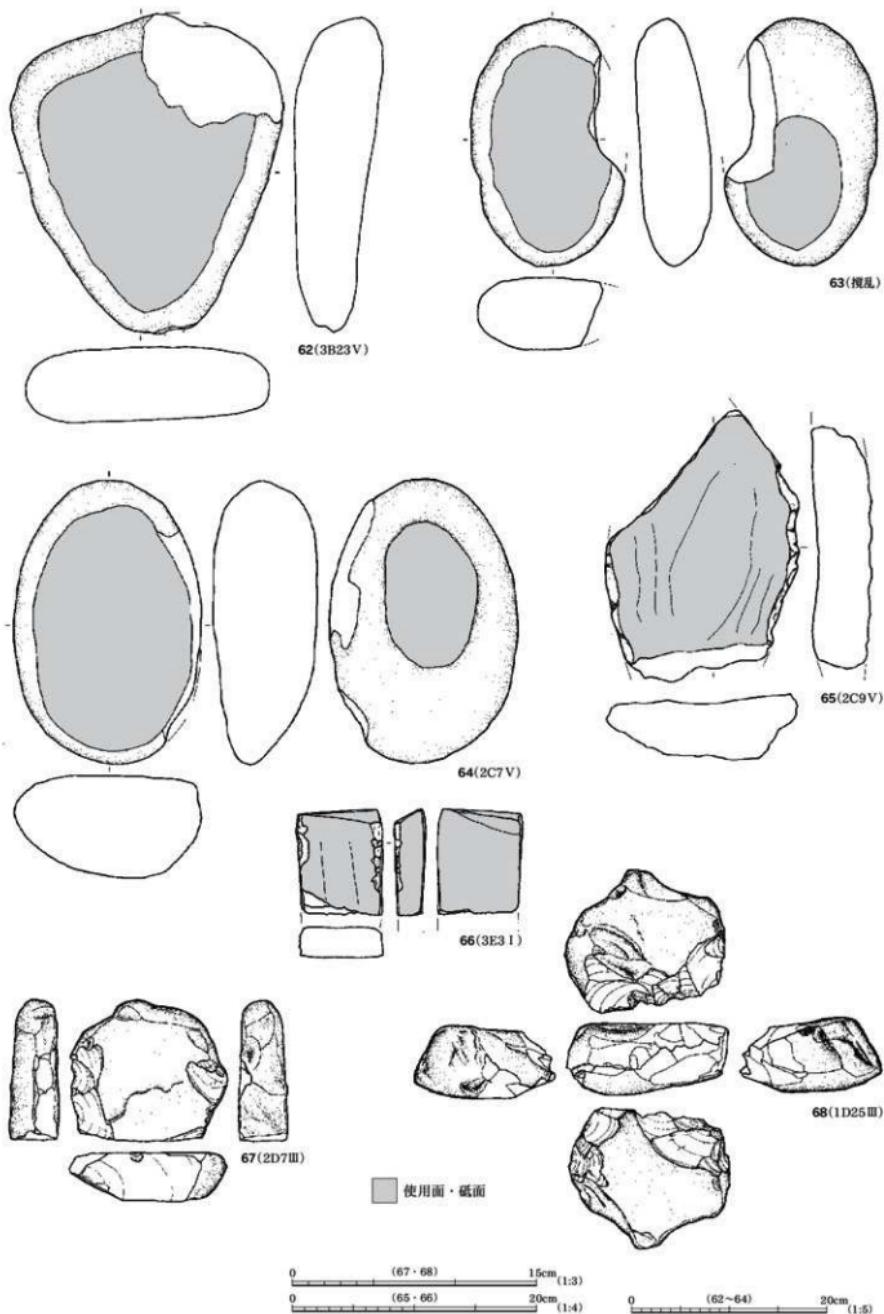


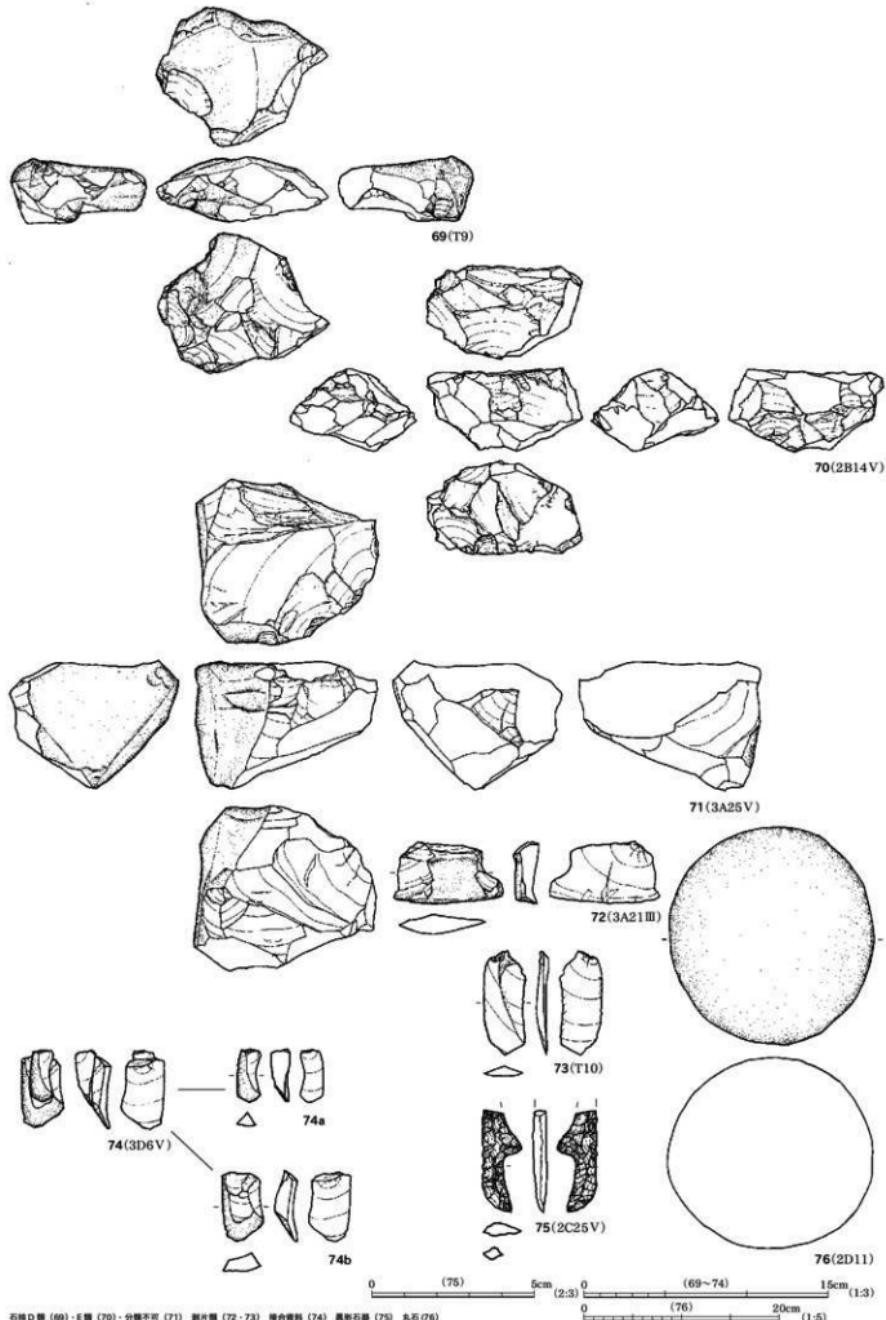
不規形石器B類 (24～26)・C類 (27～28)・D類 (29)・F類 (30・31)・G類 (32・33)両側削離面のある石器 (34・35) 剝離状石器A類 (36)



茎状石器A類 (37)・B類 (38~40) 打製石片 (41) 石核 (42・43) 磨製石片 (44・45) 磨擦石器A類 (46~47)・B類 (48)・C1類 (49・50)・C2類 (51)



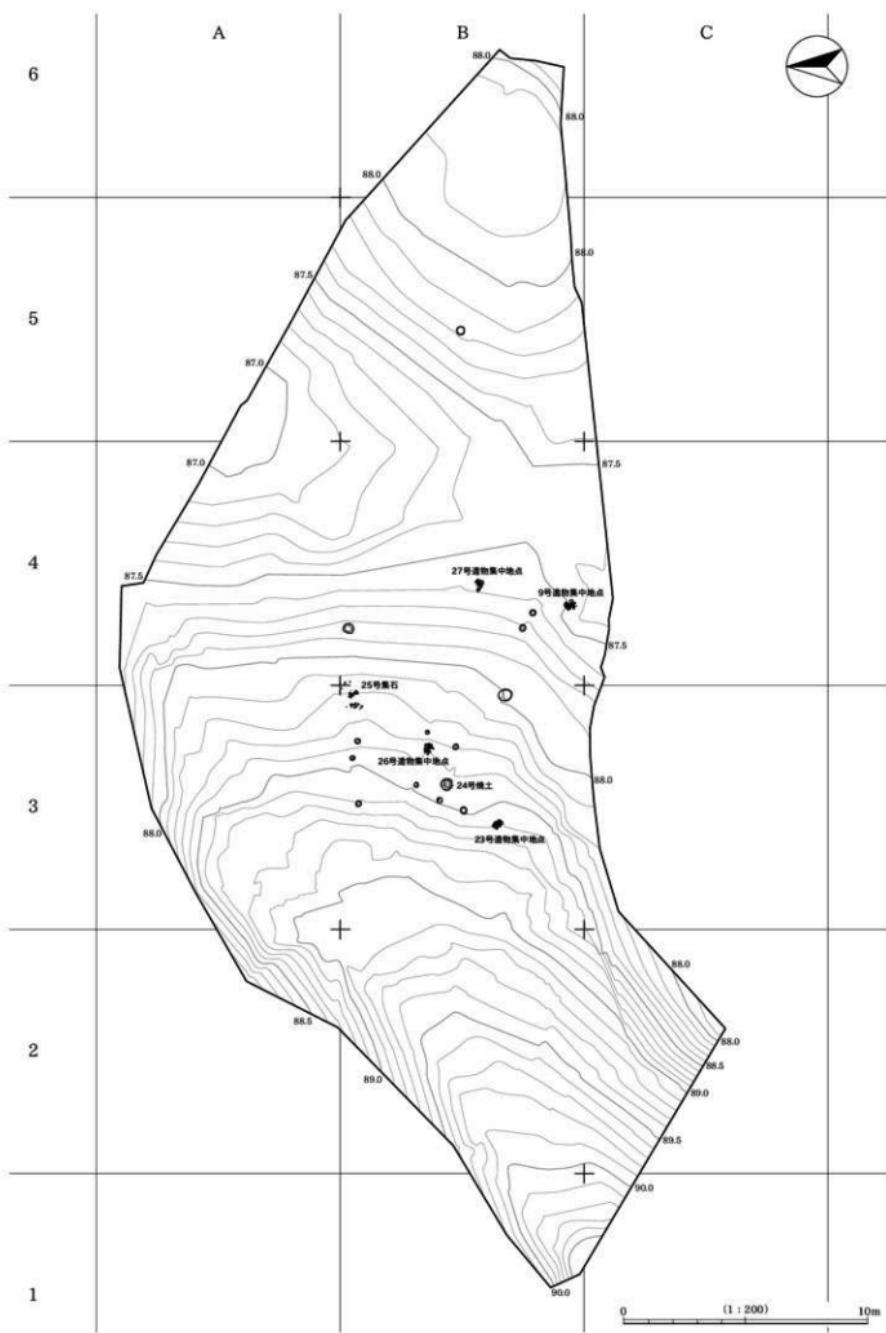




石核D型 (69)・E型 (70)・分類不可 (71)・剥片類 (72~73)・接着剤 (74)・異形石器 (75)・丸石 (76)

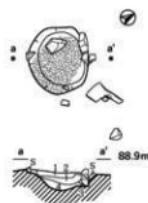
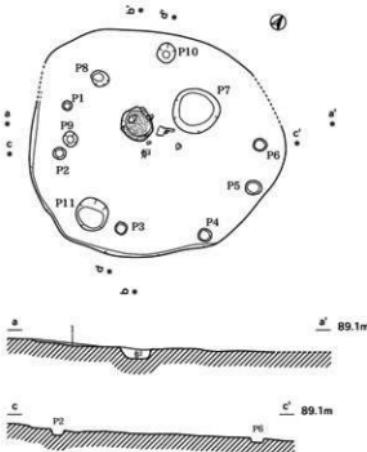




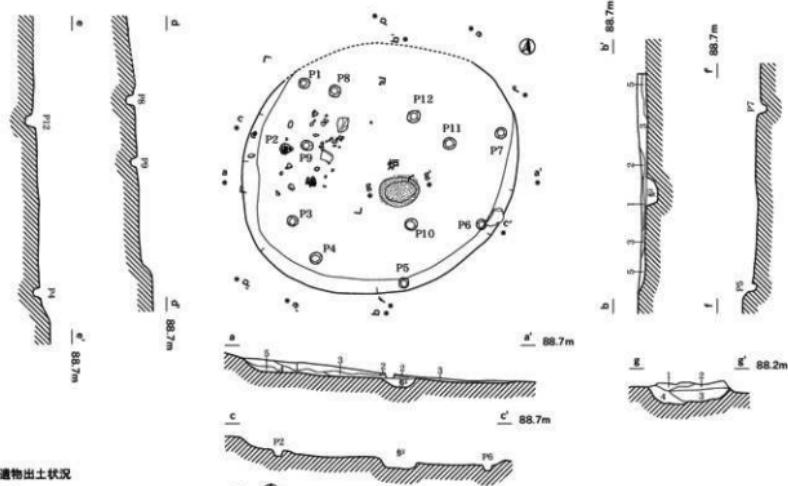


(上層)

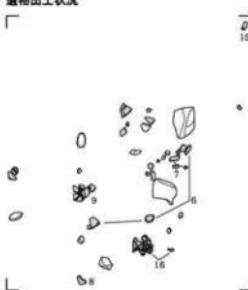
SI1



SI2



遺物出土状況



SI2 土色 (Top)

1 黒褐色土 塗化粧颗粒混入む。粘性やや強。しまりやや弱。

2 黒褐色土 塗化粧颗粒混入む。粘性やや強。しまりやや弱。

3 黑褐色土 塗化粧颗粒混入む。粘性やや強。しまりやや弱。

4 明褐色土 ローム粒多量含む。粘性やや強。しまりやや弱。

5 黄褐色土 ローム多量含む。塗化粧颗粒混入む。粘性強。しまりやや強。

SI2 土色 (Bottom)

1 黒褐色土 塗化粧。塗土粒少微量含む。粘性やや強。しまりやや弱。

2 明赤褐色土 塗化粧颗粒混入む。粘性弱。しまり強。

3 黑褐色土 塗化粧颗粒混入む。粘性やや強。しまりやや弱。

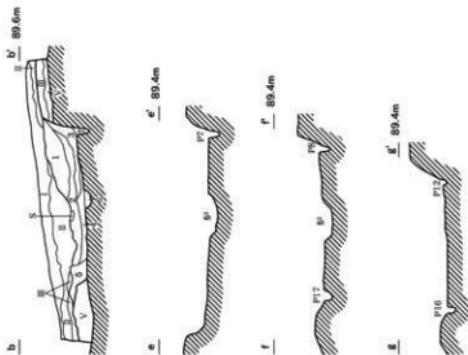
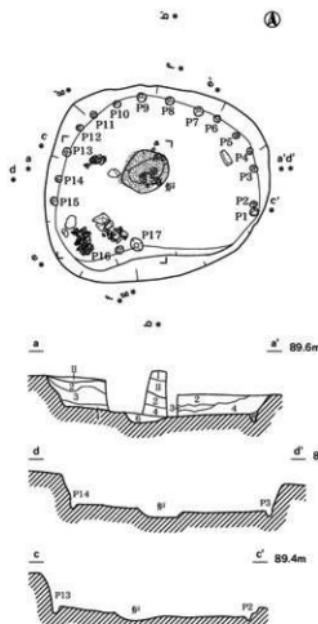
4 明褐色土 ローム粒多量含む。粘性やや強。しまりやや弱。

SI2 ピットの深度 (cm)

P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
5	7	5	13	24	7	15	16	10	8	9	10

SI1 (b-b), SI2(遺物出土状況) (1:40) 2m
SI1 (a-a), SI2(他の遺構) (1:80) 4m

SI10



SI10

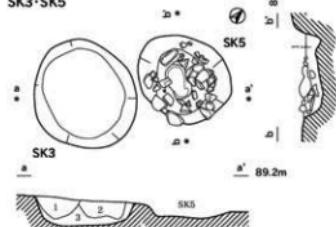
1	暗褐色土	炭化粒含む。粘性弱。しまり弱。
2	褐色土	炭化粒微量含む。粘性やや強。しまりやや強。
3	にぶい褐色土	粘性やや強。しまりやや強。
4	明褐色土	炭化粒多量含む。粘性弱。しまり強。
5	黄褐色土	炭化粒多量含む。粘性弱。しまり強。
6	(P7)赤褐色土	粘性弱。しまり強。
7	(P8)暗褐色土	粘性やや強。しまりやや強。
8	(P3)暗褐色土	粘性やや強。しまりやや強。



SI10 ピットの深さ (cm)

P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17
13	11	14	15	11	16	11	13	18	8	13	11	14	7	12	8	7

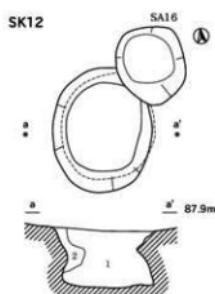
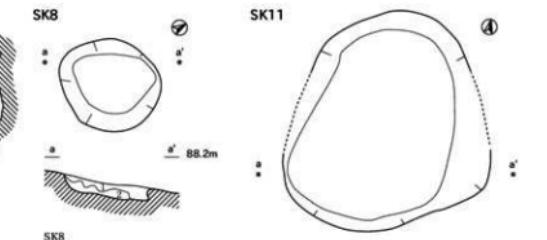
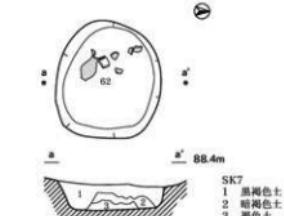
SK3-SK5



- SK3**
- 1 黒褐色土 炭化粒微量含む。粘性弱。しまり弱。
 - 2 暗褐色土 炭化粒微量含む。粘性弱。しまり弱。
 - 3 明褐色土 粘性やや強。しまりやや強。

- SK5**
- 1 黒褐色土 炭化粒多量含む。粘性弱。しまりやや強。

SK7

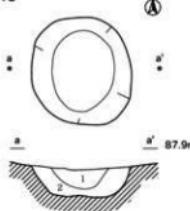


- SK11**
- 1 暗褐色土 炭化粒微量含む。粘性やや弱。しまりやや弱。
 - 2 褐色土 炭化粒微量含む。粘性やや強。しまりやや強。

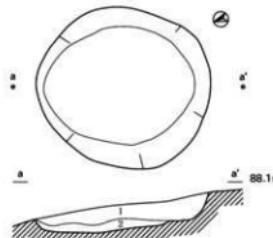
- SK12**
- 1 黒褐色土 IV層少量混入する。粘性なし。
 - 2 暗褐色土 IV層少量混入する。粘性弱。しまり弱。

0 SI10遺物出土状況 その他の遺構 (1:40) 2m
SI10平面図・断面図・エレベーション図 (1:80) 4m

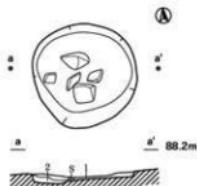
SK13



SK15



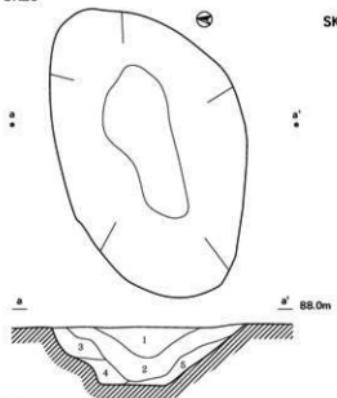
SK17



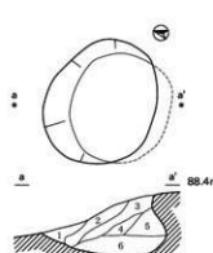
SK13

1 棕褐色土 IV層少量混入する。粘性弱。
2 褐色土 四周とIV層の境じり。粘性弱。

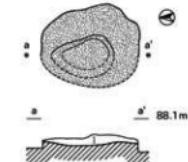
SK20



SK21



14号焼土

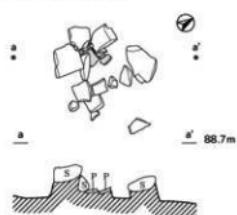


14号焼土
1 暗赤褐色土 粘性弱、しまり強。

SK21

1 黒色土 粘性やや強、しまり弱。
2 黒褐色土 炭化粒微量含む。粘性弱、しまり弱。
3 暗褐色土 炭化粒微量含む。粘性やや強、しまり弱。
4 褐色土 粘性やや強、しまり弱。
5 にぶい褐色土 粘性やや強、しまり弱。
6 黒褐色土 炭化粒、焼土粒微量含む。粘性強、しまり弱。

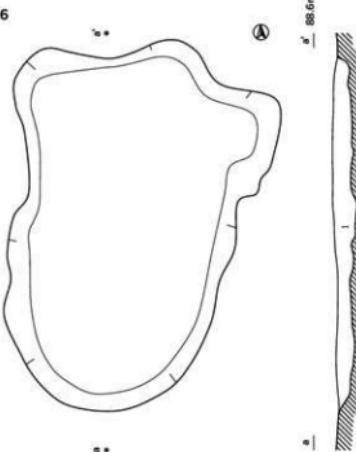
19号集石



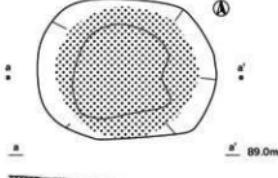
SK20

1 黒色土 粘性弱、しまり弱。
2 暗褐色土 炭化粒微量含む。粘性弱、しまり弱。
3 黑褐色土 炭化粒微量含む。Ⅳ層多量含む。粘性弱、しまり弱。
4 黑褐色土 炭化粒微量含む。Ⅳ層多量含む。粘性弱、しまり弱。
5 褐色土 炭化粒微量含む。Ⅳ層多量含む。粘性弱、しまり弱。

SX6



4号炭窯

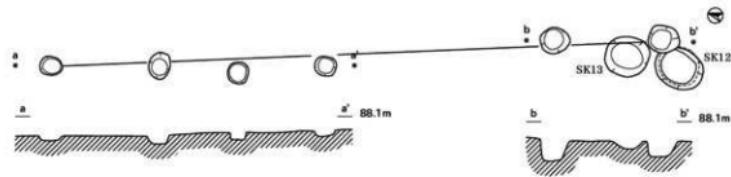


4号炭窯
1 黒色土 炭化粒多量含む。粘性弱、しまり弱。
2 黒色土 炭化粒、炭化ブロック多量含む。粘性弱、しまり弱。
3 赤褐色土 粘性やや強、しまり強。
4 橙色土 Ⅳ層含む。粘性強、しまり強。

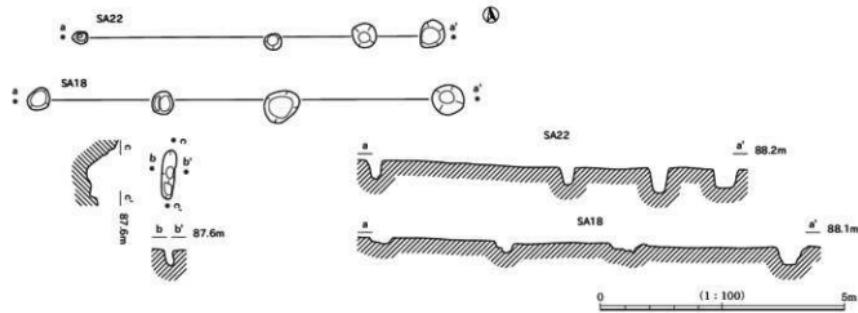
0 19号集石 (1:20) 1m
(1:40) 2m

SX6
1 黒褐色土 炭化粒微量含む。粘性弱、しまり弱。

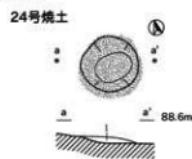
SA16



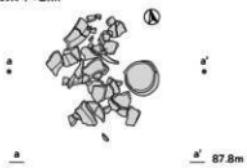
SA18・SA22



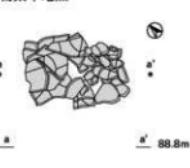
(下層)

24号焼土
1 赤褐色土、粘性泥、しまり強。

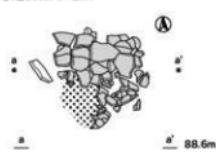
9号遺物集中地点



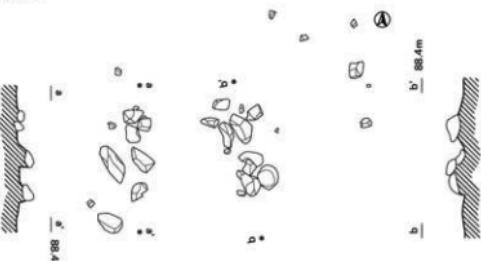
23号遺物集中地点



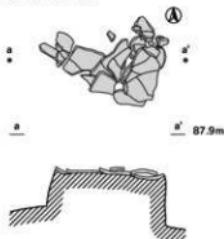
26号遺物集中地点



25号集石



27号遺物集中地点



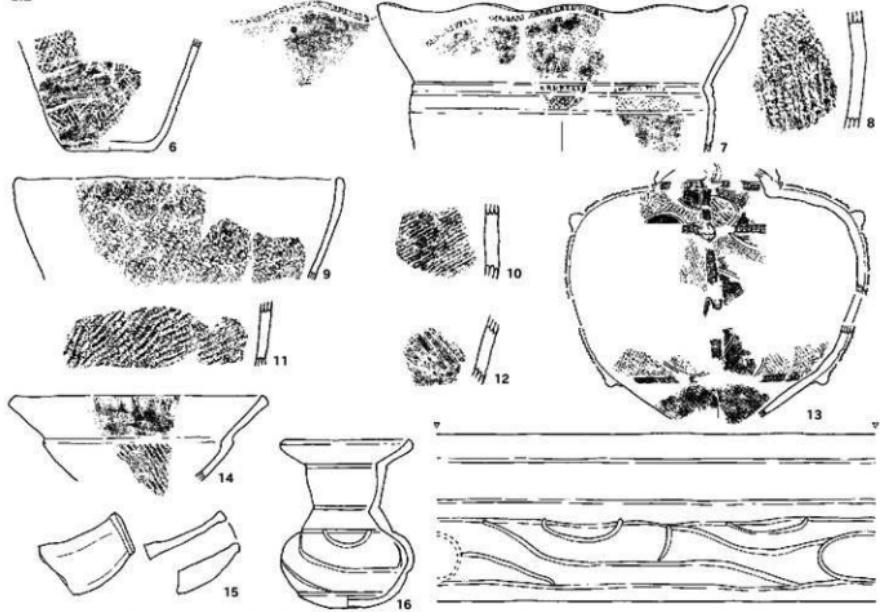
0 その他の遺構 (1 : 20) 1m

0 24号焼土 (1 : 40) 2m

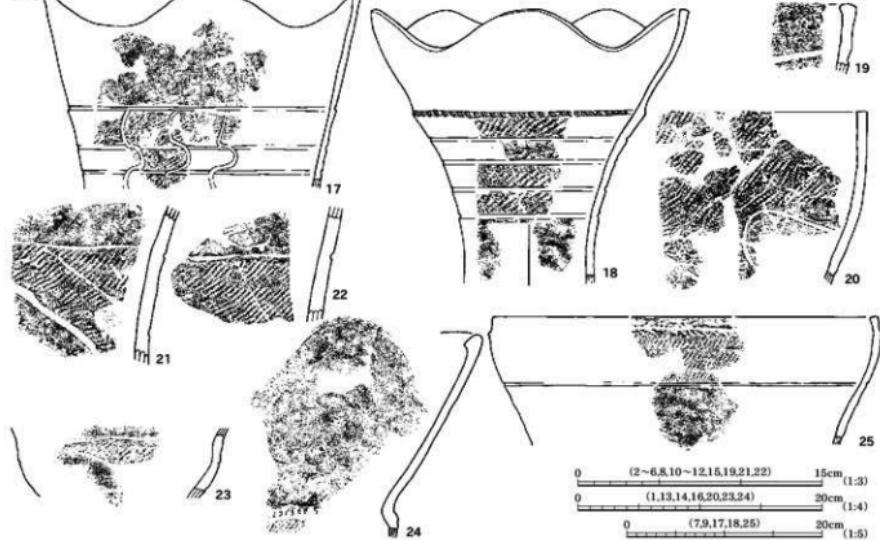
SI1



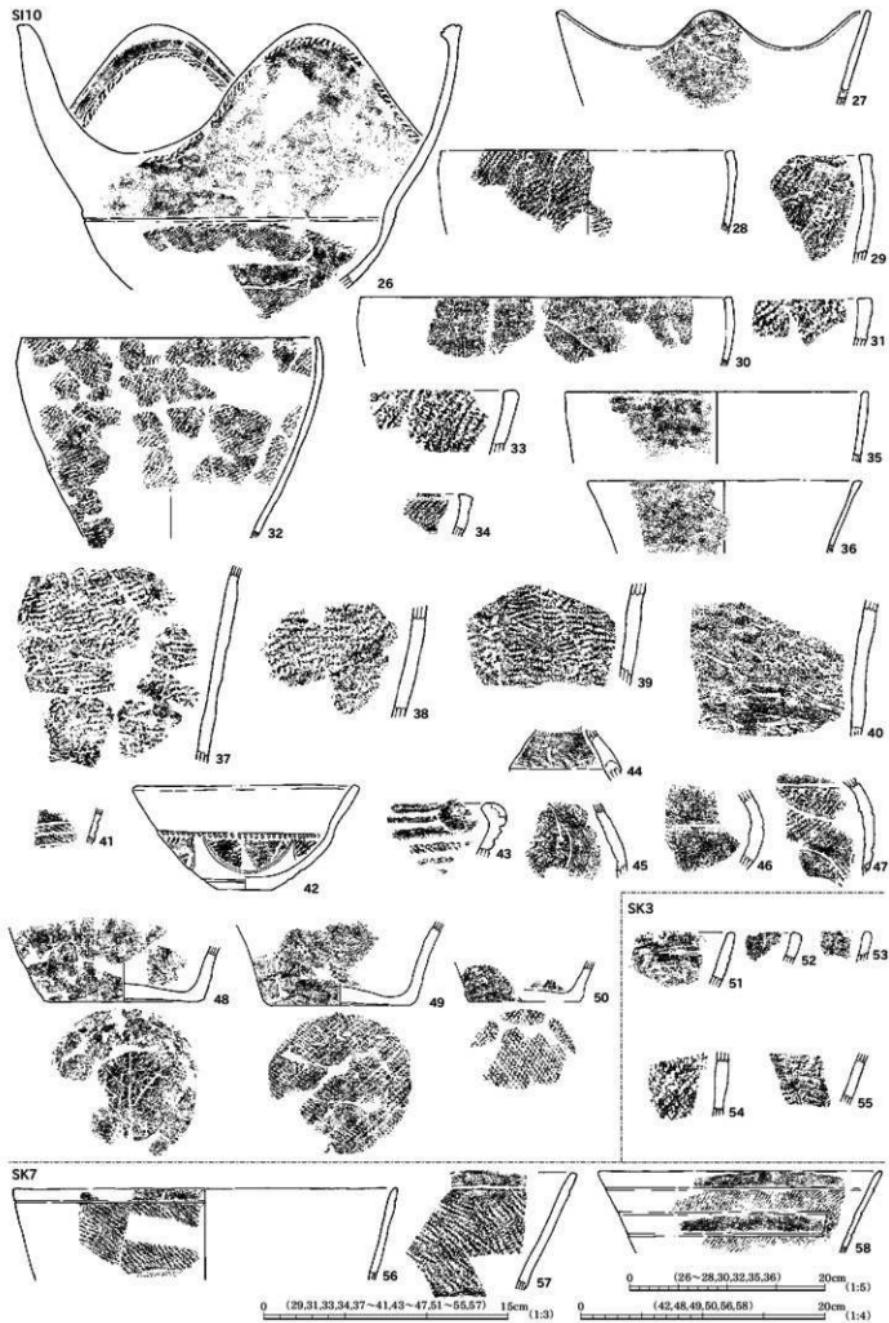
SI2

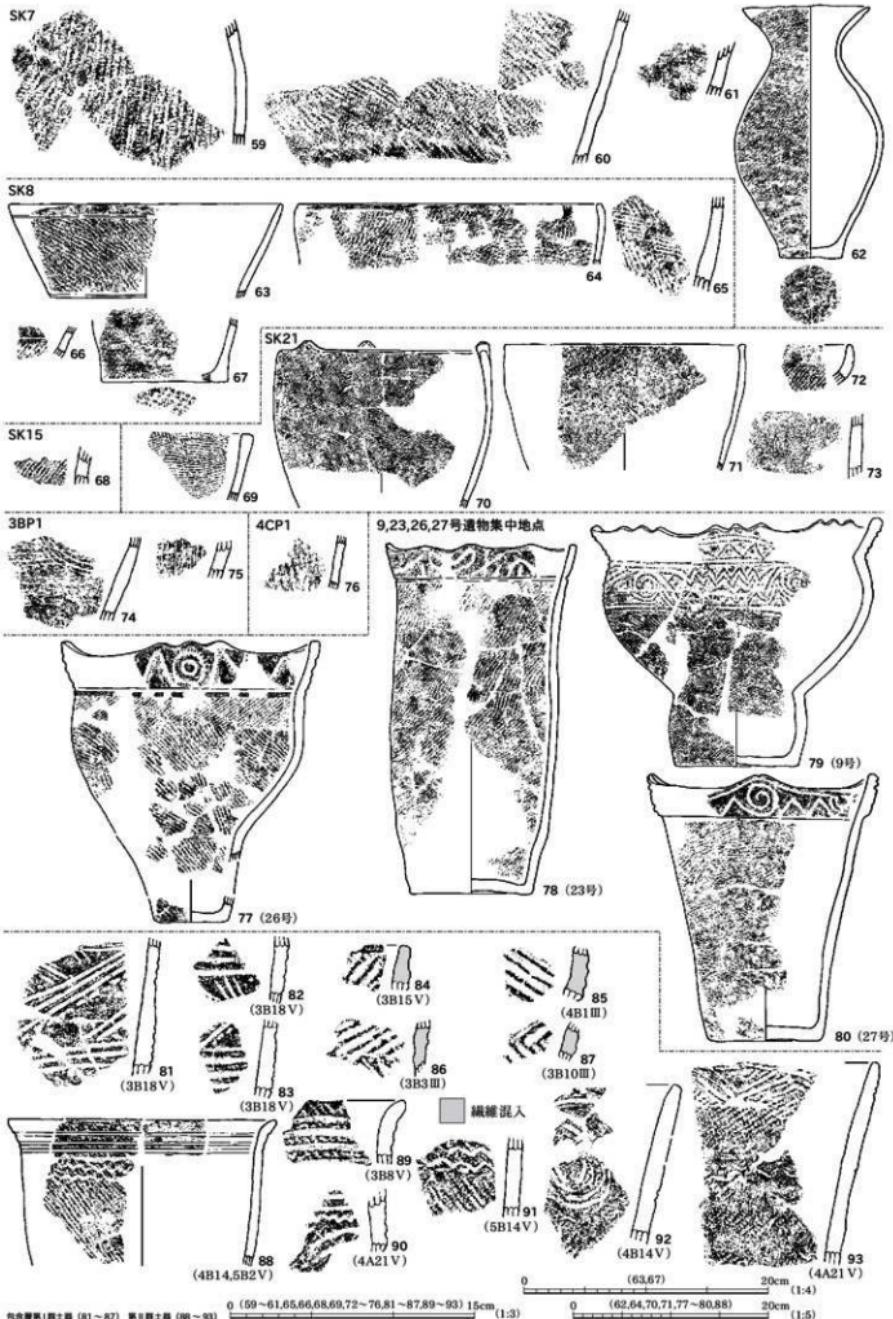


SI10

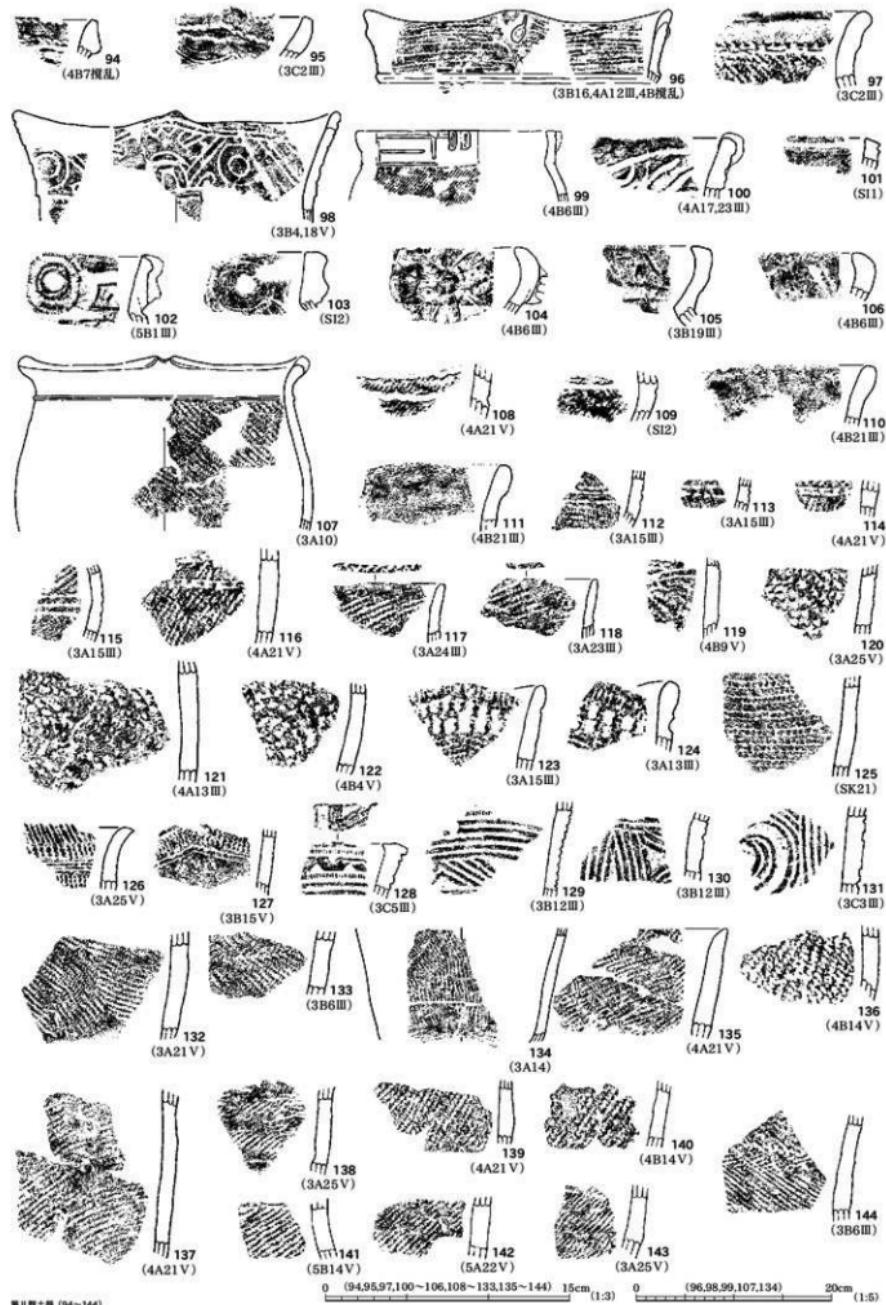


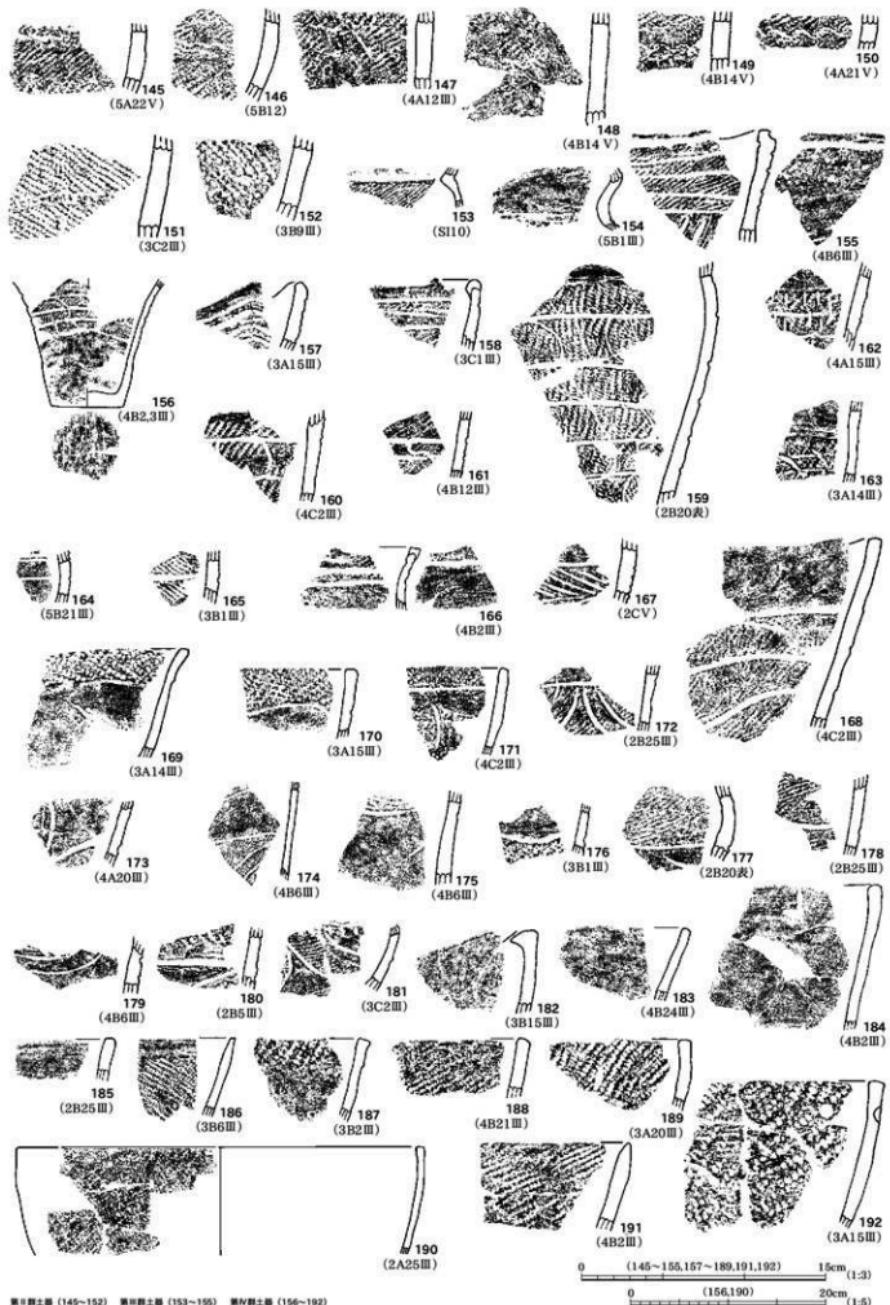
0 (2~6,8,10~12,15,19,21,22) 15cm (1:3)
 0 (1,13,14,16,20,23,24) 20cm (1:4)
 0 (7,9,17,18,25) 20cm (1:5)

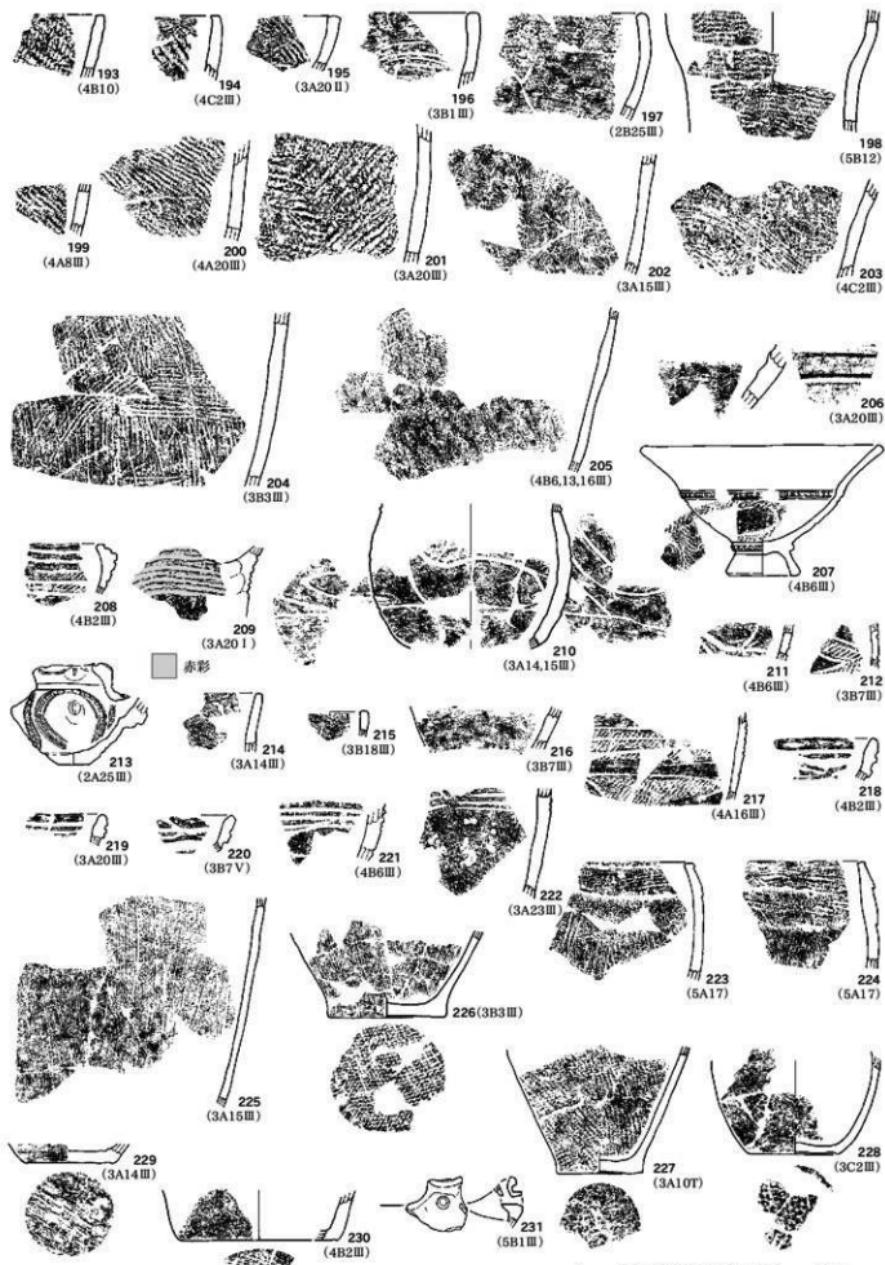




佐々木義勝「土器」(81 ~ 87) 第Ⅱ群土器 (88 ~ 93)

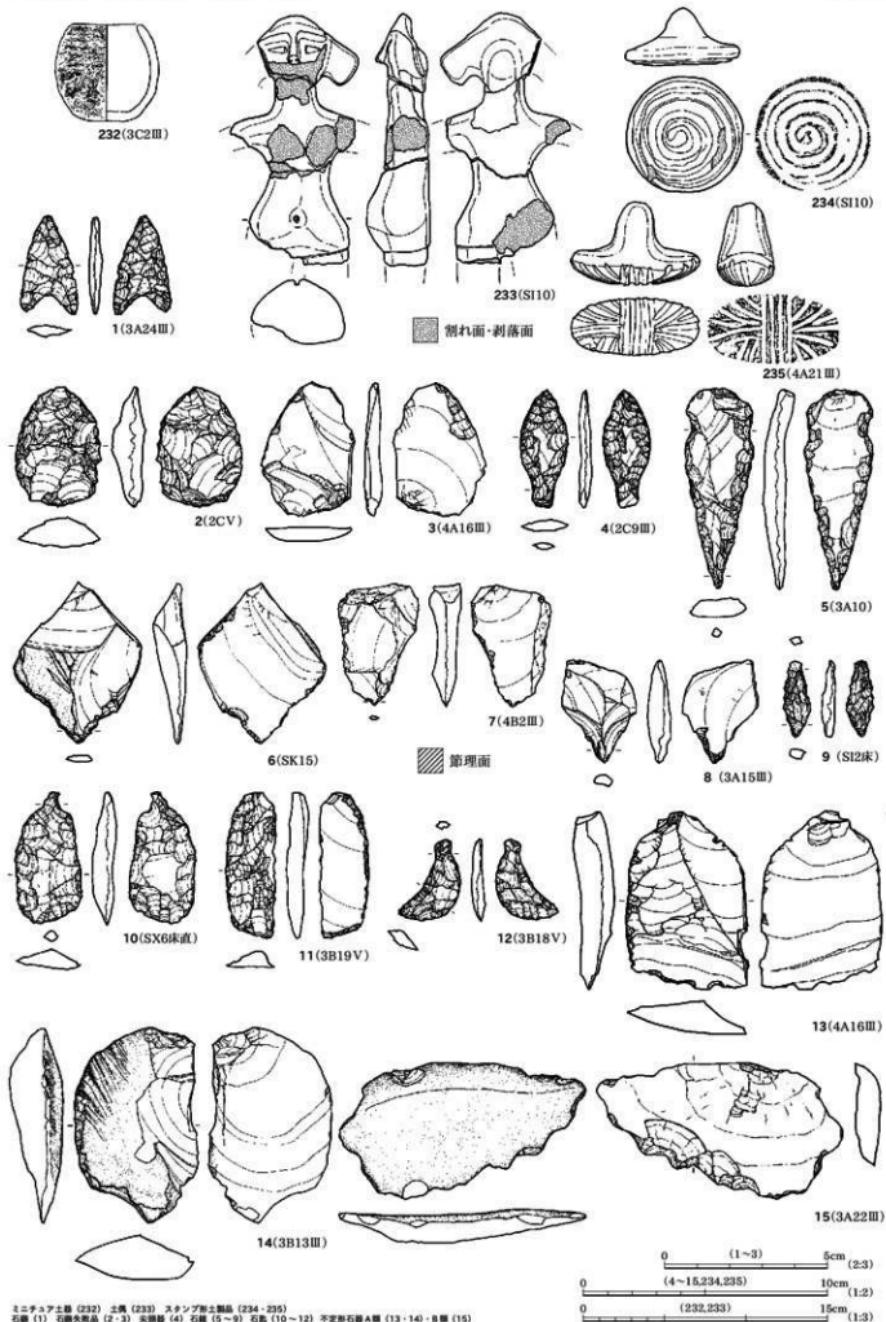


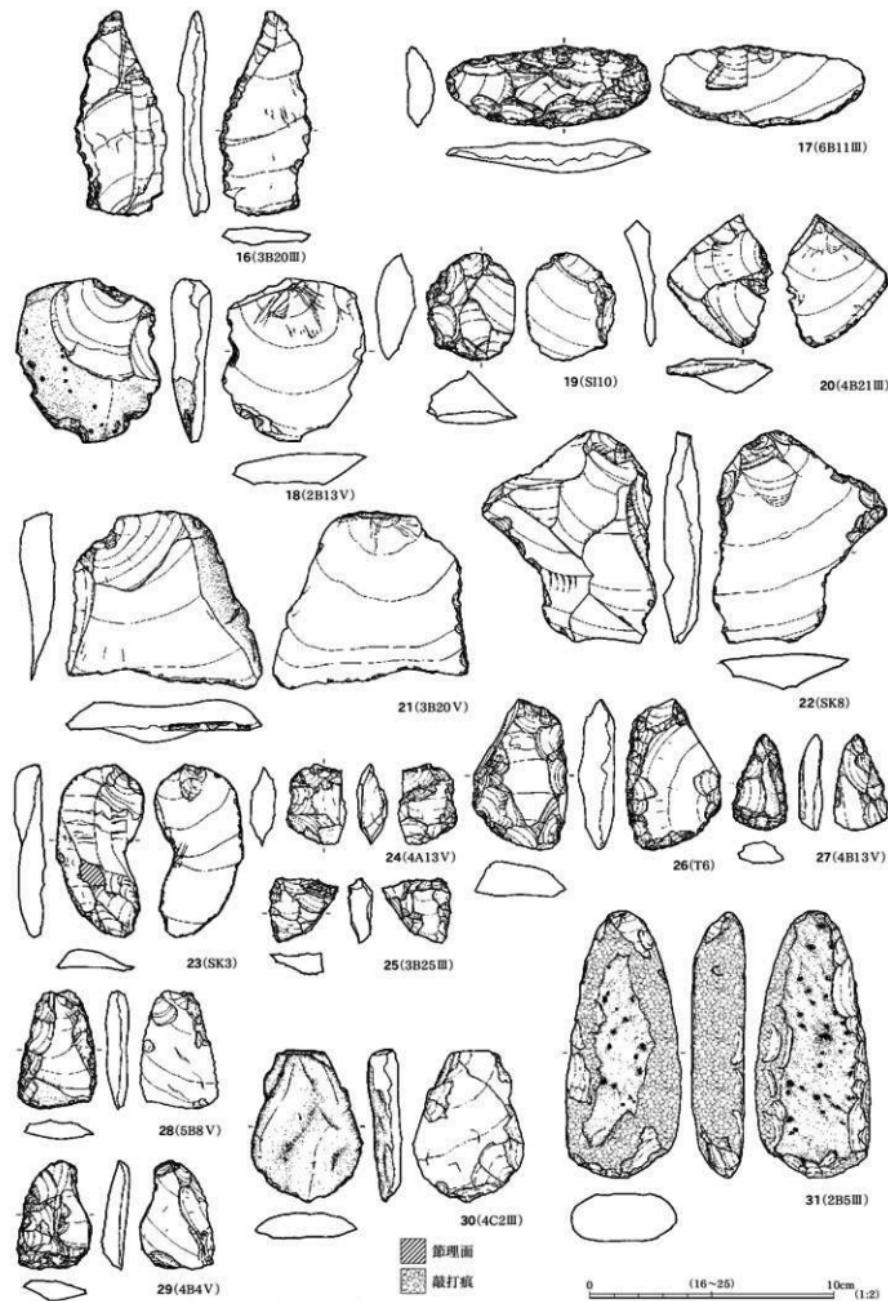




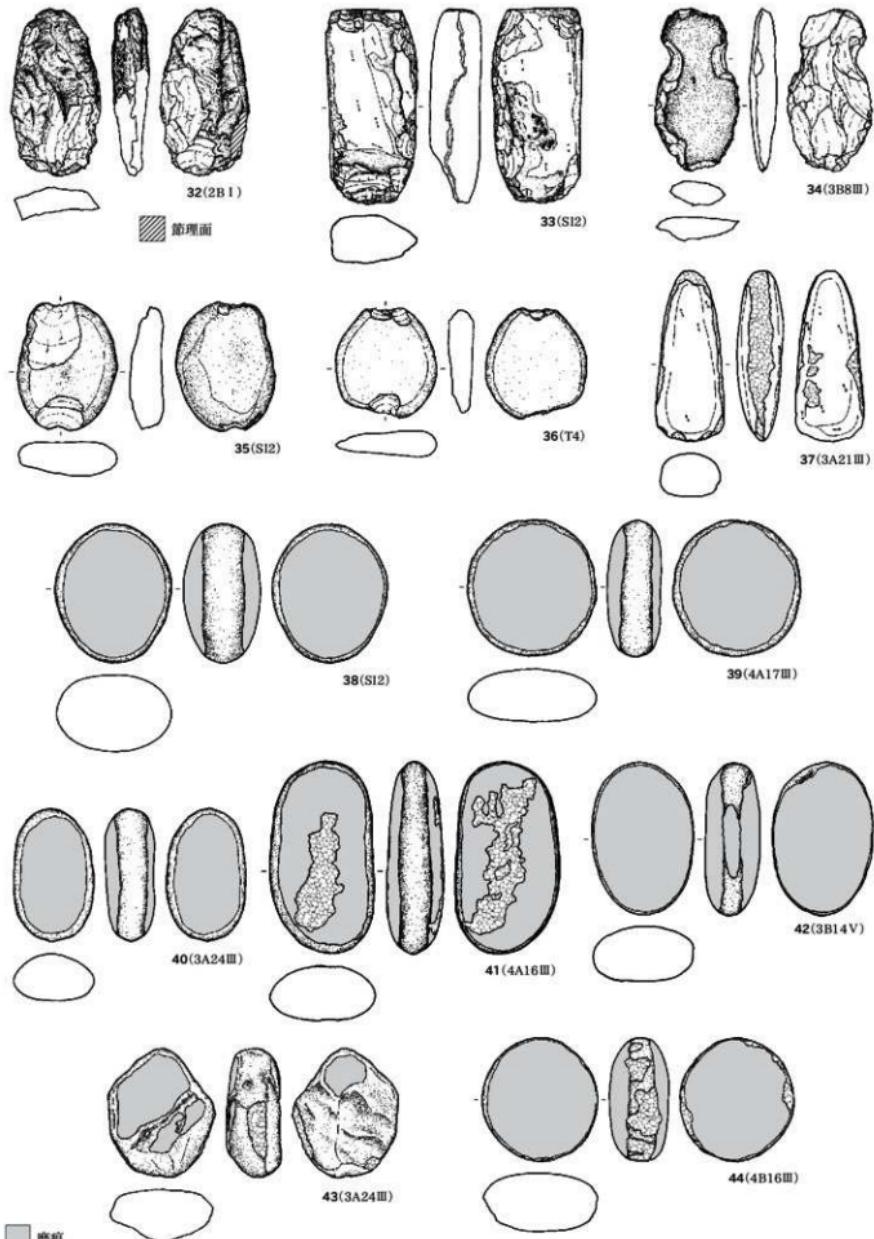
IV層土器 (193~216, 227~231) V層土器 (217~226)

0 (193~206, 208~224, 227~231) 15cm (1:3)
0 (207, 225, 226) 20cm (1:6)





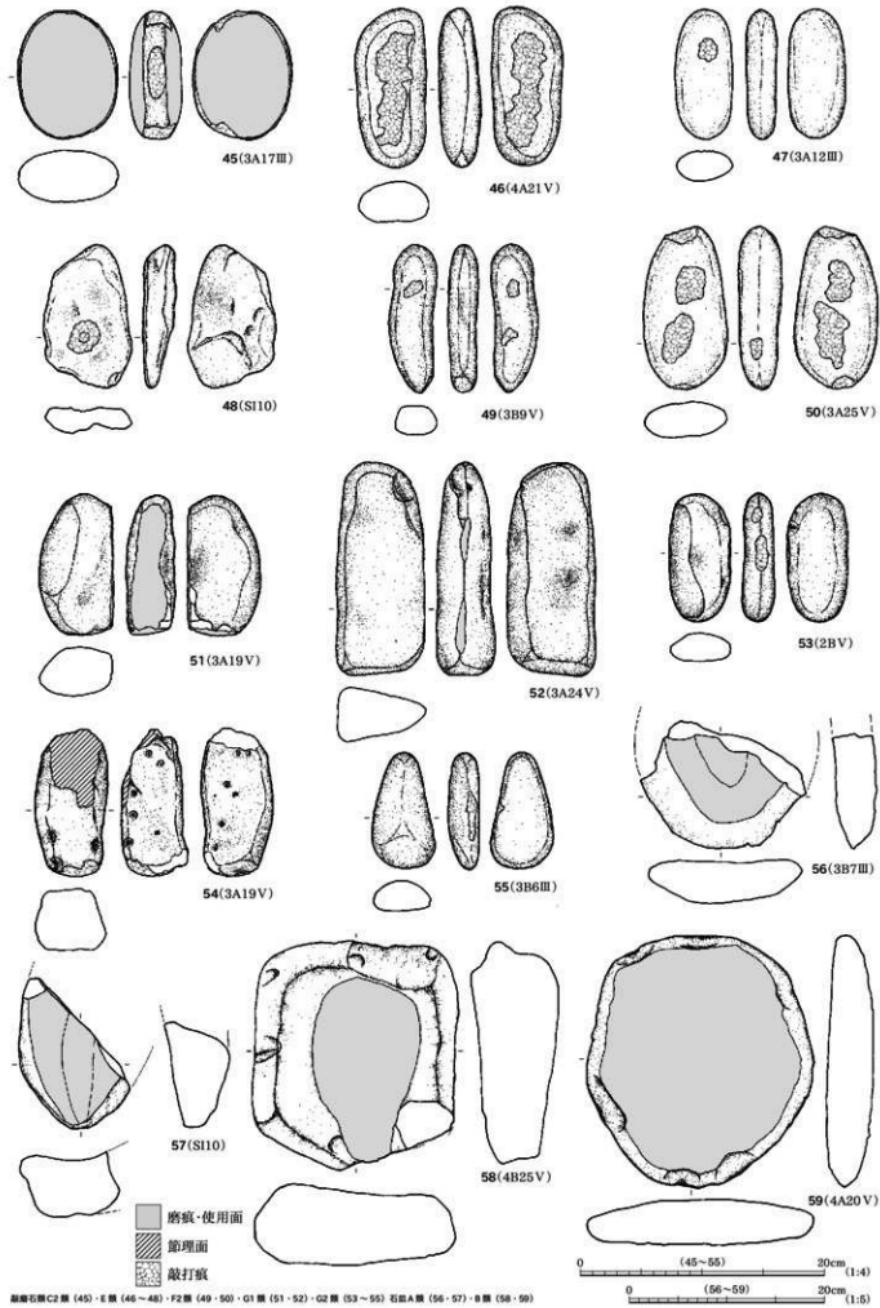
不定形石器 8種 (16)・C種 (17)・D種 (18)・E種 (19・20)・F種 (21・22)・G種 (23) 両側削離痕のある石器 (24・25)
茎状石器 (26・29) 打撃石器 (30・31)



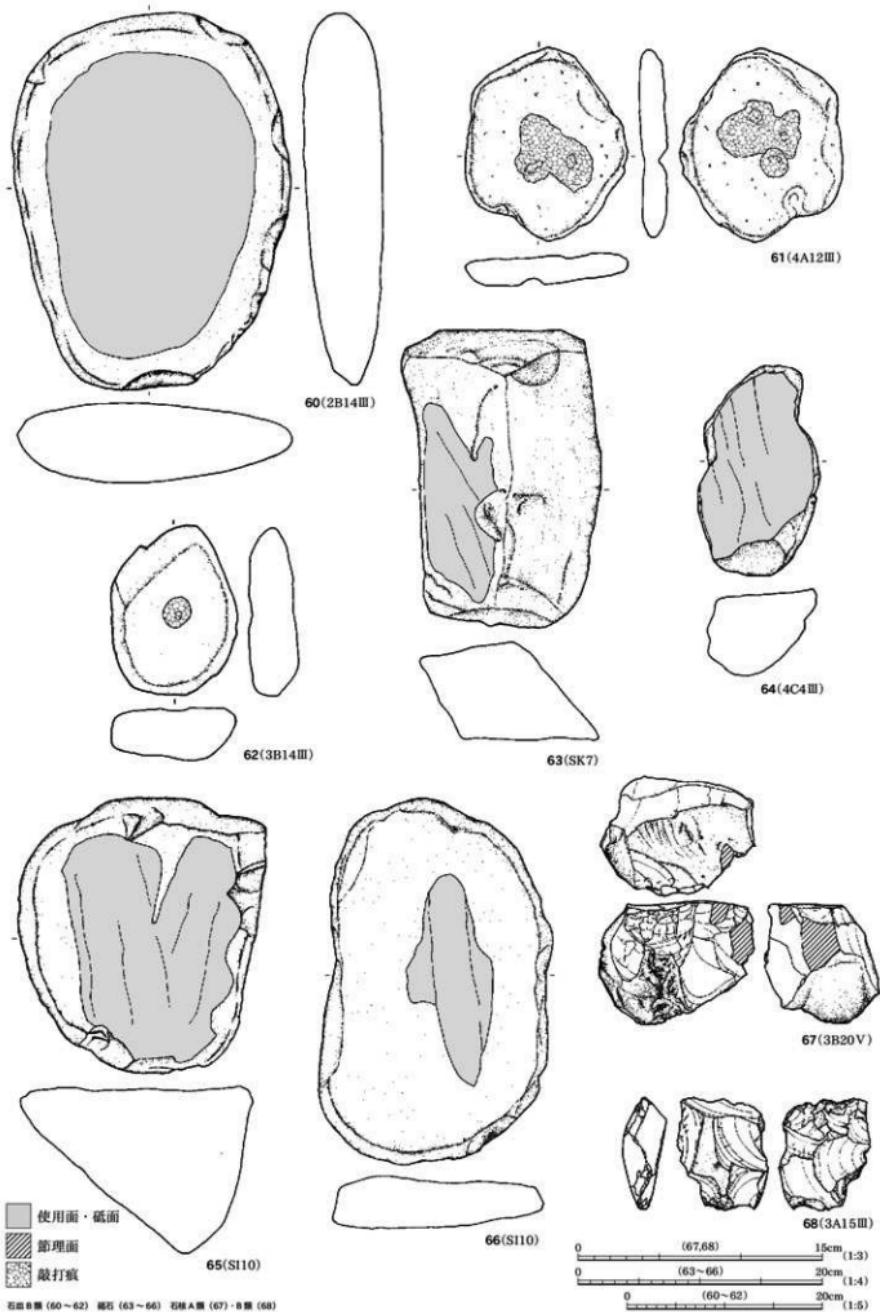
打削石片 (32~34) 石棒 (35~36) 扇形石片 (37) 扇形石器A類 (38~40) · B類 (41) · C1類 (42) · C2類 (43~44)

0 (32~37) 15cm (1:3)

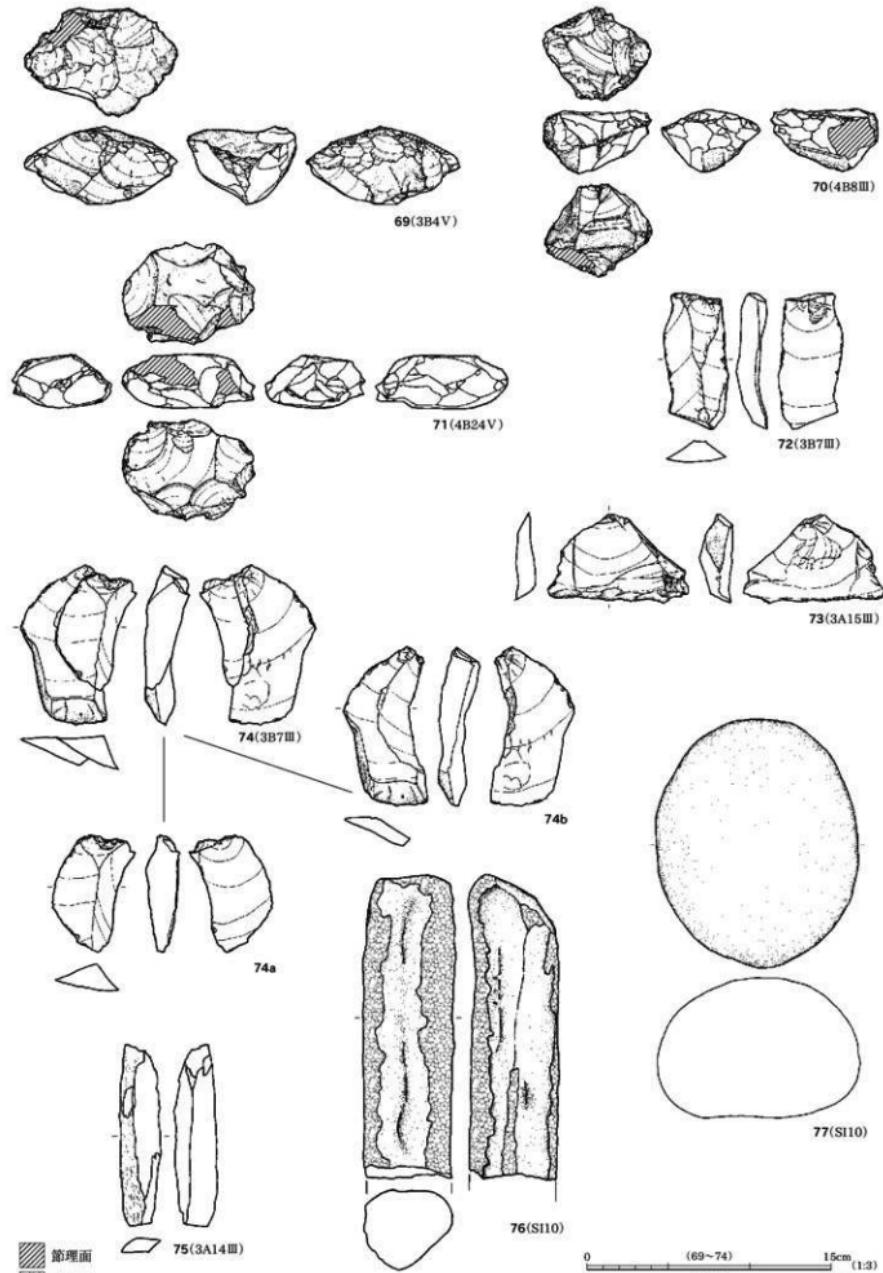
0 (38~44) 20cm (1:4)



鉄頭石器C2種 (45)・E種 (46~48)・F2種 (49・50)・G1種 (51~52)・G2種 (53~55) 石器A種 (56~57)・B種 (58~59)



石器 8 個 (60 ~ 62) 磨石 (63 ~ 66) 石核 A 面 (67) - B 面 (68)



石核 C 型 (69)・D 型 (70)・E 型 (71) 刃片 (72-73) 扇合剥片 (74) 石剣 (75) 石棒 (76) 头石 (77)

■ 節理面
□ 敲打痕

75(3A14Ⅲ)

76(SI10)

0 (69~74) 15cm (1:3)
0 (75,76) 20cm (1:4)
0 (77) 20cm (1:5)



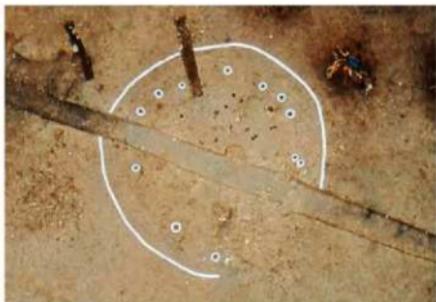
遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院 昭和51年9月26日撮影、空中写真）



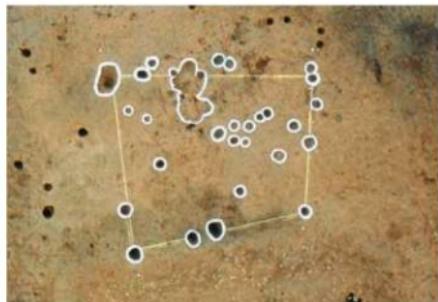
上野東遺跡 遠景（北西から）



上野東遺跡 完掘全景



SI8 完掘全景



SI14 完掘全景



土器（前期後葉）



石器（上段範状石器、下段左 6 点石鏃、中 5 点尖頭器、右 3 点石匙）



1B10 基本層序（南東から）



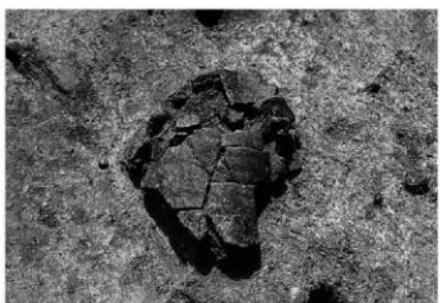
3A4 基本層序（南から）



S18 完掘（北東から）



S18 土層断面（南西から）



S18 遺物出土状況（北から）



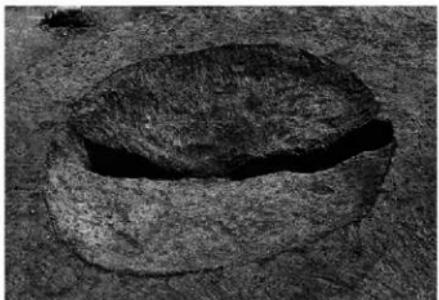
S14 完掘（北東から）



S14 カマド完掘（北東から）



S14 カマド土層断面（北東から）



SK6 完掘（南西から）



SK7 完掘（西から）



SK13 土層断面（南から）



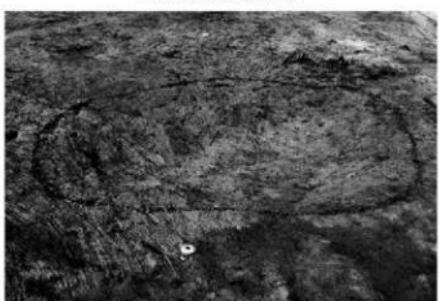
SK13 完掘（南東から）



SK15 検出状況（北西から）



SK15 土層断面（北西から）



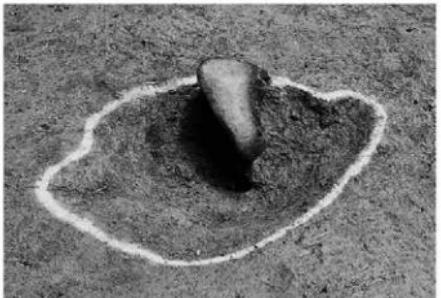
SK15 完掘（南西から）



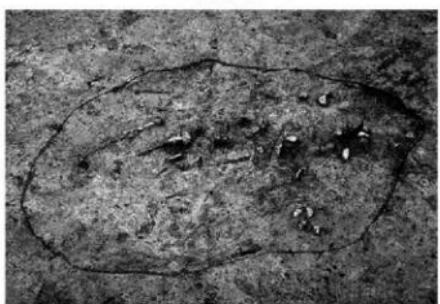
SK17 完掘（北西から）



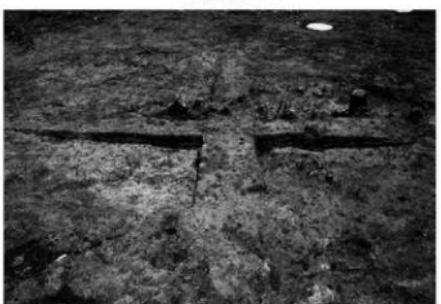
SK18 土層断面（西から）



SK18 完掘（南西から）



1号焼土 検出状況（南から）



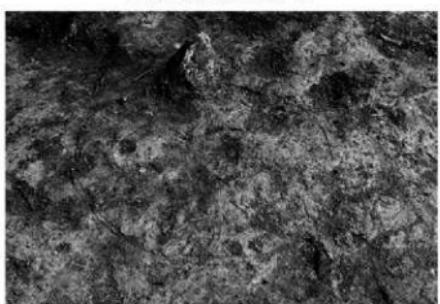
1号焼土 土層断面（南から）



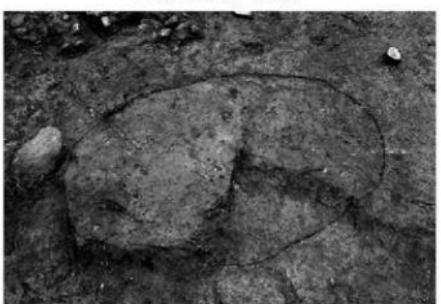
2号焼土 検出状況（南西から）



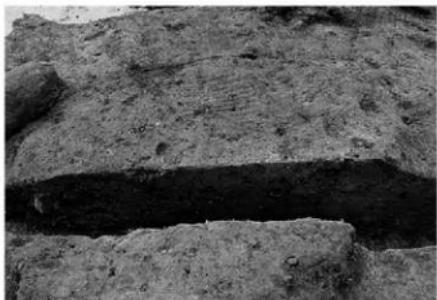
2号焼土 土層断面（西から）



3号焼土 検出状況（南から）



9号焼土 検出状況（北西から）



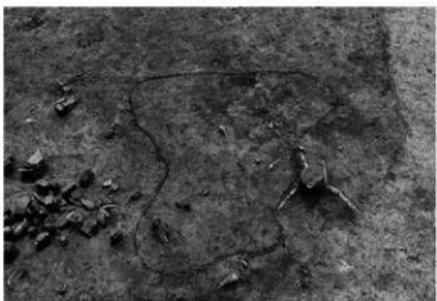
9号焼土 土層断面（北西から）



16号焼土 検出状況（南西から）



16号焼土 土層断面（南西から）



4号硬化面 検出状況（北西から）



5号遺物集中地点 検出状況（北西から）



20号炭窯 確出土状況（西から）



20号炭窯 土層断面（西から）

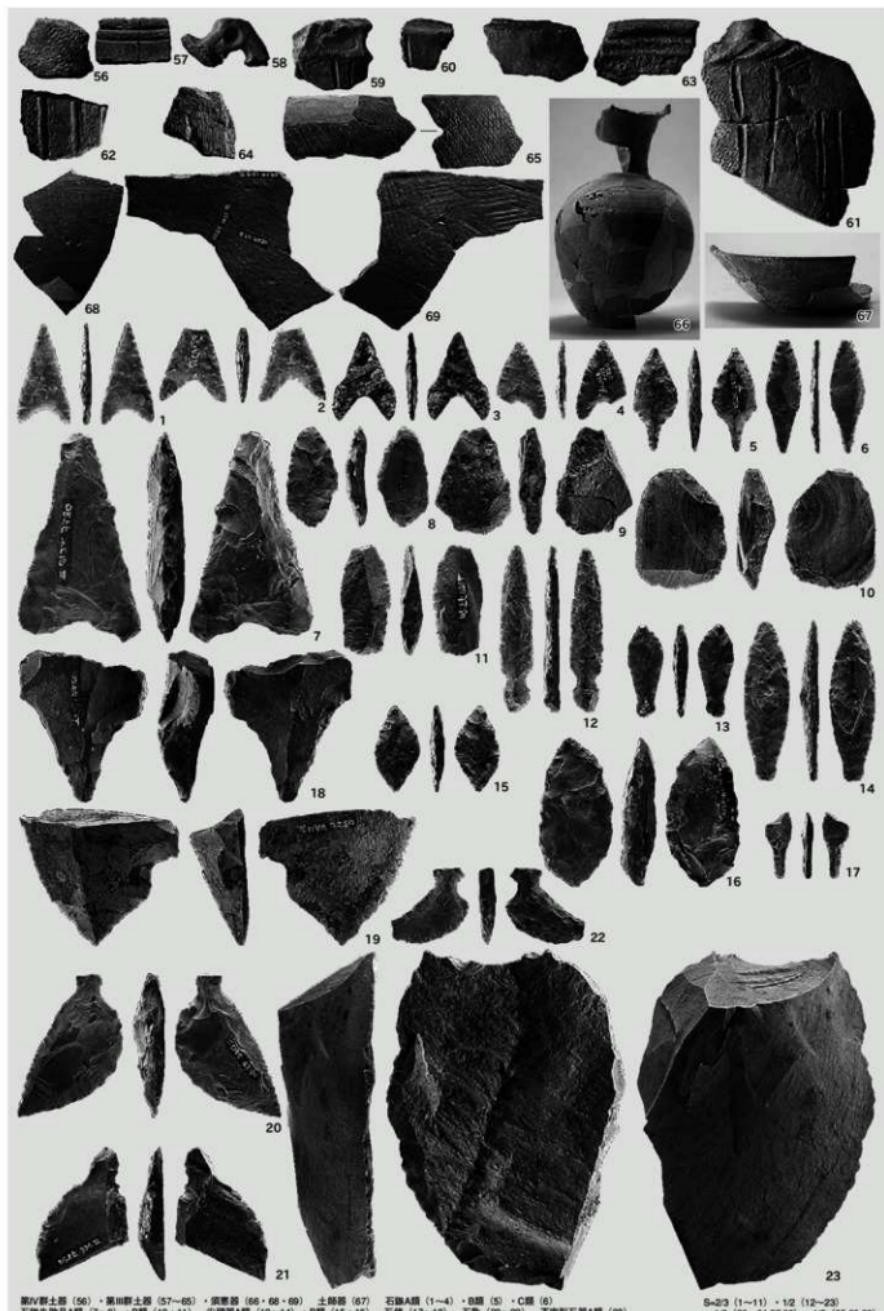


20号炭窯 完掘（東から）



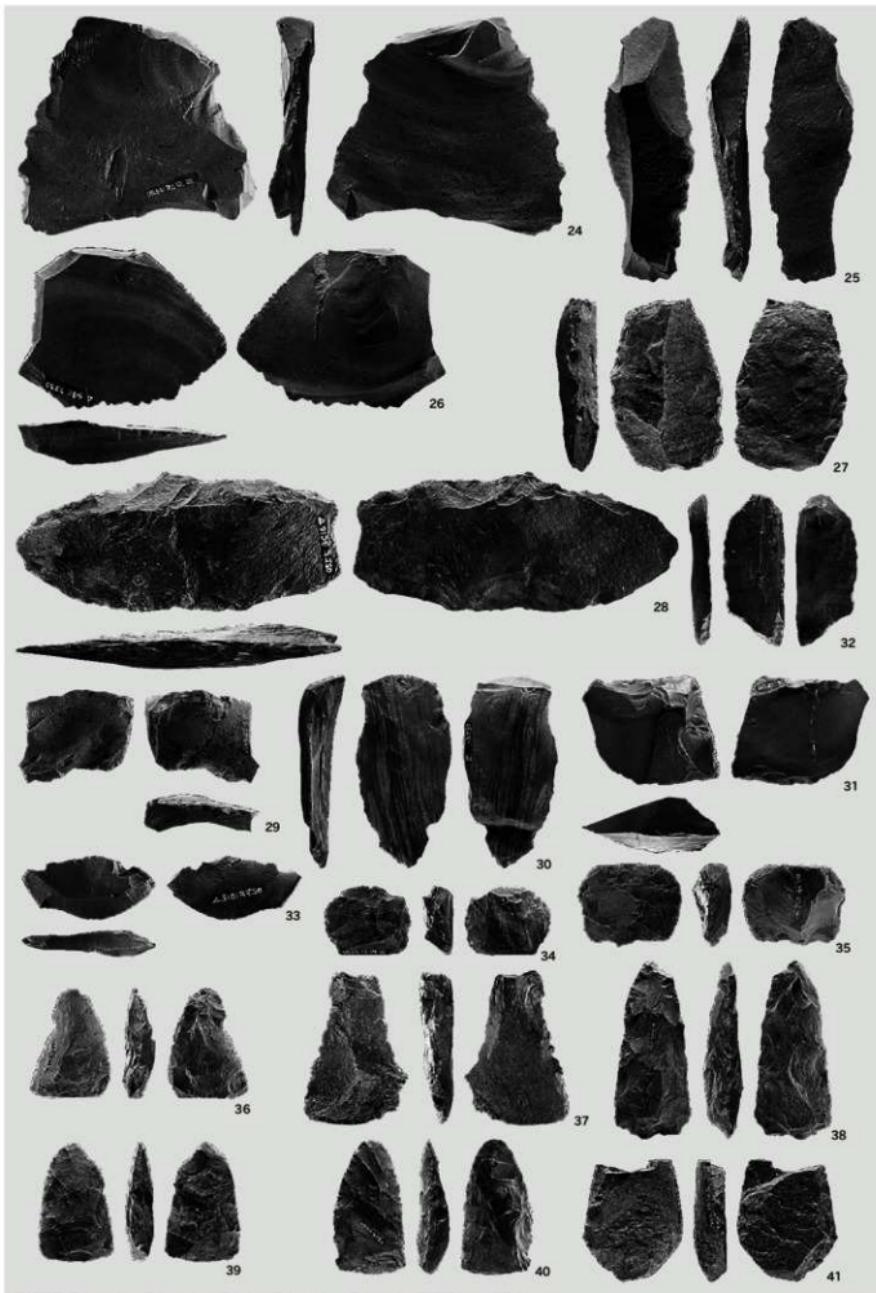
SK8 (1~3) · SK6 (4) · SK17 (5) · 1号施土 (6~7) · 16号施土 (8) · 5号遺物集中地点 (9~12) · 包含繩文I群土器 (13~15) · 第III群土器 (16~39) · 第IV群土器 (40~55)

5=1/3 (2,3,5~8,11,13~23,25,27,30,31,33~55)
1/5 (1,4,9,10,12,24,26,28,29,32)



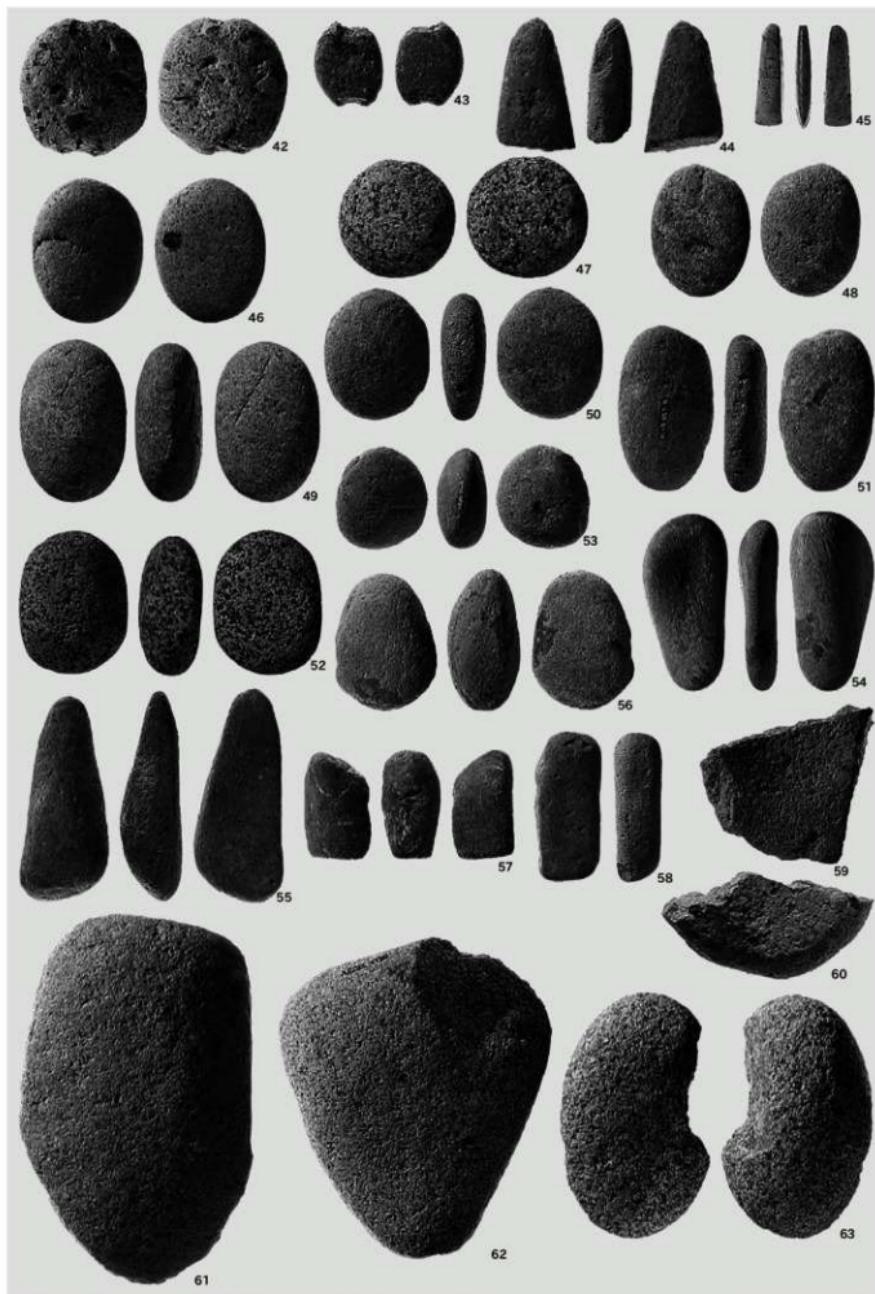
第IV層土器 (56)・第III層土器 (57-65)・圓窓器 (66-68-69)・土器器 (67)・石器A類 (1-4)・石器 (5)・C類 (6)
石器失敗品A類 (7-9)・B類 (10-11)・実驗器A類 (12-14)・B器 (15-16)・石器 (17-19)・石器 (20-22)・不定形石器A類 (23)

9-23 (1-11)・1/2 (12-23)
1/3 (56-64, 67, 69)・1/5 (65, 66, 68)



不規形石器B類 (24~26) · C類 (27~28) · D類 (29) · F類 (30~31) · G類 (32~33) 同様剥離度のある石器 (34~35)
塊状石器A類 (36~37) · B類 (38~40) 打製石器 (41)

B+D (24~25)
13 (36~41)



石錠 (42・43)・磨き石形 (44・45)・敲磨石頭A面 (46・47)・B面 (48)・C1面 (49・50)・C2面 (51)
D1面 (52)・D2面 (53)・E面 (54)・F1面 (55)・G1面 (56)・G2面 (57・58)・石錠A面 (59・60)・B面 (61・63)

S=1/3 (42~45) + 1/4 (46~58)
1/5 (59~63)



石器B器 (64) 積石 (65・66) 石核B器 (67) · D器 (68・69) · E器 (70) · 分類不可 (71) 削片器 (72・73)
接着合資料 (74) 背形石器 (75) 丸石 (76)

S-23 (75) · 1/3 (67~74)
1/4 (65,66) · 1/5 (64,76)



現明倣遺跡 遠景（南西から）



現明倣遺跡 上層完掘全景



SI10 遺物出土状況（南から）



SI11 遺物出土状況（南西から）



SI2 遺物出土状況（南から）



下層出土土器（前期未葉）



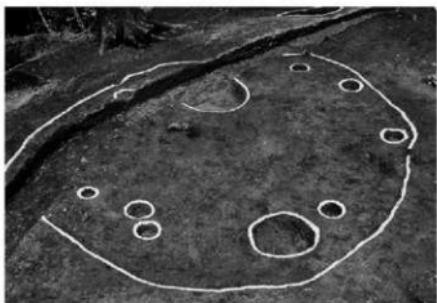
上層出土土器（後期中葉）



4A～5A グリッド 基本層序（南西から）



4A16 基本層序（南西から）



SI1 完掘（南西から）



SI1 炉 换出状況（南から）



SI1 炉 土層断面（北西から）



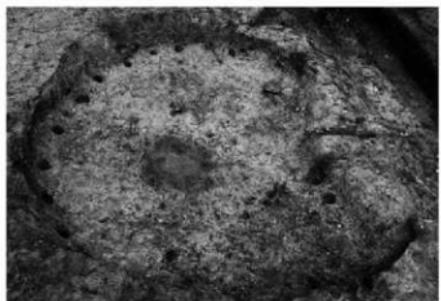
SI2 完掘（南から）



SI2 土層断面（南から）



SI2 遺物出土状況（南から）



SI10 完掘（西から）



SI10 土層断面（北から）



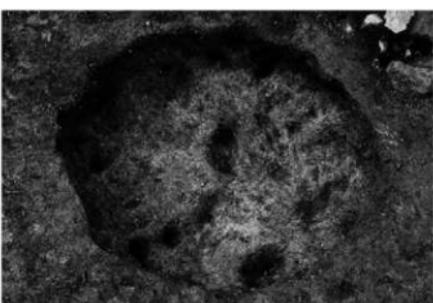
SI10 土層断面（東から）



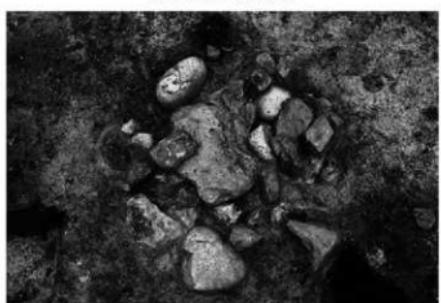
SI10 遺物出土状況（南東から）



SK3 土層断面（南東から）



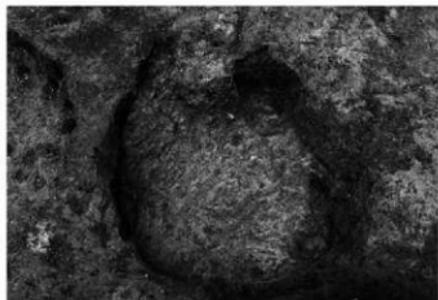
SK3 完掘（南東から）



SK5 掘出状況（南東から）



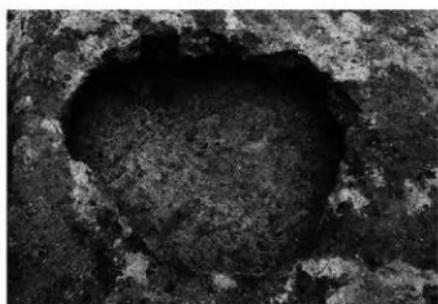
SK5 土層断面（北東から）



SK5 完掘（南東から）



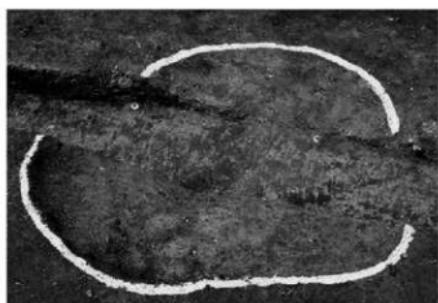
SK7 遺物出土状況（東から）



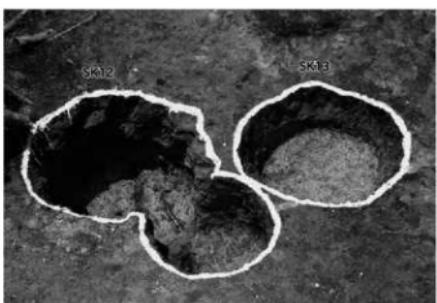
SK7 完掘（西から）



SK8 完掘（南西から）



SK11 完掘（南から）



SK12・13 完掘（東から）



SK17 土層断面（北から）



SK17 完掘（北から）



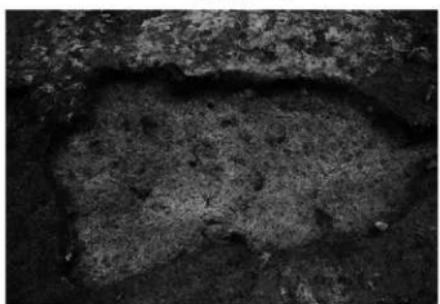
19号集石 掘出状況（北東から）



SK21 土層断面（西から）



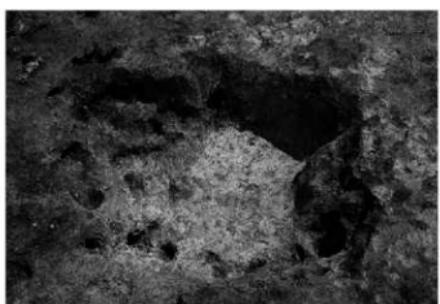
SK21 完掘（北から）



SX6 完掘（西から）



4号炭窯 土層断面（西から）



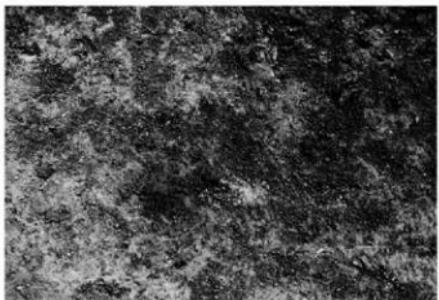
4号炭窯 完掘（東から）



SA16 完掘（北から）



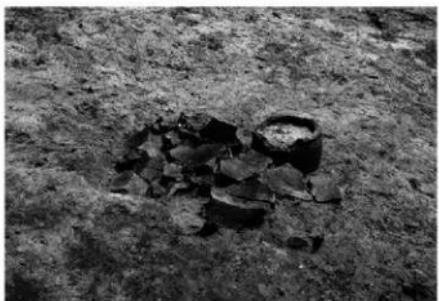
SA18・22 完掘（東から）



24号焼土 検出状況（南から）



24号焼土 土解断面（南から）



9号遺物集中地点 検出状況（南西から）



23号遺物集中地点 検出状況（南西から）



26号遺物集中地点 検出状況（南から）



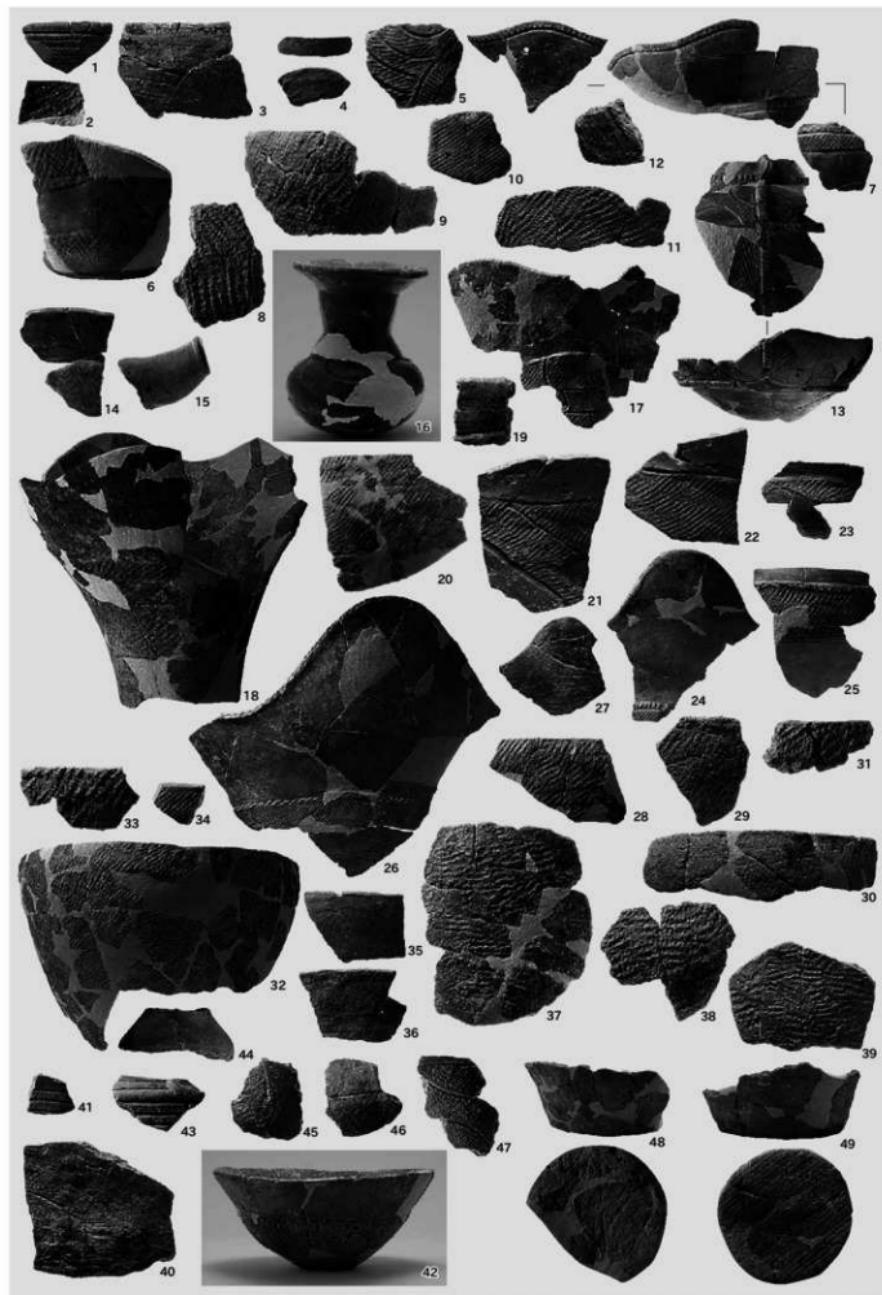
27号遺物集中地点 検出状況（南西から）

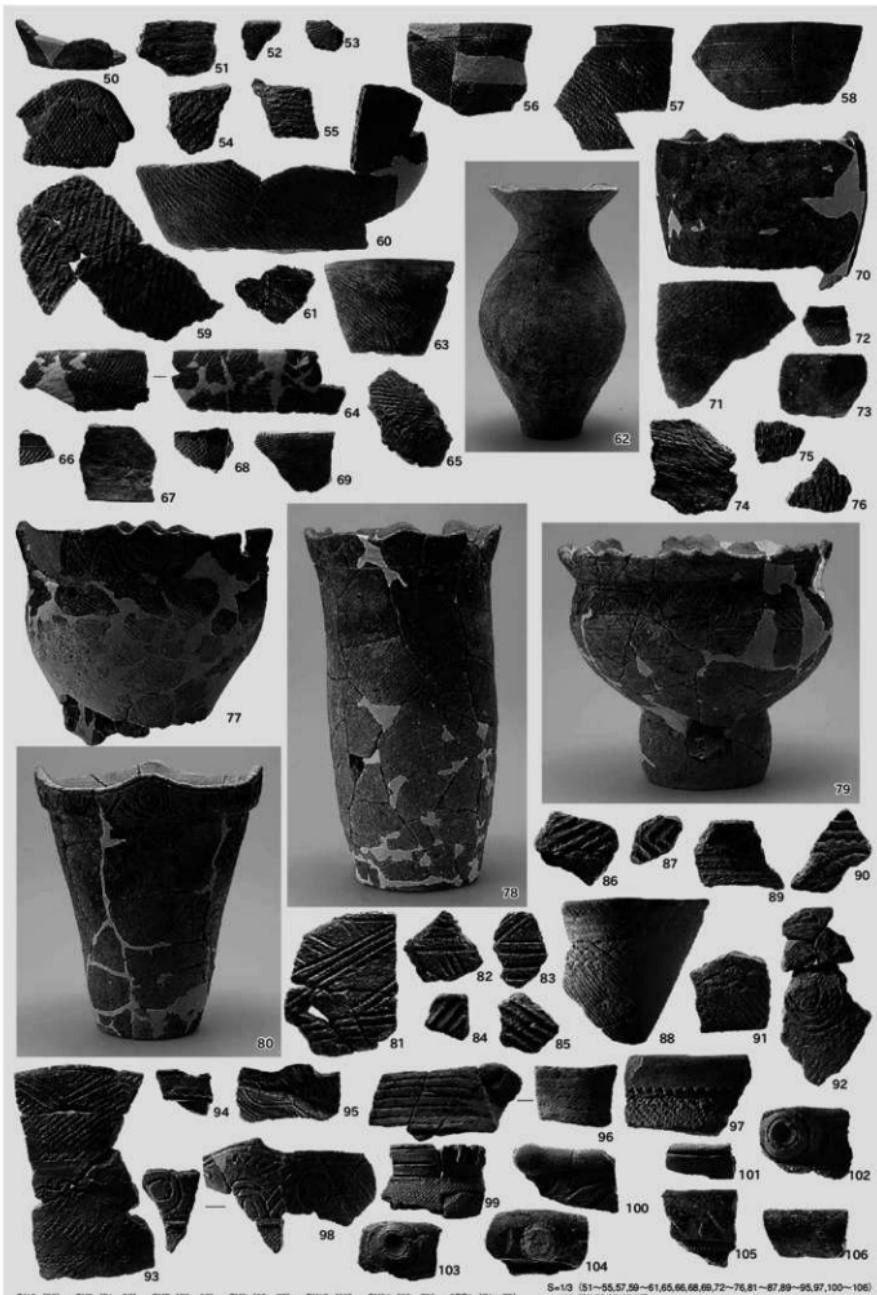


25号集石 検出状況（南から）



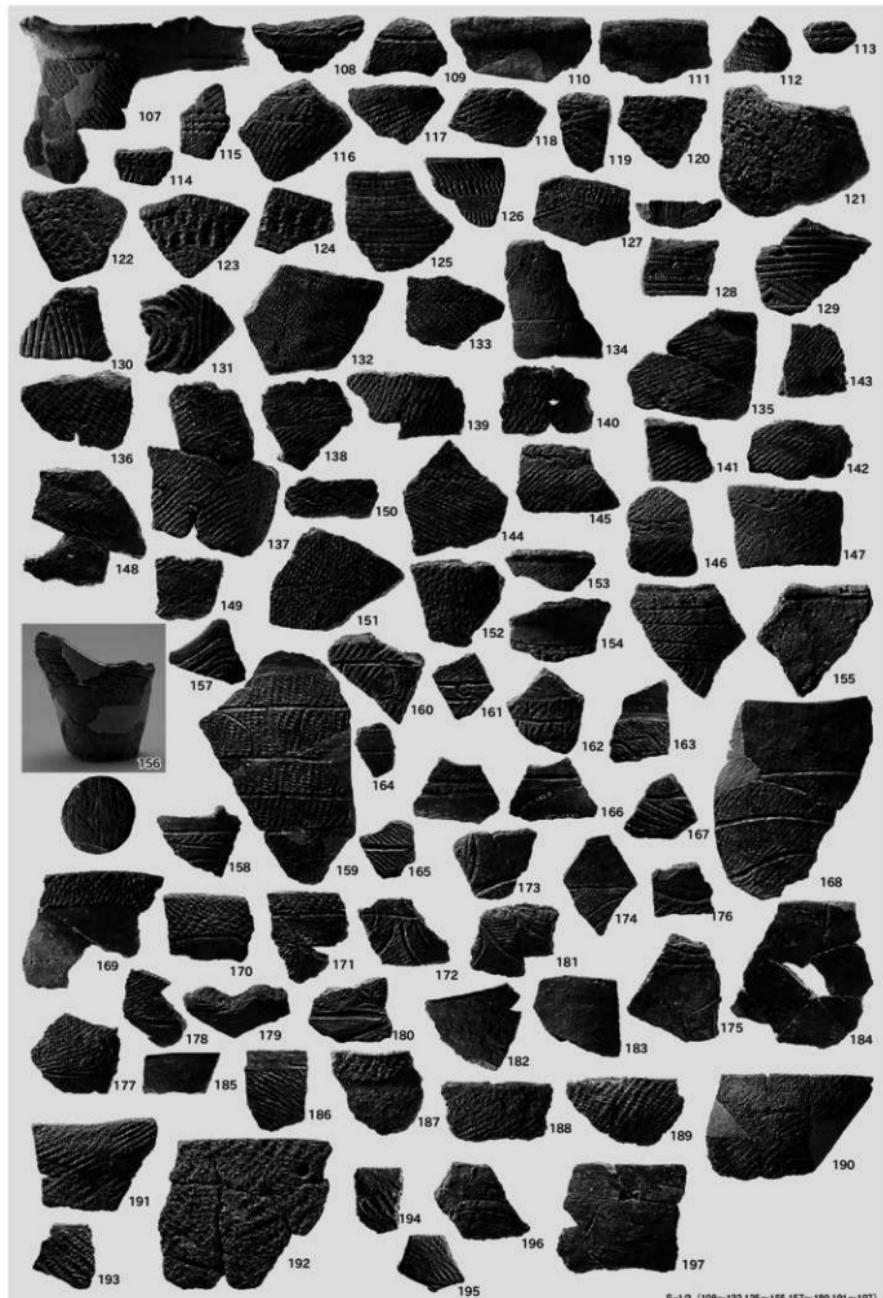
調査風景





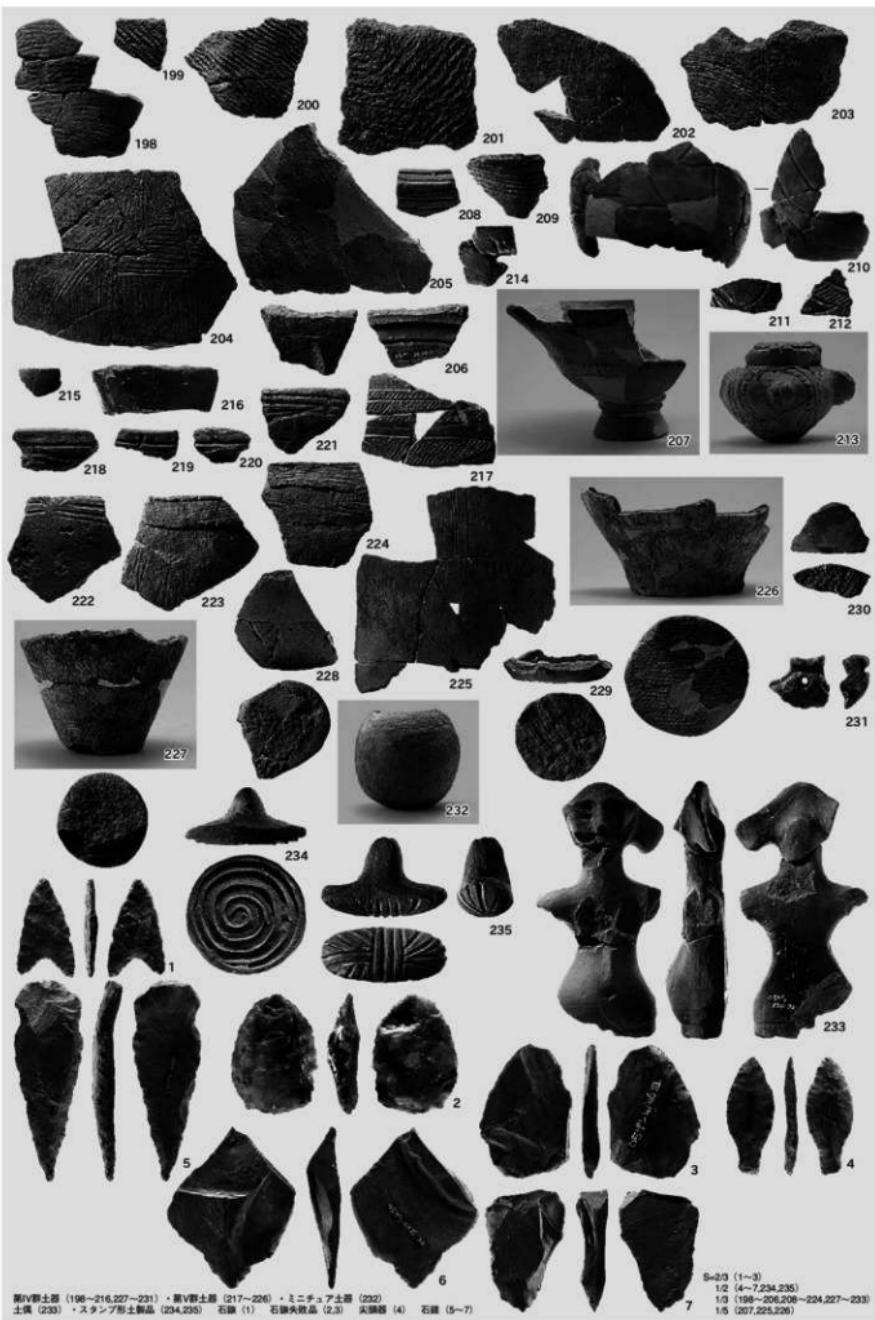
SH10 (50)・SK3 (51~55)・SK7 (56~62)・SK8 (63~67)・SK15 (68)・SK21 (69~73)・3BP1 (74~75)
4CP1 (76)・9.23,26,27号遺物集中地点 (77~80)・包含層Ⅰ(81~87)・層Ⅱ(88~106)

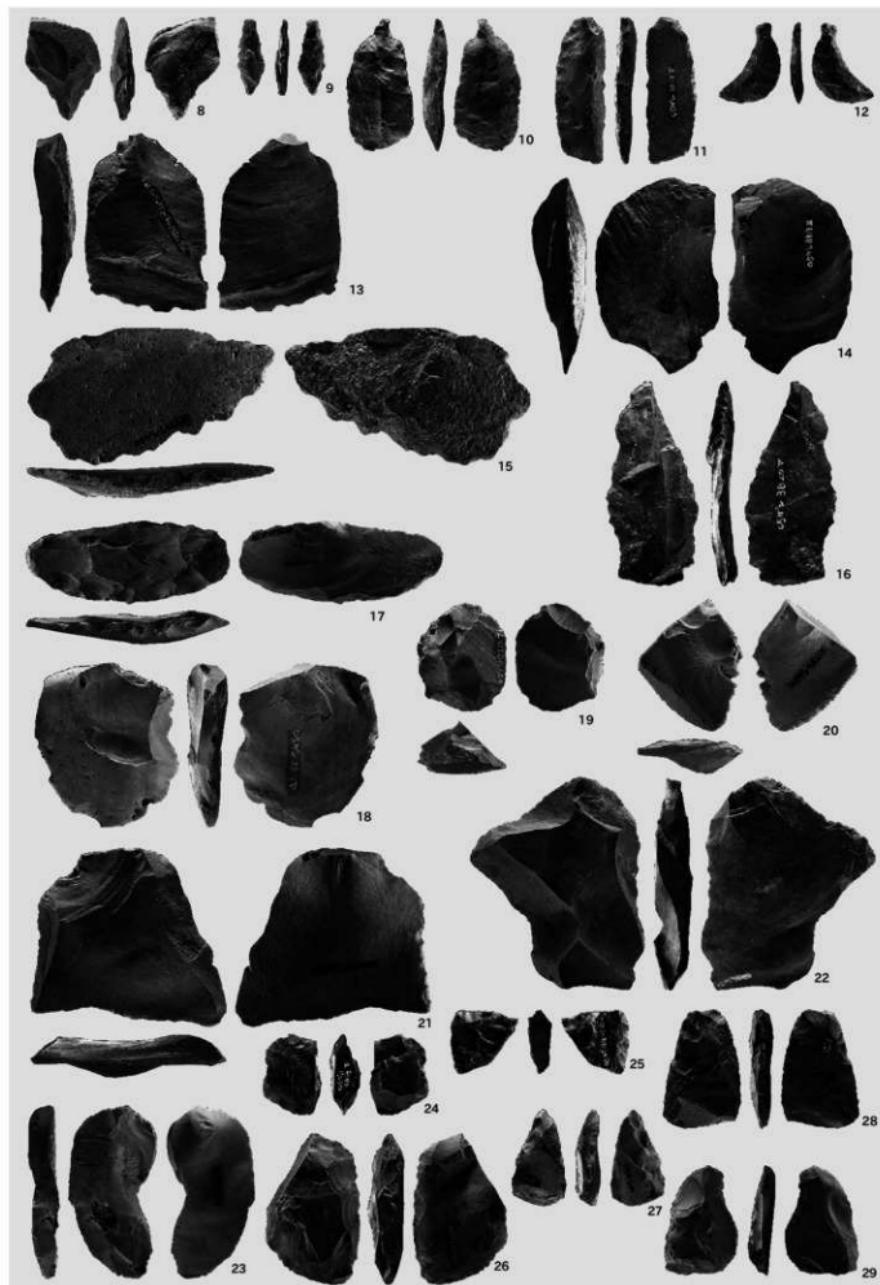
S=13 (51~55,57,59~61,65,66,68,69,72~76,81~87,89~95,97,100~106)
1/4 (50,56,58,63,67)
1/5 (62,64,70,71,77~80,88,96,98,99)



第III群土器 (107~152)・第III群土器 (153~156)・第IV群土器 (156~197)

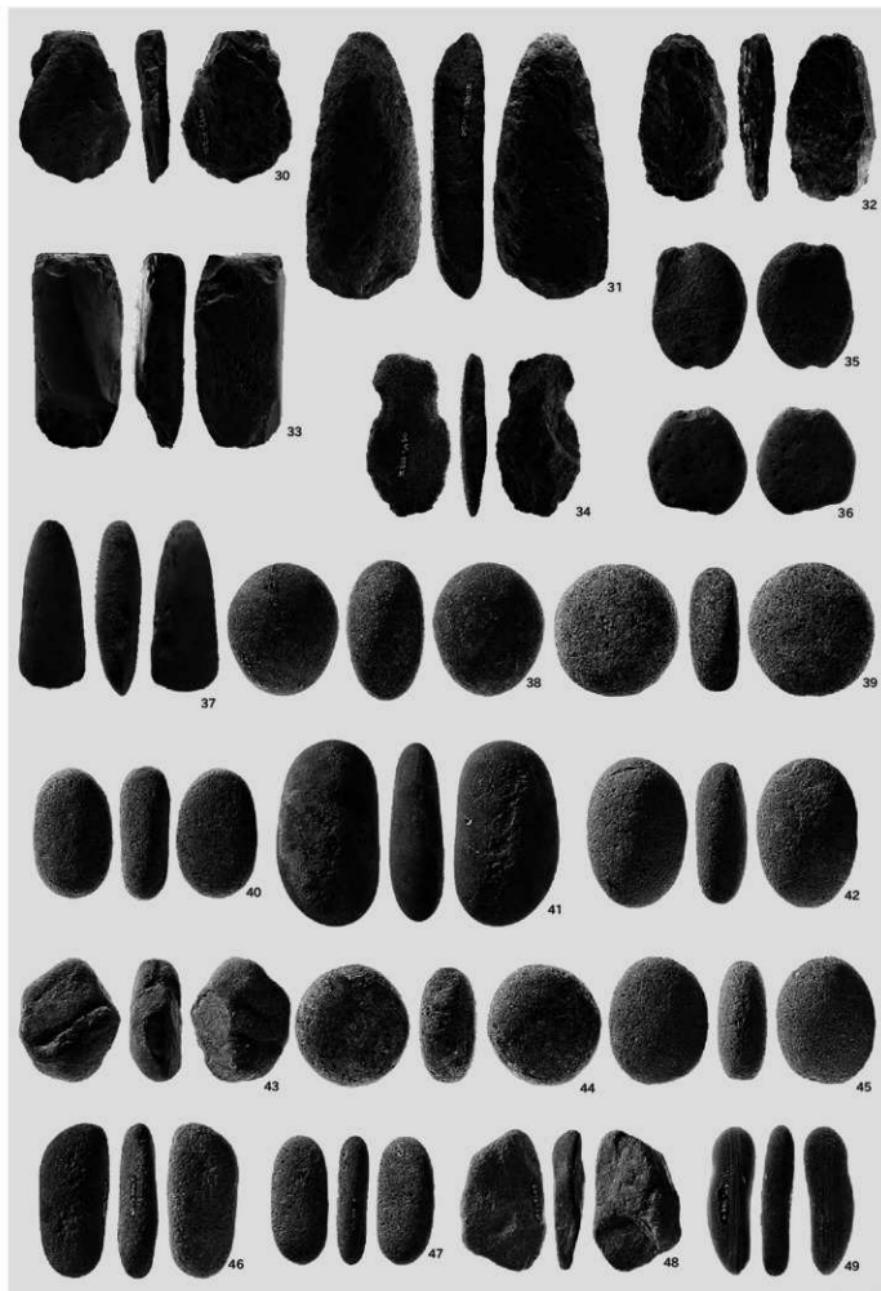
S=1/3 (108~133, 135~155, 157~189, 191~197)
1/5 (107, 134, 156, 190)





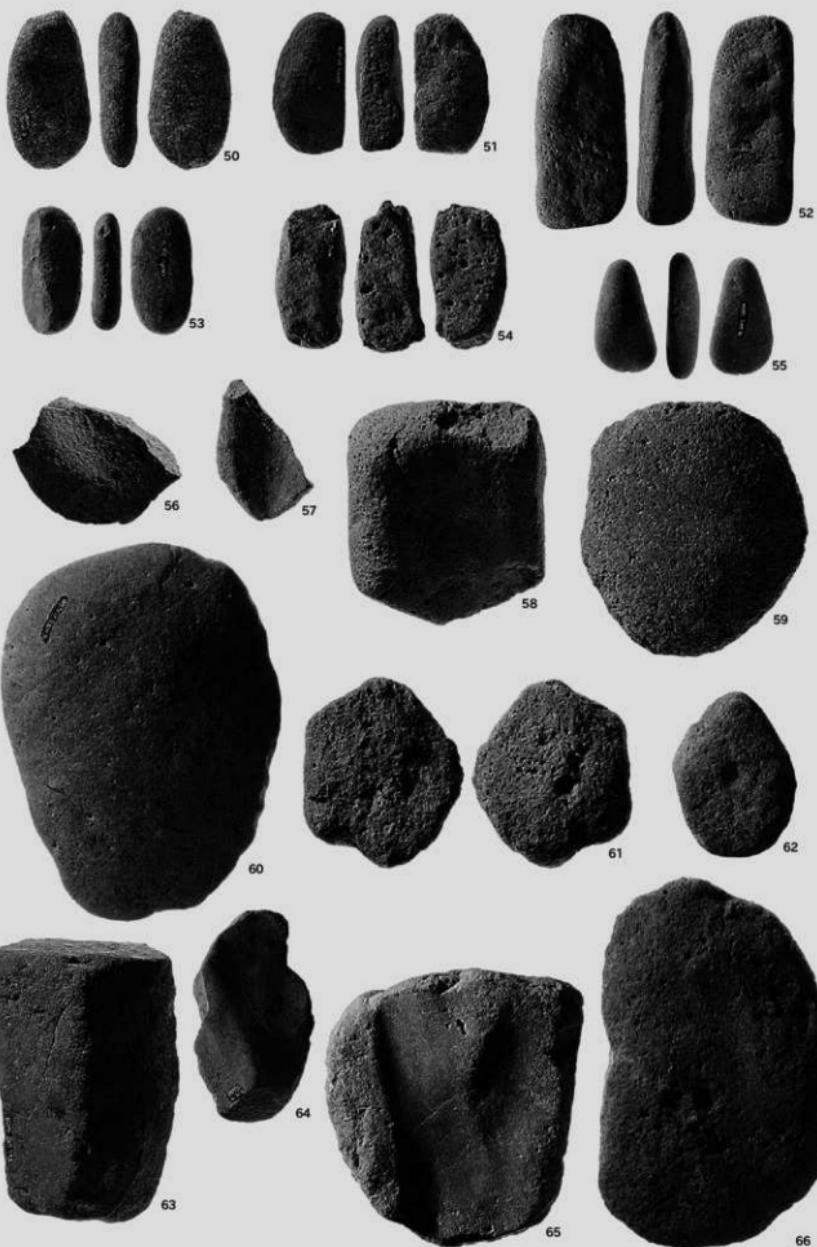
石器 (8,9) 石胞 (10~12) 不定形石器A類 (13,14) · B類 (15,16) · C類 (17) · D類 (18) · E類 (19,20) · F類 (21,22) · G類 (23)
両極側離底のある石器 (24,25) 対状石器 (26~29)

S=1/2 (8~25)
1/3 (26~29)



打削石斧 (30~34) 石錐 (35・36) 磨削石斧 (37)
敲砸石錐 A 面 (38~40) B 面 (41) C1 面 (42) C2 面 (43・44・45) E 面 (46~48) P2 面 (49)

S=1/2 (30~37)
1/4 (38~49)



縦削石類F2面 (50)・G1面 (51・52)・G2面 (53~55) 石皿A面 (56・57)・B面 (58~62) 稲石 (63~66)

S=1/4 (50~55,63~66)
1/5 (56~62)



68

67



71

70



72



73



74



74a



75



76



74b



77

報告書抄録

ふりがな	うえのひがしいせき・げんみようだけいせき							
書名	上野東遺跡・現明嶽遺跡							
副書名	一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅰ							
卷次								
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第160集							
編著者名	高橋保雄・奥村伸男・木村雄司・村上章久							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	2006(平成18年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東經 度 分 秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
上野東遺跡	新潟県 東蒲原郡 阿賀町大字西字上 野4762番地ほか	15385	36 40分 51.33902 秒	37度 25分 30.37584 秒	20050425～ 20050630	1,410	道路(一般国道 49号揚川改良) 建設	
現明嶽遺跡	新潟県 東蒲原郡 阿賀町大字西字現 明嶽4734番地 8ほか	15385	62	37度 41分 00.89513 秒	139度 25分 13.28002 秒	20050617～ 20050812	上層 770 下層 500	道路(一般国道 49号揚川改良) 建設
所収遺跡名	種別	時期	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上野東遺跡	遺物散 布地	縄文時代(前 後葉～末 葉) 平安時代(9 世紀後半～ 10世紀初頭)	竪穴住居1軒・住居1 軒・土坑7基・焼土8 基・硬化面2基・遺物集 中地點1か所	縄文前期後葉～末葉土器 (深鉢) 石器(石鑿・尖頭器・石 錐・石匙・不定形石器・ 笠状石器・打製石斧・石 錘・磨製石斧・敲磨石 類・石皿・砥石・石核) 石製品(異形石器・丸石) 須恵器・土師器				鹿瀬輕石質砂屑直 下の活動地点、大木 5b～6式古段階の 土器出土。 平安時代の住居は 東蒲原郡内で初検 出。
現明嶽遺跡	遺物散 布地 集落跡	縄文時代(前 後葉～末 葉) (近世以降) 炭窯1基・ハサ木3列	(下層) 焼土1基・集石1基・ 遺物集中地帯4か所 (上層) 竪穴住居3軒・土坑10 基・焼土1基・集石1か 所 (近世以降) 炭窯1基・ハサ木3列	縄文後期中葉土器(深 鉢・鉢・浅鉢・壺・注口 土器) 土製品(ミニチュア土 器・土偶・スタンプ彫土 製品) 石器(石鑿・尖頭器・石 錐・石匙・不定形石器・ 笠状石器・打製石斧・石 錘・磨製石斧・敲磨石 類・石皿・砥石・石核) 石製品(石棒・丸石)				鹿瀬輕石質砂屑直 下の活動地点、大木 5b～6式古段階の 土器出土。 鹿瀬輕石質砂屑の 上層からは後期中葉 の集落検出。同集落 に伴う土器・石器が まとまって出土。

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第160集
一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書 I
上野東遺跡・現明嶽遺跡

平成18年3月16日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
平成18年3月31日発行 〒950-8570 新潟市新光町4番地1
電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986
URL <http://www.mai bun.net>

印刷・製本 長谷川印刷
〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号
電話 025(233)0321